愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 188 集

キジ山古墳群・晴雲寺址

2014

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 188 集

キジ山古墳群・晴雲寺址

2014

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

KJ10A 区 001SZ

「キジ山」東斜面で確認された、極めて規模の小さな横穴式石室の古墳である。全長は約 1.7m しかないが、奥壁・側壁・敷石・裏込まで横穴式石室そのものである。石室内からの出土遺物はなかったが、終末期古墳の一形態とみられる。

KJ10C 区 018SZ

尾根筋近くで検出された南向きの横穴式石室である。石室内で耳環、墓道で須恵器（フラスコ瓶など）が出土した。わずかに胴張となる平面形と玄門の突出しない立柱石が特徴の無袖式で、深い墓坑も注目される。古墳が群集する 7 世紀代のものと考えられる。

SU10A 区 082SZ

「キジ山」西斜面の晴雲寺址で検出された、豊橋市街地を見渡せる西向きの横穴式石室である。長方形の石室からは須恵器や鉄製刀子・鉄鏃が出土した。時期は 6 世紀後半代と推定され、この地域で古墳群形成が開始された頃の古墳である。

キジ山古墳群・晴雲寺址

SU10A 区 085SX

晴雲寺址で 082SZ と並列するようにして検出された馬蹄形の礫群。礫の間からは須恵器片が多数出土した。側壁石材が取り去られた横穴式石室の基底部と推定される。向かって左側の礫群が比較的原位置を保っているとみられる。時期は 082SZ に近く 6 世紀後葉である。

SU10A 区 087SB

江戸時代、宝永年間（18 世紀初頭）に吉田藩によって創建された寺院跡。藩主牧野家の菩提寺として観音堂 I 宇を建立したことがいくつかの文献史料で伝わる。牧野家転封後は多米村で管理され幕末まで続いた。肥前産染付椀や青磁香炉など、寺院の備品とともに屋根瓦が出土した。軒桟瓦は吉田城の武家屋敷で使用されたものと同笵である。

SU10A 区 086SX

晴雲寺観音堂跡へ上る石積み階段の遺構である。やや大きめの石材を 2 段に積んだものが創建時の階段と推定され、大名の菩提寺にふさわしい境内の造営を進めたことがうかがえる。一方、それを斜めに横切るようにして小さな石材がやや乱雑に配置されたものが後代の階段で、山麓方向から直線的に堂へと至る。

観音堂・階段ともに、巨岩「屏風岩」背後の一部を切り盛りして平場を造成しているが、その過程で横穴式石室の古墳 2 基（082SZ・085SX）を削平し埋め立てたものと考えられる。

キジ山古墳群・晴雲寺址

序言

豊橋市には多数の埋蔵文化財がありますが、とりわけ印象深いのは多数の古墳があることではないでしょうか。雑木林を分け入るとそこには 1300 年以上前の横穴式石室をもつ古墳が累々とその姿をとどめています。古墳は数十基の群をなし、かつての人々が丘陵地を墓地として利用していたことを私たちに伝えてくれます。

キジ山古墳群は、豊橋市街地の東方丘陵上に立地する古墳時代後期の古墳群です。その総数は 40 基以上で豊橋市内屈指の規模です。愛知県埋蔵文化財センターでは、この古墳群の一部について発掘調査を実施し、未知の古墳 3 基の横穴式石室やキジ山 34 号墳の周溝を検出しました。とりわけ石室では、古墳時代終末期に比定される全長 2m に満たない横穴式石室をもつきわめて小型の古墳を確認することができました。これは愛知県内でも数例しかなく、不明な点が多い奈良時代の墓制を明らかにする貴重な手がかりを得ることができました。

そして古墳群の所在する丘陵には、江戸時代に吉田藩によって創建された寺院の遺跡も確認されました。その名を晴雲寺址といいます。当寺は、18 世紀初頭の宝永年間に吉田藩主牧野家の菩提寺として創建されたことが文献史料から知ることができます。しかしその所在地や建物については全く不明となっていましたが、当センターが実施したキジ山古墳群の発掘調査を通じて確認することができました。これも合わせて報告いたします。

最後になりましたが、埋蔵文化財の調査の準備から報告書作成にいたるまで、地元の方々をはじめ各機関には多大なご理解とご協力をいただきましたこと、厚くお礼申し上げます。そして本書が古墳群や江戸時代寺院への理解が進む一助となってくれれば誠に幸いであります。

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　加藤髙明

例言

(1)　本書は、愛知県豊橋市多米町に所在するキジ山古墳群（県遺跡番号 791056、県埋文遺跡記号 4TKJ）と晴雲寺址（県遺跡番号 791400、県埋文遺跡記号 4TSU）の発掘調査報告書である。

(2)　発掘調査は、愛知県企業庁東三河水道事務所による県営水道供給事業に伴う事前調査で、愛知県教育委員会を通じた委託事業として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

(3)　発掘調査期間は、範囲確認調査が平成 21 年 5 月～ 6 月で、本調査が平成 22 年 10 月～平成 23 年 3 月である。

(4)　発掘調査面積は範囲確認調査が 500㎡、本調査が 2,170㎡（キジ山古墳群 1,130㎡、晴雲寺址 1,040㎡）である。

(5)　発掘調査は、範囲確認調査は池本正明（調査研究専門員、現：主任専門員）、永井邦仁（調査研究主任）が担当し、本調査は鈴木正貴（調査研究専門員）、永井邦仁が担当し、本調査については株式会社ユニオンの支援を受けた。

(6)　発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げる。愛知県企業庁東三河水道事務所・豊橋市上下水道局浄水課・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・豊橋市教育委員会・豊橋市文化財センター・豊橋市多米中町自治会・豊橋市小鷹野自治会・医療法人光生会赤岩病院・高浜市焼き物の里かわら美術館・安藤さおり・磯谷和明・岩原剛・岡村弘子・尾嵜信之・金子智・北村和宏・城ヶ谷和広・都築暢也・名倉雅人・贊元洋・野口哲也・藤澤良祐・本田英貴・村上昇・森泰通・余合昭彦

(7)　本書作成のための整理作業は永井邦仁が担当し、株式会社文化財サービス、有限会社写真工房・遊の協力を得た。

(8)　整理作業期間は平成 24 年 8 月～平成 25 年 3 月である。

(9)　本書の編集・執筆は永井邦仁がおこなったが、一部に川添和暁（調査研究主任）・井上巌（株式会社第四紀地質研究所）の執筆もある。

(10)　本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた世界測地系における平面直角座標第Ⅶ系（以下、国土座標第Ⅶ系と呼ぶ）に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。

(11)　本書で提示する土層説明の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

(12)　その他の埋蔵文化財にかかわる学術用語については特に断らない限り『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した。

(13)　遺構一覧および遺物一覧のデータは添付 CD-ROM に収録されている。

(14)　写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4161 / E-mail: doki@maibun.com）

(15)　出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4164）

目次

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と調査工程　11
第２節　地形・歴史的環境　14

第２章　範囲確認調査の成果

第１節　地形測量　17
第２節　トレンチ調査　17

第３章　発掘調査の成果

第１節　概観　23
第２節　古墳　24
（１）KJ10A 区 001SZ　24
（２）KJ10B 区キジ山 34 号墳　29
（３）KJ10C 区 018SZ　32
（４）SA10A 区 082SZ　42
（５）SA10A 区 085SX　49
（６）横穴式石室の敷石について　52
第３節　晴雲寺址の遺構　54
（１）SU10A 区　54
（２）SU10B 区　60
第４節　晴雲寺址の遺物　62
（１）陶磁器類・金属製品　62
（２）瓦類　70

第４章　陶器・瓦の胎土分析

第１節　試料と分析の目的　78
第２節　分析結果　78
（１）分析方法　78
（２）組成分類　79
（３）X 線回折試験結果　80
（４）化学分析結果　80
（５）分析のまとめ　82

第５章　考察と総括

第１節　キジ山古墳群について　84
第２節　晴雲寺址について　92
参考文献　98

写真図版　遺構　99
写真図版　遺物　120

抄録　129

図版・表目次

図 1　愛知県および豊橋市の位置 11
図 2　キジ山古墳群・晴雲寺址の位置 11
図 3　キジ山古墳群・晴雲寺址調査地点 12
図 4　多米町内の遺跡分布 14
図 5　多米小学校旧蔵の古墳時代須恵器実測図 15
図 6　豊橋市街地と多米町域の近世寺院分布 16
図 7　キジ山古墳群範囲確認調査対象範囲 17
図 8　キジ山古墳群地形測量図 18
図 9　キジ山古墳群範囲確認調査トレンチ配置 20
図 10　キジ山古墳群範囲確認調査成果 21
図 11　キジ山古墳群範囲確認調査出土遺物実測図 22
図 12　キジ山古墳群・晴雲寺址の発掘調査区と主要遺構 23
図 13　KJ10A 区遺構図 24
図 14　KJ10A 区 001SZ 想定範囲 25
図 15　001SZ 全礫検出状況 25
図 16　001SZ 石室平面図および基底石平面図 26
図 17　001SZ 断面図 27
図 18　KJ10A 区基本土層断面図と出土遺物実測図 28
図 19　KJ10B 区遺構図と基本土層断面図 30
図 20　KJ10B 区 T3 土層断面図および出土遺物実測図 31
図 21　KJ10C 区第 1 遺構面遺構図 33
図 22　KJ10C 区基本土層よび 017SD 土層断面図 34
図 23　KJ10C 区第 2 遺構面遺構図 36
図 24　018SZ 石室平面・立面図 37
図 25　018SZ 石室全礫・遺物出土状況図 38
図 26　018SZ 石室断面図および出土遺物実測図と 017SD 遺物出土地点分布 40
図 27　016SX 礫群平面・土層断面図 41
図 28　SU10A 区第 2 遺構面遺構図 (古墳) 42
図 29　082SZ 石室平面・立面図および基底石平面図 44
図 30　082SZ 断面図 45
図 31　083SD 土層断面図 47
図 32　082SZ 遺物出土分布および出土須恵器実測図 48
図 33　082SZ 出土金属製品実測図 49
図 34　085SX 礫群平面・断面図 50
図 35　085SX 礫群遺物出土分布および出土遺物実測図 51
図 36　SU10A 区トレンチ等出土須恵器実測図 53
図 37　石室床面敷石使用礫実測図 53
図 38　SU10A 区第 1 遺構面遺構図 54
図 39　SU10A 区第 2 遺構面遺構図（近世） 55
図 40　087SB 礎石建物平面・断面図 56
図 41　087SB 礎石配置図 57
図 42　086SX 階段平面・断面図 58
図 43　001SX 断面図 59
図 44　SU10B 区遺構・基本土層断面図 61
図 45　出土近世陶磁器実測図 63
図 46　出土近世陶磁器実測図 64
図 47　出土近世陶磁器実測図 65
図 48　出土近世陶磁器実測図 66
図 49　出土近世陶磁器実測図 67
図 50　出土近世陶磁器・金属製品実測図 68
図 51　出土近世赤物甕実測図 69
図 52　出土軒丸・軒平瓦実測図 71
図 53　出土軒桟瓦・鳥衾瓦実測図 72
図 54　出土丸・平瓦実測図 73
図 55　出土熨斗瓦・桟瓦・袖瓦実測図 74
図 56　出土面戸瓦・差込瓦実測図 75
図 57　出土飾瓦・鬼瓦・文字瓦実測図 77
図 58　胎土組成分類ダイヤグラム各種図 79
図 59　胎土化学分析結果図 82
図 60　胎土分析に基づく遺物分類図 83
図 61『多米郷土誌』掲載の多米地区古墳分布 84
図 62　キジ山古墳群の横穴式石室集成 86
図 63　東三河地域横穴式石室方位軸分布 87
図 64　キジ山古墳群の古墳分布と平野の地形 88
図 65　キジ山古墳群古墳分布 89
図 66　愛知県・三重県の小型横穴式石室の諸例 90
図 67　静岡県の小型横穴式石室の諸例 91
図 68　晴雲寺址の寺地推定 94
図 69　晴雲寺址観音堂の推定礎石配置 95
図 70　晴雲寺址観音堂の復元想定 95
図 71　豊橋市花田町浄慈院地蔵堂 96
図 72　大名墓所と菩提寺の位置関係 97

表 1　分析試料一覧 78
表 2　胎土性状表 80
表 3　化学分析表 81
表 4　タイプ分類表 82
表 5　組成分類表 83

第 1 章 調査の概要

第 1 節　調査に至る経緯と調査工程

遺跡の所在　愛知県豊橋市は、県南東部にある人口約 38 万人（平成 25 年 12 月現在）の中核市で、豊川流域と渥美半島を合わせた東三河地域の中心地であるとともに、平野で接する東隣の遠江地域（静岡県西部）と鉄道や道路で繋がる地理的特性を活かした各種産業の盛んな都市である。その豊橋市の中心部は豊川河口近くの古くは吉田と呼ばれた市街地が相当し、重要な交通施設である豊橋駅や近世東海道（国道 1 号）が所在する。特に近世東海道は吉田城址（現・豊橋市役所）の南側を東西に通過し、それを軸線に江戸時代吉田藩の城下町が形成されている。その城下町の東方約 7km には遠江との国境でもある山地・丘陵地が南北にのびており、その南端の一尾根は通称「キジ山」と呼ばれ、本報告の対象であるキジ山古墳群と晴雲寺址はここに所在する。行政区域的には豊橋市多米町字蝉川および野中に相当し、尾根から東の多米学区と西の鷹丘学区に分かれるようにして地元とも関わっている。また、当該地点には豊橋市上水道の施設（小鷹野浄水場）も昭和 5 年（1930）より所在しており、現在は 2 基の巨大な上水道タンクがランドマークとなっている。

県営水道供給事業　上記の市浄水場には愛知県営水道豊橋浄水場が併設されている。当該施設を管轄する愛知県企業庁（東三河水道事務所）は、「キジ山」に県営水道供給事業のための施設建設を計画した。しかし事業計画区域には、周知の埋蔵文化財であるキジ山古墳群（県遺跡番号 791056）が存在している。そのため同所は愛知県教育委員会とその取り扱いについて協議をい、事業予定地内における古墳群の分布や規模について、詳細なデータが必要と判断され、委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターは平成 21 年 5 月～ 6 月に 105 カ所のトレンチ（500㎡）による範囲確認調査を実施した。

図1　愛知県および豊橋市の位置

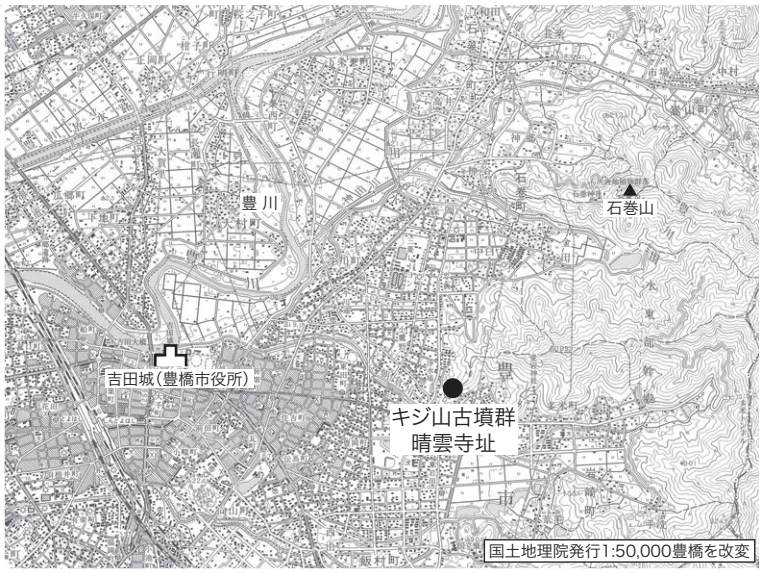


図2　キジ山古墳群・晴雲寺址の位置（1:100,000）

キジ山古墳群　当該古墳群は市内でも古くから知られており、丸地古城著『三河の古墳』（昭和 25 年（1950）刊）では多米古墳群という項目名で古墳群の一部がかつて発掘されていることが記されている。その後豊橋市教育委員会による埋蔵文化財分布地図ではキジ山古墳

群として 1 ～ 34 号墳が登録されている。

範囲確認調査　範囲確認調査の詳細については後述（第 2 章）するが、概要としては、事業予定区域の中でも特に「キジ山」東斜面に所在する古墳群は既知のものに加えて多数の古墳が存在し、また西斜面には近世寺院跡（晴雲寺址）が認められるというもので、後者については新たな埋蔵文化財包蔵地として認定（県遺跡番号 791400）された。これを受けて東三河水道事務所では「キジ山」東斜面での事業計画を大幅に縮小し、尾根筋と東斜面山麓の 2 か所を中心に建設工事を実施することになった。

図3　キジ山古墳群・晴雲寺址の発掘調査地点（1:50,000）

変更された事業計画および範囲確認調査の成果に対応して新たな遺跡発掘調査の必要箇所が愛知県教育委員会文化財保護室より提示され、愛知県埋蔵文化財センターでは平成 22 年度の事業として、平成 22 年 10 月より平成 23 年 3 月までキジ山古墳群（1,130㎡）・晴雲寺址（1,040㎡）の総計 2,170㎡の発掘調査を実施した。

発掘調査体制　当センターでは発掘調査の実施にあたって調査支援体制を設けている。今次発掘調査では（株）ユニオン（岐阜市）の支援を受けて発掘調査業務を遂行した。その人的構成は以下のとおりである。

埋蔵文化財センター調査担当：調査研究専門員 鈴木正貴・調査研究主任 永井邦仁
（株）ユニオン現場代理人：大野哲也（一級施工管理技士）
同調査補助員：石川郁（学芸員）
同測量担当：沖村高志（測量士）・高橋政伸（同）
同発掘作業員：豊橋市在住の約 15 名（途中ローテーションにより変動）

発掘調査工程　発掘調査は準備・撤収期間を合わせて約 6 ヶ月を要した。その内容については日誌抄録を参照されたい。なおここで特記すべきは、山麓・山腹の数カ所に調査区が分かれた上に発掘器材や人員の進入路確保が問題となったため、隣接する豊橋市水道局が管理する多米貯水場敷地の一部を借用し作業用兼休憩用小屋と物置を設置し、進入はその南門からの通路を使用して調査区へは仮設進入路を設置してから調査を実施したことである。

室内整理調査工程　発掘調査終了後、諸データの整理と出土遺物の整理および報告書作成業務は平成 24 年度に実施した。遺物整理業務は（株）文化財サービス（担当:野地ますみ・長谷明日美）に委託し、写真撮影は（有）写真工房・遊（金子知久）の協力で実施した。この過程で得られた新たなデータを加え、陶磁器類は藤澤良祐（愛知学院大学）、須恵器は城ヶ谷和広（愛知県立旭丘高等学校）、瓦類は金子智（高浜市かわら美術博物館）の指導を受けて、永井が報告書を執筆・編集した（以上、敬称略）。

キジ山古墳群・晴雲寺址発掘調査日誌抄録（平成 22 年度）

平成 22 年（2010 年）

10/4 (月) 雨、詰所開設。赤岩病院へ事前説明。
10/7 (木) 晴、器材搬入。フェンス設置（キジ山 10B ほか）。
10/12 (火) 晴、キジ山 B 区（4TKJ10B）表土掘削開始。
10/13 (水) 晴、遺構検出作業ではキジ山 34 号墳の周溝の一部がみえつつある。当該地点からは須恵器小片 10 点近くが散布。
10/14 (木) 晴時々曇、キジ山 10B 区、遺構検出・掘削・トレンチ掘削。古墳築造時の造成を想定。
10/15 (金) 晴、キジ山 10C 区（KJ10Ca）フェンス設置、表土除去。
10/18 (月) 晴、KJ10B、トレンチ掘削。KJ10Ca、表土除去・木根処理。
10/19 (火) 晴、KJ10B、遺構掘削、トレンチ掘削。KJ10Ca 区、トレンチ掘削。
10/22 (金) 曇、KJ10B 区遺構掘削。KJ10C 区トレンチ掘削
10/26 (火) 曇のち晴、KJ10A、表土除去。KJ10B、遺構掘削。
10/27 (水) 曇時々晴、KJ10A、表土除去。KJ10B、遺構掘削。
10/29 (金) 曇、KJ10B、遺構掘削、全景撮影。
11/1 (月) 晴時々曇、台風一過、表土除去再開。石室下方で須恵器出土。
11/2 (火) 晴、KJ10A、湧水で地山が泥化し作業困難。石室下方で須恵器杯出土。
11/10 (水) 曇、KJ10A 遺構検出。石室北東側は溝状の凹みを検出。
11/12 (金) 晴、KJ10A、遺構検出、遺構掘削。豊橋市教委岩原氏来所。小型横穴式石室に関する情報提供受ける。
11/16 (火) 晴のち曇、石室内掘削開始。
11/18 (木) 晴、KJ10A 区、石室内土層断面図作成。
11/22 (月) 雨、KJ10A、テントを張り石室内掘削。
11/25 (木) 曇、KJ10A、古墳周溝完掘。墓坑ライン検出。豊橋市教委贄氏来所。
11/26 (金) 晴時々曇、KJ10A、石室内完掘、遺物なし。
11/29 (月) 晴、KJ10A、遺構掘削。KJ10Ca、遺構検出。早野来所。
11/30 (火) 晴のち曇、KJ10Ca 遺構検出、松田，日吉来所。
12/1 (水) 晴、KJ10A 石室石敷調査。KJ10Ca 全景撮影。
12/2 (木) 晴のち曇、KJ10A 石室裏込調査。KJ10Cb、トレンチ 01 からフラスコ瓶出土。平松、赤塚来所。
12/6 (月) 晴、KJ10A 石室解体調査、004SK 拡張掘削。
12/7 (火) 晴、石室解体調査 ,004SK から須恵器甕 8 片。KJ10Cb、表土除去。
12/8 (水) 晴、KJ10A 石室基底石調査。
12/9 (木) 晴時々曇、KJ10A 石室基底石記録。
12/10 (金) 晴、KJ10A 石室墓坑調査で以降埋め戻し。
12/13 (月) 曇のち雨、KJ10Cb 遺構検出、溝状 (017SD) が曲線にみえる。
12/14 (火) 曇のち晴、KJ10Cb 遺構検出、段切状遺構か。
12/15 (水) 晴のち曇、KJ10Cb 検出と遺構掘削。耕作地だったか徳利出土。
12/16 (木) 曇、KJ10Cb「地山」ふう整地土下に黒色土。SU10A、表土除去開始。
12/17 (金) 晴、SU10A 表土除去、腐葉土 10cm 下の面を追跡。
12/20 (月) 曇のち晴、KJ10Cb 遺構掘削、墳丘が埋没している予感。
12/21 (火) 晴のち曇、KJ10Cb 全景撮影、石室トレンチ掘削、古墳周溝も検出。石黒来所。
12/22 (水) 晴時々曇、KJ10Cb 石室トレンチ掘削、側壁など確認。川添来所。
12/24 (金) 晴のち曇、KJ10Cb 旧表土下に石室あり。奥壁確認、南へ開口か。
12/27 (月) 晴、KJ10Cb 遺構検出、017SD は周溝なのか石室関連なのか混迷する。
12/28 (火) 晴時々曇、SU10A、瓦や 18 世紀以降の陶磁器出土。

平成 23 年（2011 年）

1/5 (水) 晴のち曇、石室前庭部の調査、須恵器片多数出土。
1/6 (木) 曇のち晴、KJ10Cb 礫群 016SX は不定形で単独で古墳などと評価できず。
1/7 (金) 晴、SU10A 遺構検出、基壇の範囲を推定。
1/11 (火) 晴時々曇、SU10A 遺構検出。贄・岩原氏来所。
1/12 (水) 晴時々曇、KJ10Cb016SX 調査。SU10A、基壇遺構脇で須恵器・土師器出土、古墳あるか。余合氏・鈴木来所。
1/13 (木) 晴、SU10A、寛永通宝、須恵器出土、整地土は厚そう。
1/14 (金) 晴のち曇、KJ10Cb 石室前庭部・付属施設 (017SD) 掘削フラスコ瓶･杯身出土。SU10A、トレンチでようやく地山を検出。鬼頭来所。
1/17 (月) 曇のち晴、豊橋では珍しい大雪で中止。
1/18 (火) 晴時々曇、SU10A、旧表土からも瓦出土。基壇遺構とみたものは 1970 年代のアスレチック場の整地か。
1/19 (水) 曇のち晴、SU10A、T04 調査。整地層とその下層との関係判明。第 1 次検出面は近代以降のものと判断、第 2 次検出へシフト。
1/20 (木) 晴のち曇、宮腰ほか来所。
1/21 (金) 晴、SU10A 第 1 次遺構面全景撮影。SU10B、T01 調査で瓦若干出土。SU10A よりはるかに少ない。贄氏来所。
1/24 (月) 晴、KJ10Cb 礫群 016SX 掘削、SU10A、第 2 次遺構面へ向け重機掘削。SU10B、平場造成土の厚いことが判明。
1/25 (火) 晴、SU10A、掘り下げ中にいきなり須恵器杯蓋・身出土、整地土下層から石室らしき礫。
1/26 (水) 晴のち曇、SU10A、雨落ち相当位置に礫と瓦の集積 (071SU) と礎石列を検出。
1/27 (木) 晴時々曇、KJ10Cb、礫群 016SX を再検討。礫群が盛土遺構だったか。SU10A 遺構検出、礎石建物中央に礫群、須弥壇か。余合氏来所。
1/31 (月) 晴時々曇、KJ10Cb、016SX 主体部？掘削。SU10A、石室を検出。
2/1 (火) 晴時々曇、KJ10Cb、016SX 完掘。石室調査へ。SU10A、石室に伴う古墳周溝を検出。須恵器・土師器出土し 6 世紀と推定。ユニオンの測量チーム増援。
2/2 (水) 晴、KJ10Cb、石室上層掘削。撹乱層とみられ 016SX と共通するもよう。SU10A、古墳周溝確定、掘削。夕方、多米町歓喜院見学。
2/3 (木) 晴、KJ10Cb、石室撹乱層掘削、下から黒色土。SU10A、造成土掘削、その上から据えられた常滑赤甕検出。
2/7 (月) 晴、KJ10Cb、石室半裁、崩落した側壁石が積み重なっている。SU10A、基壇西方で検出した礫群が階段状に。
2/8 (火) 晴、KJ10Cb、石室前半は床面敷石がなさそう。崩落側壁石の間から金環出土。SU10A、石室内掘削開始。
2/9 (水) 曇時々晴、KJ10Cb、石室奥壁付近は崩落少なく掘削進む。SU10A、石室に隣接して須恵器と礫と瓦の集積がある。
2/10 (木) 晴のち曇、KJ10Cb、石室 018SZ ほぼ完掘。またも崩落石材中より金環出土。SU10A、石室 082SZ 内で蓋をあけた安置状態の須恵器出土。赤塚、石黒、鬼頭、堀木、石井、川添、永井、西尾市教委鈴木氏来所。
2/11 (金) 大雪、だが地元説明会開催、50 名の方に山上まで来ていただけた。キジ山周辺について情報寄せられる。市水道局朝河氏、東三河水道事務所渡辺氏、ほか来所。
2/14 (月) 曇のち雨、トレンチで土層断面記録も中断。
2/15 (火) 晴、KJ10Cb、石室床面掘削、採取した土を土嚢に。SU10A、石室内で鉄鏃出土。愛知県文化財保護指導委員尾 _ 氏来所。
2/16 (水) 晴、KJ10Cb、石室墓坑が階段状に掘り込まれている。SU10A、礫群 085SX からは相変わらず須恵器片出土。古墳時代のものか。早野、東三河水道事務所渡辺氏、名倉氏来所。
2/17 (木) 曇、SU10A、石室内遺物取り上げ。須恵器 5 点、土師器 1 点、鉄鏃数点。古墳周溝 083SD 上層の礫群中に須恵器片あり、当該層の形成および墳丘破壊は晴雲寺造成時か。
2/18 (金) 晴（強風）、KJ10Cb、石室 018SZ 完掘、床面洗浄着手。SU10Ba 掘削するも瓦数点。
2/21 (月) 晴、KJ10Cb、石室内洗浄。SU10A、石室内洗浄。礫群 085SX はまだ須恵器小片が出土。SU10B、礎石らしき平石と痕跡が 1.5m 間隔で。遺物は瓦ばかり。
2/22 (火) 晴、豊橋市教委岩原氏来所。KJ10Cb の石室 018SZ は立柱石が突出しない点、無袖式である点を指摘。SU10A の石室 082SZ は西向き開口は古い古墳に多い。礫群 085SX は以前似たような礫混じり墳丘を調査したことがある、とのこと。午後小澤来所。
2/23 (水) 晴、SU10A、石室内須恵器は 6 世紀後葉か、裏込めは比較的大きな礫を使用。礎石建物基壇断ち割り、土層確認。早野来所。豊田市教委森氏、豊橋市教委贄氏来所。
2/24 (木) 雨、残り時間も限られるので SU10Bb 重機掘削。
2/25 (金) 晴時々曇、KJ10Cb、古墳全景撮影。SU10A、石室脇の列石は墳丘内列石でよいだろう（贄氏）。礫群は寺院もしくはそれ以降のものか判断に苦しむ。
3/1 (火) 曇のち雨、SU10A、調査区壁面で土層観察。午後は雨天中止。
3/2 (水) 晴時々曇、SU10A、拡張区重機掘削～古墳周溝の続きを掘削。須恵器小片。礎石建物の礎石部分断ち割り。根石なし。石黒来所。
3/3 (木) 晴、KJ10Cb、石室墓坑はとてつもなく深い。SU10Bb、遺構は溝 2 条土坑 1 基。余合氏来所。
3/4 (金) 晴、SU10A・B、補足調査と埋め戻し。
3/7 (月) 雨のち晴、石室床面採取の土（土嚢袋）を水洗選別のためにパレオ・ラボの中村氏に引き渡す。同敷石をサンプリング。川添来所。
3/9 (水) 晴時々曇、SUl10A、石室 082SZ 断ち割り調査。石室軸線位置に溝を掘っていることが判明。
3/10 (木) 晴、埋め戻し続行。遺物収納作業。
3/11 (金) 晴時々曇、遺物センター搬送。午後、地震あり、現場異常なし（東日本大震災）。
3/30（水）晴、豊橋市水道局による多米配水場内借用地の撤収確認。

第２節　地形・歴史的環境

遺跡の地理　豊橋市は愛知県の東端に位置し、豊川左岸から弓張山地と渥美半島の付け根までを市域とする。前節でも述べたように、山地南端と半島の付け根にあたる高師原・天伯原台地はなだらかで、ここを主要陸路が通り抜けて、東三河と遠江地域が繋がりやすくなる要因がある。その弓張山地南端には中世の山寺である普門寺が交通路を見下ろすようにして立地しているが、同寺の背後をうかがうようにして東西方向の谷底平野が山地に食い込んでいる。これが現在の豊橋市多米町に相当する地域で、谷底平野を貫流する朝倉川は、豊橋市街地の中心である吉田城の地点で豊川に合流している。朝倉川と併行する多米街道は吉田城下町で東海道から分岐し、東進して多米峠で遠江へと抜ける。朝倉川の北側はこれも弓張山地から西へのびる尾根筋によって谷の輪郭をつくるが、その南西端にある小尾根にキジ山古墳群・晴雲寺址が立地している。この位置はまさに多米地区の平野入口にあたり、ここから西方には市街地のある高師原台地が豊川まで広がっている。

遺跡の地形環境　上述のように当該遺跡群の所在する丘陵は、弓張山地から幾度も分岐した小尾根の１つであるが、鞍部を経て標高約 135m の山頂があるため、市街地側から眺望すると半ば独立した山のようでもある。そして山頂から尾根筋を南西へ約 50m 下って再び鞍部を経るとチャートの巨岩がそそり立つもう１つの山頂（標高約 76m）が現れる。このような山頂巨岩の周囲が風化して形成される山容は、石巻山を代表例として周辺に大小規模で存在し、現在は山林で隠れていることが多いものの、地域の景観的特色の１つとなっている。さてこの巨岩は、立柱状のものの周囲を一部テラス状の岩塊が取り巻く構成になっており、その西側斜面の発掘調査区内にも割れて落下したとみられる巨岩が存在する。そしてさらに下った平場の先にはほぼ東西方向に長い鰭状の巨岩に達する。この巨岩は古くから「屏風岩」と呼ばれ地元のランドマークになっている。これら巨岩や岩盤を覆うようにして長年にわたり風化生成された橙色の粘土が地山となっている。

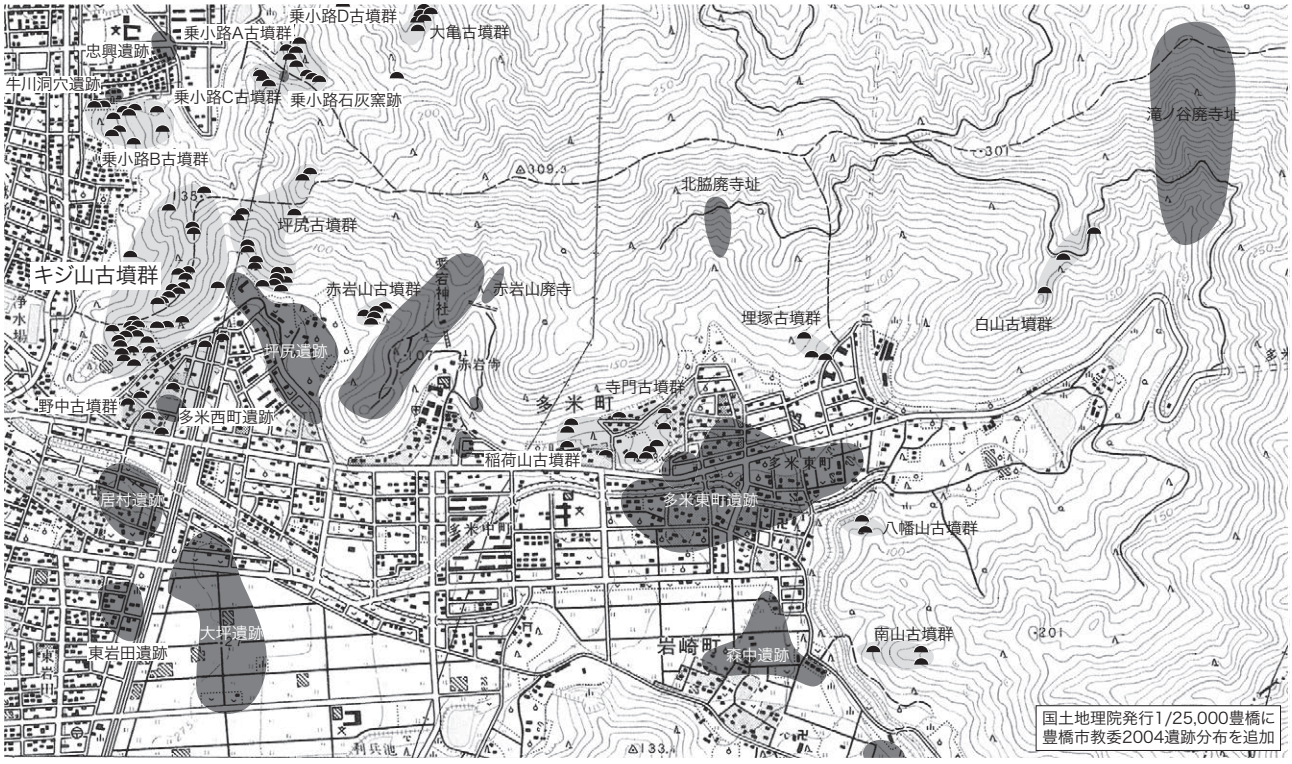


図4　多米町域の遺跡分布（1:25,000）

遺跡の歴史的環境　次に当該遺跡を取り巻く歴史的環境について、多米地区の遺跡を中心に概観しておこう。キジ山古墳群を含めた豊橋市域の遺跡については、同市教育委員会による埋蔵文化財分布調査が実施されており、遺跡の所在地から出土あるいは表採遺物資料による年代など、詳細な情報が公開されている（豊橋市教育委員会 2004）。また、多米町域の歴史については地元で『多米郷土誌』という地域史が編さんされており（多米郷土誌編纂委員会 1967）、これらが遺跡評価の基礎資料となっている。

ところで多米という地名は、平城京左京一条三坊から出土した和銅 6 年（713）の「八名郡多米里多米部□［麿カ］庸米五□［斗カ］和銅六年」と記された木簡までさかのぼり、さらに天平 2 年（730）にも「参河国八名郡多米郷天平二年六月五」と記された木簡が平城京左京七条一坊でも出土している。その後、平安時代中期成立の「和名抄」に三河国八名郡に多米郷とあることから、律令の里制から郷制を経て、1300 年以上にもわたって地域の呼称として定着してきたものである。

多米地区の遺跡　キジ山古墳群から朝倉川東方上流には、西側に開口する谷底平野が広がる。これが概ね多米町域で、現在朝倉川はその北縁寄りを流れている。特に川を見下ろす丘陵端部では、古墳時代から中世の遺跡や山林寺院が多く分布していることで知られる。

古墳群は、坪尻古墳群、寺門古墳群、稲荷山古墳群などがある。これらはキジ山古墳群に比べていずれも数的には小さな規模であるが、古くからその存在は知られ一部は発掘調査が実施されている。中でも稲荷山古墳群は 2000 年と 2007 年に稲荷山 1 ～ 4 号墳の発掘調査が豊橋市教育委員会によって行われ、無袖タイプの横穴式石室と須恵器や鉄鏃などの副葬品が検出されている。石室前庭部に溝状の付属施設があるのが特徴で、キジ山古墳群でも同様の遺構が検出されたことでこれらの関連が注目される。また須恵器には独特な重ね焼き痕跡のみられるものが主体を占めており、当該地域の須恵器生産の一端を示すものとして注目される。さらに一部石室では中世の利用をうかがわせるものもある。

ところで豊橋市立多米小学校には、付近で出土したと考えられる考古資料がいくつか保管されており、今次調査の過程で新たな資料の存在が明らかになった。なおこれらは現在、豊橋市文化財センターに移管されている。内容は古墳時代から平安時代の須恵器や鉄刀で出土地名などの情報はない。一部の須恵器について図を提示する（図 5）。1 と 2 は杯蓋と杯身でともに明灰色硬質の仕上がりで組み合うものであろう。3 は丸底気味の平瓶、4 と 5 はハソウで 5 の方が古相を示す。6 はフラスコ瓶で頸部に縦方向の刻線が連続して施される（焼成前）。窯印というより施文の一種であろう。これらが一括資料であるかは不明ながら資料群中には鉄刀（直刀）もみられることから、おそらく多米地区の古墳から出土したものとみられる。

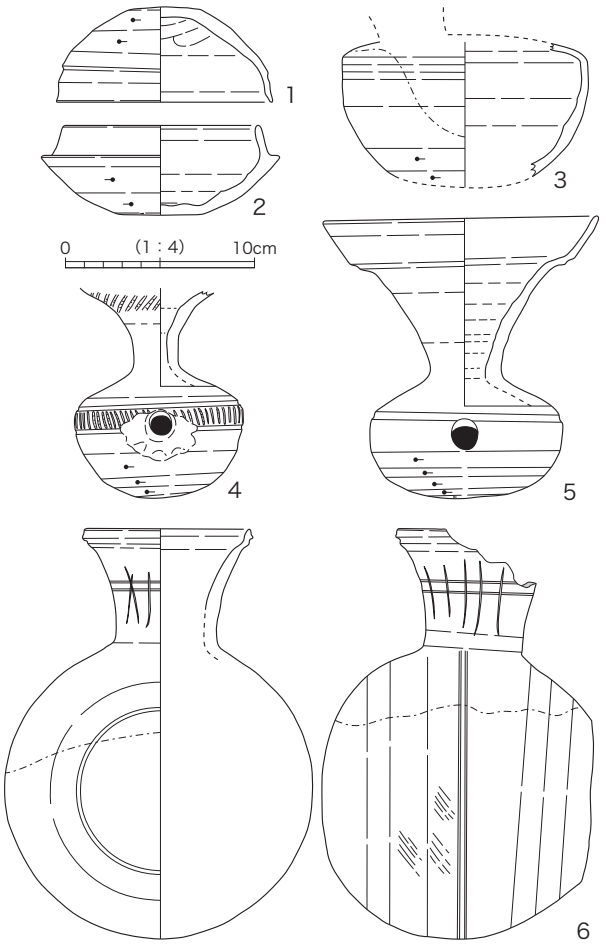


図5　多米小学校旧蔵の古墳時代須恵器実測図（1:4）

山寺は、現在存続しているものとして赤岩寺がある。寺の創建は奈良時代で 9 世紀半ばに中興されたと伝えられるが、鎌倉時代の愛染明王座像の存在などからも中世以降に興隆した寺院であるといえる。これ以外では、遺跡として北脇廃寺や滝ノ谷廃寺がある。これらは丘陵斜面に平場が認められ灰釉陶器が出土しているのが特徴であり、平安時代に遡るものと考えられる。中でも滝ノ谷廃寺には、「徳合長者」という人物がここに寺院を開いたという伝承がある。これが江戸時代前半となる 17 世紀に山麓へ移転したものが現在の歓喜院ともいわれている。

牛川地区として　次に転じて晴雲寺址のある丘陵西側斜面付近の遺跡をみておこう。北方には江戸時代から石灰を採取してきた牛川鉱山跡地によって、大きく山容が滅失しているが、そこで発見された牛川洞穴遺跡から出土した骨は「牛川人骨」として著名である。残る丘陵上には乗小路 A ～ D 古墳群があり、近年豊橋市教育委員会により発掘調査が実施されている。一方晴雲寺址から西には、現在は住宅地となっている一角に相生塚古墳が位置し、同市教育委員会の発掘調査（平成 24 年度）によって、6 世紀後半に造られた横穴式石室や多数の副葬品が検出された。当該古墳はキジ山古墳群に先行する時期に築造されていることもあって、今後比較検討が必要になるだろう。

近世寺院　晴雲寺址周辺の豊橋市内には、吉田藩の城下町時代に造営された寺院建築を擁する近世寺院が集まっている。第二次世界大戦の空襲などで焼失したものもあるようだが、中でも花田町の浄慈院には、享保 12 年（1727）に創建された地蔵堂（市指定文化財）が現存している。当該建築は平成 24 年に修理が実施されたが、その以前に屋根から下ろされていた露盤瓦には「享保十二年丁未九月吉日」「吉田瓦町」「細井新兵衛作之」 という刻書があって、晴雲寺址と同時期の瓦であることが示される。そしてやや新しい時期の建築では、岩田町居村の西福寺山門は文化 10 年 (1813) 建立と伝えられ、一部の軒桟瓦は当該期のものとみられる。同様に多米東町の宝珠寺薬師堂は、文化年間（1804 ～ 1817）とされている（豊橋市教育委員会 2002）。また東岩田の祥雲寺には 18 世紀代の年号が刻まれた石仏（地蔵）や手水鉢などがあり、多米東町の歓喜院所在の手水鉢は晴雲寺址から持ち込まれたものというが（多米郷土誌編纂委員会 1967）、銘文は不明瞭で判読できない。一方、先に挙げた赤岩寺はどちらかといえば 19 世紀以降の金石文が多く伝わっていて、晴雲寺創建期の 18 世紀前半のものは少ない。

以上のように、晴雲寺址と比較しうる 18 ～ 19 世紀の寺社建築の瓦や金石文が周辺に現存しているが、比較的新しい時期であるがゆえに文化財としての認識がいまだ薄く、そのために地域史的評価づけがあまり進んでいない現状がある。今次発掘調査を契機に、埋蔵文化財を素材として、吉田城下町とその周辺の近世景観を積極的に描いていく方法を模索する必要がある。

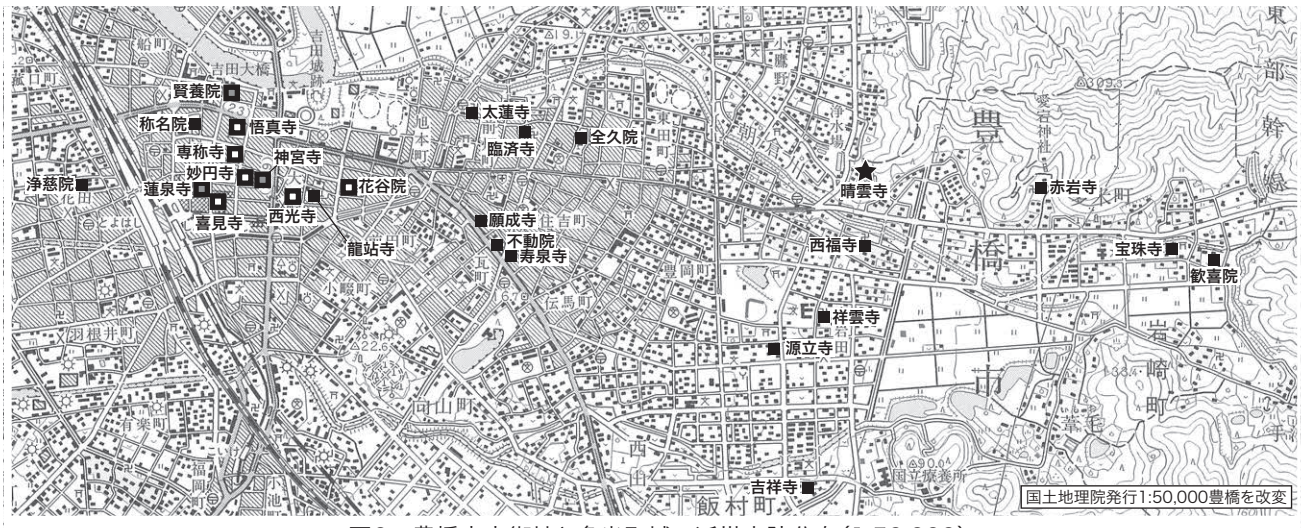


図6　豊橋市市街地と多米町域の近世寺院分布（1:50,000）

第２章 範囲確認調査の成果

第１節　地形測量

範囲確認調査の企画　キジ山古墳群の範囲確認調査は以下の目的をもって計画･実施された。すなわち、(1) 豊橋市遺跡地図に既掲載の古墳と、それとは別に現地で視認できる古墳の位置や周溝を含めた平面規模を明らかにし、(2) 現況で視認できない地点での古墳の有無を確認することであった。特に (2) については､西側斜面で既知の古墳がほとんどない状況に対する一定の回答が必要と見込まれた。そこで、後期古墳が通常直径 10 ～ 20m 規模の円墳であることから、調査対象区域に設定した 10m 単位の仮想グリッドに沿ったトレンチ調査で古墳の検出を企図し必要な調査面積を 500㎡とした（図 7)。

地形測量の実施　範囲確認発掘調査に先だって､事業予定地に限定して詳細な測量図を作成した (図 8)。測量業務は（株）昭和（名古屋市）が実施した。等高線は 25cm 間隔とし、そこへ豊橋市遺跡地図に示されたキジ山古墳群に加えて､古墳と推測される饅頭形の地形の位置を図示していく作業を実施した。また、キジ山 14 号墳では大きく抉られた墳丘後背周溝の地形を測量した。

測量図によると、尾根筋には等高線間隔がやや開く緩斜面があるものの、そこから東西へは急傾斜となっている。また南東側斜面を中心に、視認出来る古墳の該当箇所は等高線の大小の乱れが認められ、主だった群集墳については所在を図示できた。しかしながら例えばキジ山 8 号墳は、規模が小さいこともあって等高線からはその存在を窺い知ることは全くできない。その一方で、平成 20 年度に愛知県埋蔵文化財調査センター北村和宏（当時）による踏査で判明した未確認の古墳２基（A・B）は、等高線でも明瞭に示されている。そして西側斜面では、巨大な岩塊（屏風岩）周辺に２つの平坦面が存在していることも認められた。

第２節　トレンチによる発掘調査

範囲確認調査の実施　測量図作成後、幅 0.5m のトレンチによる発掘調査を西側斜面から開始した。しかし上述のグリッドはあくまで机上の設定であり、平場では概ね実施できても斜面地では樹木に阻まれ想定通りの調査はできなかった。また平場では須恵器よりも近世瓦や陶磁器の出土がみられたので、急遽近世遺跡の確認に主眼を変更した。その後尾根筋から東側斜面では仮想グリッドとともに、既知および未確認の古墳に対し最低２か所で周溝にかかるようにトレンチを設定して調査を進めた。しかしながら結果的には、範囲確認調査で検出できずに本調査時に西側斜面での古墳３基に加えて東側斜面の低位（T.T.095 付近）でも小規模な終末期古墳が検出されている。墳丘の残存していない古墳を、山林斜面においてトレンチ調査で検出しようとするのはあまり有効ではなく、地中レーダー探査などを併用することが望ましいが、それでも極小規模古墳の確認ができたのかどうか課題の残る調査であった。

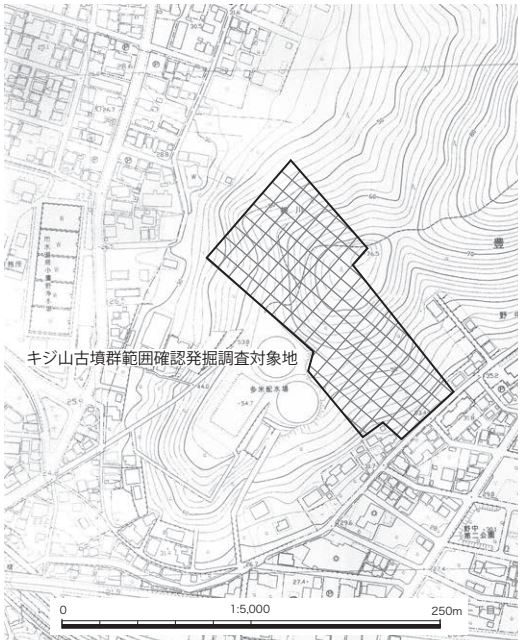


図7　キジ山古墳群範囲確認調査対称範囲

近世寺院遺跡の確認　一方でこの範囲確認調査では、西側斜面の平場に設定した T.T.006 で帯状に敷かれた

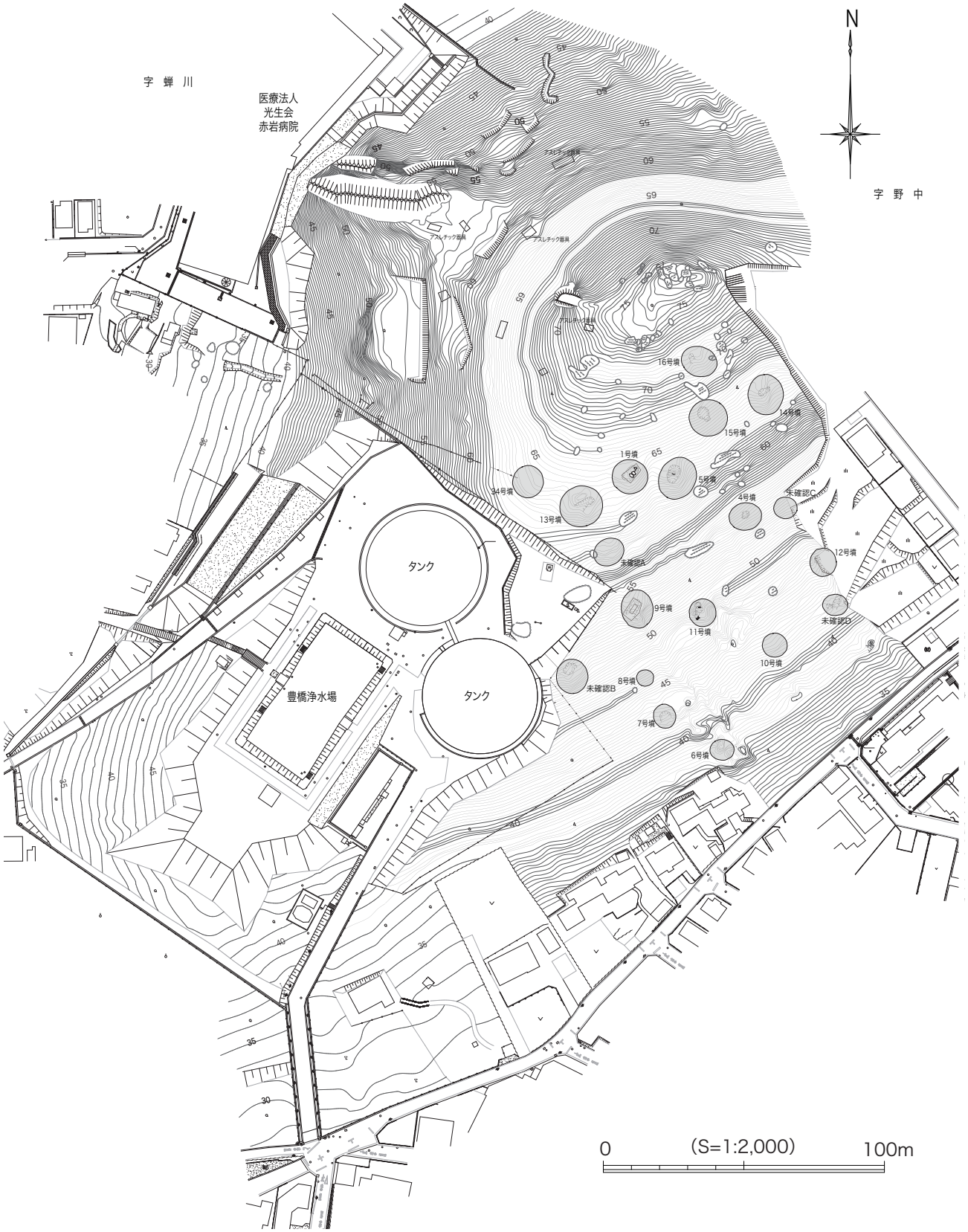


図8　キジ山古墳群地形測量図(1:2000)

近世瓦が大量に出土する遺構を検出し、その拡張トレンチで検出したピットから青磁香炉が出土するなど、当該平場が近世の遺跡である可能性が急浮上した。具体的には寺院跡が想定され、それは『多米郷土誌』などの郷土史に記載のある「屏風山晴雲寺」であると考えられた。そして後論（第 5 章）で述べるような考察過程を経て、当センターが提示した考古資料・文献史料をもとに愛知県教育委員会と豊橋市教育委員会で協議の結果、あらたな埋蔵文化財包蔵地として晴雲寺址が認定された。

尾根筋の古墳時代土坑　さらに尾根筋で設定した T.T.029 では、掌大の角礫が多数詰まった幅約 1.6m、深さ約 0.3m 土坑を検出し、そこから須恵器杯蓋（図 10-3）や甕（同 2）の一部が出土した。平行する西隣のトレンチ（T.T.031）では検出されていないので溝状遺構ではないと判断される。須恵器の時期は猿投窯編年の H-44 号窯期（6 世紀末～ 7 世紀初頭）から H-50 号窯期前半（7 世紀前葉）と推定される。大きさの近似する礫が集中することから、人為的に集められ埋められたものと考えられる。その状況から石室用石材調達時の残滓を廃棄したようでもあるが、古墳のすぐ脇でないことや、石材加工に伴う細かい剥片がみられない点はやや不審である。一方で、T.T.029 の北側には、立石状の巨岩とその周囲に土壇のような平場が立地していることから、磐座もしくは岩陰祭祀の可能性も考えておきたいが、T.T.030 などのトレンチ調査でこれを示す証左は得られていない。

検出された古墳　その他、調査対象地内で既知の古墳 14 基の他に、新たに 4 基の古墳（未確認古墳 A ～ D）の存在が確認された。対応する古墳の番号順に記述する。

キジ山 1 号墳（T.T.036・037・042）　尾根筋から東斜面へ移行する地点に立地する。墳丘径 12.5m、周溝まで含めた径 17.5m の円墳である。墳頂部に大きな凹地があり、石室の奥壁と側壁・天井石の一部が残存しているのが確認できる。

キジ山 4 号墳（T.T.060・061・062）　東斜面高位から中位にかけて立地する。墳丘径 12.0m、周溝まで含めた径 16.5m の円墳である。墳頂部に若干の凹地がある。

キジ山 5 号墳（T.T.042・043・048）　東側斜面、キジ山 1 号墳の東下に隣接する。墳丘径 15.5m、周溝まで含めた径 17.5m の円墳である。墳頂部に大きな凹地があり、側壁の一部とみられる石積みが露出する。

キジ山 6 号墳（T.T.092・093・094）　東斜面の低位に立地する。墳丘径 8.0m、周溝まで含めた径 11.0m の円墳である。削平を受けており墳丘および周溝については明瞭でない。

キジ山 7 号墳（T.T.074・075・076）　東斜面の中位に立地する。墳丘径 8.0m、周溝まで含めた径 12.0m の円墳である。墳丘の中央部に南東側へ開く浅い凹地がある。石室後背に相当する T.T.075 からは、須恵器フラスコ瓶片（図 10-8・9）が出土しているが、位置からみてキジ山 8 号墳に由来する可能性もある。

キジ山 8 号墳（T.T.064･065･066）　東斜面中位に立地する。墳丘径 6.0m、周溝まで含めた径 9.0m の円墳である。しかし現況ではほとんど地形の起伏なく、目立たない。

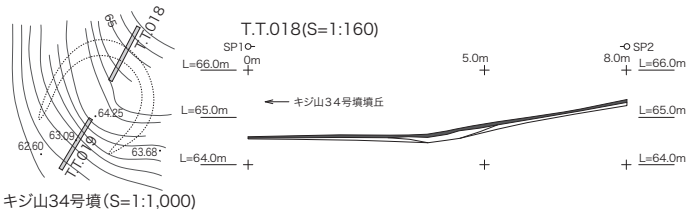
キジ山 9 号墳（T.T.050・051・052）　東斜面高位に立地する。墳丘径 12.5m、周溝まで含めた径 19.0m の円墳である。墳頂部に南西方向へ開く大きな凹地があるが、石材はみえない。

キジ山 10 号墳（T.T.078・079・080）　東斜面の中位に立地する。墳丘径 8.0m、周溝まで含めた径 16.0m の円墳である。低い台状の地形となっている。

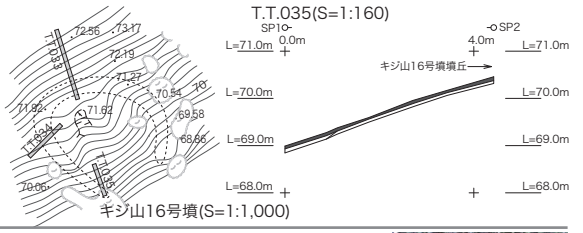
キジ山 11 号墳（T.T.058・059）　東斜面中位に立地する。墳丘径 9.5m、周溝まで含めた径 16.0m の円墳である。石室の一部とみられる礫が露出する。墳頂部に凹地があり、清掃すると、2 か所で長径 5 ～ 20cm の角礫の集中がみられた。

キジ山 12 号墳（T.T.071・072）　東斜面中位に立地する。墳丘径 8.5m、周溝まで含めた径 12.5m の円墳である。南東側が耕作地によって削平されている。

図9　キジ山古墳群範囲確認トレンチ配置（1:1,200）

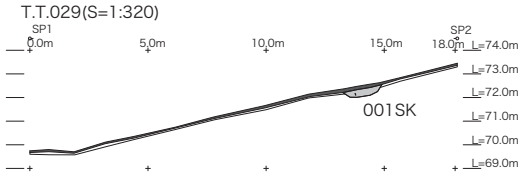


キジ山34号墳(S=1:1,000)

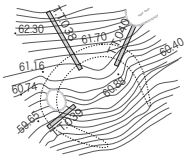


キジ山16号墳(S=1:1,000)

T.T.029 001SK 土坑土層断面と出土した角礫 (南から)

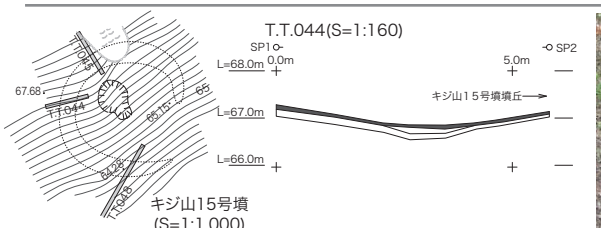


(土層注記)　001SK, 5YR4/4 にぶい赤褐 シルト 径15～20㎝の角礫 (破砕されたものとみられる)が多く入る。須恵器(古墳時代)が出土



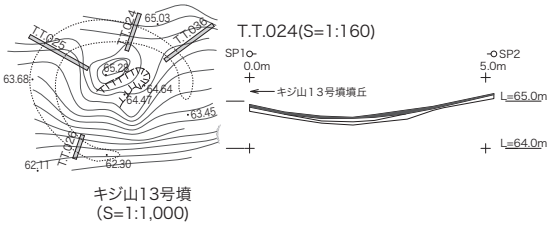
未確認古墳A
(S=1:1,000)

T.T.039（南西から）

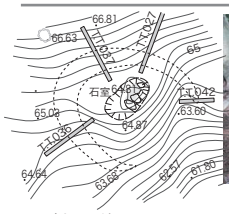


キジ山15号墳
(S=1:1,000)

T.T.044(西から)

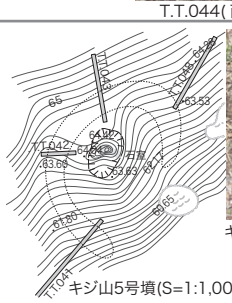


キジ山13号墳
(S=1:1,000)



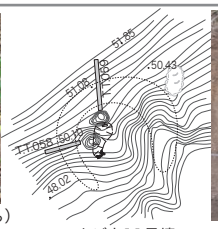
キジ山1号墳(S=1:1,000)

キジ山 1 号墳石室（西から)



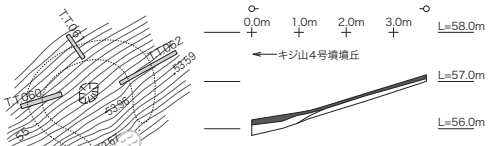
キジ山5号墳(S=1:1,000)

キジ山 5 号墳石室（側壁か、北から）

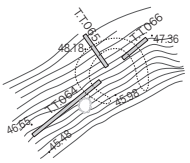


キジ山11号墳
(S=1:1,000)

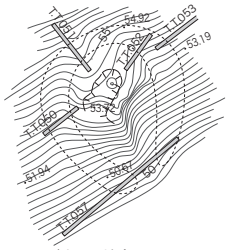
キジ山 11 号墳石室
(南から)



キジ山4号墳(S=1:1,000)



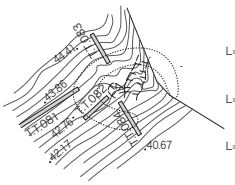
キジ山8号墳(S=1:1,000)



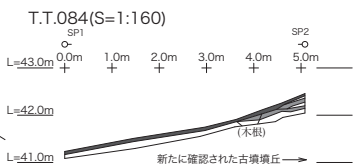
キジ山9号墳(S=1:1,000)

キジ山10号墳
(S=1:1,000)

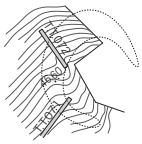
T.T.078(西から)



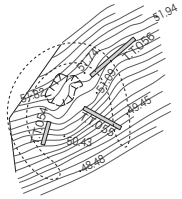
未確認古墳D
(推定される周溝S=1:1,000)



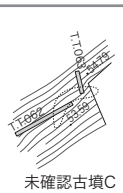
T.T.084 北端（墳丘の版築状盛土確認状況）



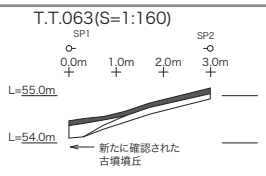
キジ山12号墳(S=1:1,000)

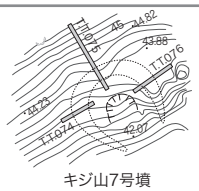


未確認古墳B(S=1:1,000)

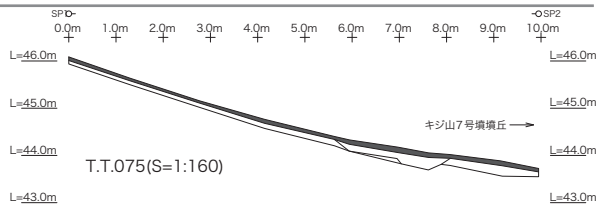


未確認古墳C
(S=1:1,000)





キジ山7号墳
(S=1:1,000)



T.T.075(S=1:160)

図10　キジ山古墳群範囲確認調査成果(古墳測量図とトレンチ土層断面図)

キジ山 13 号墳（T.T.024・025・026・036）　尾根筋から東斜面へ移行する地点に立地する。墳丘径 15.0m、周溝まで含めた径 20.0m の円墳である。墳頂部を中心に大きく北東～南西方向へ断ち割られたような凹地があるが石材はみえない。34 号墳と隣接する側の T.T.025 からは須恵器（7 世紀代杯身）が出土した。

キジ山 14 号墳　東斜面高位に立地する。範囲外であるためトレンチ調査は実施していないが、後背周溝地形が明瞭にみられる。墳頂部に若干の凹地がある。

キジ山 15 号墳（T.T.044・045）　キジ山 16 号墳の南下に巨岩を挟んで隣接する。墳丘径 13.0m、周溝まで含めた径 17.5m の円墳である。墳丘頂部に凹地がある。T.T.044 と T.T.045 からはそれぞれ須恵器（古墳時代瓶類）が出土した。

キジ山 16 号墳（T.T.033・034・035）　山頂立石の南東直下に立地する。墳丘径 12.5m、周溝まで含めた径 16.5m の円墳である。墳丘は比較的目立つ。墳頂部に若干の凹地がある。

キジ山 34 号墳（T.T.018・019・025）　尾根筋から西側斜面へ移行する地点に立地する。墳丘径 11.0m、周溝まで含めた径 13.5m の円墳である。T.T.018 からは須恵器（甕）が出土した。墳丘の盛り上がりは目立たない。

未確認古墳 A（T.T.038・039・040）　東斜面高位、キジ山 13 号墳南東下に立地する。墳丘径 10.5m、周溝まで含めた径 13.5m の円墳である。墳丘の盛り上がりは比較的明瞭である。

未確認古墳 B（T.T.054・055・056）　東斜面中位、水道タンク脇に立地する。墳丘径 11.5m、周溝まで含めた径 16.5m の円墳である。墳丘の盛り上がりは比較的明瞭である。

未確認古墳 C（T.T.062・063）　キジ山 4 号墳東側に立地する。残存状況は良くないが、墳丘径 3m 以上の円墳である。

未確認古墳 D（T.T.082・083・084）　東斜面中位に立地する。墳丘径 7.5m、周溝まで含めた径 10.0m の円墳である。T.T.084 で墳丘盛土の一部土層がみられた。

古墳の配置　以上の古墳群は、南から (a) 未確認古墳 B、(b)13 号墳・未確認古墳 A・9 号墳・8 号墳・7 号墳、(c)5 号墳・11 号墳・6 号墳、(d)4 号墳・10 号墳、(e)12 号墳・未確認古墳 C のそれぞれが高位から低位へと列状の配置となっている。各列の間は仮想グリッド対応のトレンチの調査で、浅い窪地状の地形に礫混じりのしまりの弱い粘土が堆積しているのがみられた。このような堆積は細い谷筋のように分布しており、山頂からの地下脈になっているとみられる。現地形では T.T.68 の下方のようにシダ植物の群生する一画が相当する。ただし窪地といっても極端な谷地形は形成しておらず、古墳列間の空閑地となっていたとみられ、例えば墓道のような機能を果たしていたとも考えられる。

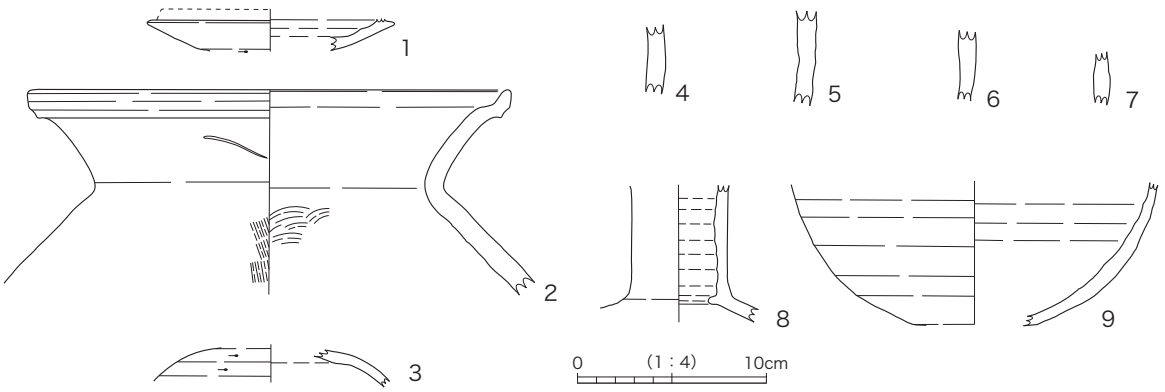


図11　キジ山古墳群範囲確認調査出土遺物実測図（1:4）

第 3 章 発掘調査の成果

第 1 節　概観

調査区の設定　範囲確認調査完了後、愛知県水道用水供給事業関連施設の建設工事は、東側斜面の古墳群を避けるかたちで計画が立てられ、平成 22 年度、これに基づいて発掘調査区が設定された。調査区名はキジ山古墳群が KJ10A ～ C 区、晴雲寺址が SU10A・B 区の計 5 地点である。その配置は、東側斜面下端に KJ10A 区、尾根筋から西側斜面にかけて KJ10B・C 区と SU10A・B 区である。このうち KJ10B 区はキジ山 34 号墳の墳丘に接しているためその一部が検出されると見積もられていたが、KJ10A・C 区については範囲確認調査で顕著な遺構が検出されていなかったことから、古墳そのものよりも古墳関わる祭祀関連や縄文時代などの遺構・遺物が検出される可能性が高いと予想された。また SU10A・B 区については、ともに 500㎡以上の平場であることから瓦が出土した A 区では瓦葺き建物、そして B 区にも非瓦葺き建物跡が存在すると予想した。

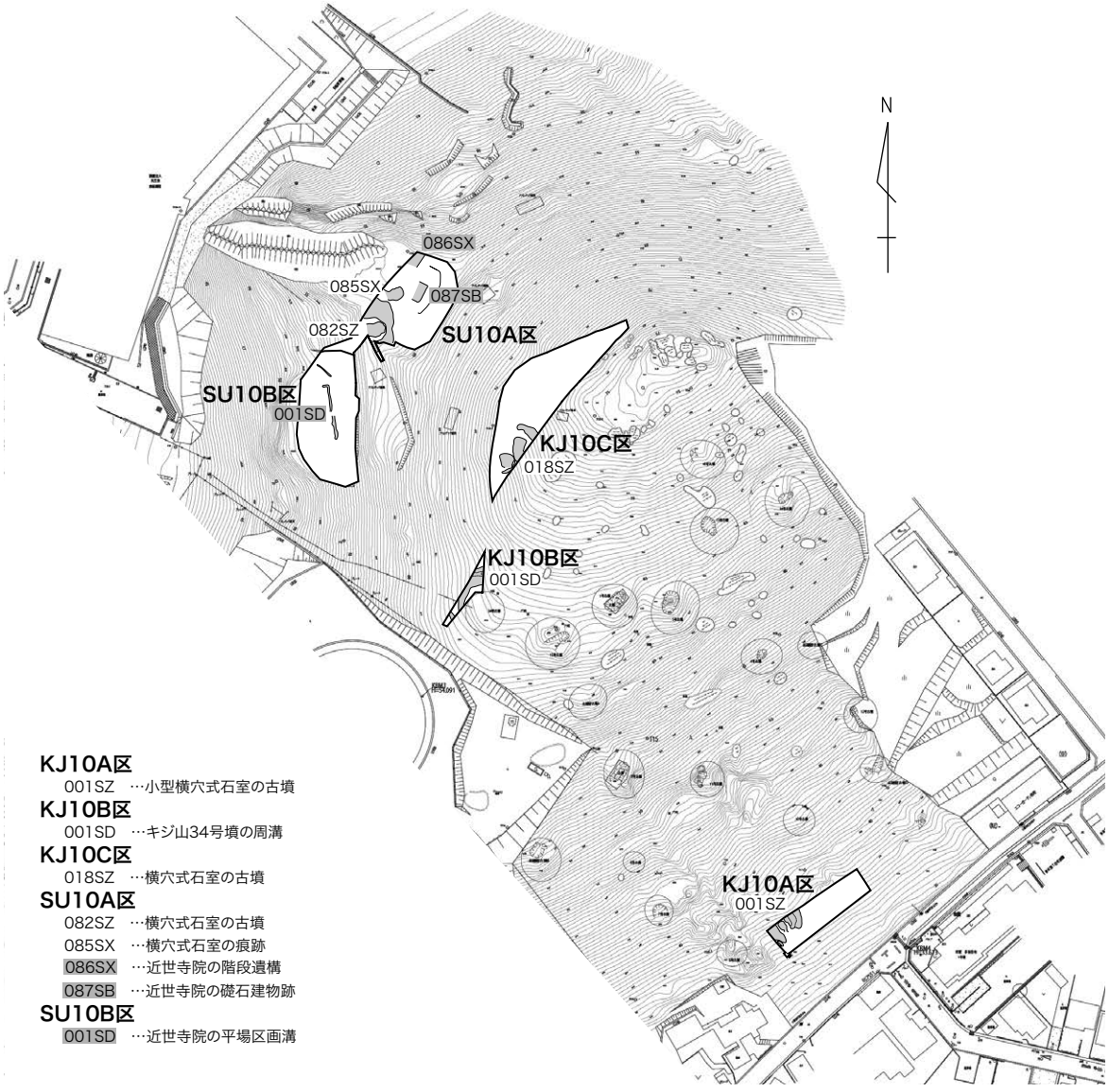


図12　キジ山古墳群・晴雲寺址の発掘調査区と主要遺構（1:2,000）

調査前の状況　発掘調査着手前はいずれの調査区もうっそうとした雑木林となっていた。平場のある晴雲寺址 SU10A・B 区とその周辺は、1970 年代にアスレチック場として利用されており、それらの器具が朽ち果てた状態で放置されていた。伐採直後の検分では、KJ10A・B 区はなだらかな斜面であり、同 C 区は巨岩の南方でいくつかの転石が認められた一帯が比較的傾斜が緩いようであった。SU10A 区では「屏風岩」東側で範囲確認調査時に多数の瓦が出土した T.T.006 の周辺に若干の高まりがあるように見受けられた。なお SU10A・B 区の山頂側は地山の露出した崖面となっていたが、アスレチック場を整備した際に削平されたことによる比較的新しい崩落だと思われた。

新たな古墳の検出　ところが発掘調査が進行するにつれて、KJ10A・KJ10C・SU10A の各調査区で、後期古墳の横穴式石室などが相次いで検出された。最終的に、各調査区で 1 基ずつの横穴式石室計 3 基と、SU10A 区において削平された石室の可能性がある遺構 1 基を確認した。いずれも盗掘や削平を受けているため、天井石を始めとする石材の滅失が著しく、また豊富な副葬品の出土にはいたらなかったが、それでも須恵器・金属製品が検出できた。これら出土品や石室の形状から各石室は築造時期を異にしていることが判明し、当該古墳群における石室構造の変遷をたどる好資料となった。

寺院跡　一方、晴雲寺址調査区のひとつである SU10A 区では、礎石建物とそこに至る階段の遺構を検出した。残念ながら礎石建物は廃寺後の削平を受けているため、建物規模については不明な点が多いが、多数の瓦が出土している。これに対して、もうひとつの調査区である SU10B 区でははるかに狭い規模の平場とそれに伴う溝が検出されたのみで、遺物もほとんどなかった。そのため近世瓦と陶磁器の大半は SU10A 区出土である。

本章の構成　以上が検出遺構の概要であるが、本章では第 2 節で各古墳とその出土遺物、第 3 節で寺院跡、第 4 節でその出土遺物について各々詳述する。

第 2 節　古墳

(1)KJ10A 区 001SZ

調査区概観と石室検出の経緯　調査区は丘陵部南東側斜面が現在の住宅地に接する裾部に位置する。キジ山古墳群の遺跡範囲は市道から約 15m 離れた地点より上位と認定されており、調査区南東辺がそれに相当する。周辺も含めて調査前は雑木林になっていたが、視認できる古墳や範囲確認調査での出土遺物はなかった。

当該調査区における基本土層は、厚さ約 5cm の表土（調査区北壁 T1・同東壁 T2・同西壁土層断面 1 層）

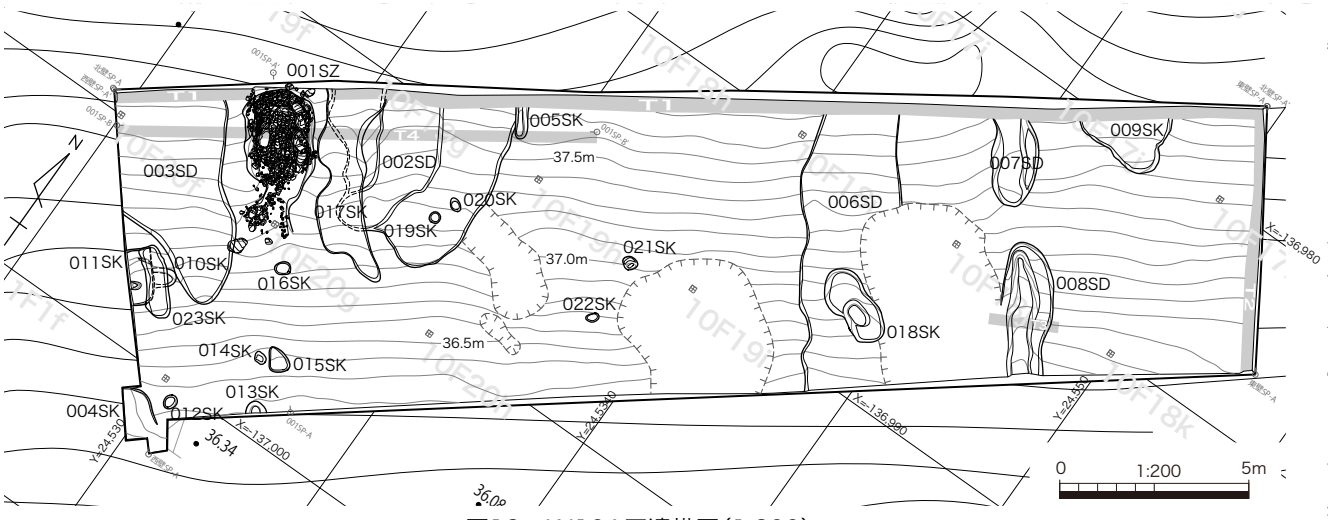


図13　KJ10A区遺構図（1:200）

と、その下に厚さ約 10 ～ 20cm の撹拌を受けたり雨水で流れた地山粘土層（調査区北壁 T1・同東壁 T2 土層断面 2 層と同西壁土層断面 3 層）が全体に認められ、さらにその下で橙色礫混じり粘土層が検出される。当該層は岩盤の風化でできた地山層であり、本調査では当該層上面を遺構検出面とした。

遺構検出では人為的な遺構は少なく、斜面にできた凹地が溝状にいくつか検出されるばかりであったが、調査区南西隅付近において表土掘削直後から径 20cm 以上の礫が相次いで検出され始め、結果的に横穴式石室の側壁や裏込めなどが検出された。またその石室を取り巻くようにして円弧状に近い溝遺構も検出されたことから、後期古墳と認定した。

古墳の位置と構成　古墳の所在地点は国土座標第Ⅶ系の X=-136.993、Y=24.528 に位置し、標高は 37.5m である。地形は北西から南東方向へ下る緩斜面に該当する。当該古墳は横穴式石室 001SZ と周溝 002SD・003SD で構成され、001SZ の中軸線はグリッド北から西へ 38° 振れている。

ところで 001SZ の位置は、遺跡地図で示されるキジ山 6 号墳の位置に近いが、同墳より北東へ約 10m 離れて並列する位置関係にある。6 号墳は範囲確認調査でその遺構や遺物がほとんど検出できなかったことからその存在がやや疑わしく、001SZ が 6 号墳である可能性も考えられたが、周辺民家との位置関係や地表面の凹凸に基づくと、これらを同一視する根拠は薄く、別個のものとして認定する。

墳丘　当該古墳の墳丘盛土は平面検出で認められなかった。なお、古墳の横断面土層は北壁（T1）および T4 で、縦断面土層は南北ベルトで観察したが、同様にして墳丘盛土はなく、削平が地山まで達していた。しかし地山検出面がほぼ石室天井石の位置に相当していることから、さほど墳丘盛土はなかったものと思われる。

墓坑　石室は楕円形の墓坑内に築かれており、墓坑の規模は全長 2.7m、最大幅 1.8m である。約 20° の傾斜する地山に対し水平な底面となるように掘り込まれている（図 17）。したがって奥壁設置箇所が最も深くなり、その深さは 0.6m である。墓坑の壁面は斜め（約 65°）でその立ち上がりは緩やかなカーブとなっている。この壁面と奥壁・側壁石材との間には裏込めとなる礫混じりの赤褐色シルトが充填されている（石室縦断面 8 層および T4 断面 4 層）。この裏込めは、墓坑内では礫が少なくほとんどがシルトや粘土で占められ、天井石近くとなる検出面とそこから上位では多数の礫が密着するようにしてみられた。

奥壁・側壁　奥壁は、正面観が高さ 52cm、幅 36cm の隅丸方形に近い礫で、横面観では据えられた底部が最も厚く上方

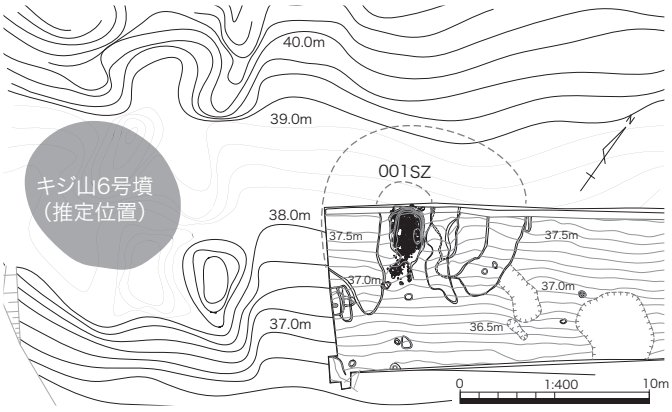


図14　KJ10A区古墳001SZ想定範囲（1:400）

図15 古墳001SZ全礫検出状況（1:40）

ですぼまっている。中央部での厚さが 34cm である。奥壁下端両脇は拳大の角礫を支えにして据えられ、検出時には上端にも 2 点の石材が載っていたことから、これらの礫で位置や高さを微調整していたものと思われる。なお、奥壁の面は直立せず、やや外傾するように設置されている。

側壁の第 1 石は左右ともに奥壁に対し斜めに接し、奥すぼまりな平面形の起点となっている。基底石の配置（図 16 右）からは、後続して据えられた第 2 石も若干の角度をもたせ、さらに第 3 石で奥壁と直交するようにして面をつくっている。ちなみに第 1 ～ 3 石までは左右でほぼ同規模の石材を使用し、第 3 石が長さ約 50m で最も大きい。以降、左壁第 4 石からはややすぼまり始めているが、対する右壁ははるかに小さな礫約 3 点を用いて基底石とし線対称にラインを形成している。第 5 石については左右とも据えられた痕跡も見出せなかったが、墓坑の形状からすると据えられていた可能性もある。

側壁の積み上げ方はこれもほぼ左右対称となっている。基底石第 1・2 石は高さ 10 ～ 20cm 程度でその上に約 15 ～ 20cm 長の角礫 2 ～ 3 段積み上げ、左壁ではその上にやや大きめの礫を載せている。これで奥壁とほぼ同じ高さとなるため、奥壁上の補足礫も気にかかるがほぼこの上に天井石が載せられたものと思われる。したがってこの箇所での側壁高がほぼ石室内法高と考えられ、それは約 0.5m である。そして奥壁同様、側壁も面として外傾するように構築されている。

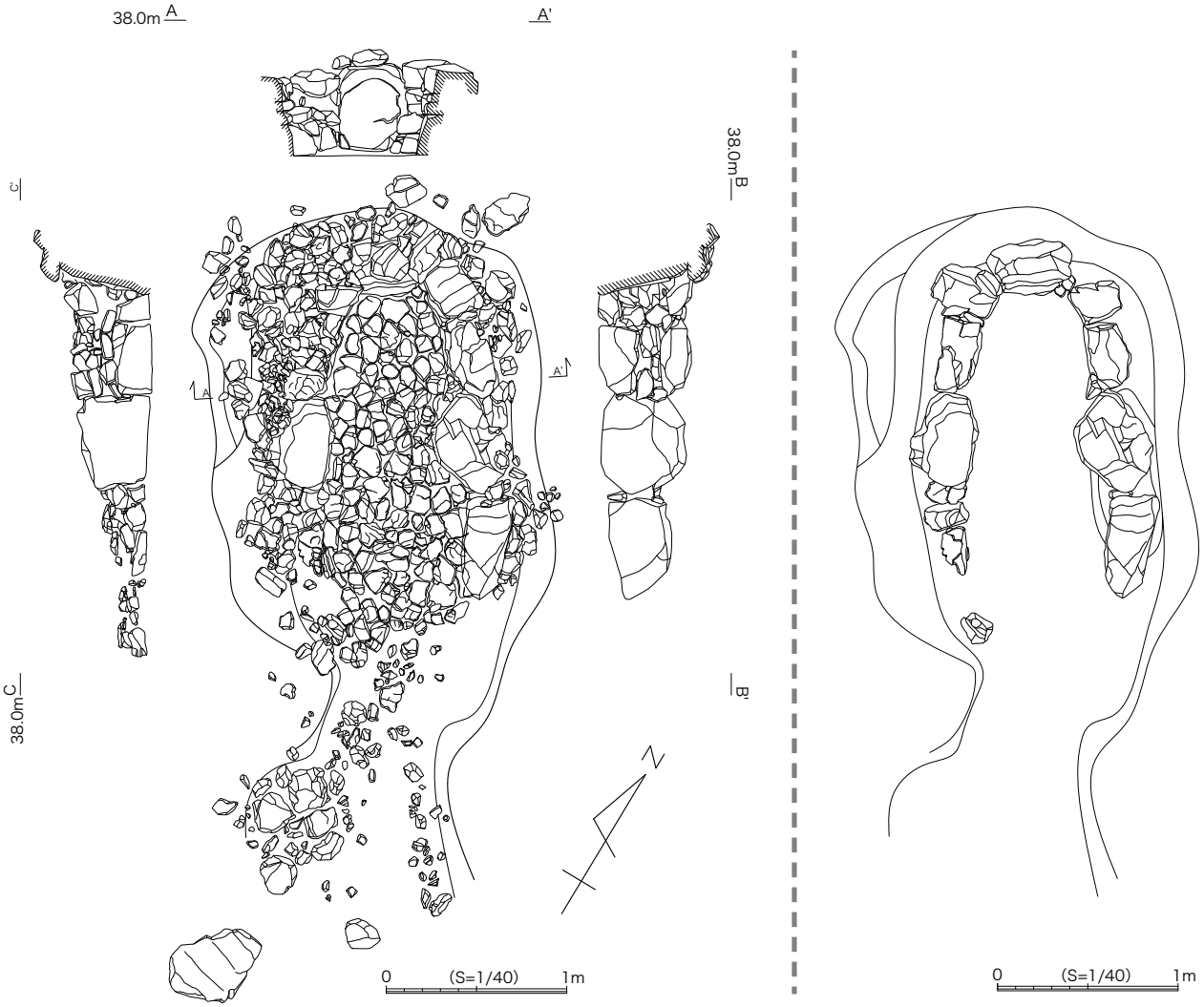


図16　001SZ石室平面図と同基底石平面図（右、ともに1:40）

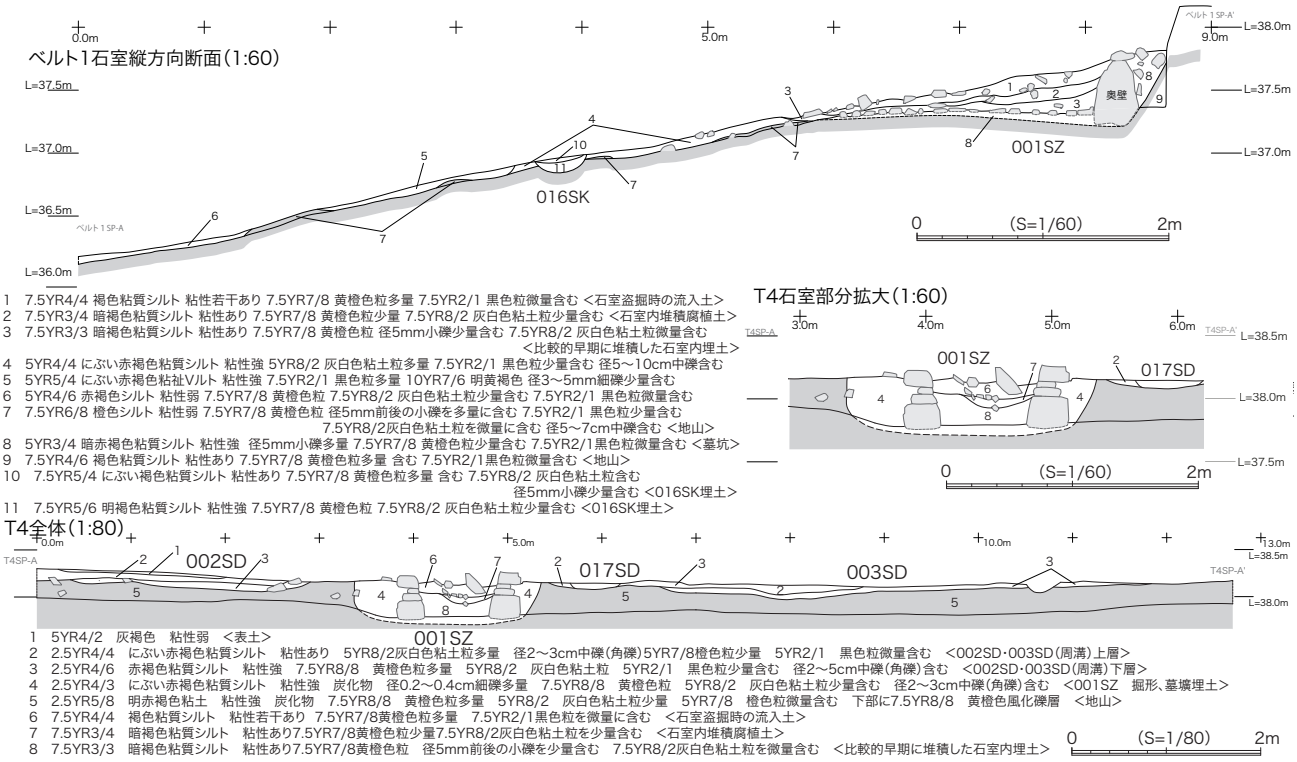
敷石　当該石室では、奥壁・側壁設置後に床面全体に礫を敷き詰めている。敷石の石材は形状はさまざまであるが大きさのほぼ揃った（約 15cm 前後）の角礫を使用し、ほとんど重なり合わないで敷かれている。敷石サンプルを観察すると、金属などで打ち欠いて調整した痕跡が認められる。

敷石の範囲は、左壁第 4 石まではほぼ原位置を保ったと思われる出土状況であったが、そこから前庭部方向の礫は向きや形状がそれまでと異質で敷石とは認めがたい。したがって敷石の範囲は、奥壁～側壁第 4 石の長さ 1.8m、幅 0.7m の範囲内に限定され、これが石室の床面範囲と呼べるものであろう。

石室内埋土　石室内はほぼ上下 2 層の堆積層で構成される。T4 石室横断面（図 17）によると、下層（8 層）は若干の小礫を含む暗だけの褐色土であるのに対し、腐葉土（7 層）を挟んだ上層（6 層）は角礫が多数混じる褐色土となっている。下層は細分しがたい均一さで、時間経過に従って堆積したというよりも比較的短期間に埋没したという表現の方が近い。敷石もほとんど動いた形跡がみられないことから、埋葬時に下層相当分の土を入れてから天井石で蓋をしたような印象を抱かせる。その後石室開口によって表面の土壌化が進み、上層は石材持ち出し目的の石室破壊時の堆積と考えられる。したがって埋葬状況が比較的保全された状態が続いていたと想像されるが、棺などの痕跡はなくまた各層からの顕著な出土遺物もなかった。下層床面付近で土師質の極小片らしきものを採集したのみである。ちなみに当該石室埋土は水洗選別を実施していないが、慎重な掘削を行っても骨片などは見当たらなかった。

前庭部と関連遺物　しかしながら、001SZ 下方で遺構検出作業中、木根の間から須恵器杯の小片が出土した（図 18-10）。高台は扁平で杯部の立ち上がりは残存部分でみれば明瞭な屈曲はなく曲線的である。明灰色で硬質な焼成をしており、湖西窯を含む在地産であると考えられる。静岡県下の須恵器編年（鈴木 2004）を参照すればそのⅤ期に相当し、およそ 7 世紀末～ 8 世紀初頭の年代と推定される。001SZ 前方には墓坑として掘削された凹みが存在するが、これが前庭部に相当するとみることができるであろう。ここに供えられたものが落下したものと推定する。

周溝 002SD・003SD　横穴式石室 001SZ に伴う古墳周溝である。それぞれ石室両外側を概ね南北

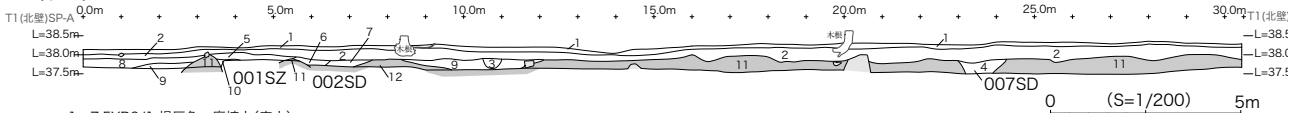


1　7.5YR4/4 褐色粘質シルト 粘性若干あり 7.5YR7/8 黄橙色粒多量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <石室盗掘時の流入土>
2　7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒少量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <石室内堆積腐植土>
3　7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒 径5mm小礫少量含む 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む <比較的早期に堆積した石室内埋土>
4　5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 5YR8/2 灰白色粘土粒多量 7.5YR2/1 黒色粒少量含む 径5～10cm中礫含む
5　5YR5/4 にぶい赤褐色粘祉Vルト 粘性強 7.5YR2/1 黒色粒多量 10YR7/6 明黄褐色 径3～5mm細礫少量含む
6　5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 7.5YR7/8 黄橙色粒 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む 7.5YR2/1 黒色粒微量含む
7　7.5YR6/8 橙色シルト 粘性弱 7.5YR7/8 黄橙色粒 径5mm前後の小礫を多量に含む 7.5YR2/1 黒色粒少量含む 7.5YR8/2灰白色粘土粒を微量に含む 径5～7cm中礫含む <地山>
8　5YR3/4 暗赤褐色粘質シルト 粘性強 径5mm小礫多量 7.5YR7/8 黄橙色粒少量含む 7.5YR2/1黒色粒微量含む <墓坑>
9　7.5YR4/6 褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒多量 含む 7.5YR2/1黒色粒微量含む <地山>
10　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒多量 含む 7.5YR8/2 灰白色粘土粒含む 径5mm小礫少量含む <016SK埋土>
11　7.5YR5/6 明褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR7/8 黄橙色粒 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <016SK埋土>

1　5YR4/2　灰褐色　粘性弱　<表土>
2　2.5YR4/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性あり　5YR8/2灰白色粘土粒多量　径2～3cm中礫(角礫)5YR7/8橙色粒少量　5YR2/1　黒色粒微量含む　<002SD･003SD(周溝)上層>
3　2.5YR4/6　赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/8　黄橙色粒多量　5YR8/2　灰白色粘土粒　5YR2/1　黒色粒少量含む　径2～5cm中礫(角礫)含む　<002SD･003SD(周溝)下層>
4　2.5YR4/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　炭化物　径0.2～0.4cm細礫多量　7.5YR8/8　黄橙色粒　5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　径2～3cm中礫(角礫)含む　<001SZ　掘形、墓壙埋土>
5　2.5YR5/8　明赤褐色粘土　粘性強　炭化物　7.5YR8/8　黄橙色粒多量　5YR8/2　灰白色粘土粒少量　5YR7/8　橙色粒微量含む　下部に7.5YR8/8　黄橙色風化礫層　<地山>
6　7.5YR4/4　褐色粘質シルト　粘性若干あり　7.5YR7/8黄橙色粒多量　7.5YR2/1黒色粒を微量に含む　<石室盗掘時の流入土>
7　7.5YR3/4　暗褐色粘質シルト　粘性あり7.5YR7/8黄橙色粒少量7.5YR8/2灰白色粘土粒を少量含む　<石室内堆積腐植土>
8　7.5YR3/3　暗褐色粘質シルト　粘性あり7.5YR7/8黄橙色粒　径5mm前後の小礫を少量含む　7.5YR8/2灰白色粘土粒を微量含む　<比較的早期に堆積した石室内埋土>

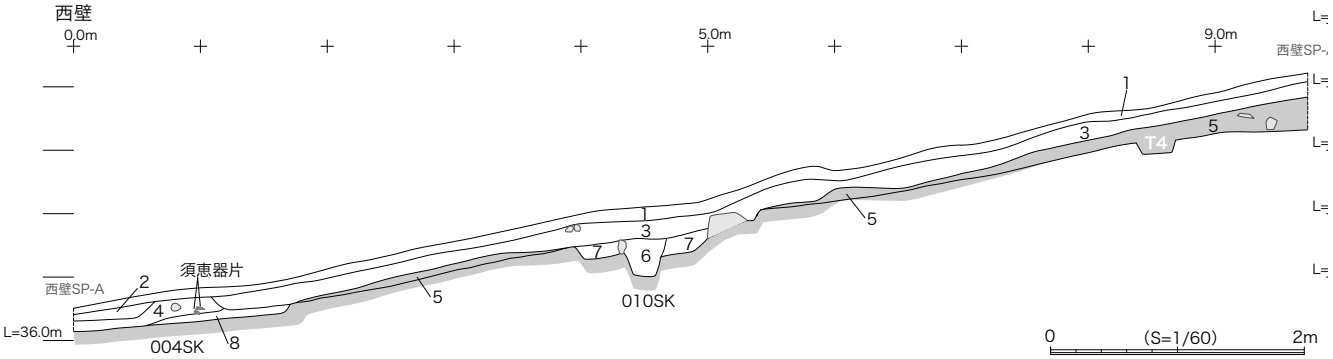
図17 001SZ石室断面図(1:60､1:80)

T1(北壁)



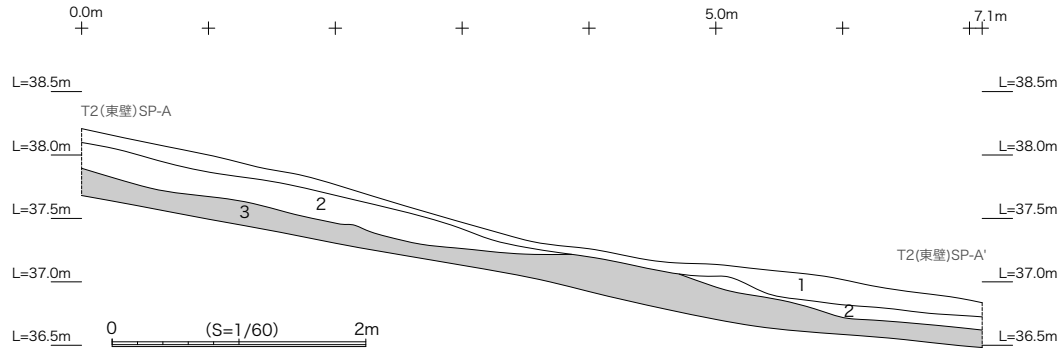
1　7.5YR6/1 褐灰色　腐植土(表土)
2　5YR5/4 にぶい赤褐色 シルト　粘性弱　径3～5cm中礫(角礫)<10YR8/6 黄橙色を呈した風化岩>が南側(周溝部以南)に集中　10YR8/2 灰白色 粘土粒多量　7.5YR8/8黄橙色少量　炭化物粒微量含む
3　7.5YR4/6 褐色 粘質シルト　粘性あり　7.5YR2/1 黒色粒多量　7.5YR8/8 黄橙色 粘土粒少量含む
4　7.5YR4/4 褐色 粘質シルト　粘性強　7.5YR2/1 黒色 粒多量　7.5YR8/8 黄橙色 粘土粒　径2～3cm中礫(角礫)少量　10YR8/2 灰白色 粘土粒微量含む 径4～5cm中礫(角礫)含む　<007SD>
5　5YR3/4 暗赤褐色 粘質 シルト　粘性あり 7.5YR2/1黒色 粒多量　7.5YR8/8 黄橙色 粒　径3cm前後中礫(角礫)少量　10YR8/2 灰白色 粘土粒微量含む 径5～10cm大礫(角礫)含む　<001SZ>
6　2.5Y4/4 にぶい赤褐色 粘質シルト　粘性あり 7.5YR2/1黒色 径2～3cm中礫(角礫)多量　7.5YR8/8 黄橙色 粒　10YR8/2 灰白色 粘土粒少量含む　径8cm大礫(角礫)含む
7　2.5YR4/6 赤褐色 粘質シルト　粘性強　7.5YR8/8 黄橙色 粒多量　5YR8/2 灰白色 粘土粒　5YR2/1 黒色 粒少量含む　径2～5cm中礫(角礫)含む　<002SD、001SZ周溝>
8　2.5YR4/8 赤褐色 粘質シルト　粘性あり　7.5YR2/1 黒色 粒多量　7.5YR8/8 黄橙色 粒 径8～10cm大量(角礫)　径2～3cm中礫(角礫)少量含む　<002SD、001SZ周溝>
9　2.5YR3/6 暗赤褐色 粘質シルト　粘性強　7.5YR8/8 黄橙色 粒多量　7.5YR2/1 黒色 粒少量含む<002SD、001SZ周溝>
10　5YR3/4 暗赤褐色 粘質シルト　粘性強　径5mm前後小礫多量　7.5YR7/8 黄橙色 粒を少量含む　7.5YR2/1 黒色粒を微量に含む　<墓壙埋土>
11　2.5YR5/6 明赤褐色 粘土　粘性強　7.5YR8/8 黄橙色 粘土粒　7.5YR2/1 黒色 粒少量含む　<地山>
12　2.5YR5/6 明赤褐色 粘土　中礫多い　<地山>

西壁



1　7.5YR5/1 褐灰色 腐葉土　粘性弱　<表土>
2　7.5YR5/4 にぶい褐色 粘質シルト　粘性あり 7.5YR2/1 黒色シルト粒を多量に含む　7.5YR8/8 黄橙色シルト粒を少量含む　<腐植土>
3　5YR5/4 にぶい赤褐色 粘質シルト　粘性やや強 径2～3cmの中礫 5YR7/8 橙色シルト粒を多量に含む
4　5YR4/6 赤褐色 粘質シルト　粘性強 5YR7/8 橙色粒を多量に含む 5YR8/2 灰白色 粘土粒 7.5YR2/1 黒色粒を少量含む 径5cmの中礫を含む
5　2.5YR4/8 赤褐色 粘土　粘性あり 径2～3cm中礫の角礫 7.5YR2/1 黒色粒を多量に含む 5YR8/2 灰白色粘土粒を微量に含む　<地山>
6　5YR3/4 暗赤褐色 粘質シルト　粘性強 径1～2cmの中礫　7.5YR8/8 黄橙色粒を多量に含む 7.5YR2/1 黒色粒を少量含む 径5cmの中礫を含む　<010SK>
7　2.5YR4/4 にぶい赤褐色 粘質シルト　粘性強 7.5YR2/1 黒色粒を多量に含む 径5cmの中礫を含む　<010SK>
8　5YR4/4 にぶい赤褐色 粘質シルト　粘性強　7.5YR8/8 黄橙色粒　7.5YR2/1 黒色粒　径1～2cm中礫少量含む　<004SK>

T2(東壁)



1　7.5YR6/1 褐灰色 腐葉土　<表土>
2　5YR5/4 にぶい赤褐色 シルト　粘性弱　径3～5cm中礫(角礫:10YR8/6 黄橙色 風化岩)が南側(周溝部以南)に集中
10YR8/2 灰白色 粘土粒多量　7.5YR8/8 黄橙色 少量　炭化物粒微量含む
3　2.5YR5/6 明赤褐色 粘土　粘性強　7.5YR8/8 黄橙色 粘土粒　7.5YR2/1 黒色 粒少量含む <地山>

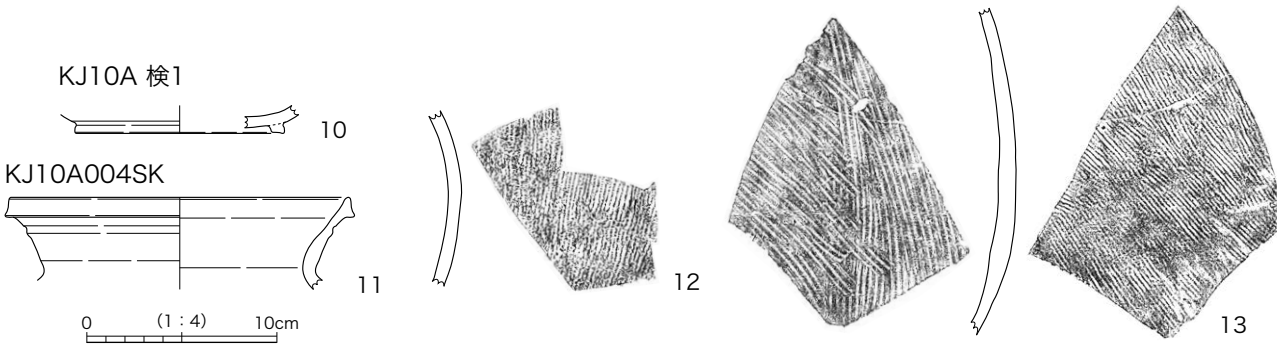


図18　KJ10A区基本土層断面および出土遺物実測図

に展開し石室前庭部脇で収束する。後背部分は調査区外にのびる調査区内におけるそれぞれの規模は 002SD が最大幅 4.9m、南北長 4.2m、で、003SD が最大幅 3.0m 以上、南北長 5.4m である。いずれも遺構確認面から約 15cm と浅い皿状を呈しているが、002SD では中央部分で最大幅 3.0m、南北長 3.5m のやや凹む箇所があり、おそらくこの凹み範囲が最終的に周溝になるよう企図して掘削したと考えられる。すると先述規模の範囲は、古墳造営時に墳丘用の土を掻き集めた範囲と推定される。

土坑 004SK　調査区南隅に位置する。当初遺構検出で調査区西壁に沿って長さ 1.2m の土坑の一部から須恵器甕片が相次いで出土したため、同壁の土層観察完了後西と南へ 0.2m ずつ拡張して当該遺構の続きを調査した。すると南側では表土と地山が接して間の土層が消滅していたのに対し、西側ではほぼ同じ深さで続いていることが判明した。結果的には、北東から南西方向へ最大長 1.3m 以上、深さ 8cm の規模となる皿状形態をしているが、全体の平面形は楕円形もしくは隅丸方形のいずれかになると推定されるにとどまる。

出土遺物（11 ～ 13）は、いずれも須恵器の甕で胎土・色調から同一個体と判断される。11 は甕の口縁から頸部で、上方に鋭角となる三角形の口縁からのびる頸部は短めで波状や凹線の施文はない。12・13 は甕の胴部である。外面はおびただしいタタキ締め痕（平行タタキ）があり、13 では内面にハケ状工具でナデ調整した痕跡がみえる。後者はタタキ成形時の内面押さえ具痕を消すようにして施行されている。

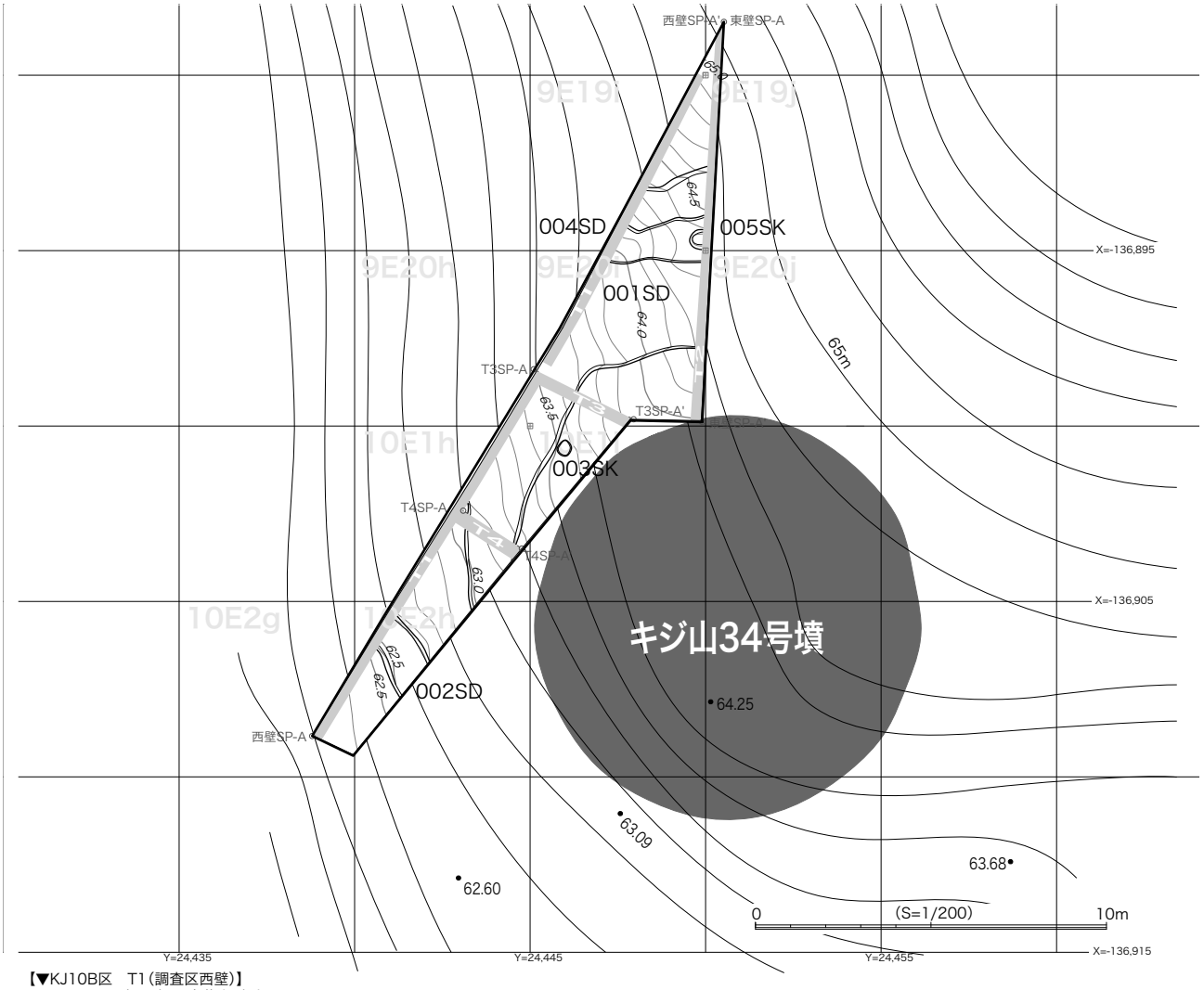
溝 006SD　調査区半ばよりやや北東側で検出された幅約 2.6m、深さ 3 ～ 7cm の溝で、調査区を北西から南西方向へ概ね直線的に抜けている。形状が明瞭でないことから大雨時の流水痕とも考えられるが、その延長上に、調査区上方のキジ山 10 号墳西側の谷状凹地を示す等高線のカーブがあることから（図 12）、山頂方向へ至る道であった可能性もあり、第 2 章で述べたように古墳群の墓道もその性格の 1 つとして挙げられる。

溝 007SD・008SD　溝 006SD の北東側にほぼ同じ方向でのびる溝状遺構である。007SD は幅 1.2m、深さ 18cm で、008SD は幅 1.4m、深さ 30cm である。両者はほぼ同じ延長上に位置するものの、完全に切れていてその間は 0.9m 離れている。また 006SD と平行するものの明瞭な掘り込みのある溝であり、自然に形成されたものとは考えにくい。当該遺構については、出土遺物が全くないことから時期を特定することができないものの、006SD との位置からこれに関係するものと推測する。

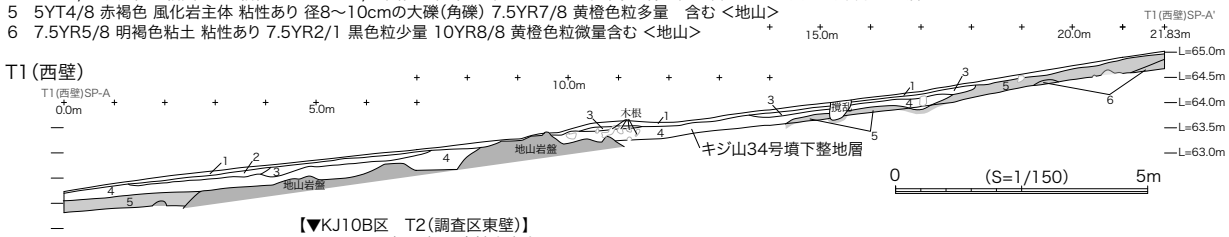
(2)KJ10B 区キジ山 34 号墳

KJ10B 区　調査区は尾根筋から西側へ傾斜が始まる地点に位置する。南東側に隣接してキジ山 34 号墳が所在しており、調査区南東壁は墳丘盛土の裾に沿って設定されている。

基本層位と造成面　土層は調査区東壁（T2）と同西壁（T1）で南北方向の基本土層を把握し、東西方向については T3・T4 を設定して補足した（図 19）。T2 では、北から半ばまでは表土直下で地山粘土層がみられ、上層はわずかに礫が混じるが下層はほとんど礫がない。それを大きく切り込む斜めの分層線は明らかに人為によるもので、ここから南側では直径 10cm 以下の角礫が多数混じる堆積層（4･5 層）になっており、地山粘土層はトレンチ底の一部で検出されるにとどまる。この 5 層を掘り込む 3 層が 004SD、3 層より上位の浅い皿状の堆積（2 層）が 001SD に相当する。T1 では中央部以外で地山層が認められ、北側では T2 同様の掘り込みによる傾斜ラインがみられた。一方南側では地山といってもチャートの岩盤が約 7m のびており、その間の 34 号墳下整地層（4 層）は約 20cm の厚さにとどまっているが、調査区南端で地山が落ち込む地点では 5 層がみえる。次いで T3 では地山粘土と岩盤はトレンチ半ばまでで、その西側は岩盤が風化した礫層（T3 の 4 層）が整地層下位を占めており、T1 中央部の凹地はこれに相当する。このことから墳丘端より西方へ約 5 ～ 10m の斜面は、山頂側を削った排土



【▼KJ10B区　T1(調査区西壁)】
1　10YR6/1 褐灰色 <腐葉土 表土>
2　7.5YR7/6 橙色砂質シルト 粘性弱 径3～5cm中礫(角礫)多量含む <002SD>
3　7.5YR5/6 明赤褐色砂質シルト粘性弱 7.5YR7/8 黄橙色粒 少量含む <001SD>
4　5YR5/6 明赤褐色粘質シルト粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒 多量 径2～3cmの中礫(角礫)を少量含む <キジ山34号墳下整地層>
5　5YT4/8 赤褐色 風化岩主体 粘性あり 径8～10cmの大礫(角礫) 7.5YR7/8 黄橙色粒多量　含む <地山>
6　7.5YR5/8 明褐色粘土 粘性あり 7.5YR2/1 黒色粒少量 10YR8/8 黄橙色粒微量含む <地山>



【▼KJ10B区　T2(調査区東壁)】
1　10YR6/1褐灰色 <腐植土表土>
2　7.5YR5/6 明褐色砂シルト 粘性弱 7.5YR7/8 黄橙色粒少量 含む 001SD <キジ山34号墳周溝および墳丘>
3　5Y5/6 明赤褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒多量 炭化物粒少量含む
4　5YR4/8 赤褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒多量 径2～3cmの中礫(角礫)を少量含む <キジ山34号墳下整地層>
5　5YR5/8 明赤褐色粘質シルト 粘性強　7.5YR7/8 黄橙色粒 径5～8cmの中礫(角礫)大量 炭化物粒少量含む <キジ山34号墳下整地層>
6　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 粘性弱 径5～8cmの中礫(角礫)を少量含む
7　7.5YR5/8 明褐色粘土 粘性あり 7.5YR2/1 黒色粒少量 10YR8/8 黄橙色粒微量含む <地山>

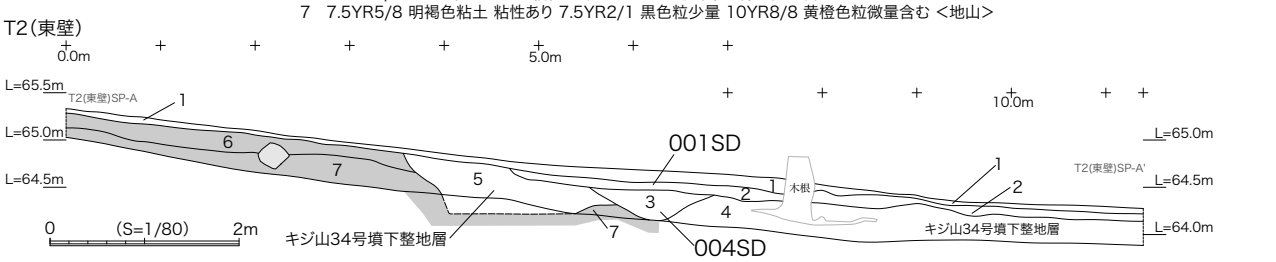


図 19　KJ10B 区遺構図および基本土層断面図

で埋め立て造成をしていることが明らかとなった。またそれにあたって岩盤を上手く取り込んでいるものと思われる。これに対して墳丘東側は等高線の状況から推察すると、墳丘北側同様に削り出し造成を行っているものとみられる。総合すると、推定される墳丘中心から直径 13m の円形（約 530㎡）に造成範囲が及んでいたと考えられる。

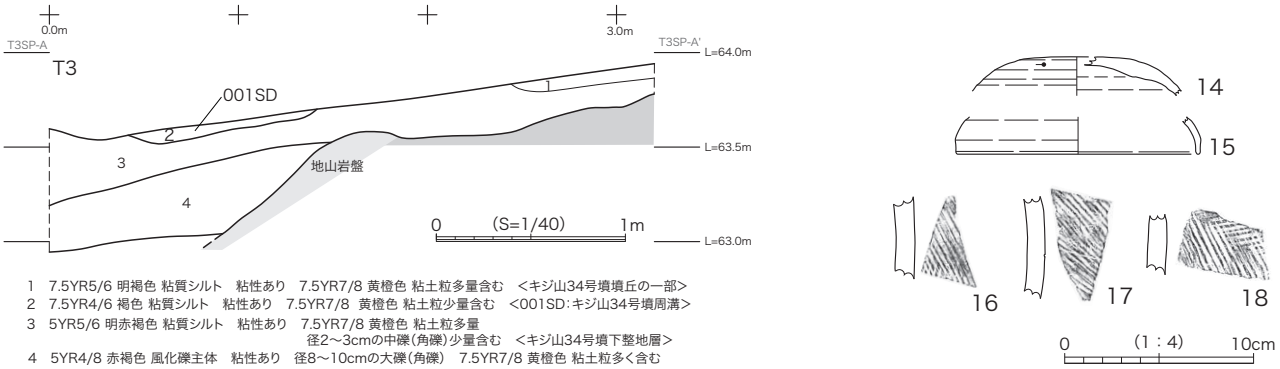
造成範囲は調査区北半（グリッド：9E19i・20i）に限定して掘削調査した（写真図版 6 右下参照）。約 55° の傾斜で山頂側を削り平らな底面を造る。その埋土は若干の炭化物と多くの角礫を含み、削り出し面との境界が明瞭であることから掘削後すぐに埋め固められたものと推定される。このことから当該遺構がキジ山 34 号墳の周溝として機能していた可能性は低いと判断される。なお埋土中から出土遺物はなかった。

周溝 001SD　当初の検出で確認された溝状遺構で、幅 4.7 ～ 5.2m、深さ 8cm の皿状の断面となる。平面形は推定墳丘裾に対し周溝状にカーブしている。ただし、埋土は調査区東壁 T2 の 2 層に相当するが、溝の立ち上がりの先もほぼ変化なく調査区外の推定墳丘裾までのびている。したがって、当該遺構を周溝とするならばその幅は約 5m 以上となり墳丘直径は約 10m（以下）となる（図 19）。また 001SD の深さを周溝の深さと考えると、相当の削平を受けていることも考えられる。出土遺物は遺構検出時に須恵器杯蓋（図 20-14・15）と同甕（16 ～ 18）が出土したのみで、遺構掘削開始後は全く出土しなかった。杯蓋は 7 世紀代、甕は同一個体の胴部片で外面に平行文タタキ痕がみえ、内面は丁寧にナデを行っている。

002SD　調査区南端付近にある。浅い皿状の断面となる溝状遺構で、古墳造成層上、表土層直下で検出されている。遺物はなく古墳との関連は薄いとみられる。等高線とほぼ平行にのびていることや、調査前に「キジ山」尾根筋から西斜面へ下る道がこの付近にあったことから、その凹みが遺構検出面にあらわれていたのかもしれない。

004SD　001SD 底面で検出された幅 1.3m、深さ 32cm の溝状遺構である。ほぼ東西方向に 2.4m のび、両端は調査区外である。調査区東壁（T2）断面では緩い V 字形をしているが（3 層）、同西壁（T1）断面では明瞭に見出せていない。T1 観察後に 001SD 底面の検出を行ったことも影響するが、埋土が明赤褐色粘土を主体としていることも関係しているだろう。そのため掘削後比較的短期間で埋められた可能性が考えられる。出土遺物はない。

当該遺構の性格としては、周溝 001SD と完全に重複して検出されていること、先述の古墳造成層に掘り込まれていることの 2 点を考慮すると、キジ山 34 号墳に関わる施設と考えることができる。ただし、すぐに埋めらていることやその延長が 001SD と全く同一ではなく、むしろ等高線に直交する関係にあることに注意したい。すると古墳築造時の排水施設という可能性も考えられる。



1　7.5YR5/6 明褐色 粘質シルト　粘性あり　7.5YR7/8 黄橙色 粘土粒多量含む　<キジ山34号墳墳丘の一部>
2　7.5YR4/6 褐色 粘質シルト　粘性あり　7.5YR7/8　黄橙色 粘土粒少量含む　<001SD：キジ山34号墳周溝>
3　5YR5/6 明赤褐色 粘質シルト　粘性あり　7.5YR7/8 黄橙色 粘土粒多量
　径2～3cmの中礫（角礫）少量含む　<キジ山34号墳下整地層>
4　5YR4/8 赤褐色 風化礫主体　粘性あり　径8～10cmの大礫（角礫）　7.5YR7/8 黄橙色 粘土粒多く含む

図20　KJ10B区T3土層断面（1:40）および同区出土須恵器実測図（1:4）

(3) KJ10C 区 018SZ

KJ10C 区の概観　調査区は山頂の巨岩群から西方へ約 30m、高低差で約 4m 下った斜面地である。調査区のほぼ中央の巨岩を挟んで北側を KJ10Ca 区、同南側を KJ10Cb 区としたが、Ca 区については遺物は全く出土せず、木根痕と考えられる撹乱がいくつかみられたのみである。一方 Cb 区では、第 1 次遺構検出において、段切り状の整地層と、それを山頂側から直交して切り込む溝状遺構がみられる程度であった。しかし調査区東壁のトレンチ（T1）で出土した須恵器に端を発した墓道 017SD の検出に続いて、第 2 次遺構検出を実施した結果、古墳の主体部である横穴式石室古墳 018SZ と周溝 019SD および墳丘に後から敷設された礫群 016SX が検出されている。

基本土層　調査区東壁（T1）土層断面を基本土層とする (図 22)。腐葉土直下の 1・2 層が実質表土といえる。この下層に広がるのが 5 層で、同層上面で第 1 次遺構検出をおこなった。出土遺物から当該層は江戸時代後期から近代の堆積と考えられ、粘性・締まりの弱い赤褐色粘土に多量の礫が含まれることから、上位からの土砂の流出もしくは人為的な切り崩しが広範に及んだものと考える。この下位で横穴式石室などが検出され、それらが掘り込まれる粘性・締まりの強い明褐色粘土層（17 層）が地山となる。この地山層は巨岩から南側（Cb 区）で全体でみられ、所々で転石のように露頭している礫が認められる。一方北側 (Ca 区) では特に調査区北端を中心に、岩盤が連続するようにして検出されている。

第 1 次検出の遺構　001SD･002SD･008SD は、ほぼ東西方向にのびる溝状遺構である。形状は不明瞭で、断面も皿状となるが明らかでない。調査区東壁から外の山頂方向へ延長するとみられる。後述する段切り状遺構を切り込んでおり、また等高線に直交している点からも雨水が流下した痕跡もしくは斜面を下る道跡なのかもしれない。

次に、010SD・013SD・014SD・015SD であるが、これらは 001SD などに切り込まれる溝状遺構で、等高線とほぼ平行な位置関係にある。幅は 1.1 ～ 2.8m で、形状は不明瞭で部分的に深くなる部分もある。010SD は屈曲し調査区東壁かから外へ、014SD はクランクしさらに南へのびている。出土遺物はなかった。比較的上層の遺構であることから、近代にかかる時期が想定され、畝状に展開することから一案として耕作の痕跡としての段切り状遺構ではないかと推定する。

古墳の位置と構成　KJ10C 区の古墳は調査区南半（Cb 区）の東壁に接する位置にあり、国土座標第Ⅶ系の X=-136.859、Y ＝ 24.455、標高は 69 ～ 70m にある。その構成は横穴式石室 018SZ とその墓道および排水溝 017SD、そして石室背後の周溝 019SD である。墳丘はほとんどが削平されており残存していなかった。石室 018SZ の方位は国土座標の北から東へ 4° 振れるのみでほぼ南北方向といえる。

墓道と排水溝 017SD　018SZ の玄門に取り付く墓道と排水溝からなる溝状遺構である。その一部は調査区東壁から外にあるため、全形は明らかではないが、おそらく石室玄門から直進する墓道があってそこから分岐する形状になっているものと想定される。調査区内では 018SZ との接点を発して一旦南へ延びたのち、曲線を描きながらやがて西南西方向へ向かっている。この間の長さは 6.8m で、末端付近での幅は 0.4m である。その底部はほぼ水平になっているので、末端は立ち消えになるような形状となっている。溝の断面形は U 字形をしており、最深部での深さは 0.6m である。

当該遺構は、調査区東壁トレンチ T1 掘削時に検出され須恵器の出土もあったが、当初は礫群 016SX に伴う周溝と想定していた。それは 016SX の礫分布の縁と 017SD の検出ラインが合致していたことによる。しかし 017SD 埋土を東壁（T1）土層断面（図 22）でみると、検出面に広がる 8 層は、石室撹乱時の堆積である 10 層の上に展開していて明らかに新しい堆積であることが示される。8 層からは須恵器フラスコ瓶や広口壷の破片が散乱して出土したが、これらは盗掘時に破砕されたものと思われる。撹乱は 016SX よりも後と考えられ、そのため 017SD 検出面が 016SX を切り込むかたちで見えたと考えられる。017SD を含む墓道の元々の堆積は 12・13 層であり、これらの層にはほとんど礫が含まれ

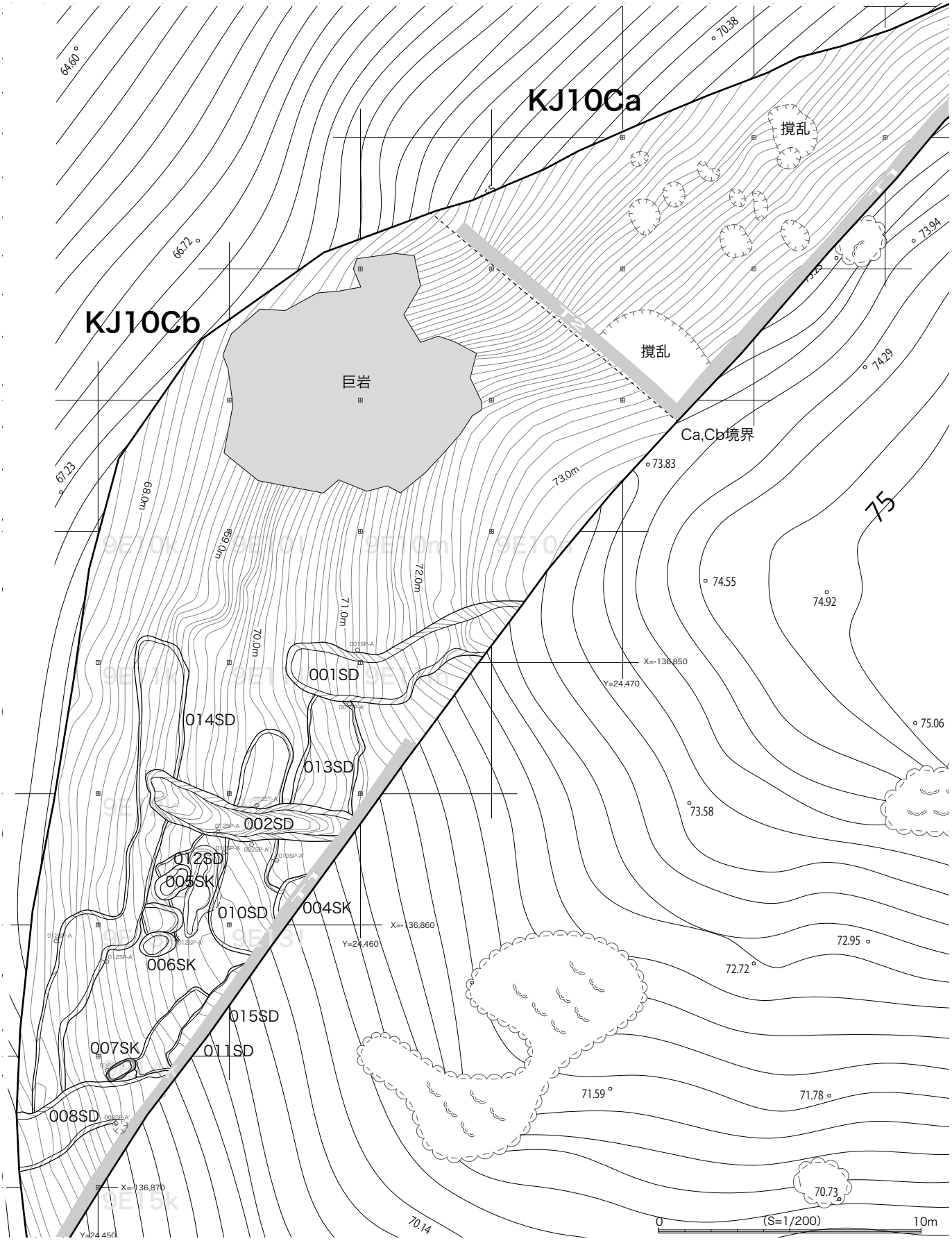
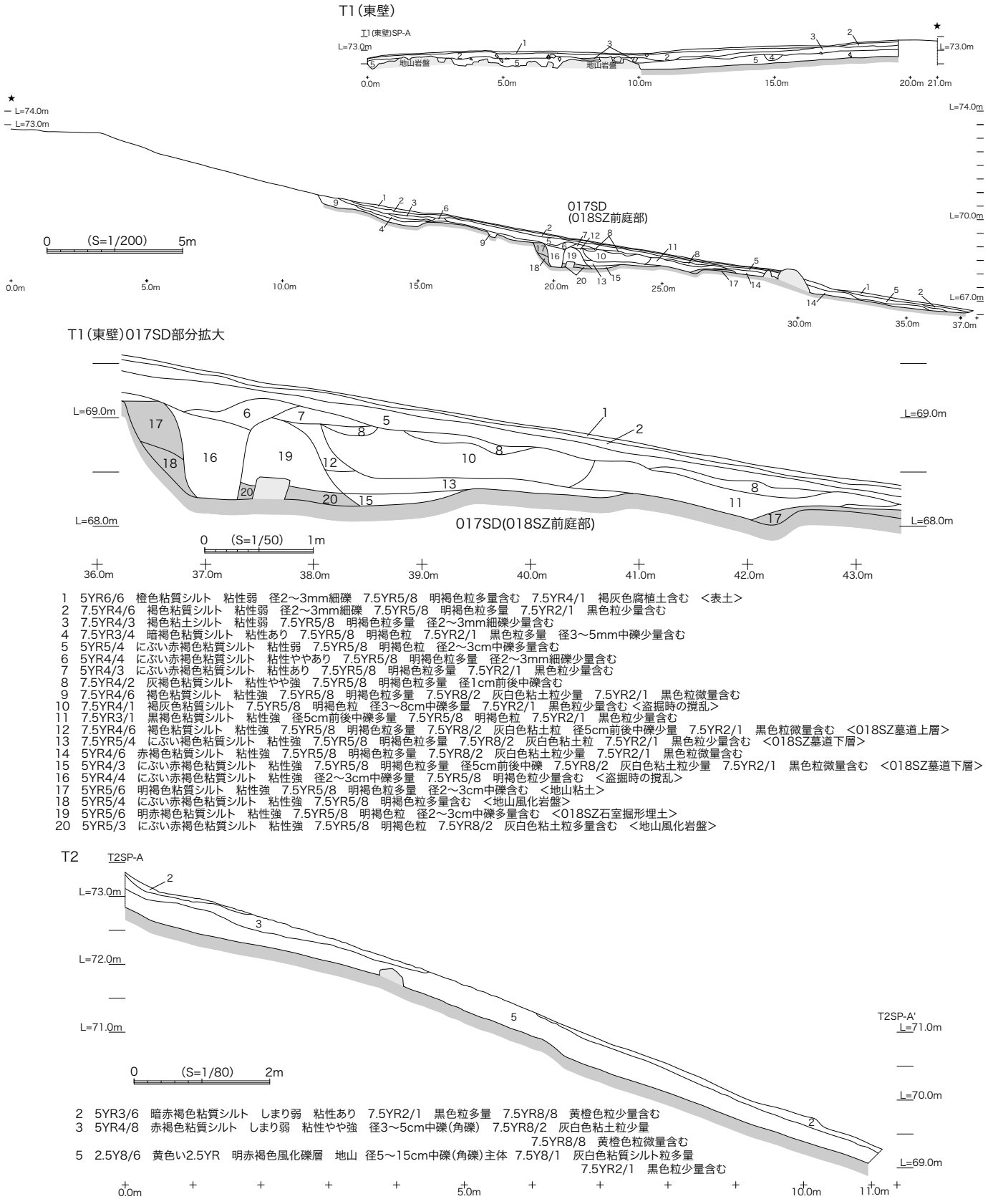


図 21　KJ10C 区遺構平面図（第 1 次検出時）



1　5YR6/6　橙色粘質シルト　粘性弱　径2～3mm細礫　7.5YR5/8　明褐色粒多量含む　7.5YR4/1　褐灰色腐植土含む　<表土>
2　7.5YR4/6　褐色粘質シルト　粘性弱　径2～3mm細礫　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR2/1　黒色粒少量含む
3　7.5YR4/3　褐色粘土シルト　粘性弱　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径2～3mm細礫少量含む
4　7.5YR3/4　暗褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR2/1　黒色粒多量　径3～5mm中礫少量含む
5　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性弱　7.5YR5/8　明褐色粒　径2～3cm中礫多量含む
6　5YR4/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性ややあり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径2～3mm細礫少量含む
7　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR2/1　黒色粒少量含む
8　7.5YR4/2　灰褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1cm前後中礫含む
9　7.5YR4/6　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む
10　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　7.5YR5/8　明褐色粒　径3～8cm中礫多量　7.5YR2/1　黒色粒少量含む <盗掘時の撹乱>
11　7.5YR3/1　黒褐色粘質シルト　粘性強　径5cm前後中礫多量　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む
12　7.5YR4/6　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　径5cm前後中礫少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む　<018SZ墓道上層>
13　7.5YR5/4　にぶい褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<018SZ墓道下層>
14　5YR4/6　赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む
15　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径5cm前後中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む　<018SZ墓道下層>
16　5YR4/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　径2～3cm中礫多量　7.5YR5/8　明褐色粒少量含む　<盗掘時の撹乱>
17　5YR5/6　明褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径2～3cm中礫含む　<地山粘土>
18　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量含む　<地山風化岩盤>
19　5YR5/6　明赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径2～3cm中礫多量含む　<018SZ石室掘形埋土>
20　5YR5/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR8/2　灰白色粘土粒多量含む　<地山風化岩盤>

2　5YR3/6　暗赤褐色粘質シルト　しまり弱　粘性あり　7.5YR2/1　黒色粒多量　7.5YR8/8　黄橙色粒少量含む
3　5YR4/8　赤褐色粘質シルト　しまり弱　粘性やや強　径3～5cm中礫(角礫)　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　7.5YR8/8　黄橙色粒微量含む
5　2.5Y8/6　黄色い2.5YR　明赤褐色風化礫層　地山　径5～15cm中礫(角礫)主体　7.5Y8/1　灰白色粘質シルト粒多量　7.5YR2/1　黒色粒少量含む

図22　KJ10C区基本土層および017SD土層断面図

ていないことが注意される。これに対して撹乱層は礫が多く混じり、016SX や 018SZ から流れ込んだものと考えられる。したがって隣の 11 層についても同様に撹乱時の堆積と考えることができ、このことから 017SD 埋土の大部分が後世の撹乱によると理解できる。

出土遺物は、先述のように検出面付近で須恵器片が多数出土した。しかしながらこれらのほとんどは撹乱に伴うものである。その分布状況は図 26 の通りであるが、一方で、これらの分布から離れて 018SZ 玄門付近で完形あるいはそれに近い状態で出土した杯蓋（図 26-19）と杯身（同 22）の位置がおそらく原位置であったと考えられる。ところでその構成は、径の小さな杯蓋（同 19・20）とそれに組み合うとみられる杯身（21・22）、口縁外面が斜めに面取りされた広口壷（23）、頸部にヘラ工具による刻書のあるフラスコ瓶（24）、長頸瓶の頸部とみられる小片（25）、同様に肩が角張るであろう長頸瓶の胴部片（26）がある。これらの須恵器は、広口壷やフラスコ瓶の存在からしても猿投窯編年に対応させると I-17 号窯期でも後半段階に相当すると考えられ、おおむね 7 世紀後葉であろう。しかしながら後述する横穴式石室 018SZ 内出土須恵器とは時期的に隔たっていることや、玄門より外に供えられた可能性が高い須恵器杯身の存在を考慮すると、これらの一群は埋葬後時期を経たもしくは追葬時の供献によって石室前に置かれたものであると考えられる。

横穴式石室 018SZ　古墳の主体部である墓坑とその内部の石室が相当する。礫群 016SX や墓道 017SD とは別に検出された経緯があり、別番号を付してある。

墓坑　石室はやや不整形な隅丸長方形の墓坑内に構築されている。墓坑の規模は南北に長軸 6.8m、奥壁付近での東西方向最大幅 3.6m、玄門付近での幅 2.6m で、上端のラインは玄門に向かって直線的にすぼまっている。この平面形状は墓坑の深さが影響しており、奥壁地点での検出面からの深さは 104cm に対して玄門付近では 43cm と大差があり、深く掘り込む分上端が張り出すことになるためである。墓坑掘削にあたって、周辺地形はさほど改変されておらず、墓坑底面を水平にした分奥壁付近の掘削深度が大きくなっている。ちなみにこの最大深度は奥壁高とほぼ同じである。

墓坑壁面は、石室左壁の背後は急角度（約 80°）で掘り込まれているのに対し、奥壁と右壁背後はやや緩い角度（約 50°）で掘り込まれており、左右非対称となっている。その結果、左壁背後の裏込め空間は狭く、特に基底石は墓坑にほぼ密着している。また裏込めに礫を入れることもほとんどなく、地山粒の多い明褐色粘質シルト（石室内土層断面 7 層）が流し込まれている程度である。この点はやや緩傾斜となる奥壁背後も同様で、奥壁も墓坑壁面にほぼ密着しているため、その上部の隙間に同様の土を流し込んでいる。次いで右壁背後では、基底石と墓坑下端との間は最大で約 0.5m も離れている箇所がある。これに対して裏込めに礫を混ぜることはなく、他と同様に粘質シルトの流し込みをおこなっている。ただ唯一、石室土層横断面を観察した箇所（T7）では、墓坑壁面に寄りかかって長径約 40cm の角礫が出土しており、当初は撹乱時の落下かと考えたが、右壁石材との間を埋めるために落とし込んだものかとも思われる。

墓坑底面はきわめて水平に掘り込まれているが、玄門から外部では前庭部へ向かって若干の傾斜となっている。しかしこれも石室床面に敷石を施工する段階で埋められている。これら墓坑内裏込めからの出土遺物はなかった。

022SK　墓坑の北東隅壁面で検出された小土坑である。検出時の長径は 82cm であるが、そこからさほど掘り込まずに遺物もなかった。022SK の掘削時期が、墓坑開口時なのか埋め立て後なのかどうか不明であり、墓坑・石室との関係も明確にしがたい。ただその隅に合致していることは、何らかの関係を推測させる。

奥壁　奥壁は巨大な鏡岩で、内面に対しほぼ平らな面があって正面観は隅丸方形に近い形状をしている。その高さは 112cm、幅は 109cm である。これに対し断面形は底部で厚さ 50cm あり、そこから厚み

を増して半ばで最大 72cm となり、そこから上端へとすぼまっており、上端では厚 8cm となっている。先述したように墓坑の壁面に対して、奥壁の腰部が隙間なく収まるような関係になっており、墓坑の傾斜も奥壁形状に合わせて掘削されたものと推測される。この奥壁より上では数点の礫が検出され、天井石架構時の補足石かと思われるが、撹乱が及んでいるため原位置ではないだろう。

側壁　基底石の配置でみると、奥壁に対し側壁の第 1 石は左右ともに若干鈍角（約 98°）に取り付いている。次ぐ第 2 石もほぼ同じ角度で連続し、第 3 石で石室最大幅となった後に第 4・5 石ですぼまり始める。そして左壁第 6 石は石室内で唯一縦に長い立柱石となっている。その高さは 56cm でほぼ検出面から墓坑底面までの深さに相当する。なお右壁では、これと対称の位置が一部撹乱を受けていて、そこに立柱石が据えられていたかどうかは不明である。いずれにせよ当該石の地点をもって石室玄門と呼ぶことができ、明瞭な袖構造をもたない無袖式の一形態に分類される。

このような側壁と一体化し内側へ突出しない立柱石のある横穴式石室は、豊川市・馬見塚 6 号墳、同（旧一宮町）・炭焼平 28 号墳、豊橋市石巻小野田町・寺西 1 号墳などで確認されている。いずれも 7 世紀代で、特に馬見塚 6 号墳では、石室前方に溝状の墓道が直線的に取り付いている。このような点は 018SZ と 017SD の関係にほぼ当てはまる。

ところで個々の基底石は、その長さが左右で対応関係にあるものの、高さについてはまちまちで、その積み上げにあたって目地が整っている印象は薄い。撹乱をあまり受けていない奥壁付近で比較すると、右壁はおよそ 3 段の積み上げが確認される一方、左壁は比較的小さい礫が組み込まれている。特に左壁については、それ以外でほとんどの石材が崩落・滅失しており推測となってしまうが、崩落石材をみると大小さまざまであることから、似たような状態が玄門まで続いていたものと思われる。

梱石　玄門位置の床面には梱石が設置される。後述するように石室内埋土には崩落した礫が多数混じっているため、床面の礫についても原位置か崩落か見分けがつきにくい箇所がいくつかあった。中でも一番困難だったのが梱石で、左壁立柱石前床面で 3 点の礫が面を揃えて密着しつつ石室と直交方向に並んでいるものを梱石と判断した。その南側でも同様に並ぶ礫を 5 点検出したが、2 列構成なのか、これ

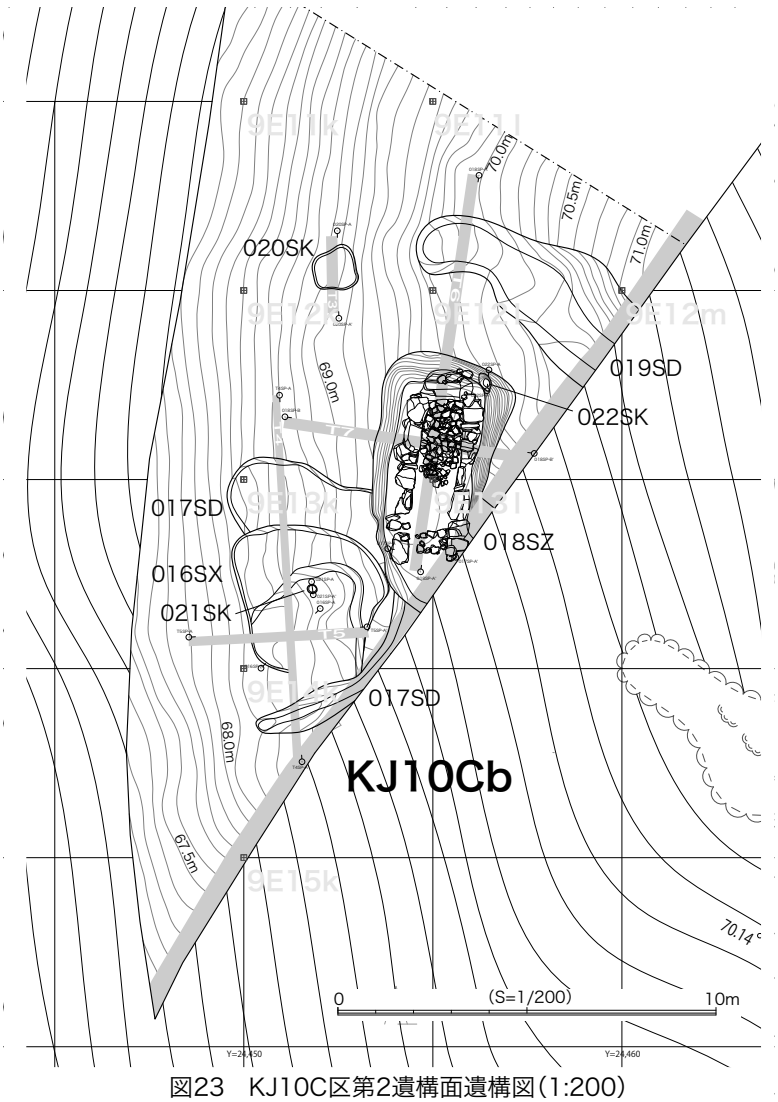


図23　KJ10C区第2遺構面遺構図（1:200）

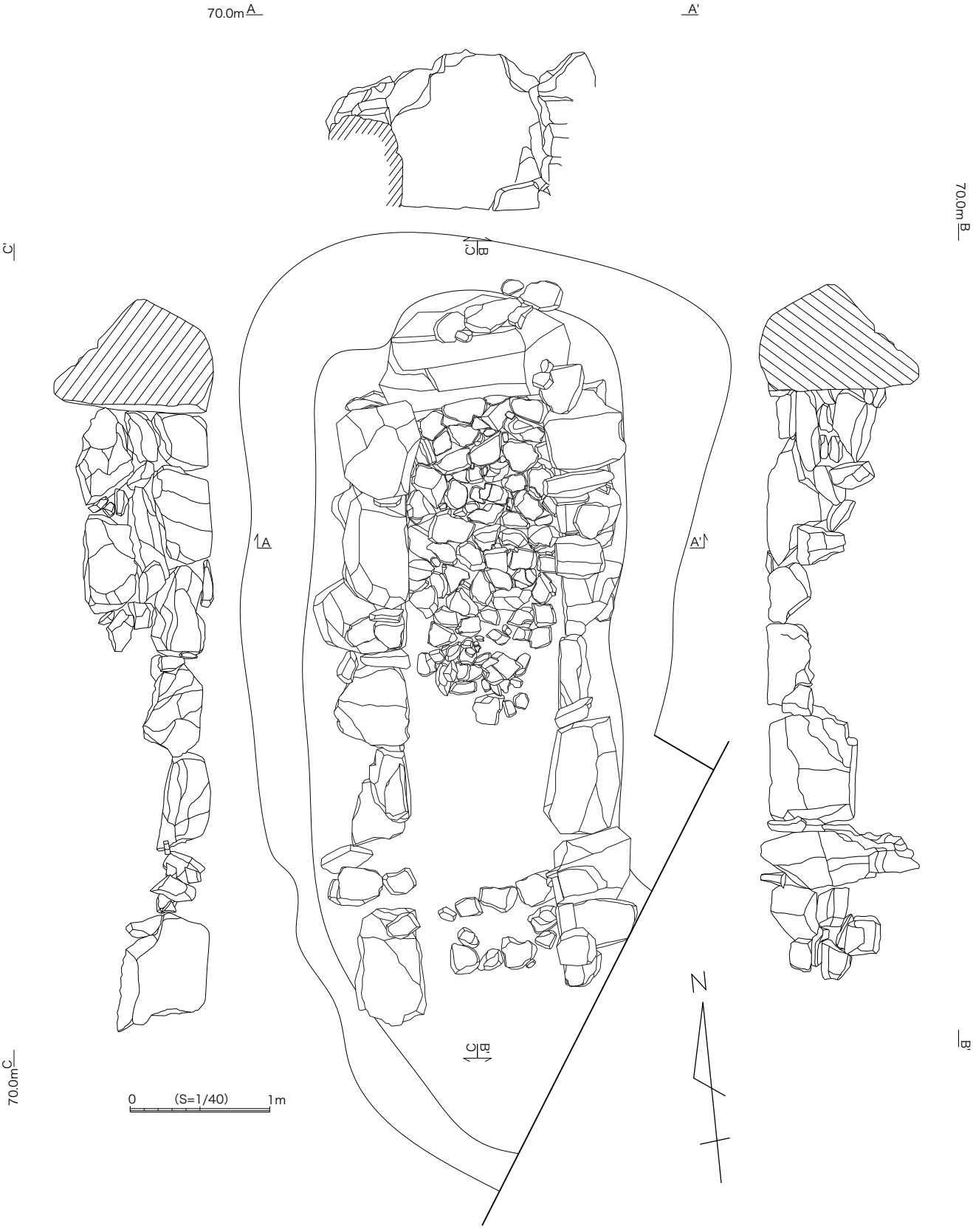


図 24　018SZ 石室平面・立面図

図25　018SZ全礫・遺物出土状況平面図（左）および同基底石平面図（右、ともに1:40）

らの一群を 1 つの梱石としていたものかは不明である。

敷石　石室床面には奥壁・側壁構築後に敷石が施工されている。ただしその範囲は奥壁から約 2.4m までに限られている。当初は石室前半部を中心に撹乱を受けていることから、それで滅失した可能性も考えられたが、密集して敷かれた状況から判断すると、撹乱で徹底的に除去される可能性は低い。ただそれでも基底石第 4 石前のやや乱雑な状況の一群は当初のものかどうかは確定しがたいが、敷石として記録している。そこから奥へ 1.6m 分はほとんど隙間無く展開しており、長径約 22cm のものを基本としつつ小礫を隙間に補っている。これもサンプル観察によって、打ち欠いて大きさを揃えたものが準備されたものと考えられる。

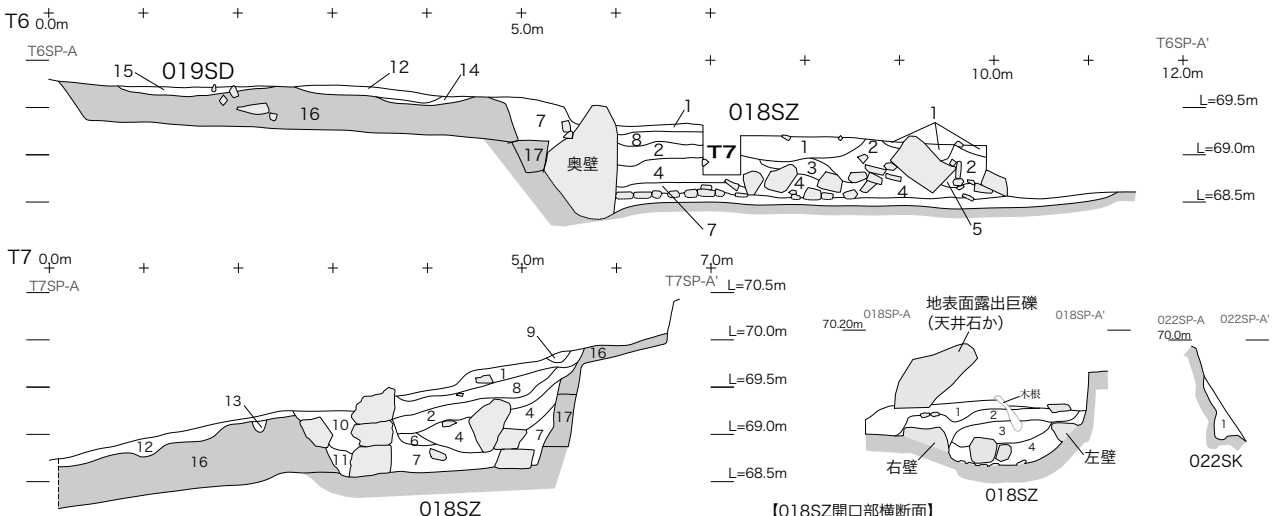
天井石　調査開始前に玄門相当位置で地表に露頭していた巨礫である。風化が激しかったが、長径 104cm のチャートで、側壁用石材に比べて圧倒的な大きさであることから、天井石の 1 つと推測される。石室撹乱層の上に据わっていたことから、原位置からは移動している。

石室埋土　石室内埋土はおおむね 4 つに区分される（図 26 の各層）。1 つは石室だけでなく第 2 遺構検出面を覆っていた地山粘土に近い明赤褐色粘質シルト（1 層）で、比較的近時の人為的地ならしである。2 つ目は撹乱後の表土（腐葉土）で、調査前状況に至るまでに石室の凹みが露頭していた時期があったことになる（2 層）。3 つ目は撹乱および石材崩落層である（3 ～ 6 層）。いくつかに分層しているがおそらく 1 時期の事象であろう。具体的な状況としては、左壁側から崩落した大小の礫と裏込めにかかる土（4 層）が石室最下層（後述）を覆っている。その要因として地震などによる自然崩落の可能性と人為的な撹乱の可能性の 2 つが考えられるが、当該石室では周囲も含めて天井石が 1 点しか残存しておらず、天井石搬出目的の撹乱時に崩落したものと推測される。なお、当該層中からは若干の出土遺物があった。4 つ目は敷石直上堆積層（7 層）で、裏込めの土が雨水などで石室内に流入したものであろう。石室奥部の敷石付近で認められ、前半部では撹乱層が床面にまで達していて広範囲には認められない。本来ならば当該層から副葬品などの出土が期待されるはずであったが、敷石検出作業中に土壌を採取し後日水洗選別も実施したが、土器の極小片が採取された程度であった。可能性としては撹乱以前の盗掘もしくは追葬時などの整理が挙げられるが、推測の域を出ない。

出土遺物と石室の時期　石室内出土遺物は須恵器小片 3 点と金銅製耳環 2 点がある。ただしいずれも石室中部の撹乱・崩落土層中からで、全く原位置ではない。須恵器杯蓋（図 26-27）は天井部分のみで時期特定は難しいが、墓道 017SD 出土須恵器とは明確に形態差をみせていることから、石室内に副葬されたものの 1 つと推測される。耳環（M1・M2）はともに直径 1.5cm、太さ 0.2cm と細身で小型のものである。錆が進んでいるが一部が金色に輝く。おそらく一対で、副葬品の 1 つであろう。西三河での出土事例では 6 世紀後半～ 7 世紀前半段階の古墳に多くみられることから（楠 1999）、須恵器同様、墓道 017SD 出土須恵器とは時期的な隔たりがある。石室築造時期策定には石室内出土遺物を優先させるので、018SZ の場合、7 世紀前半を中心に若干 6 世紀代にまで遡る可能性を指摘できる。

周溝 019SD　横穴式石室 018SZ の北東～北側で検出された溝である。018SZ 墓坑北端から約 1.3 ～ 2.3m にあり、そこから若干曲線となって調査区東壁に至り、そこから外へ延びている。調査区東壁付近で最大幅 2.6m となり、最深度 14cm を測る。対して 018SZ 北側では少しずつ浅くなりやがて立ち消えになる。出土遺物はなかったが、018SZ との位置関係からみて古墳の周溝と判断される。その深さや全周しない点から、山頂側からの雨水を遮断し排水する機能が主であるとみられる。

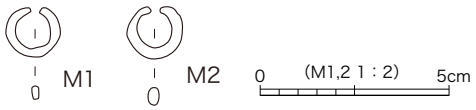
礫群 016SX　古墳墓道 017SD の西側斜面に広がる礫群である。その範囲は東西 3.8m 南北 4.6m で遺構としては不整円形に囲ったが、一部を除いて明瞭な境界は検出できなかった。礫群の中心は 017SD に沿った幅約 1.1m、長さ 3.8m の範囲で、互いに重なることなく敷設したような状況で密集している。またここから約 0.8m 西のトレンチ（T4･T5）交差点では直径約 0.9m に復元できる土坑内（図

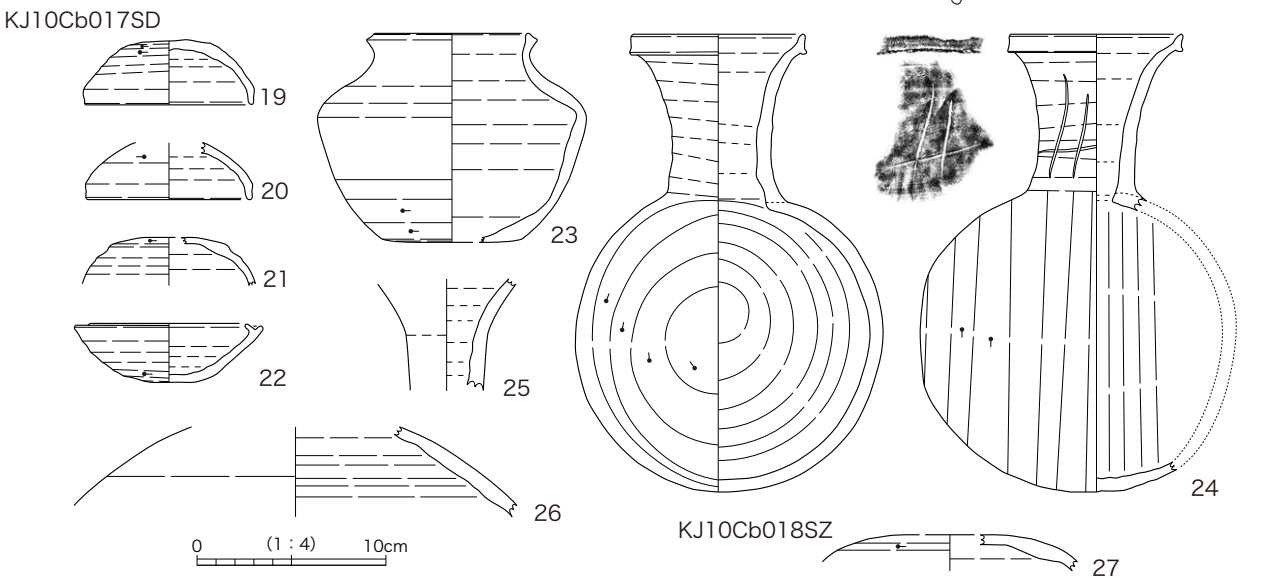


【018SZ土層断面】
1　5YR5/8 明赤褐色粘質シルト 粘性やや強　7.5YR7/8 黄橙色粒多量 径5～7cm中礫　10YR8/4 浅黄橙色粘土粒少量
　　7.5YR2/1　黒色粒微量含む　<撹乱後の埋め戻し>
2　10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強　10YR5/8 黄褐色粒多量 径2～5cm中礫少量
　　7.5YR2/1 黒色粒微量含む　径10cm中礫含む　<腐植土堆積>
3　7.5YR5/6 明褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR6/8　橙色粒多量　7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量　7.5YR2/1 黒色粒微量
4　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR6/8　橙色粒多量 φ0.5～1cm中礫少量
　　7.5YR2/1 黒色粒微量含む　銅製金環含む　<盗掘時撹乱>
5　7.5YR5/8 明褐色粘質シルト　粘性強(3･4より強)　7.5YR6/8　橙色粒多量含む
6　10YR3/4 暗褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR2/1 黒色粒少量含む
7　7.5YR4/6 褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径2～5cm中礫少量含む
8　5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒　径1cm前後中礫多量　7.5YR8/3 浅黄橙色粒少量含む
9　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR2/1 黒色粒少量含む
10　7.5YR5/6 明褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR6/8　橙色粒　10YR5/8 黄褐色粒多量　7.5YR2/1 黒色粒少量含む
11　7.5YR4/6 褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR6/8 橙色粒多量　7.5YR2/1 黒色粒少量含む
12　5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト　粘性ややあり　7.5YR5/8 明褐色粒多量　7.5YR2/1 黒色粒少量含む　<018SZ第1次墳丘か>
13　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト　粘性ややあり　7.5YR5/8 明褐色粒多量　7.5YR2/1 黒色粒少量含む
14　5YR4/8 赤褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8 明褐色粒多量　7.5YR8/6　浅黄橙色粘土粒少量含む
15　5YR4/6 赤褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8 明褐色粒多量　径1～3cm中礫
　　7.5YR8/6 浅黄橙色粘土粒少量含む　<019SD周溝>
16　7.5YR5/8 明褐色粘土 粘性強　10YR8/6 浅黄橙色粒　7.5YR6/8 橙色粒少量含む　<地山>
17　10YR8/8 黄橙色風化岩盤　<地山>

【018SZ開口部横断面】
1　2.5YR6/4　にぶい橙色粘質シルト 粘性あり 径1cm前後中礫多量
　　7.5YR8/8 黄橙色粒 7.5YR2/1 黒色粒少量含む <撹乱と造成>
2　2.5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性あり 径3～5cm中礫 7.5YR8/8
　　黄橙色粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <盗掘による撹乱>
3　7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性やや強 7.5YR4/6 褐色粒多量
　　炭化物少量　径3cm中礫含む
4　7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR4/6 褐色粒多量 5YR7/8
　　橙色粒少量 炭化物微量含む 径10～径40cm大礫､須恵器含む>

【022SK】
1　7.5YR4/3　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒
　　径2～3mm細礫多量含む　<022SK埋土>





017SD遺物出土地点分布

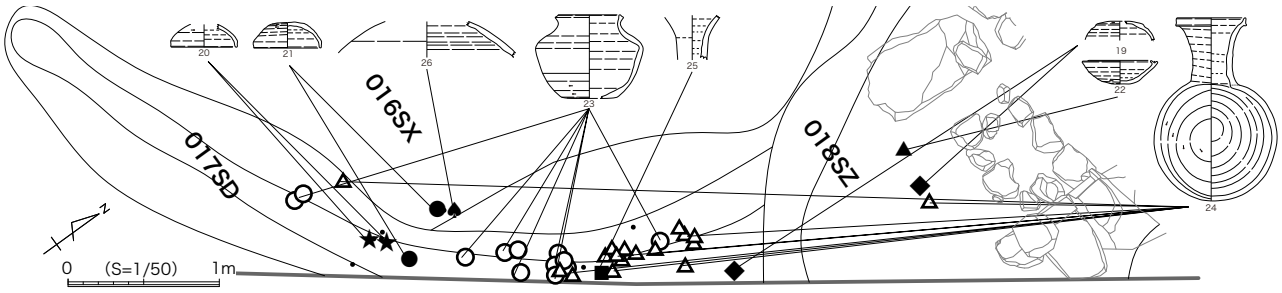


図 26　018SZ 土層断面図および出土遺物実測図と 017SD 遺物出土地点分布

27 の土層断面 8 層）にて高さ 45cm の立柱状の角礫が検出されている。深さ 21cm の土坑内に据えられ、わずかに遺構面から露頭するのみである。遺物は出土していない。

密集する礫は大半が拳大で、若干長径約 20cm のものも混じっている。礫間の土は地山とは全く異なる撹拌されたものである。唯一境界が明確だったのが 017SD 付近の地山との間で、比較的直線に延びており、そこから西側下方へ若干凹んでいる（T5 断面の 2 層）。そして立柱状角礫付近より先では複数の土層が次々と重なるようにして堆積している。このあたりでは礫は明らかに少なくなる。したがって、立石とその下方に 1m 四方の敷石があり、そこから東上方に幅約 0.5 ～ 1.2m の空閑地があって再び濃密な敷石が幅約 1m にわたって展開する構成になっている。

祭祀遺構の可能性　当該遺構の評価は、遺物もないことから時期も含め困難な点が多い。ただし、近隣の豊橋市多米町・稲荷山古墳群の 2 号墳では、西向きの石室開口部脇に中世陶器（古瀬戸瓶子）が出土する同様の礫が敷設された遺構 SX02 が検出され、中世の祭祀遺跡と考えられている（豊橋市教育委員会・国際文化財株式会社ほか 2008）。礫群の位置や石を敷設するところは全く同じである。またキジ山古墳群では、SU10A 区の石室 082SZ で山茶碗類小皿が出土していることから（後述）、中世に古墳を場とする祭祀行為があったと評価することは可能である。

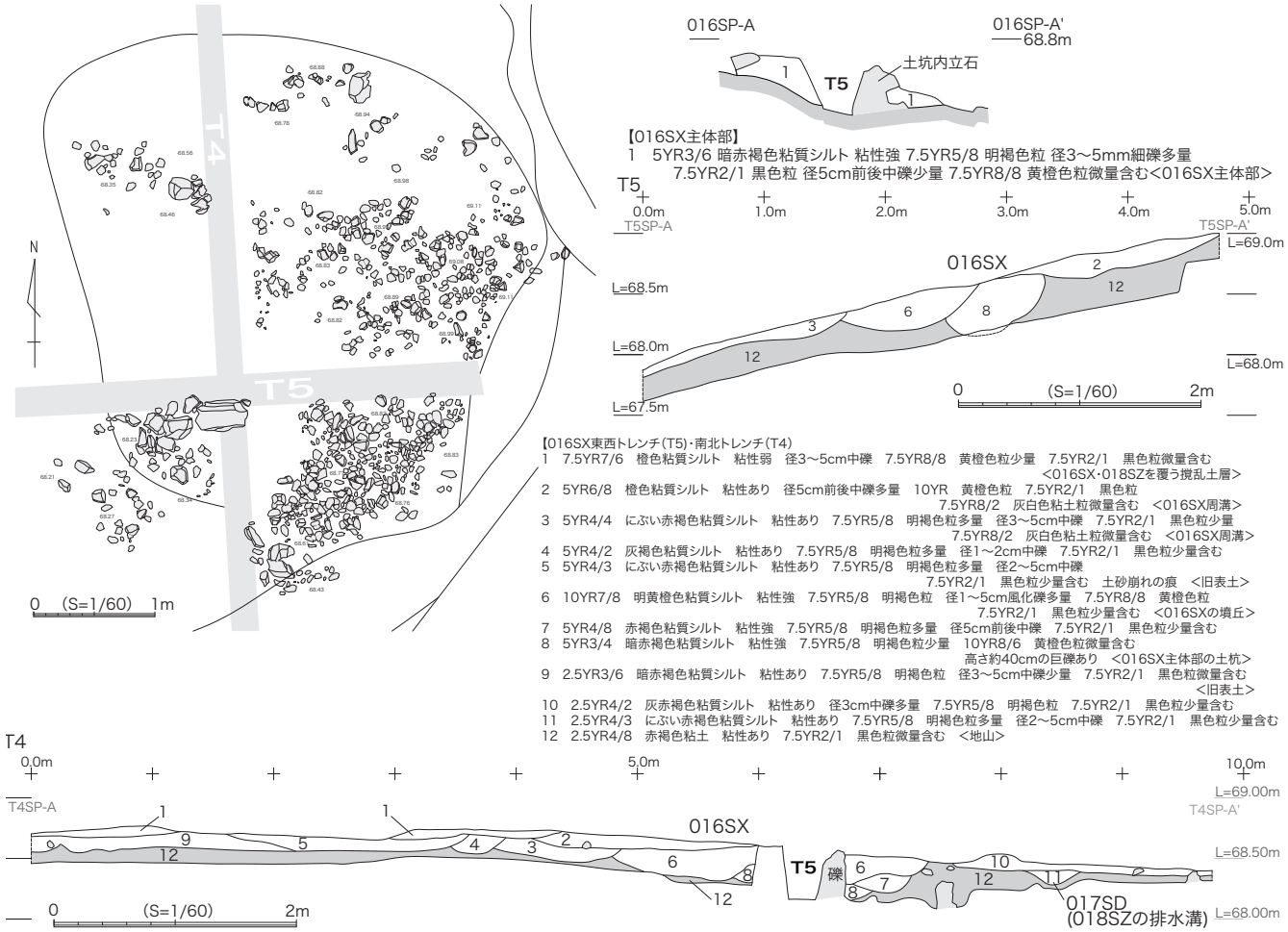


図27　016SX平面図および土層断面図（1:60）

(4)　SU10A 区 082SZ

SU10A 区の概観　SU10A 区（晴雲寺 10A 区）ではまず、腐葉土主体の表土を除去した時点で調査区北端付近から近世の遺物が多数出土した。このことから表土層下の地山に近似する明黄褐色粘土層上面で遺構検出を行った（第 1 面検出）。しかし当該粘土層にも遺物が含まれていることが判明し、再度 5 ～ 15cm の掘り下げを実施して建物遺構の礎石（087SB）を検出した。それと同時に調査区南端付近で礫の露出が相次いだため、礫周辺を慎重に掘り下げながら検出作業を行ったところ、列状に露頭する礫群の間から須恵器・土師器が出土し、古墳の横穴式石室が存在する可能性が高まった。そこで急遽礎石建物の調査と平行して横穴式石室（082SZ）の調査を実施した。当該地点では石室内埋土まで瓦が混入する状態であったため、ほぼ近世の遺構はないと判断した。

一方、礎石建物の西側正面に相当する調査区西端では、撹乱で滅失した礎石建物の延長部分を検出すべく微細な掘り下げを繰り返していたところ、礎石検出面とほぼ同一の高さできわめて濃密な礫群があらわれた（085SX）。そこで礫群を露出させる作業を進めたところ、瓦片とともに須恵器小片が続々と

図28　SU10A区第2遺構面遺構図(1:200)

出土し、馬蹄形の礫群と須恵器集中域が検出された。当初、当該遺構は礎石建物にかかる通路とも想定したが、発掘調査終了後に須恵器の出土状況を再検討したところ、削平された古墳の一部であると評価を変えている。本項ではまず横穴式石室 082SZ を主体部とする古墳について記述する。

古墳の位置と構成　横穴式石室 082SZ を主体部とする古墳は、調査区南西隅にあり、国土座標第Ⅶ系の X=-136.826、Y=24.414 に位置する。地形的には尾根筋となる調査区中央部から南西方向へ下り始める地点にあたり、標高 57.0 ～ 57.5m である。古墳は横穴式石室 082SZ および周溝 083SD で構成されている。。石室の中軸線はグリッド北から東へ 80° 振れており、ほぼ西向きに開口している。

横穴式石室 082SZ　横穴式石室の基底部を中心に墓坑の一部を検出し、断面観察で第 1 次墳丘もしくは整地層を確認した。

墓坑　奥壁側を中心として部分的に検出した。楕円形の平面で、幅 3.7m、長さは 4.4m 以上となるが前底部側の状況が不明瞭であった。おそらくそのまま直線的に延びて斜面から抜けていたと思われる。検出面からの深さは 22cm で約 60° 以上の急角度で掘り込まれ、石室半ばまでほぼ水平な底面となっている。石室縦断面（T7）では、整地層もしくは旧表土（8 層）上からの掘り込みが確認され、さらに横断面（T11）では、同層（7 層）の上に広がる第 1 次墳丘（5・6 層）の上から掘り込まれていることが確認できた。もっとも各層は部分的にしか見出せていないので、その位置づけは確定的なものでないが、例えば T11 にみる整地層は地山（8・9 層）との間が明瞭な直線で一部に段もあることや、地山由来の粘土粒が多量にみられる点も人為的な開削を受けた根拠とするものである。したがって古墳造営の過程は、予定地の整地から一部墳丘の盛土を経て墓坑掘削に至ったと考えられる。

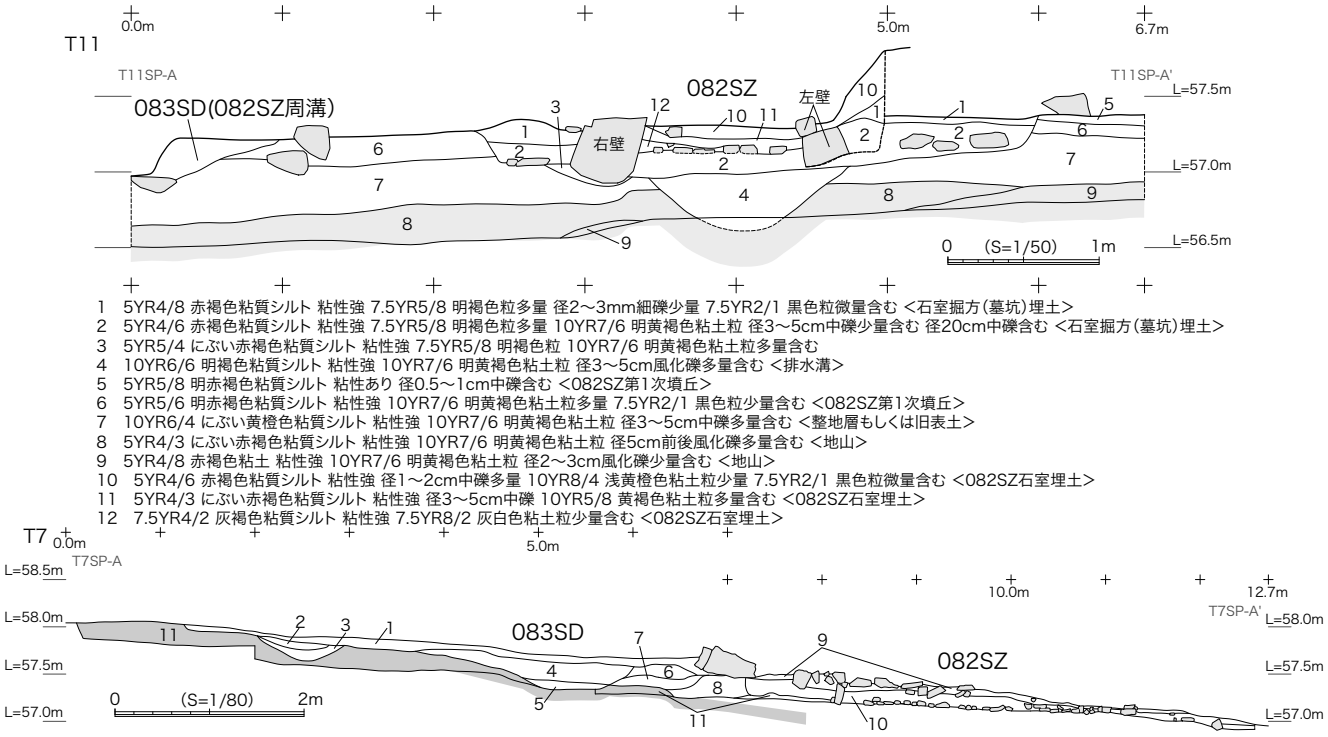
石室下排水溝　調査最終段階で墓坑を横方向に断ち割ったところ、床面下で溝状遺構のあることが断面で認められた（図 30、T11 断面の 4 層）。床面での幅 1.3m、深さ 40cm の緩い V 字形断面である。その延長は調査できなかったが、トレンチ（T11）底面でその下部が直線的に延びているのが認められたことから、おそらく石室と同方向になるものと思われる。掘削時期は不明であるが、少なくとも整地層（T1 断面の 7 層）より後になるのは確実である。その下部は地山粘土層を大きく掘り込んでいるが、掘削後すぐに埋められたとみられ、断面ラインはかなり明瞭である。石室下層へ水を浸透させ前庭部方向へ誘導するための、ある種の湿度操作が目的であったと想定される。

奥壁・側壁　石室の壁体は大部分が削平を受けており、基底石の一部しか残存していない。特に奥壁については、該当箇所に三角形を呈する角礫が立柱状にみられた以外は長径約 30cm 以下の角礫数点があるのみで、不明な点が多い。三角形の角礫も原位置である可能性は高いが、鋭利な破面も見受けられることから削平時に打ち割られた可能性もあり、その形状を知ることはできない。しかし長径 1m 超の一枚岩ではないことは容易に推測される。

側壁の奥壁への取り付きは、確実な箇所はないがほぼ直角になるとみられる。その後ほぼ直線的に基底石が配置されており、平面は長方形になるであろう。ただし石室前方も撹乱で滅失しているため、その全形は若干の推測を要するが、右壁北側列石の位置からすると概ね最西端の石が本来の開口部にあたる可能性が高く、無袖式に分類される。基底石はいずれも周辺の岩盤から採取されるチャートで、長径が約 40 ～ 80cm の直方体に近い形状をしている。左右ともに高さが 30 ～ 40cm で揃えられており、左壁では一部 2 段目の石材 2 点も残存していたが、水平方向に直線の目地が揃っている。

敷石　石室床面には奥壁・側壁構築後に敷石が施工されている。その範囲はほぼ全面といってよいが、使用する礫の形状が前庭部側とそれ以外で異なっている。すなわち前庭部側では長径 10cm 程度であるが、奥壁から約 2.6m の地点を境にして長径 20cm 前後の扁平な角礫となっている。いずれも撹乱を受けているので滅失箇所がいくつもみられたが、前者ではぐらつきやすく床面に固定されている印象は薄い。一方後者では他の古墳よりもやや隙間が多く見られるものの、平らな面が揃うようにして床面の

図 29　082SZ 石室平面・立面図



1　5YR4/8 赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 径2～3mm細礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <石室掘方(墓坑)埋土>
2　5YR4/6 赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 10YR7/6 明黄褐色粘土粒 径3～5cm中礫少量含む 径20cm中礫含む <石室掘方(墓坑)埋土>
3　5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒 10YR7/6 明黄褐色粘土粒多量含む
4　10YR6/6 明褐色粘質シルト 粘性強 10YR7/6 明黄褐色粘土粒 径3～5cm風化礫多量含む <排水溝>
5　5YR5/8 明赤褐色粘質シルト 粘性あり 径0.5～1cm中礫含む <082SZ第1次墳丘>
6　5YR5/6 明赤褐色粘質シルト 粘性強 10YR7/6 明黄褐色粘土粒多量 7.5YR2/1 黒色粒少量含む <082SZ第1次墳丘>
7　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト 粘性強 10YR7/6 明黄褐色粘土粒 径3～5cm中礫多量含む <整地層もしくは旧表土>
8　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 10YR7/6 明黄褐色粘土粒 径5cm前後風化礫多量含む <地山>
9　5YR4/8 赤褐色粘土 粘性強 10YR7/6 明黄褐色粘土粒 径2～3cm風化礫少量含む <地山>
10　5YR4/6 赤褐色粘質シルト 粘性強 径1～2cm中礫多量 10YR8/4 浅黄橙色粘土粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <082SZ石室埋土>
11　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 径3～5cm中礫 10YR5/8 黄褐色粘土粒多量含む <082SZ石室埋土>
12　7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <082SZ石室埋土>

1　5YR4/6 赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <晴雲寺堂建立時の造成>
2　5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 径2～5cm中礫 10YR7/4　にぶい黄橙色粘土粒少量含む
3　5YR4/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土粒多量 径3～5cm中礫少量含む
4　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8　明褐色粒 径5cm前後中礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <083SD覆土>
5　5YR5/8 明赤褐色粘質シルト 粘性強 径2～3mm細礫 7.5YR5/3 にぶい褐色粒多量 径2～3cm中礫少量含む
6　5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <082SZ第1次墳丘>
7　5YR5/6 明赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR8/2 灰白色粘土粒 径3～5cm中礫少量含む <082SZ第1次墳丘>
8　5YR5/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 10YR8/6 黄橙色粘土粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <整地層もしくは旧表土>
9　5YR4/6 赤叶F粘質シルト 粘性強　径1～2cm中礫多量 10YR8/4 浅黄橙色粘土粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <1と同時期の撹乱>
10　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 径3～5cm中礫 10YR5/8　黄褐色粘土粒多量含む <082SZ石室埋土>
11　5YR6/8 橙色粘土　粘性強 10YR7/4 にぶい粘土粒多量 径3cm前後中礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <地山>
10　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 径3～5cm中礫 10YR5/8　黄褐色粘土粒多量含む <082SZ石室埋土>
11　5YR6/8 橙色粘土 粘性強 10YR7/4　にぶい粘土粒多量 径3cm前後中礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <地山>

図30　082SZ断面図(上,横断面1:50、下,縦断面1:80)

粘土層に固定されている。そしてサンプルの観察によって打ち欠かれて形状の調整がなされていることが判明している。

ところで、敷石に関して注意しなければならないのが、奥壁から約 1.7m の地点、左壁基底石に接して敷石上に配置された石である。形状は長径が 24cm、高さ約 10cm の崩れた直方体である。敷石より一回り大きな礫が、長径を石室主軸と直交させた状態であるためひと際存在感がある。遺物の出土状況（後述）にも関連していて、特に須恵器はこの石から前底部側のみで出土している点が注目される。境界を明示する梱石的な機能を持たせたものとして評価できる。

石室北側列石　右壁開口部に取り付く石列である。その方向は側壁に対して直角とならずやや西偏している。大小の礫が混在するが、基本は長径約 50cm の角礫で構成される。墳土との関係は明確でないが、石列が想定される墳丘のカーブとは逆であることから、墳丘内列石ではなく墳丘裾と前庭部外縁を画する目的に並べられたものと思われる。ただし、左壁側では同様の列石が認められなかった。

このような外部へ見せるための列石の他に、側壁背後の墓坑内では、これと同等もしくは若干小さな角礫が多数検出されている。左右壁ともに前庭部側で比較的多く見られ、密着したり組み合ったりしたものはない。したがって用途が理解しにくいが、墓坑壁面と側壁の間が約 1m も離れる箇所もあることから、裏込め土とともに控えで入れたものと考える。

石室内埋土と遺物出土状況　石室内の埋土は縦断面（T4）および断ち割り横断面（T11）で確認でき

るが（図 30）、概観でも述べたように、晴雲寺造営および廃絶後の整地によって大部分が撹乱を受けている。具体的には墓坑内埋土が上下 2 層（T11 の 1 ～ 3 層）、敷石上埋土が上下 2 層（T11 の 10･11 層）である。側壁基底石を据えた後に敷石を厚さ 15cm の 2 層上面に施工している。敷石上の埋土は、撹乱を受けて転石となったであろう一部の敷石や側壁の石材が混入しており、一見してあまり安定的な状態にあるとは言いがたい。ただ縦断面（T7）では、落下した礫が混じる 9 層の下に礫の混じらない 10 層があることから、奥壁から約 3m の範囲では、撹乱の影響が比較的少ない箇所もあると考えられる。

遺物は、石室内および墓坑内から出土している（図 32）。まず石室内では奥壁やや右側で鉄鏃（M7 ～ 9）が集中して出土し、そこから約 0.5 ～ 1m 前底部側で大小の刀子（M3・4）が出土している。そして先述した境界明示の石から前庭部側へ直近のところで須恵器杯蓋（28）の上に杯身（49）が乗りかかるようにして出土している。石の陰になったためか両者ともに完形である。出土地点分布では当該地点にも破片がみられる須恵器蓋（30）は、そこから約 50cm 離れて据わったような位置で主体部分が出土しており、その脇で杯身（33）が出土している。ここから先で出土した須恵器杯蓋・身や土師器高杯はいずれも破片が散乱したり欠損部分の多いものが出土している。

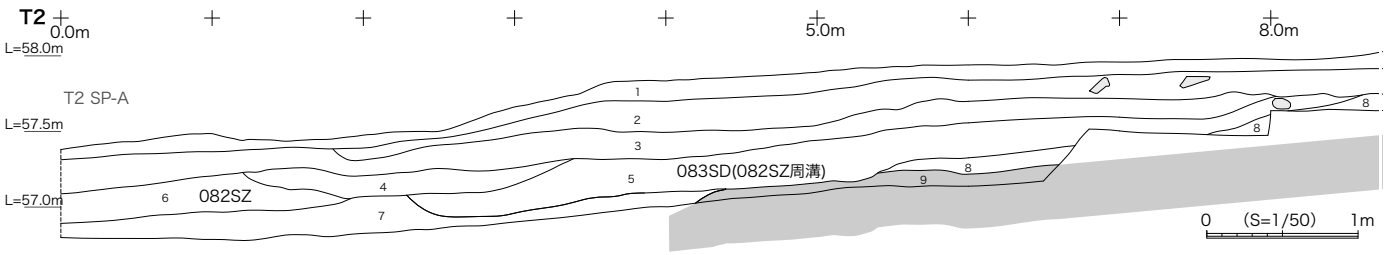
墓坑内からは、奥壁背後から刀装金具（M5・6）と土師器壺（35）が出土している。同様に右壁背後で山茶碗類の小皿（36）が出土している。これらは撹乱で移動している可能性が高いが、土師器壺が奥壁近くで出土ている点は、東海地域で類例が確認されており、「墓鎮め」に関わる痕跡として注目される（伊藤 1988・深谷 2011）。ちなみに小皿（37）は前庭部でも出土している。

周溝 083SD　横穴式石室 082SZ の西側前庭部を除く周囲で検出された周溝である。その内径上端は楕円形であるが、外径上端は隅丸方形に近い。その幅は奥壁背後が最も狭い 1.6m で、検出範囲では南東隅部と調査区西壁付近で最も広くなる（南東隅部で 2.9m、調査区西壁で 6.8m）。その断面形は調査区西壁付近では皿状で、そこから少しずつ内湾度が増し、調査区南壁（T3）および拡張区における断面形になる。その掘削は土層断面を見る限り、整地層や一部の第 1 次墳丘築造後になるとみられる。

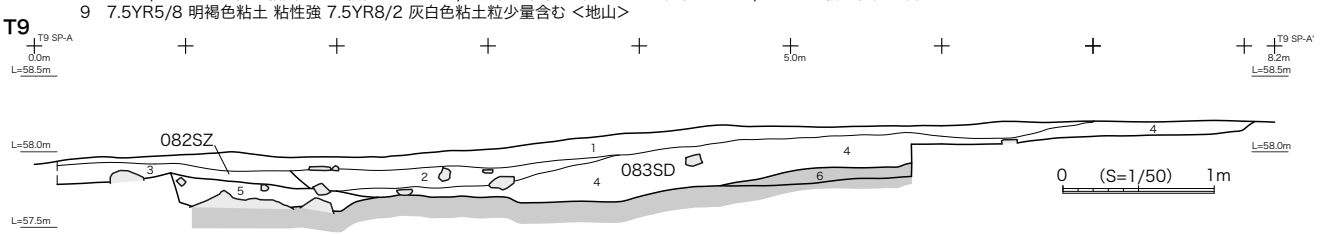
埋土は大半を占める下層（調査区西壁 T2 の 5 層、T9 の 4 層、調査区南壁 T3 の 8 層、拡張区の 6 層）と、墳丘寄りにみられる上層（調査区西壁 T2 の 4 層、T9 の 2 層、調査区南壁 T3 の 4 層、拡張区の 4･5･7 層）がある。下層は礫の混入が少ないのが特徴で、石室より北側を中心に須恵器甕や瓶類が出土している。ただしこれらも周溝底部ではなくある程度堆積が進んだ時点のもので、提瓶（40）は墳丘北東裾近くでまとまった破片があり、その他（38・39）はそこから北へ約 4m 離れた地点を中心に散乱している。一方、上層は約 10cm 以下の角礫が多数混じる傾向にあり、このような状況になる要因として石室や墳丘の撹乱の可能性が考えられる。

出土須恵器・土師器・山茶碗類　墓坑・石室・周溝の出土遺物について提示する（図 32）。28 ～ 33・49 は須恵器杯蓋・杯身である。出土位置から 28 と 49、30 と 33 が組み合うものと思われる。いずれも直径 14cm 前後のもので、端部の面取りも明瞭である。これらの諸特徴は、猿投窯編年の H-44 号窯期よりやや古い段階に比定でき、概ね 6 世紀後半とされる。29 は青灰色でやや焼成が異なるが、他は灰白色で一部降灰釉がかかるのが特徴である。29・31 以外は図中に破線で示したように、杯身に杯蓋天井外面を載せる特徴的な重ね焼き痕跡が認められる。同様の資料は多米町内稲荷山古墳群でも出土しており、流通範囲が限定されているとみられる。また 31 は前庭部寄りで出土したが、天井からの打撃により破砕されたものである。そして土師器も出土している。高杯（34）は杯部が椀状で緩い屈折の短脚である。35 は壺の胴部と推定され、底部内面にハケ調整痕がある。いずれも砂粒が少なく粉っぽい焼成である。須恵器と同時期であろう。

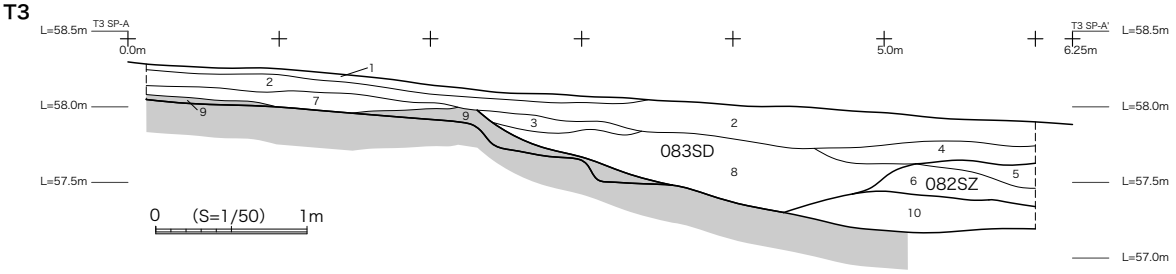
溝 083SD 出土の須恵器甕（38）は胴部上半にカキ目がめぐる。39 も甕で平行文タタキ痕跡が消されていない。40 は提瓶で、口縁～頸部は全く失われ、破砕された胴部のみである。形態的特徴としては、



1　5YR5/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性弱 7.5YR5/8 明褐色粒 径3～5cm中礫多量含む <アスレチック場の造成>
2　5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR5/8 明褐色粒多量 径1～3cm中礫 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <耕作時の造成･北端は階段遺構086SX埋土>
3　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 径1～3cm中礫少量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む
4　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒 7.5YR8/2 灰白色粘土卵x量 径1～3cm中礫少量含む <古墳周溝083SD上層>
5　5YR5/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒 径2～5cm中礫多量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <古墳周溝083SD下層>
6　5YR5/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 径3～5cm中礫 7.5YR5/8 明褐色粒少量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む <横穴式石室古墳082SZ墳丘盛土>
7　5YR6/2 灰褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒 径5cm前後中礫多量 7.5YR8/2 灰褐色粘土粒少量含む <旧表土>
8　5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 径3～5cm中礫 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <旧表土>
9　7.5YR5/8 明褐色粘土 粘性強 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む <地山>

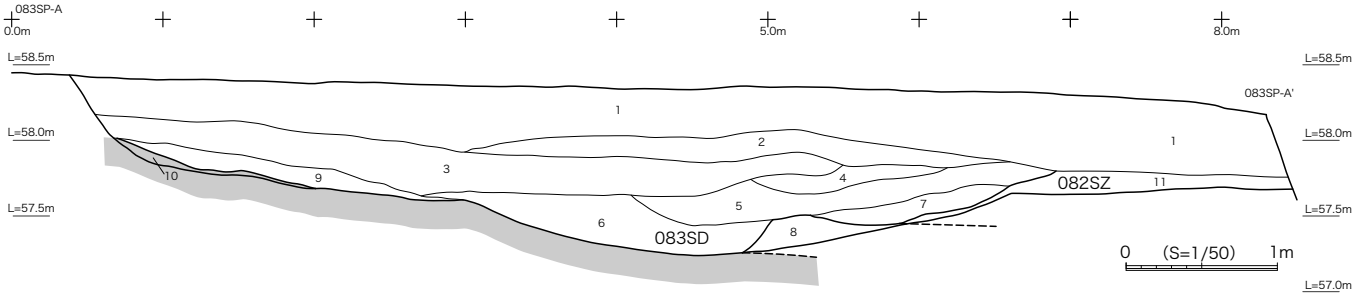


1　5YR4/8　赤褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8　明褐色粒　径1～3cm中礫多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<耕作時の造成>
2　5YR4/2　灰褐色粘質シルト　粘性強　径5～10cm中礫　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色箔y粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む
3　5YR5/2　灰褐色粘質シルト　粘性強　径3～5cm中礫　7.5YR5/8　明褐色粒少量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒微量含む　<082SZ墳丘盛土>
4　7.5YR4/2　灰褐色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8　明褐色粒　径2～3cm中礫多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<083SD(082SZ周溝)埋土>
5　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<旧表土>
6　7.5YR5/8　明褐色粘土　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<地山>



1　7.5YR4/3　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径3～5cm中礫　2.5YR4/8　赤褐色粒少量含む
2　5YR4/8　赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径1～2cm中礫多量含む
3　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　10YR7/6　明黄褐色粘土粒少量含む
4　5YR4/6　赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量含む
5　5YR5/8　明赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　10YR7/6　明黄褐色粘土粒少量含む　<082SZ墳丘>
6　5YR5/6　明赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量含む　<082SZ墳丘>
7　7.5YR4/4　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径2～5cm中礫多量含む
8　7.5YR3/4　暗褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径1～2cm中礫少量含む　<083SD>
9　7.5YR5/8　明褐色粘土　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<地山>
10　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<旧表土>

SU10A拡張区



1　7.5YR4/6　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径3～5cm中礫　2.5YR4/8　赤褐色粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む　<アスレチック場造成>
2　5YR5/8　明赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径1～2cm中礫多量　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<アスレチック場もしくは耕作時の造成>
3　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1～2cm中礫少量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒微量含む　<晴雲寺堂建立時の造成>
4　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　径3～5cm中礫多量　7.5YR5/8　明褐色粒多量　10YR7/6　明黄褐色粘土粒少量含む
5　5YR4/2　灰褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　10YR　明黄褐色粘土粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む
6　7.5YR3/4　暗褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　径1～2cm中礫少量含む　<083SD下層>
7　7.5YR4/3　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径1cm前後中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む
8　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<旧表土>
9　7.5YR4/8　赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　径1cm前後中礫微量含む
10　7.5YR5/8　明褐色粘土　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<地山>
11　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量　7.5YR2/1　黒色粒微量含む　<082SZ第1次墳丘>

図 31　083SD 周溝土層断面図

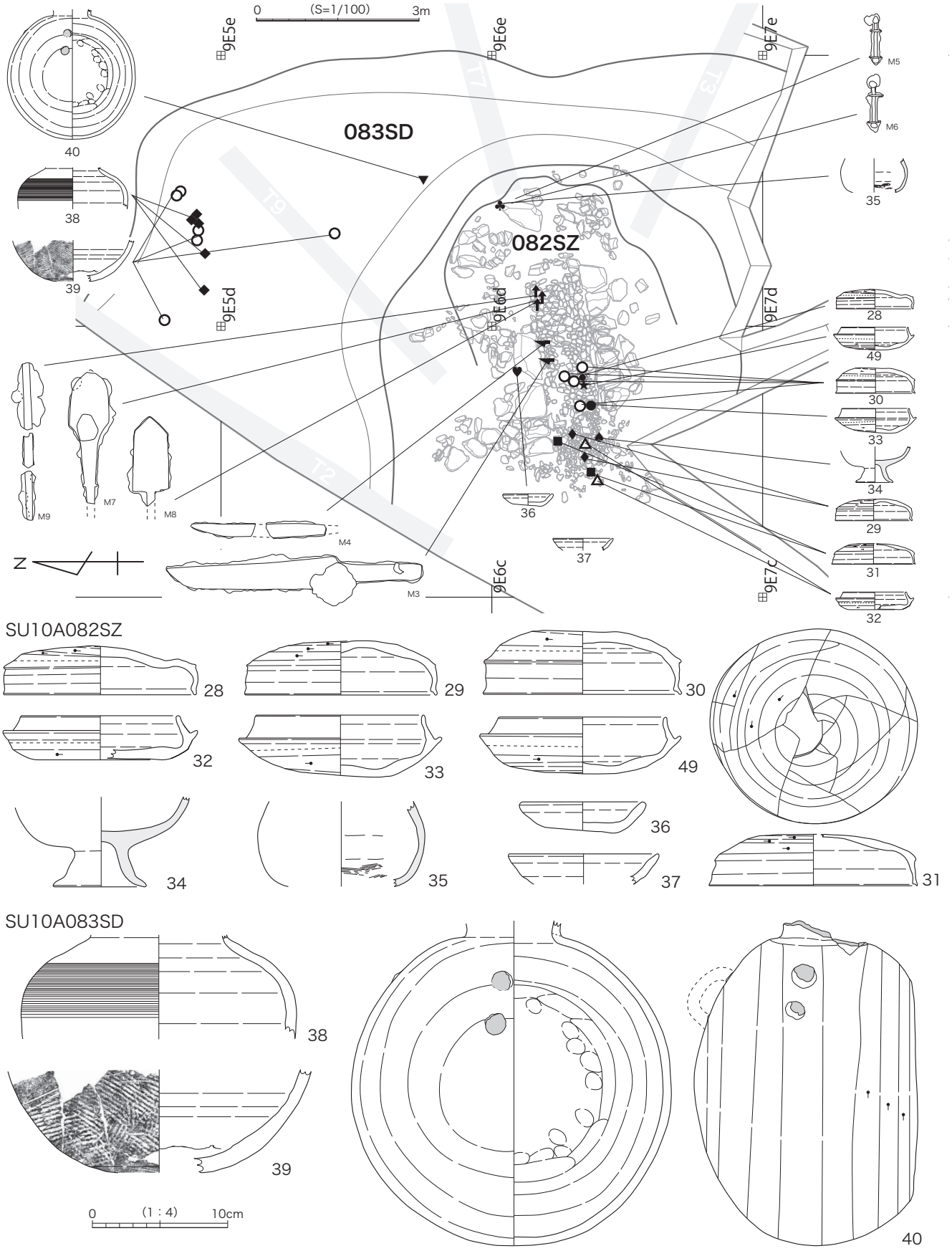


図 32　082SZ 遺物出土地点分布および出土土器実測図

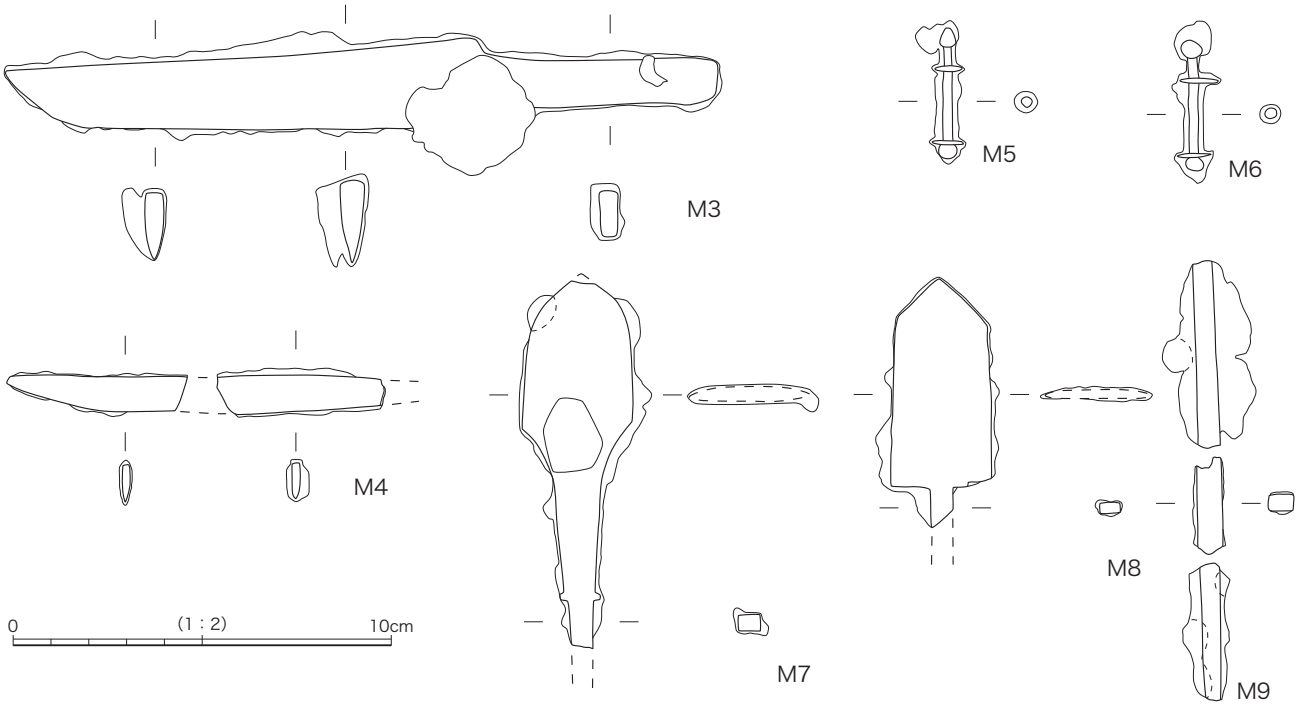


図33　082SZ出土金属製品実測図(1:2)

3 か所に把手がついていたことである。

当該石室では中世陶器の山茶碗類も出土している。36・37 は小皿で 37 は若干口径が大きい。

出土金属製品　石室 082SZ から出土した刀子は大小あり、M3 は峰の厚さが 0.7cm、茎長が 11.1cm と重厚なつくりである。それに対して M4 は刃部の推定長約 10cm の典型的な刀子である。M5・6 は両頭形の刀装具で、棒状部分に木質が若干残存する。刀子とは別に直刀があった痕跡である。M7 ～ 9 は鉄鏃で、M7 は撫角三角形型、M8 は五角形型である（大谷 2003）。M9 は茎部のみ残存していた。M3 のような大型の刀子は比較的初期の横穴式石室墳の副葬品としてみられる傾向にある。

(5)　SU10A 区 085SX

礫群 085SX　調査区西壁付近に位置する。不整形な楕円形で不明瞭な浅い掘り方内に直径約 5 ～ 40cm の角礫が多数集中している。ただし掘り方のラインは明瞭に検出されたわけではなく、礫群の周りを占める地山に近い粘土を除去した結果導き出されたものである。トレンチ（T8）断面でも明瞭な掘り方ではなかったが、ほぼ水平に分布している礫群の下で地山と区分できるとみられる。掘り方の長軸は 4.6m で、それに直交する線を短軸とすると 3.3m である。平面的にみると、掘り方のほぼ中央は礫がほとんどなく、礫群は掘り方の周縁に沿って馬蹄形に展開している。礫群のうち西端（078SK 付近）と東端から南縁ではやや大きめ（約 15 ～ 40cm）の角礫が分布している。これらは一定の配列を示しているようにはみられなかったが、馬蹄形の分布と参照すると、横穴式石室の奥壁・側壁に対応するようにもみえる。

須恵器の出土状況　礫群は、耕作時整地層下で現れ始め、須恵器小片が多数混じっていたことから、逐一出土地点を記録した。その分布（図 35）は南縁の礫群中に集中し大半はその中で接合関係がある。これに対して、北縁で出土したものは散在傾向にあり、さらに 41・47・54 は南・東縁にも破片がある。したがって、北縁で出土したものも原位置を南縁に求めることができ、元は礫群南縁に須恵器集中箇所があったことをうかがわせる。このように須恵器の出土分布からは一定の特徴が引き出せる。加えて北縁の礫群分布域が南・東縁の 3 倍も広くかつ小さなものが主体である点に注意されよう。

古墳・石室の基底部　以上のような礫群の形状と須恵器の出土状況を総合すると、当該遺構評価の一案として、横穴式石室古墳が撹乱によって削平されたものと考えておきたい。その場合、推定石室長約 2.9m、幅約 1.1m で、方位軸はグリッド北から 50° 東へ振れる。礫群は墓坑内に収まり、その外部すなわち想定墳丘内に積み上げられた痕跡は認められない。裏込めに礫を多用している点は 082SZ でも確認できるので、出土須恵器の時期（後述）とともに近い時期の石室構築方法であると考えることもできる。そして、082SZ に類する石室であれば側壁の石材が長径 50cm 前後であることから、比較的容易に撤去でき、このような理由で基底石まで滅失し裏込めだけが残存したものと考えられる。

しかし以上のような石室痕跡と想定した場合、その墳丘規模が不明な点は問題である。あるいはより痕跡として検出されやすいはずの周溝が全く検出されなかった点も疑問である。撹乱と幾度かの整地層により平面的に検出できなかった可能性もあるが、当該遺構をいち早く石室と想定して周辺までの調査にのぞむことが必要であったと反省しなければならない。

085SX 出土須恵器　085SX 出土須恵器は、その出土状況から当該遺構内に属するものと判断しうる。その大半は杯蓋（41 ～ 43）・杯身（44 ～ 51）である。これらは 082SZ 出土の同器種と比較すると、口径はほぼ同じ 14cm 前後を主体とするが、蓋の天井の丸みが強く、杯身口縁の面取りはあまりせず

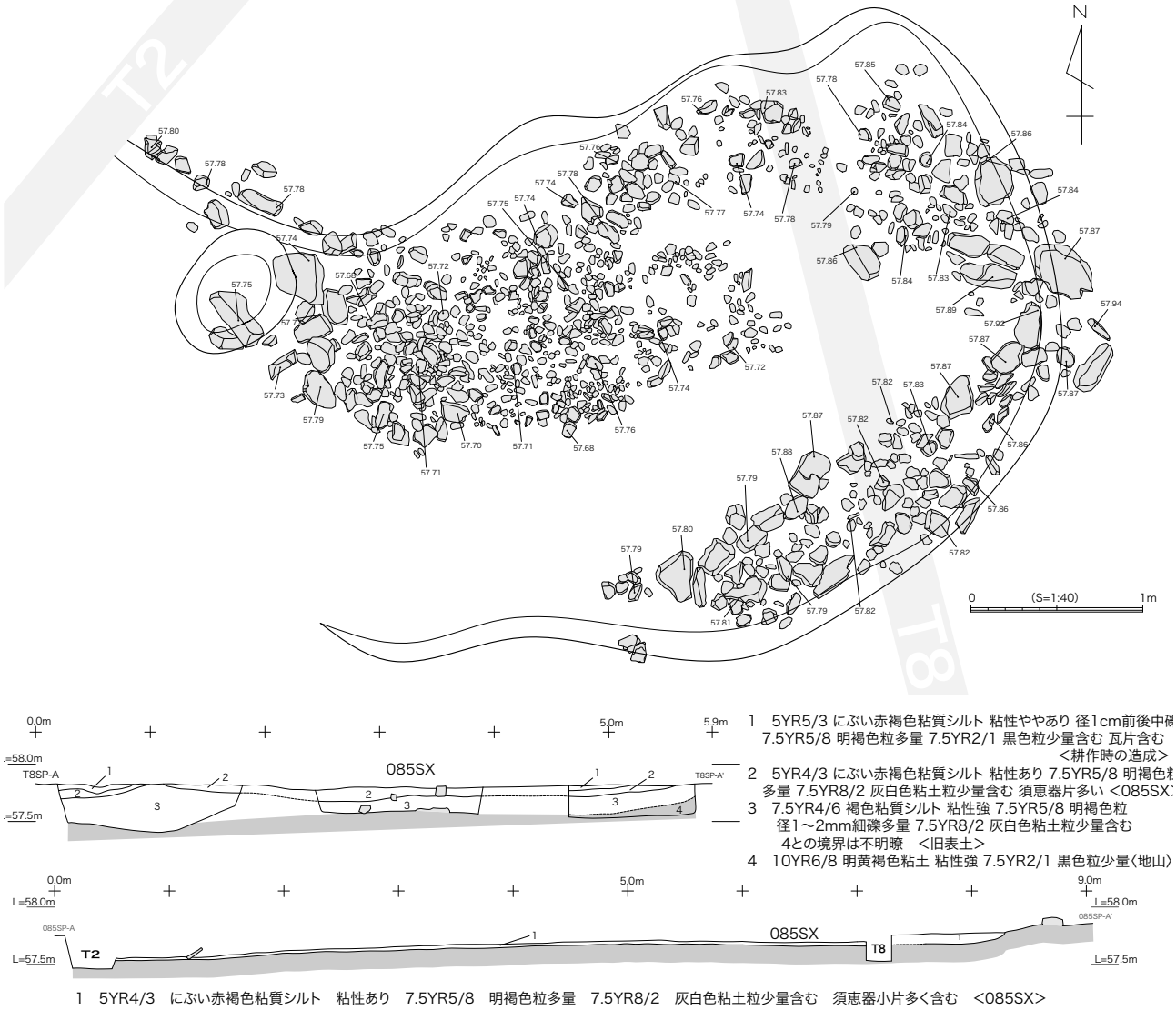


図34 085SX平面図（1:40）および土層断面図（1:60）

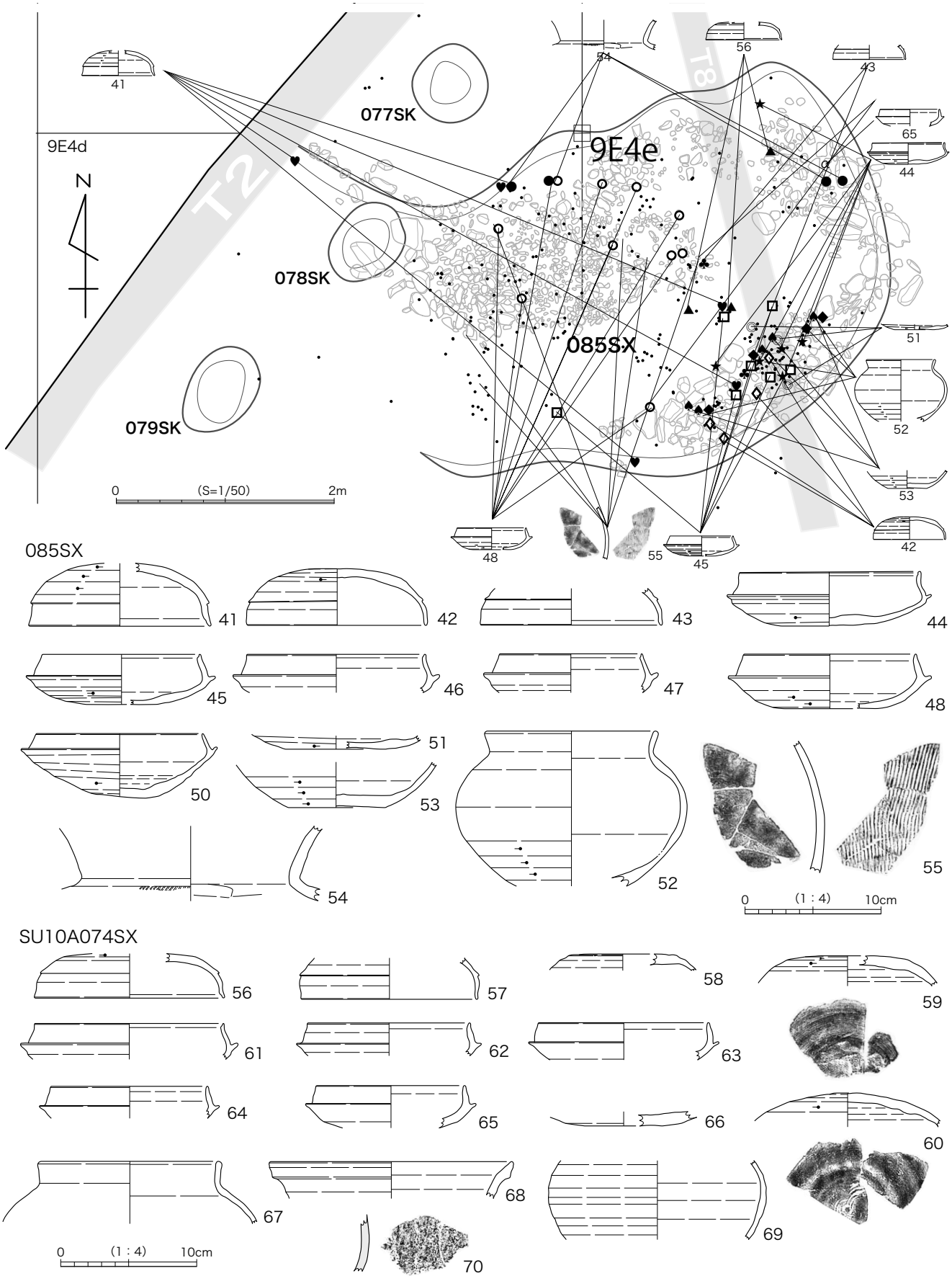


図 35　085SX 遺物出土地点分布および出土遺物実測図

に段にして端部を薄くしているなど、違いがある。082SZ よりも時期が若干新しくなるものと考えられ、H-44 号窯期に相当するであろう。47 や 50 はさらにもう少し時期が下るのかもしれない。暦年代としては 6 世紀末～ 7 世紀前葉となろう。この他に、広口壺（52）が比較的接合ができて形状が判明した。底部は不明だが口縁から胴部最大径に至るまで丸みが強いのが特徴である。53 も広口壺の底部とみられ、やや大きな底径で平底である。7 世紀代の可能性もあろう。54 は甕の頸部で外面に平行タタキが若干みえる。55 も甕の胴部で外面平行タタキ、内面は押え具痕跡をナデ消している。

なお、当該遺構からは鉄鏃茎部とみられる鉄製品も出土している（写真図版 16）。

074SX 出土須恵器　074SX は近世寺院廃寺後の整地層で、085SX の上位にある。085SX を認識する以前にほぼ同一グリッドで取り上げたものが多く、085SX に由来するものが多くを占める。須恵器杯蓋（56 ～ 60）・杯身（61 ～ 66）・広口壺（67・69）・甕（68）と、壺とみられる土師器片（70）がある。杯蓋・身は 085SX のものとほぼ同一であるが、59 や 60 のように蓋の天井内面に押え具痕があるのが特徴である。59 は木目痕で、60 は同心円文がある。

その他遺構出土の須恵器など　SU10A 区では古墳以外からも須恵器・土師器・山茶碗が出土している。71 は寺院廃絶後の造成層から出土した須恵器杯身で、082SZ・085SX いずれからも 10m 以上離れているが、ここから流出したものであろう。7 世紀代と考えられる。72 は須恵器甕で、平行タタキが交差することから底部に相当するものとみられる。083SD 出土の 39 と同一個体の可能性が高い。73 は灰釉陶器の底部である。74 は須恵器杯身で 71 と同様の時期と推定されるが、器壁が薄くやや黒みがかった色調は他の須恵器とは異質である。他地域産（例えば伊勢地域など）の可能性も考慮したい。75 は土師器長胴甕の口縁である。7 世紀代の伊勢型と呼ばれるタイプで、薄手でつまみ上げられた口縁が特徴である。丁寧な調整であることから、その名の示す伊勢地域から搬入されたものと考えられる。

(6) 横穴式石室の敷石について

今次発掘調査では、石室構築材としての石材のうち、床面に敷かれた敷石に注目した。検出された各石室内に敷き詰められていた礫は、比較的面が揃っていて平坦な床面を構成している。これらを詳細に観察すると、いずれの石室でも意図的に加工されていると考えられるものが多数確認できた。そこで、KJ10A 区 001SZ・KJ10C 区 018SZ・SU10A 区 082SZ の各石室から数点ずつのサンプルを採取して、うち特徴的な加工を示すものを 2 点ずつ実測図で提示する（図 37）。

礫は、すべて黄褐色を呈するチャートであり、古墳が立地する丘陵の基盤を形成する石材と同一と考えられる。

分割は敲打によるもので、ブロック状に割ることを意図して行なわれていたと考えられる。礫は長さ 20cm 程度に分割されていたようで、長辺あるいは短辺が 20cm 程度を示すものが多い。S-4 の ように礫風化面を残すものが多くないことから、一定の大きさに大まかに分割してから、目的とするブロック状の礫を順番に作出したようである。ブロックの分 割された面は平坦であり、この平坦部分が床面に当たるように並べられていたと考えられる。平面的な大きさの調整も行なわれたようで、S-7 では側面側も分割が行なわれたものと考えられる。

この分割･加工には、工具をもって行なわれたと考えられる。器面には、工具による打点が認められ、その大きさは 2 ～ 4cm 程度と、分割された面に比べると、極めて点的に当たっていることが分かる。このようなことを行なった工具として考えられるものに鉄器があり、節理などいわば石の目を見ながら分割が行なわれていたことが想定される。

なお、本項（6）は川添和暁の観察所見を永井がまとめた。

図 36　SU10A 区トレンチ等出土須恵器・土師器実測図

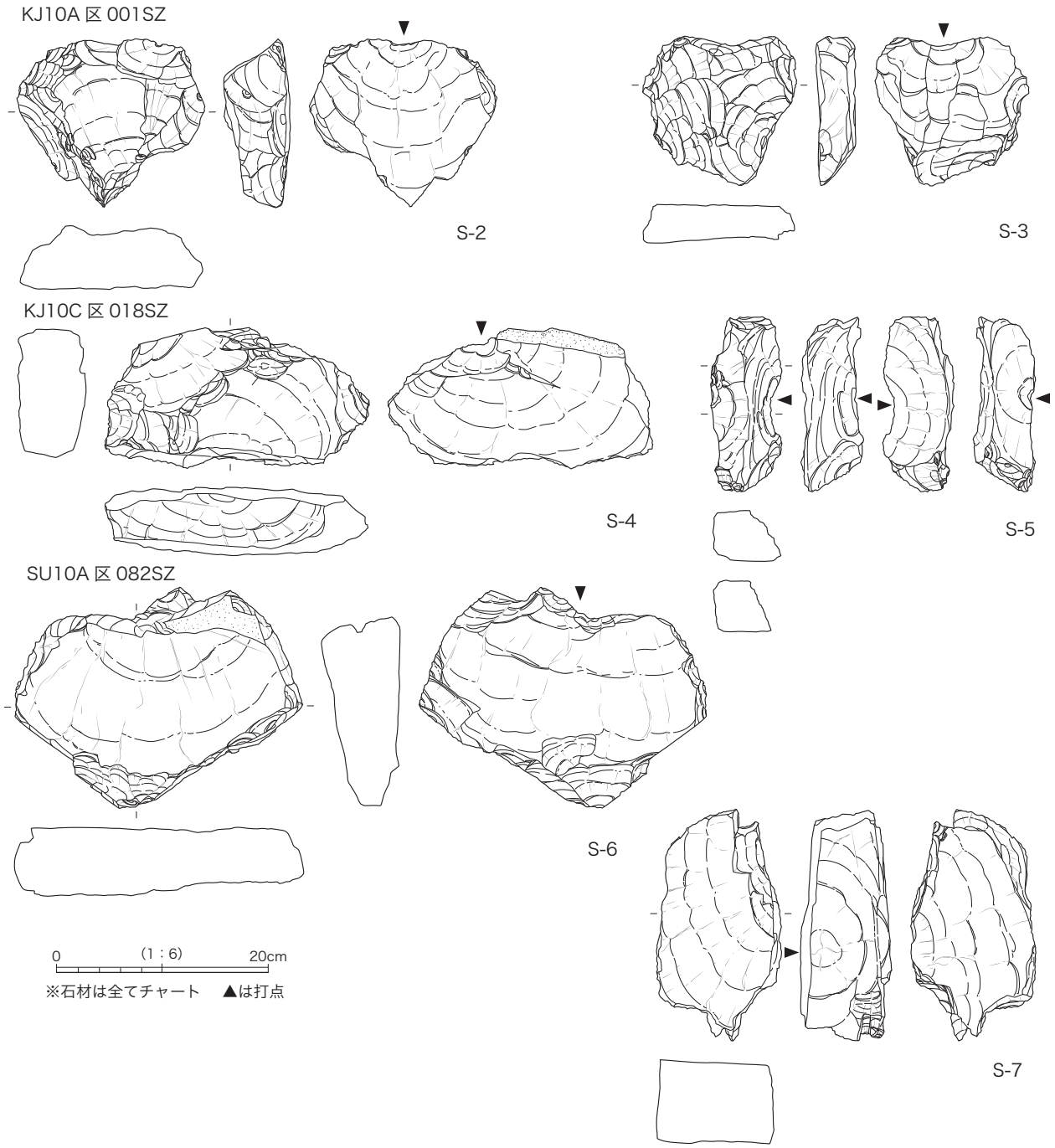


図 37　石室床面敷石使用の礫実測図

第 3 節　晴雲寺址の遺構

（1）SU10A 区

概観　本節では、SU10A・B 区で検出された晴雲寺址の遺構について報告する。本章第 1 節でも述べたように、SU10A 区では横穴式石室が検出され後期古墳群の一部であることが明らかとなったが、同時にそれを削平・整地して晴雲寺の伽藍が造営されたこともわかった。このことから、晴雲寺造営以前の SU10A 区は「屏風岩」付近の小尾根を中心に若干の緩斜面があるだけで、特に山頂側を大きく削ることで平場を確保したと考えられる。したがって検出された建物などと方位が揃う調査区東端の崖は、その際に形成されたものとみてよいだろう。

一方、SU10B 区は、調査前に A 区とほぼ同規模の平場であったにもかかわらず、検出さらた遺構は

図 38　SU10A 区第 1 遺構面遺構図

数条の溝のみであった。しかも平場の大半が寺院廃絶後に形成されたものとみられ、晴雲寺境内としての平場は限定的であることが判明した。遺物も極端に少ないことから A 区とは対称的な利用がなされたものと想定される。

晴雲寺址の遺構は礎石建物（087SB）1 棟、階段（086SX）といった寺院施設の遺構の他、廃絶後の整地に関連する造成土層（001SX・002SX・074SX）や瓦溜（072SU・075SU）、耕作で使用された埋甕（073SK など）4 基などがある。ここでは重要度の高い礎石建物・階段の順に記述し、後からその他の遺構について番号順に提示する。

礎石建物 087SB　調査区中央部に位置する。国土座標第Ⅶ系の X = -136.815、Y = 24.427 にあり、標高は 58.0m である。地山および旧表土の削り出しと一部盛土による基壇と、礎石 10 点以上で構成され、関連遺構として基壇周囲の周溝状凹地 075SD がある。その大部分は晴雲寺の廃寺後整地層 074SX に覆われており、これによる滅失範囲も広い。当該建物は晴雲寺観音堂と目されるが、以下に示す残存状況をもとに第 5 章で考察する。

基壇　基壇遺構は、東西約 2.4m、南北 5.5m の範囲で高まりとなって検出された。東辺と北辺は礎石

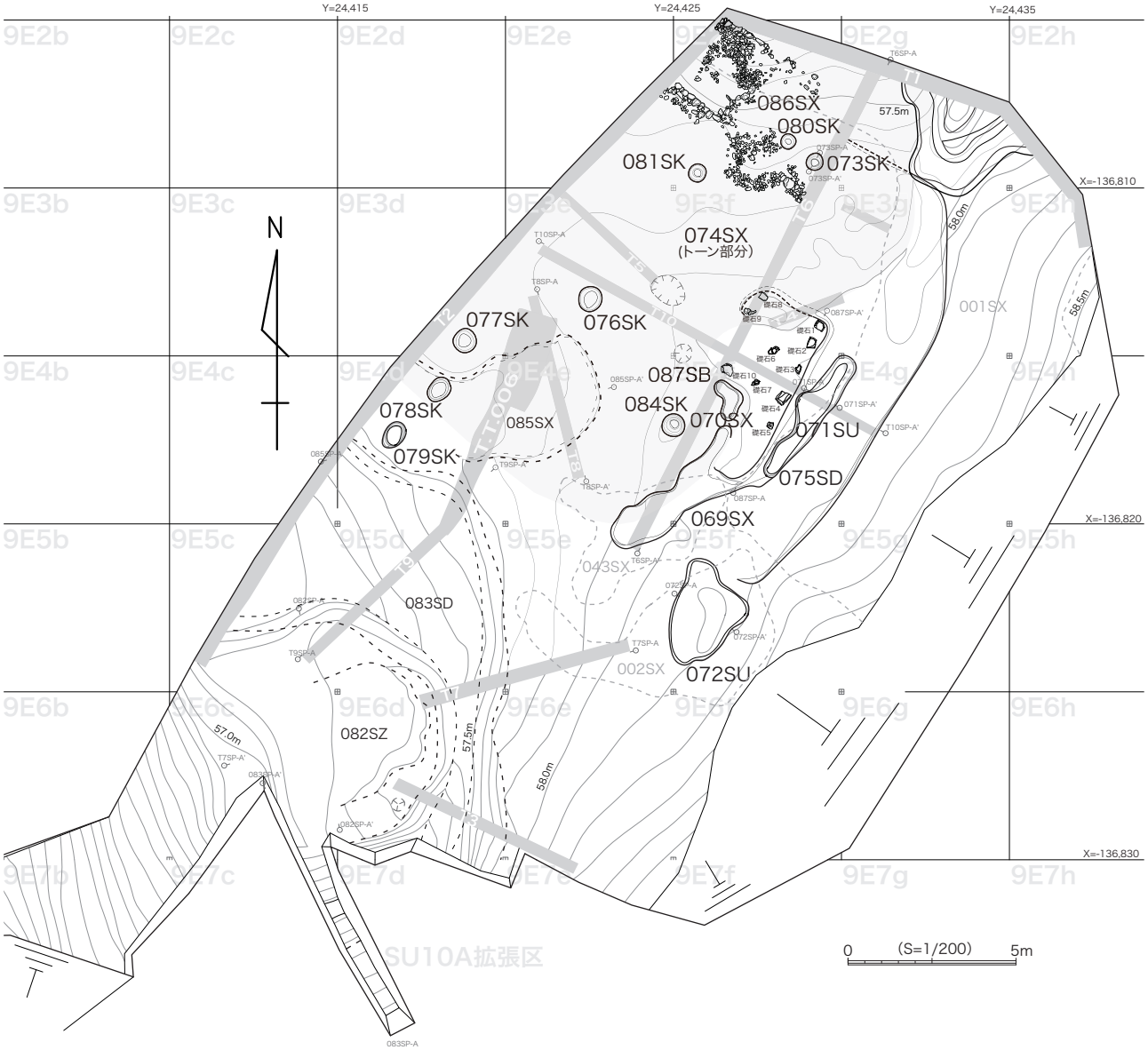
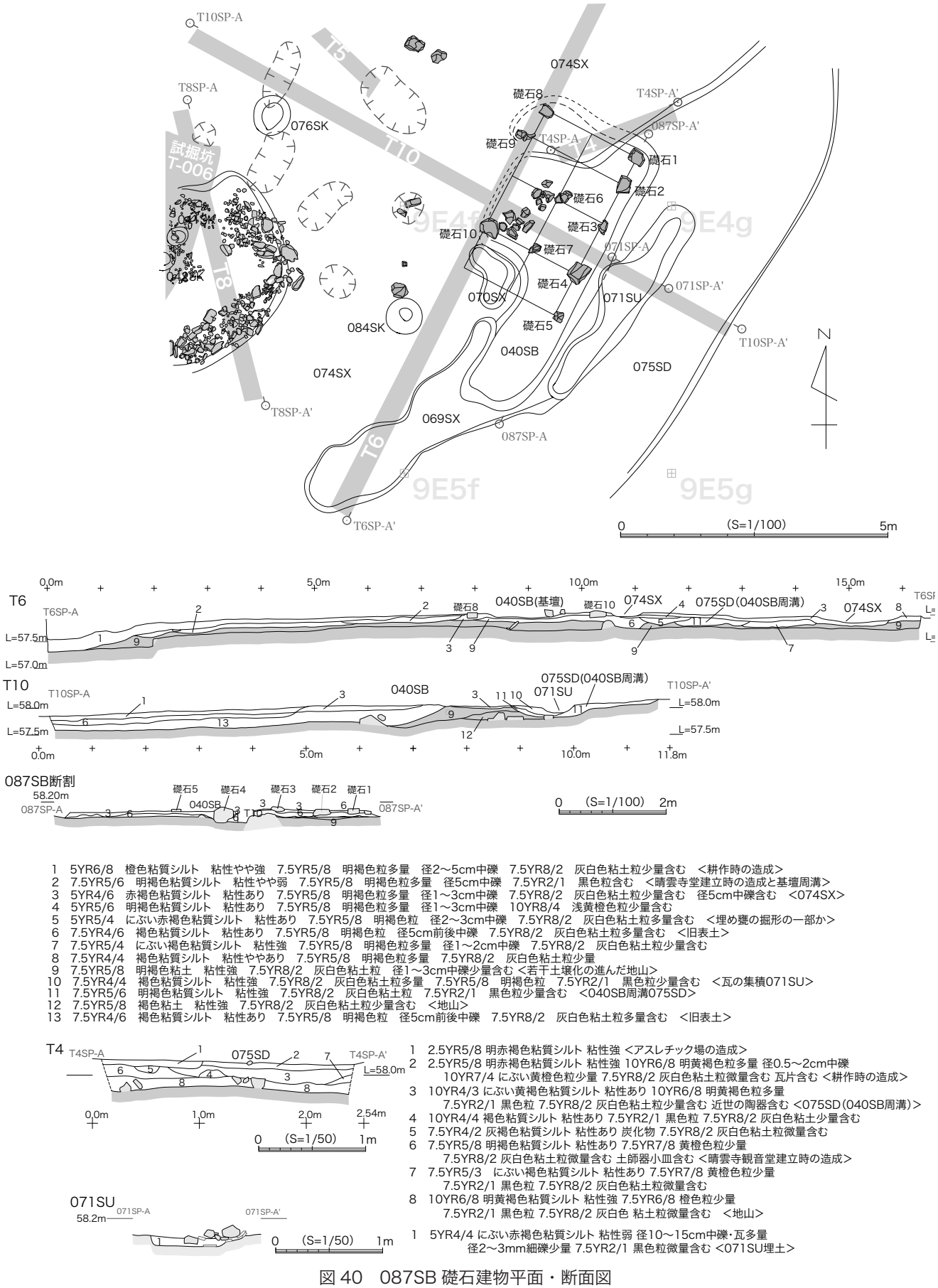


図39　SU10A区第2遺構面遺構図（近世、1:200）



1　5YR6/8　橙色粘質シルト　粘性やや強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径2～5cm中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<耕作時の造成>
2　7.5YR5/6　明褐色粘質シルト　粘性やや弱　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径5cm中礫　7.5YR2/1　黒色粒含む　<晴雲寺堂建立時の造成と基壇周溝>
3　5YR4/6　赤褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1～3cm中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　径5cm中礫含む　<074SX>
4　5YR5/6　明褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1～3cm中礫　10YR8/4　浅黄橙色粒少量含む
5　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒　径2～3cm中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒多量含む　<埋め甕の掘形の一部か>
6　7.5YR4/6　褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒　径5cm前後中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒多量含む　<旧表土>
7　7.5YR5/4　にぶい褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1～2cm中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む
8　7.5YR4/4　褐色粘質シルト　粘性ややあり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量
9　7.5YR5/8　明褐色粘土　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　径1～3cm中礫少量含む　<若干土壌化の進んだ地山>
10　7.5YR4/4　褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒多量　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<瓦の集積071SU>
11　7.5YR5/6　明褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒　7.5YR2/1　黒色粒少量含む　<040SB周溝075SD>
12　7.5YR5/8　褐色粘土　粘性強　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<地山>
13　7.5YR4/6　褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒　径5cm前後中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒多量含む　<旧表土>

1　2.5YR5/8 明赤褐色粘質シルト 粘性強 <アスレチック場の造成>
2　2.5YR5/8 明赤褐色粘質シルト 粘性強 10YR6/8 明黄褐色粒多量 径0.5～2cm中礫
　10YR7/4 にぶい黄橙色粒少量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む 瓦片含む <耕作時の造成>
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト 粘性あり 10YR6/8 明黄褐色粒多量
　7.5YR2/1 黒色粒 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む 近世の陶器含む <075SD(040SB周溝)>
4　10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR2/1 黒色粒 7.5YR8/2 灰白色粘土少量含む
5　7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト 粘性あり 炭化物 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む
6　7.5YR5/8 明褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒少量
　7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む 土師器小皿含む <晴雲寺観音堂建立時の造成>
7　7.5YR5/3　にぶい褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR7/8 黄橙色粒少量
　7.5YR2/1 黒色粒 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む
8　10YR6/8 明黄褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR6/8 橙色粒少量
　7.5YR2/1 黒色粒 7.5YR8/2 灰白色 粘土粒微量含む　<地山>

1　5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性弱 径10～15cm中礫・瓦多量
　径2～3mm細礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <071SU埋土>

図 40　087SB 礎石建物平面・断面図

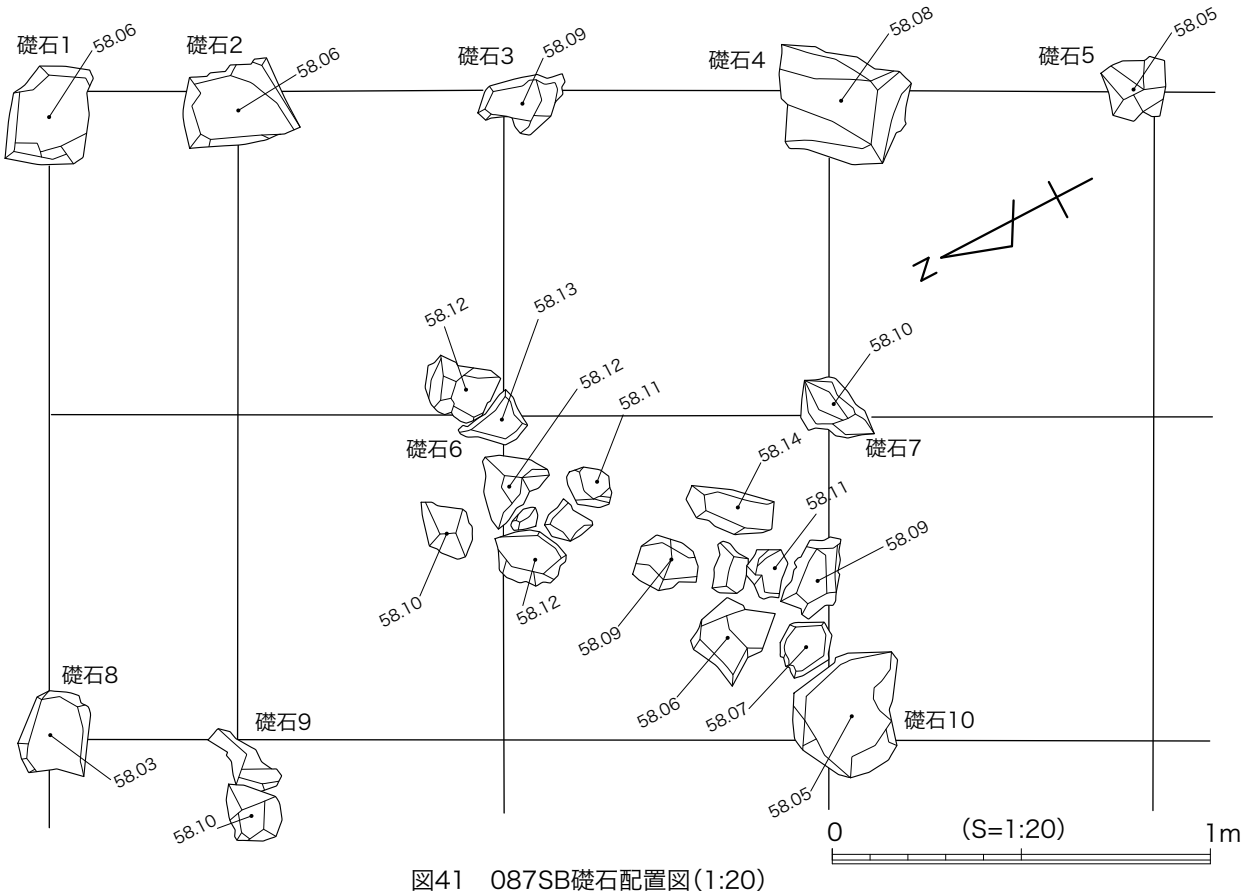


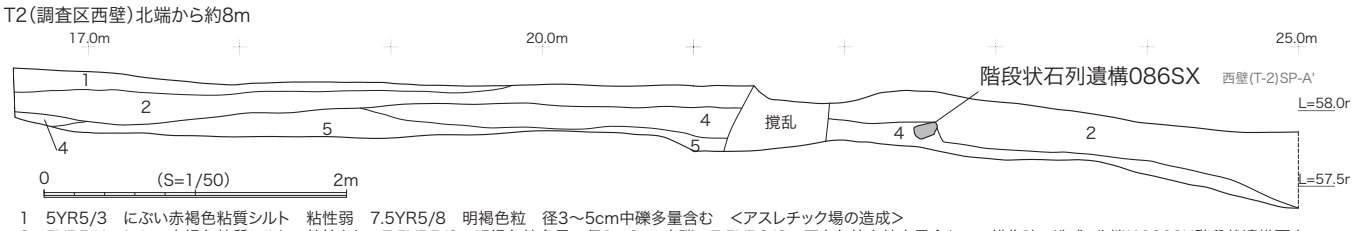
図41　087SB礎石配置図(1:20)

列と平行に延び、一部原形を保っている。それ以外は直線的に検出されたものの、069SX・070SX・074SX などによって侵食された結果である。基壇は周囲を掘りくぼめた溝 075SD の底面から約 20cm の高さがあるが、その傾斜は緩いためそれほど高くはみえない。基壇土層断面はトレンチ（T10）によると、東辺から約 2m までは風化の進んだ地山粘土層（9 層）の上面を平らにしたところへ礎石を据えるか、礎石 4 のような大きめの礫は若干掘りくぼめて据えている。一方小さな礎石 3 は、風化の進んだ粘土層の上に若干の盛り土をして据えられている。このように比較的安定した基盤の礎石が残存している。そして 9 層はその先で落ち込み、旧表土とみられる 6・13 層が全体を覆っている。おそらく尾根筋にはここから「屏風岩」まで狭小な平場が存在し、古墳の可能性がある 085SX などの先行遺構が構築されていたものと思われる。その旧表土上面を同様に均して盛土（3 層）を追加したものである。しかしこれは検出面では範囲が確定できず、結局 074SX としてやや掘りすぎてしまっている。ただし当該範囲で礎石にふさわしい礫は出土していない。また、基壇断ち割り時には瓦などの遺物は出土していない。

礎石　礎石は、 北東隅から南西方向へ延びる 1 列（礎石 1 ～ 5）と北西方向へ延びる 1 列（礎石 1･8）があり、これに基壇端が対応することから、これらは側柱に相当するものとみられる。礎石 1 ～ 5 の心々間隔は 0.5m・0.72m・0.86m・0.86m である。一方礎石 1・8 間は 1.72m で、0.86m というのが柱間間隔の基準数値となり、したがってこの間に 1 点の礎石の存在が考えられる。これら側柱間隔に対応する礎石は 6・7 と礎石 8 から南西方向の延長に礎石 9・10 が所在する。以上の他に、礎石 6・7・10 に囲まれた約 1㎡内に 13 点の角礫が重なることなく密集している。須弥壇の位置など、検出時には評価を想定したが、報告時点では性格不明としておきたい。ただし、この礫群を含めて礎石 1 ～ 10 の上面高を計測すると標高 58.03 ～ 58.14m に分布し、礎石 1 ～ 10 に限れば標高 58.03 ～ 58.09m に集中している。

周溝状凹地 075SD　礎石建物 087SB の基壇北辺から東辺に延びる周溝状遺構である。建物側の上端は基壇のそれであり、反対側は平場の切岸下端に相当する。その断面は、トレンチ T10 によると浅い皿状である。該当地点では幅 2.7m、深さ 18cm で、遺構幅が最小になる。ここから主に北東方向で検出でき、基壇北辺では幅 5.2m にまで拡大する。一方基壇南東隅での幅は 3.2m で、瓦・土器溜まり遺構 072SU とその上位にある遺構 002SX に切り込まれているので明瞭とはいいがたい。出土遺物は 18 世紀前半の陶器と土師器小皿が出土している。

階段 086SX　調査区北隅で 001SX の掘削過程で検出された。当該地点は「屏風岩」背後の尾根筋か



1　5YR5/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性弱　7.5YR5/8　明褐色粒　径3～5cm中礫多量含む　<アスレチック場の造成>
2　5YR5/4　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性あり　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1～3cm中礫　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<耕作時の造成・北端は086SX階段状遺構覆土>
3　5YR4/3　にぶい赤褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒多量　径1～3cm中礫少量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒微量含む
4　7.5YR5/4　にぶい褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　7.5YR8/2　灰白色粘土卵λ量　径1～3cm中礫少量含む　<晴雲寺造営時の造成層>
5　5YR5/2　灰褐色粘質シルト　粘性強　7.5YR5/8　明褐色粒　径2～5cm中礫多量　7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む　<古墳築造以降の堆積層>

図42　086SX平面図および土層断面図(1:50)

ら外れ北方向へ傾斜が始まるところでもある。調査区外には山麓へ下る道の痕跡とその両脇に段々畑として耕作されたと思われる小平場が数カ所で認められるがその先で病院敷地内となり消滅している。

階段遺構は積まれた礫の配置から 2 時期あると考えられる。1 時期目は、それぞれが幅 1.6m 以上となる 2 段の石列が相当する。この石列は直径 25cm 前後の礫を 2 ～ 3 段に面を揃えて積み上げたものである。石列間の距離は 2.6m ある。石列背後はやや小さな礫を裏込めとして詰めている。これによってできた通路は、北東方向から南西方向に延び、礎石建物 087SB の前面に至る。さらに通路側縁には同様の角礫を積み上げて擁壁としている。この擁壁は、後に 2 時期目の階段が通過することでかなり崩れてしまっているが、元来階段と同じ程度の高さであったと推定される。

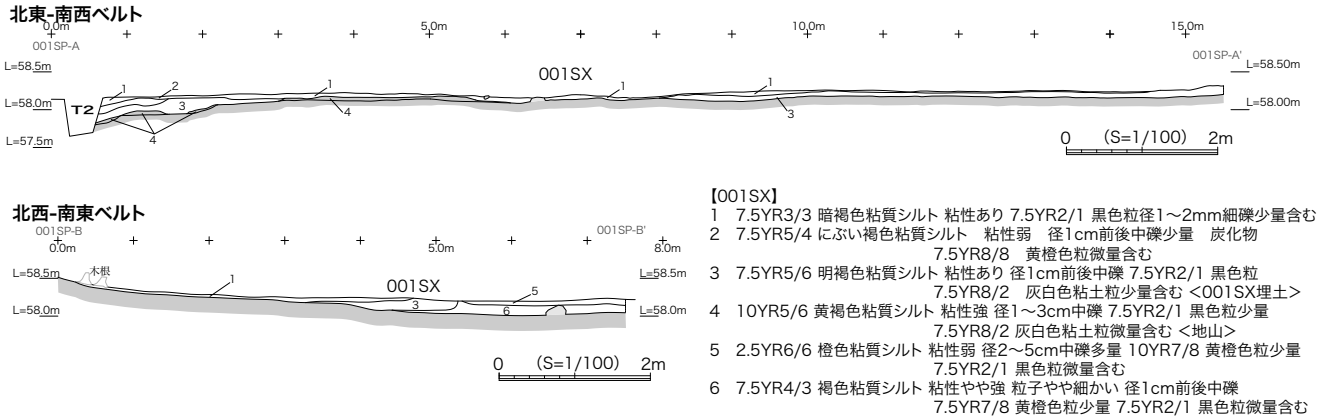
2 時期目の階段は、1 時期目階段の擁壁を一部利用しつつ、異なる向きと幅で延びている。その方は北北西から南南東で礎石建物 087SB の右側面に至る。径 10cm 前後角礫を多用した幅 1.8m の通路で、調査区内では 4 段が確認できた。この階段両脇に 080SK・081SK・084SK と 3 基の赤物甕埋設土坑がある。

1 時期目の階段は方向や規模からみて創建期晴雲寺に関連するものと考えられる。一方、2 時期目の階段は、それが縮小し直線的でなくなった点に注目すると寺院機能が低下した時期と見なすことができる。なお、両脇の埋設甕群は耕作用と考えられ、086SX を覆う土層のさらに上位から掘り込まれているので、直接的な関係はないと判断されるが、階段が埋まりつつも寺院廃絶後に通路が存在したことを示すものといえる。

001SX　調査区北端から礎石建物 087SB 基壇付近までに広がる整地層である。その範囲は南北 14.7m 東西 4.6m である。そのほとんどは深さ 5cm の浅い凹地であるが、調査区北端付近では谷に向かって地山が落ち込んでおり、これを埋めて平場を拡張する意図があったとみられる。出土遺物は近世の陶磁器・瓦・古銭がある。特に古銭は寛永通宝が銭差の状態で 12 枚出土している。

069SU　087SB の基壇南側に位置する不定形な土器・瓦集積遺構である。その規模は概ね北東から南西方向へ 4.7m、東西幅 1.2m である。特段掘り込まれていはいないが、当該遺構の上位には、第 1 遺構面で不定形な溝状遺構 043SX が検出されているが、069SU によってできた凹みとみられる。陶磁器と瓦小片が出土しているが、071SU ほど密集はしていなかった。

071SU　礎石建物 087SB 北東側に位置する遺物集積遺構（瓦溜まり）である。建物基壇に似た方位で北東から南西方向へ溝状に 4.4m 延び、幅 0.7m、深さ 14cm である。整地層 001SX の下位で検出された。集積遺物の大半は瓦で陶磁器類は少なかった。また遺構内は瓦が充満し埋土の方が少ない状態であった。そのため形成からさほど時間が経過していない可能性もある。そして、トレンチ（T10）による横断面土層でも明らかなように、087SB の周溝 075SD 埋土上部を人為的に掘り込んでいることか



【001SX】
1　7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性あり 7.5YR2/1 黒色粒径1～2mm細礫少量含む
2　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質シルト　粘性弱　径1cm前後中礫少量　炭化物 7.5YR8/8　黄橙色粒微量含む
3　7.5YR5/6 明褐色粘質シルト 粘性あり 径1cm前後中礫 7.5YR2/1 黒色粒 7.5YR8/2　灰白色粘土粒少量含む <001SX埋土>
4　10YR5/6 黄褐色粘質シルト 粘性強 径1～3cm中礫 7.5YR2/1 黒色粒少量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒微量含む <地山>
5　2.5YR6/6 橙色粘質シルト 粘性弱 径2～5cm中礫多量 10YR7/8 黄橙色粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む
6　7.5YR4/3 褐色粘質シルト 粘性やや強 粒子やや細かい 径1cm前後中礫 7.5YR7/8 黄橙色粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む

図43　001SX土層断面図(1:100)

ら、意図的につくられた溝状の凹地に瓦のみを集積させたものと評価できる。検出当初は 087SB の雨落ち溝の可能性も考えられたが、礎石列とは若干異なる方向へ延びていることから直接的には関わらないものと考えられる。このことから、当該遺構は建物廃絶後に形成されたと推測される。

072SU　礎石建物 087SB の南側に位置する瓦と土器の集積である。長径 13.2m の不定形な楕円形で若干くぼんだ箇所があり、瓦とともに廃棄状態の陶磁器類が出土している。069SU と同じく土坑を掘削せずに廃棄されたものとみられるが、同時期であるのかは不明である。なお、当該遺構の上位ほぼ同位置には 002SX が存在するが、両者で遺物の接合関係はないため、別遺構と考えられる。

073SK・080SK・081SK　調査区北部の階段遺構 086SX 付近で検出された常滑赤物甕が埋設された円形の土坑である。いずれもアスレチック場造成層下で検出されたが、礎石建物 087SB や階段遺構 086SX を覆う近代の造成層の上面から掘り込まれている。このような出土位置から、寺院には直接関わりがないものと考えられる。掘り方は甕よりわずかに大きく、甕が水平になるように掘られている。埋設された甕は、底部を中心に残存しており、一部に口縁も残っていた。甕内部の埋土は有機質分が少ないとみられる黄褐色シルトで、器壁に付着物もないことから、耕作用の水甕が主目的であったと考えられる。なお、甕以外の遺物が伴うことはなかった。

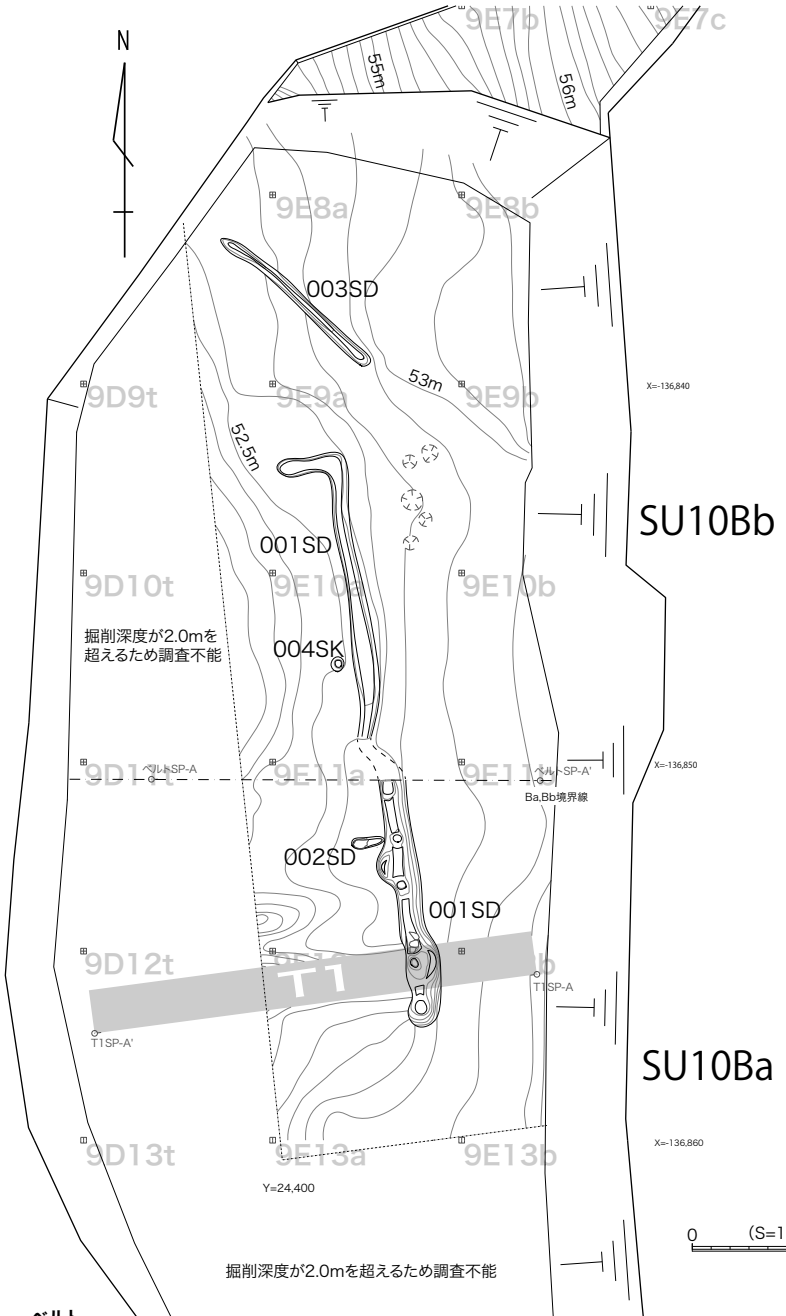
084SK　調査区中央部の礎石建物 087SB 西側で検出された常滑赤物甕が埋設された円形の土坑である。掘り込み層位は不明であるが、第 2 検出面で検出されたことから寺院廃絶後のものと考えられる。甕内部の埋土は 073SK と同様で出土遺物はなかった。当該遺構も近代の耕作用に設置された水甕であったと考えられる。

（2）SU10B 区

SU10B 区の調査経過　SU10B 区では排土置場を設けるために南北 2 小区（SU10Ba・Bb 区）に区分して、南側の Ba 区から調査を開始した。東側崖面に沿って表土層 5 ～ 10cm 下で地山が検出されたことから、西側へほぼ同じ傾斜で平場となるよう表土掘削を進め、東西トレンチ（T1）において堆積状況を確認した。すると、平場の大半を構成する 2・3 層で近世瓦が出土し、さらにその下の 4 層では暗褐色の旧表土とみられる層と瓦の出土が確認された。このことから、表土掘削で検出された平場は後から造成されたもので、4 層以下の土層が、晴雲寺が機能していた時期に相当すると判断された。それに基づき 2・3 層の掘削を開始したものの、たちまちにして掘削深度が 2m を超えて調査不能となった。したがって、晴雲寺機能時の平場とそこから下る斜面の上端を検出することにとどめ、後半の Bb 区においても同様の判断で調査を進めた。

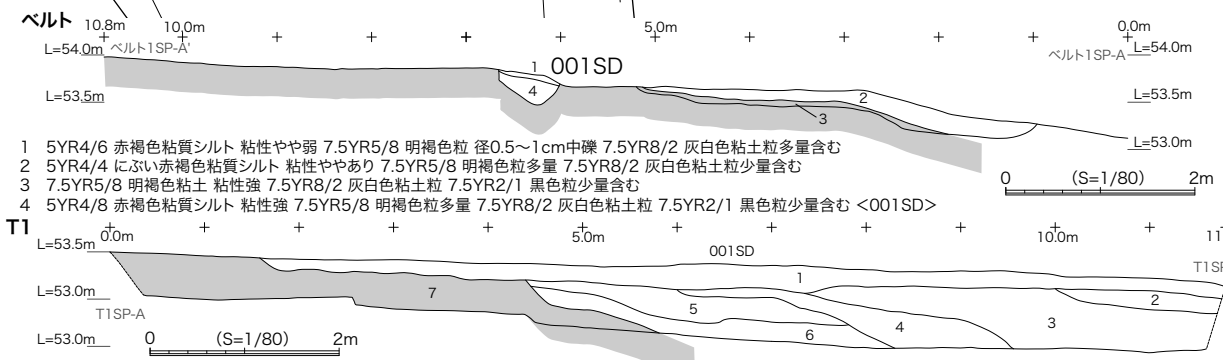
平場造成層　上述のとおり T1 で観察された平場造成層のうち、5・6 層が山頂側を削って出た土を流し込んだもので、4 層はその完成後の表土ということになる。一方切り出された山頂側は、地山粘土層（7 層）の上面が幅約 2.6m になるが、直上を覆う 1 層は 2・3 層よりも新しくなることから、これに伴って平場が拡幅されたと考えられる。以上をまとめると、晴雲寺造営に関わって造成された平場は、調査前状況の平場よりも狭い幅であり、T1 の 5 層上面と 7 層上面の一部が相当すると結論づけられる。山頂側へは元々溝 001SD（後述）あたりまでと考えられ、結果、Ba・Bb 区を総合した平場の規模は東西幅約 3.0m、南北長 14.0m に限定されるとみられる。

001SD・003SD　調査区ほぼ中央にほぼグリッド南北方向に延びる溝が 001SD である。Ba 区と Bb 区に分かれて検出されているが、南北長 15.3m で北端で西へ直角に折れて 1.5m のびる。幅は 0.6m で掘り方断面は概ね U 字形で深さは 39cm である。遺構検出前に観察した東西トレンチ（T1）断面では見落とされているが、検出位置から見地山（7 層）を掘り込んでいるとみられる。瓦片以外に顕著な遺物がなく時期不明であるが、平場縁辺とほぼ同一方向であることから、平場造成に伴って掘削された

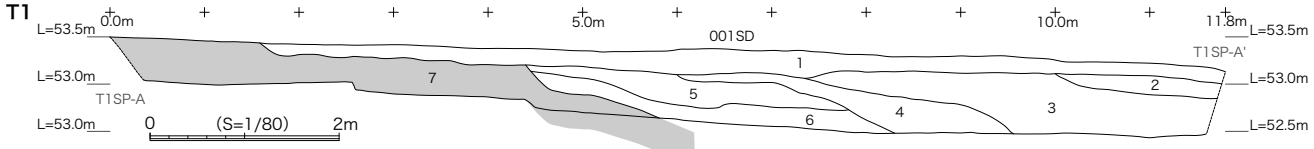


ものと考えられる。003SD も同様に地山に掘り込まれた溝で長さ 5.0m、幅 0.3m、深さ 15cm である。ただしその方向は 001SD から 45° 西に振れており、調査区北縁の崖面の方向にほぼ対応している。こちらも時期不明であるが、平場造成に関わるものと考えておきたい。

平場の機能　以上報告するように、当該調査区では大掛かりな平場造成以外に顕著な遺構・遺物はなかった。そのため SU10A 区のような建物が存在した可能性は低く、全く異なった目的で造成された可能性が高い。当該平場の機能については、第 5 章で考察するが、結論的には寺院に伴う墓地とするための用地であったと推測される。



1　5YR4/6 赤褐色粘質シルト 粘性やや弱 7.5YR5/8 明褐色粒 径0.5～1cm中礫 7.5YR8/2 灰白色粘土粒多量含む
2　5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性ややあり 7.5YR5/8 明褐色粒多量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒少量含む
3　7.5YR5/8 明褐色粘土 粘性強 7.5YR8/2 灰白色粘土粒 7.5YR2/1 黒色粒少量含む
4　5YR4/8 赤褐色粘質シルト 粘性強 7.5YR5/8 明褐色粒多量 7.5YR8/2 灰白色粘土粒 7.5YR2/1 黒色粒少量含む <001SD>



1　2.5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性あり 径1～3cm中礫多量 10YR8/8 黄橙色粘土ブロック 2.5YR7/8 橙色粒少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <近年の造成>
2　2.5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト 粘性あり 径1～3cm中礫 10YR8/8 黄橙色粘土ブロック多量 7.5YR2/1 黒色粒少量含む <近年の造成>
3　2.5YR3/3 暗赤褐色粘質シルト 粘性やや強 10YR8/8 黄橙色粘土ブロック多量 径1～3cm中礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <近年の造成>
4　2.5YR4/2 灰赤褐色粘質シルト 粘性あり 10YR8/8 黄橙色粘土ブロック 7.5YR5/8 明褐色粒多量 径1～3cm中礫 7.5YR2/1 黒色粒少量含む <近世瓦含む>
5　2.5YR3/4 暗赤褐色粘質シルト 粘性やや強 径1～3cm中礫少量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む
6　2.5YR3/2 暗赤褐色粘質シルト 粘性やや強 7.5YR2/1 黒色粒少量 径1～3cm中礫微量含む <001SD>
7　2.5YR4/3 にぶい赤褐色粘土 粘性強 径3～5cm中礫 10YR8/8 黄橙色粘土粒多量 7.5YR2/1 黒色粒微量含む <地山>

図 44　SU10B 区遺構・土層断面図

第 4 節 晴雲寺址の遺物

概観　晴雲寺址の発掘調査区では、古墳時代の横穴式石室が検出され該期の副葬品と中世前半に持ち込まれたと思われる山茶碗類が出土している（第 3 章第 2 節）。これ以外の出土遺物は江戸時代 17 世紀以降のものとなるが、本節ではこれらを晴雲寺とその廃絶後の遺物として提示する。

晴雲寺址の遺物はその大半を近世瓦が占めており、27L 入コンテナで 48 箱あるのに対し、食器・調理具である陶磁器類（磁器・陶器・土器）は 8 箱に過ぎない。これらの他には僅かな金属製品（古銭・釘）と常滑産甕が 4 個体分出土している。しかも遺構は基壇建物・階段と廃絶以降の整地層にほぼ限られ、廃棄用の土坑がほとんどないために、表土・検出面で出土した遺物が大半である。したがって形状をとどめたものは少ない。しかし遺跡の立地からすると外部から廃棄のために持ち込まれた可能性は低く、晴雲寺で使用されたかもしくは廃絶後の土地利用を示す資料であると考えて問題ない。以上をふまえて遺物を、(1) 陶磁器類と (2) 瓦類に大別し、陶磁器類については (1-1) 遺構出土の一群、(1-2) 表土・包含層・遺構検出面出土の一群、(1-3) 埋設された常滑産甕類、に区分して提示する。

（1）陶磁器類

(1-1) 遺構出土の陶磁器類　遺構ではあるが実質廃絶後の整地層である 001SX および 002SX からの出土が最も多い。磁器は染付碗（76 ～ 89）がある。76 は菊文、78・79 はコンニャク版、85・86 は二重網目文様である。84 は京信楽の可能性もあるが、概ね肥前産と考えられ、器壁の薄い良品である点が注目される。90 ～ 106 は陶器。90 は瀬戸美濃以外の例えば信楽産の可能性がある陶器碗。91 は美濃産の蓋物で丸みのある器形が特徴。93 は瀬戸・赤津産の平碗。94 は肥前産の可能性あり。95 ～ 99 は肥前産陶器。100 は瀬戸産、連房窯第 6 ～ 7 小期。102・104 は肥前産陶器碗。104 は楼閣山水文の御室焼で連房第 6 小期。105 は京焼ふう。107 は瀬戸産碗で腰錆釉。108 ～ 111 は美濃産の灯明皿で連房第 7 小期。112 は灯明受皿で同第 7 ～ 8 小期である。113 は蓋物の身で 91 と組み合うとみられる。114 は瀬戸・赤津産の片口鉢である。115 は瀬戸産擂鉢で底部に糸切痕があり連房第 5 ～ 7 小期であろう。116 ～ 127 は土師器小皿でいずれも手捏ね成形である。中には 124 ～ 126 のように口縁肥厚傾向にあるものも特徴である。油煙などの使用痕跡は認められなかった。128 ～ 130 は土師器内耳鍋で浅い形状である。ハケ状工具の調整痕がある。131 は同羽釜の上部。132・133 は常滑産の鉢と甕でいずれも無釉。134 ～ 137 は 002SX 出土で、134 は美濃・尾呂産の灯明皿、135 も美濃産筒型香炉で、連房第 5 ～ 6 小期と考えられる。137 は土師質の竈と推測され胴部は上部近くまで開口している。

041SK からは寺院跡の決め手の 1 つとなった青磁香炉（138）が出土している。獣脚がおそらく 3 か所に付く。内面口縁部から外面底部にかけて明青色の釉がかかる。肥前産と推測される。

043SK からは肥前産染付（139 ～ 141）などが出土した。139 は雨降文の丸碗。142 は瀬戸産の左右掛分け椀。143 は外面に凹ませた施文あり。受け部のある筒型なので 149 のような汁注ぎか。

069SK 出土の 145 は表土出土の 184 と接合した。陶器だが瀬戸美濃産ではないとみられる。146 は土師器小皿で口縁が肥厚する。

071SU 出土 147・148 は肥前産染付椀。149 は美濃産摺絵陶器の汁注ぎ。150 は常滑産無釉甕。

072SU の瓦溜には無釉陶器甕が伴う。常滑産もしくは近代以降であれば三河高浜産の可能性もある。

074SX は礎石建物の基壇覆土で、ここからは肥前産染付の仏飯具（153・154）と陶器皿（155）が出土したが、後者も肥前産かもしれない。他には土師器小皿（156 ～ 159）と同鍋（160・161）があり鍋はハケ調整痕がある。162 は 152 に類似した内傾口縁の無釉陶器甕。

075SD 出土は肥前産と推測される陶器椀（163）と土師器小皿（163・164）である。

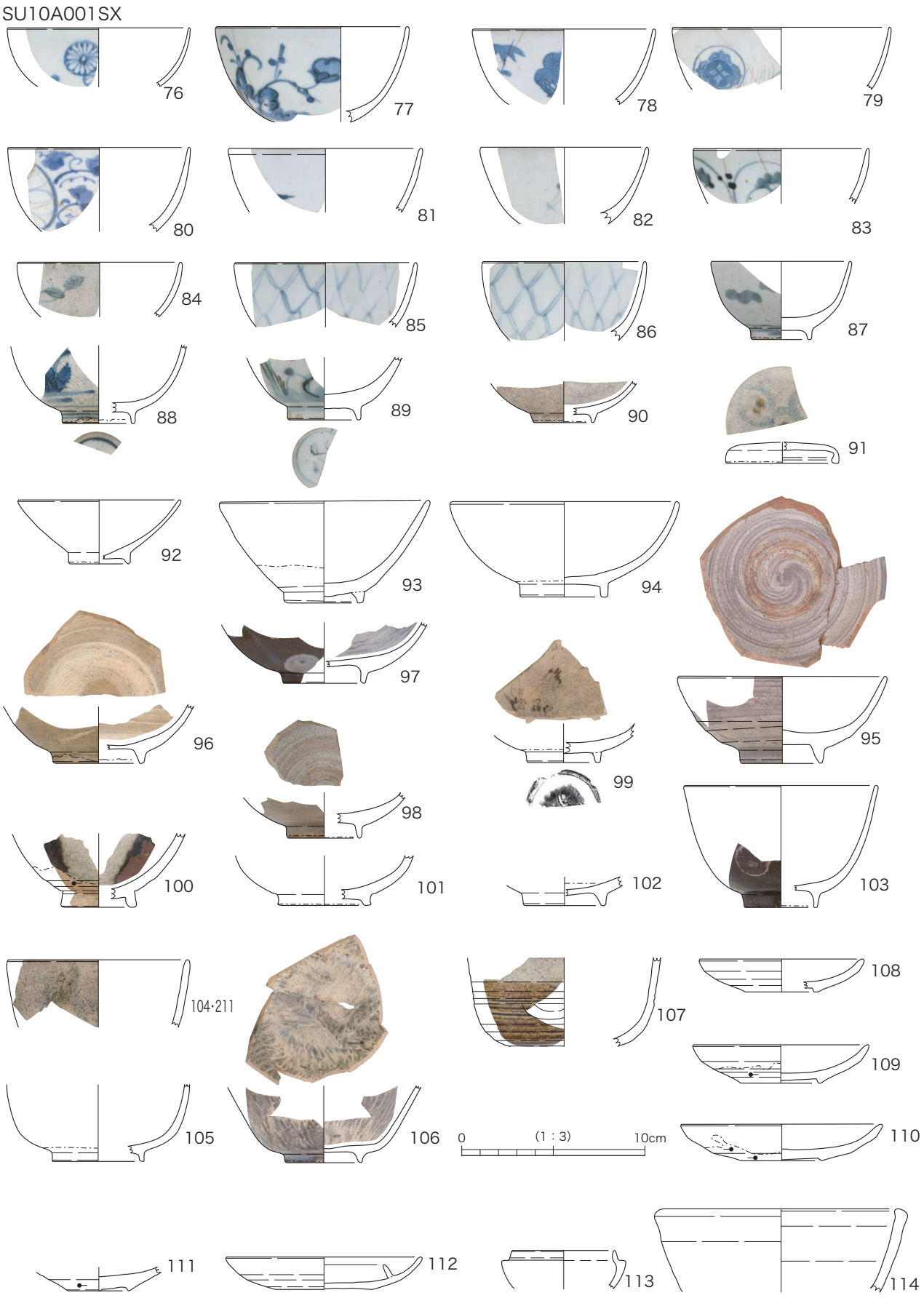


図 45　SU10A 区出土陶磁器実測図（001SX 近世陶磁器）

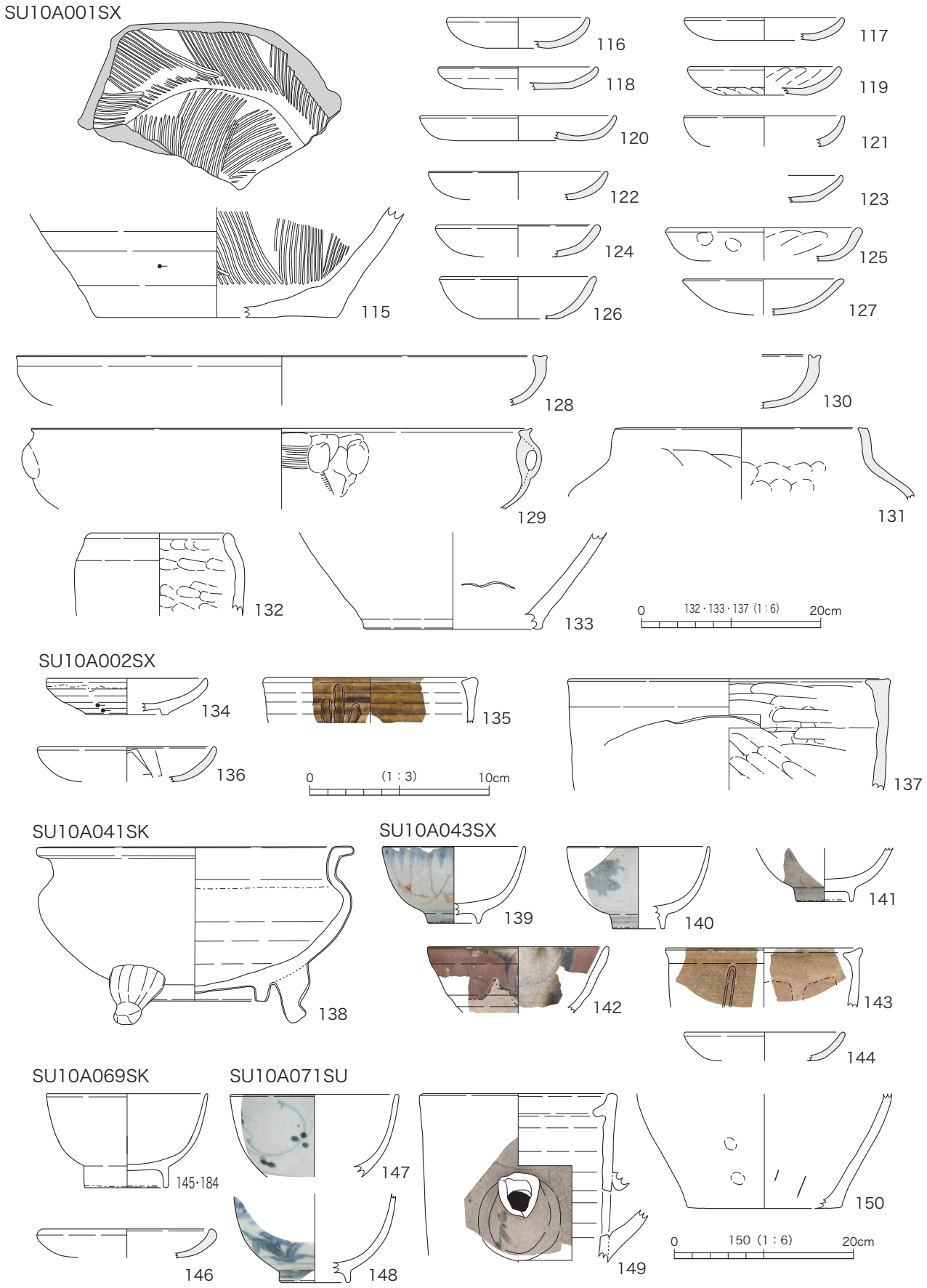


図 46　SU10A 区出土陶磁器実測図（001SX ～ 071SU 近世陶磁器）

（1-2）表土・検出面など出土陶磁器類　171 ～ 180・182 ～ 202 は染付磁器であるが、とくに表土出土を中心に近代の瀬戸美濃産のものも含まれている。具体的には 185 が底部外面に「松岡製」と記され、198 や 201 の鉢もそうである。202 の外面に「祭」などとあるものも近代以降のものであろう。それ以外は概ね肥前産とみているが、172 のようにやや白さに欠けるものや、175 ではコンニャク印版が滲んだようでもあり、192・193 も肥前産と断定するには躊躇するものもある。しかし概ね 18 世紀前半という年代観に変わりがない。なお 181 は京信楽と称されるもので信楽の土を使用して京都で生産されたものである。白磁では 203・204 は瀬戸美濃産で近代のもの、青磁では 205・206 が花瓶の口縁部と考えられ、138 の香炉とセットだったのだろうか。これらは肥前産である。

207 ～ 235 は陶器である。207 は瀬戸･赤津産の天目碗､208 は同産の平碗。209･210 は肥前産陶器。211 は 104 は瀬戸美濃産の御室茶碗系。212 は高台削りで蓮房登窯第 7 小期である。213 は腰錆釉、214 は付け高台風の削り高台。215 は御室茶碗系、216 は瀬戸・赤津産の平碗。217 は京信楽に分類される。218 は京焼ふうで肥前産か。219 は筒形の香炉で染付ふうの文様がある。肥前産の雰囲気がある。220 は瀬戸産で腰錆釉、221 は美濃産の香炉底部。222 は美濃産の花瓶、223 も同産の灯明皿で第 7 ～ 8 小期である。224 は花瓶だが古瀬戸ふうである。瀬戸産か。225 ～ 227 は仏飯器で美濃産である。連房登窯第 7 小期に該当する。228 は筒形香炉で第 6 ～ 7 小期美濃産。229 は土瓶で産地不明である。時期は比較的新しい。230 は蚊遣の把手で美濃・尾呂産で第 5 ～ 7 小期に相当する。231・232 は瀬戸産擂鉢で、連房登窯第 6 ～ 7 小期に該当する。233 ～ 235 は美濃産の通い徳利。233 には「□（多カ）米□」、234 には「□園町」とある。ちなみに豊橋市内では花園町・御園町がある。

236 ～ 241 は土師器小皿で 237・238・240 で肥厚する口縁がみられる。242 は内耳鍋。243 は瓦器火鉢の脚か。244 から 250 は常滑産赤物の一群である。大きさから甕と考えられる。

ところで、245 は方形の器部に把手部が付きその基部に人面文のある植木鉢である。厚めの青釉がか

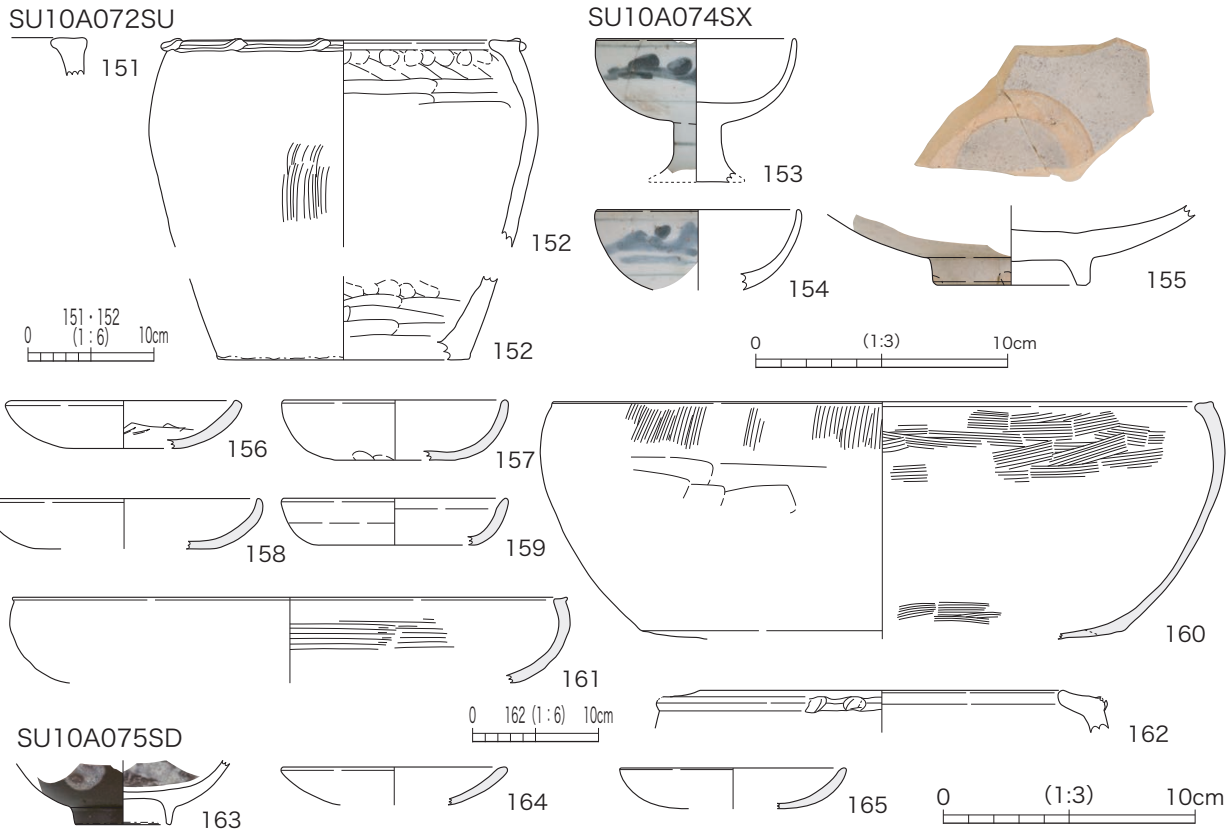


図 47　SU10A 区出土遺物実測図（072SU ～ 075SD 近世陶磁器）

表土・検1・検2・トレンチ

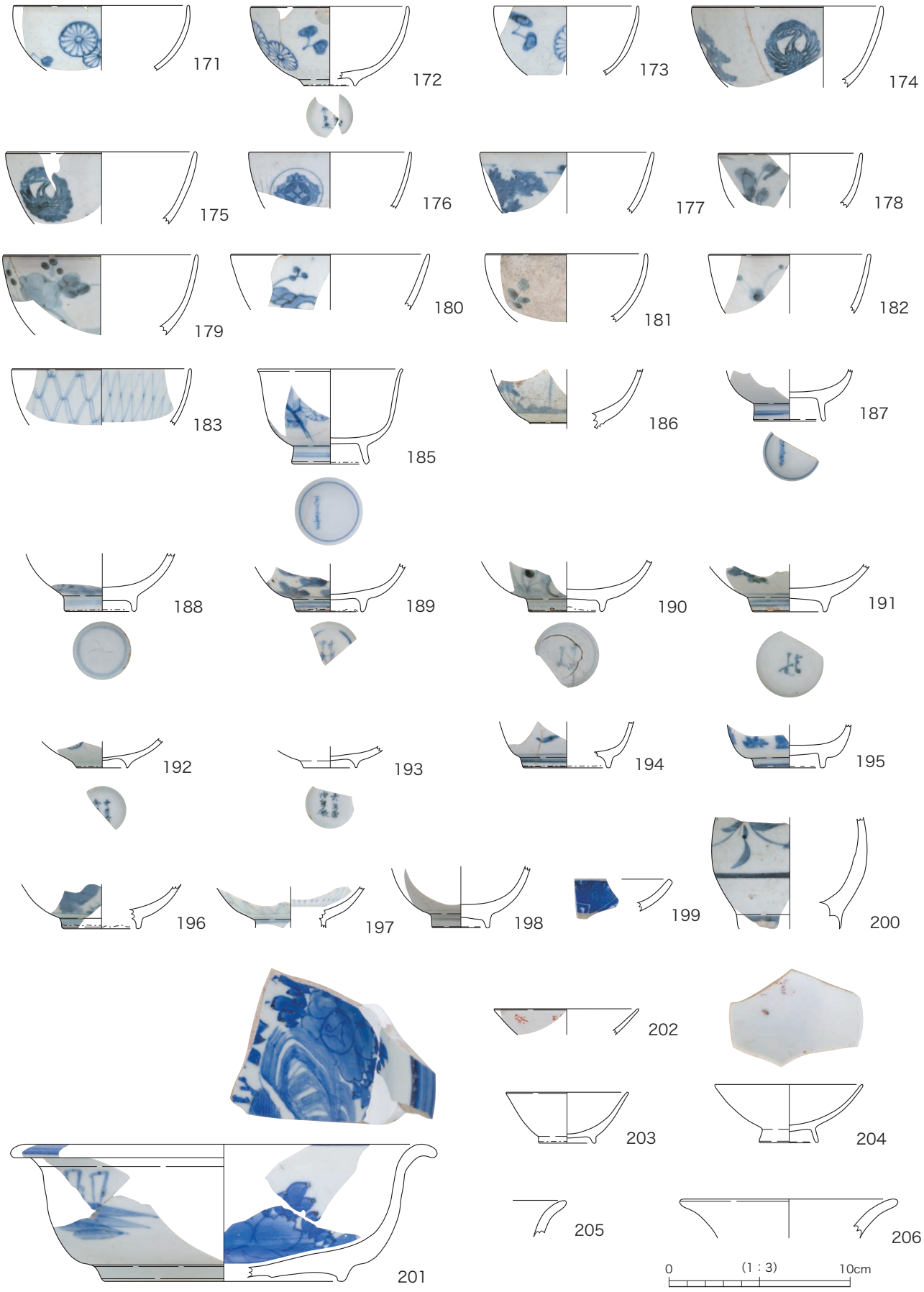


図 48　SU10A 区出土陶磁器実測図（表土・検出・トレンチ近世陶磁器）

表土・検1・検2・トレンチ

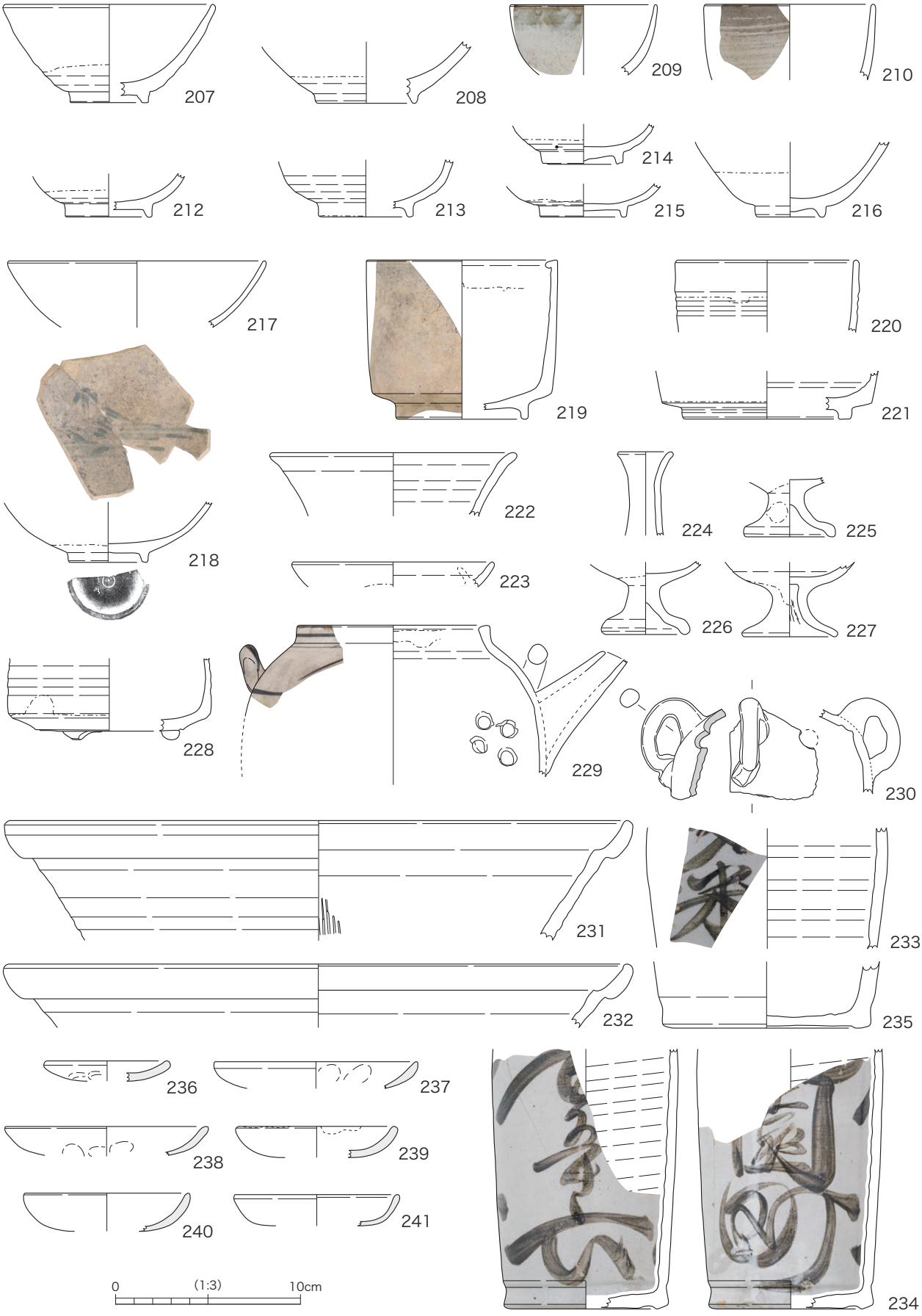


図 49　SU10A 区出土陶磁器実測図（表土・検出・トレンチ近世陶磁器）

表土・検1・検2・トレンチ

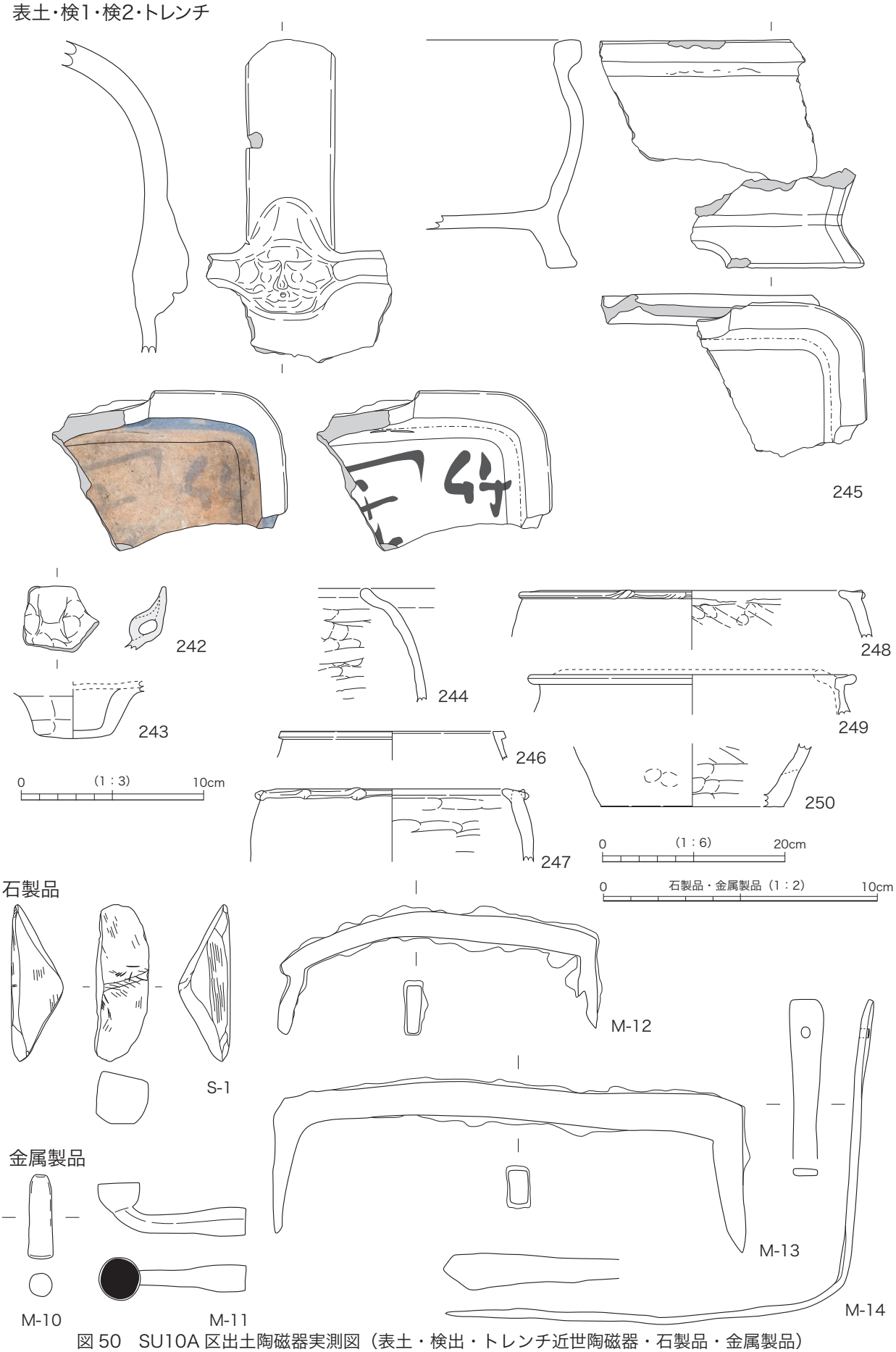


図 50　SU10A 区出土陶磁器実測図（表土・検出・トレンチ近世陶磁器・石製品・金属製品）

かり人面文の表出がやや埋没気味であるが布袋のようでもある。また裏面には「竹」ほか文字が墨書されている。時期は江戸時代後期から明治時代（概ね 19 世紀）で、産地不明であるが該期には地方窯で個性的な器物の生産がなされているのでそれらの 1 つかもしれない。

(1-3) 常滑産赤物甕　常滑産赤物については上述の中にもいくつか含まれるが、ここでは土坑に埋設されていたものを中心に提示する。169 は下半部のみが残存していたが 167・168・170 はいずれも口縁から底部まで復元することができた。後 3 者はいずれも口縁部形状が類似していることから時期が近いものと考えられるが、168 のようにやや高さの詰まったタイプも存在するようである。166 は 071SU などで出土した口縁に捻り文のめぐるタイプで内傾する点では他のものと同じ機能を有するとみられる。これらの甕は 19 世紀後半代という年代観や基壇建物の位置と関係なく配置・埋設されていることから、晴雲寺廃絶後の耕作時に関係するものと評価される。

石製品・金属製品　陶磁器類以外には砥石（S-1）、キセル雁首（M-11）、扉や箪笥の把手とみられる金属製品（M-12）、鎹（M-13）、篦状の銅製品（M-14）が出土している。001SX 出土の古銭は銭差の状態であり、判明するものはいずれも寛永通宝である。それ以外も含めて 14 点ある。M-10 は弾丸。

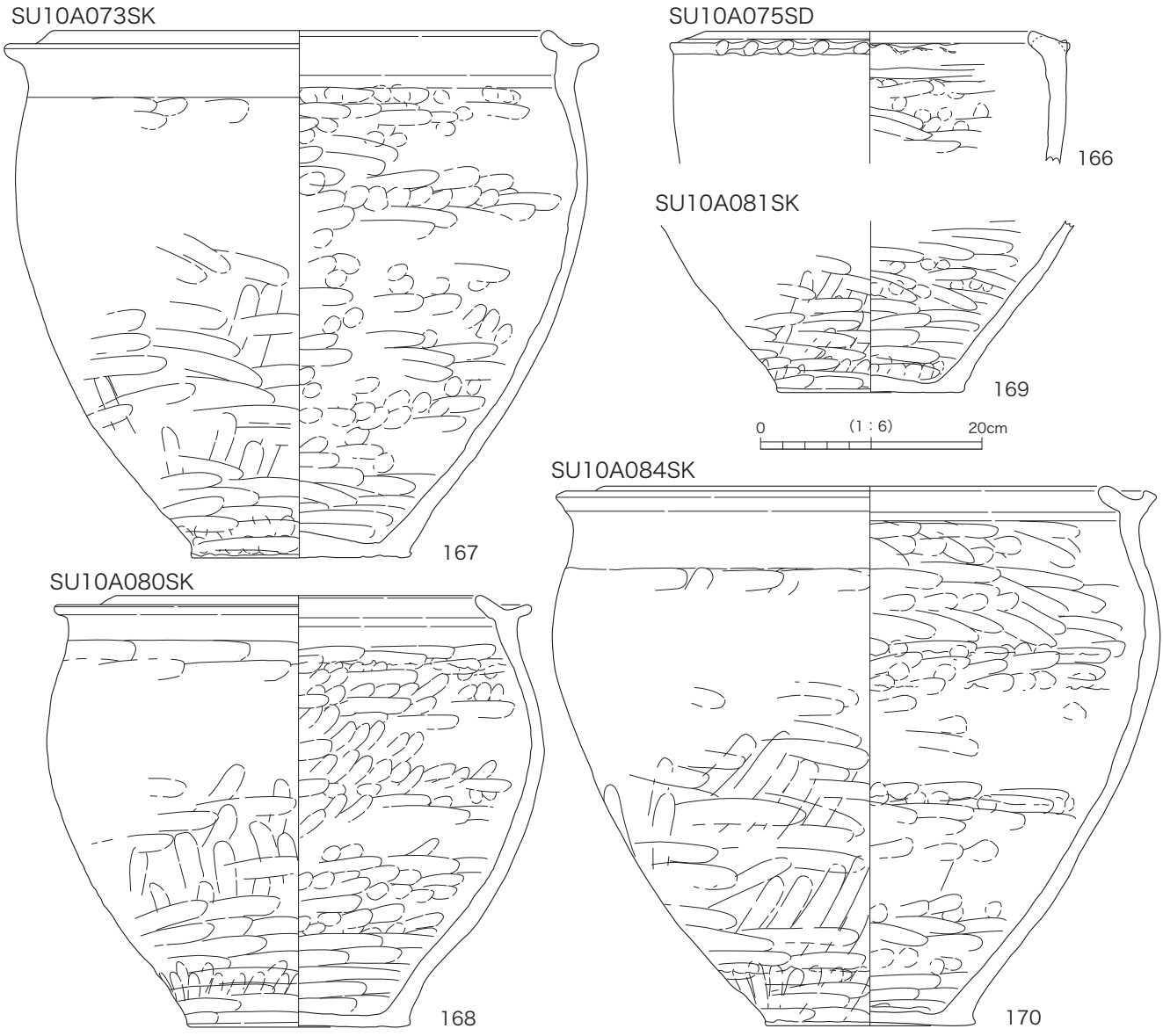


図 51　晴 SU10A 区出土陶磁器実測図（赤物甕、1 ： 6）

（2）瓦類

概観　晴雲寺の建築に関わる遺物に近世瓦がある。軒丸・軒平瓦、丸・平瓦といった本瓦葺き用の瓦とともに桟瓦と軒桟瓦も出土している。この他に面戸瓦、鳥衾、鬼瓦などがある。これら瓦の総量は重量換算で 508.5kg、27 リットルコンテナにして 48 箱である。

瓦の出土分布は、全種類に関してほとんどが SU10A 区出土であり、SU10B 区ではわずかである。したがって瓦葺き建物の存在は SU10A 区に限定され、SU10B 区へは後世の流れ込みや持ち込みによるものと見なすことができる。ただし、SU10A 区においても出土層位の大半は表土や第 1 次検出面であり、廃寺後の撹乱によってかなり移動しているとみるべきである。また瓦集積遺構 071SU や範囲確認調査 T.T.-006 での出土状況をみると、耕作時などに破砕されて片付けられた形跡もうかがえる。つまり、建物廃絶時の状況そのままではない可能性が高く、例えば軒丸瓦瓦当部の点数がきわめて少ない点などは、別の要因を想定する必要もあろう。

軒丸瓦　軒丸瓦（図 52-251 ～ 255）は、13 点（1.5kg）のみである。瓦当文様は珠文の廻る三巴文で、同一笵とみられる。瓦当全体が残っているものはないが、珠文は 16 個と推定され、全体に丸みのある表出が特徴で、巴の頭は大きく尾部は長くのびる。瓦当厚は 2.6cm である。推定される瓦当面径は 16cm である。焼成はやや軟質で燻しが全体に及ばずに明黄褐色となるものもある。丸瓦部まで連続しているものはないが、丸瓦として報告する 271・272 はこの瓦当に取り付くものであろう。

軒平瓦　軒平瓦は 1 種類で、総破片が 77 点、総重量は 14.3kg である。軒丸瓦に対比してはるかに多いが、やや軟質な焼成は全く同じなので、セット関係にある。破断しつつも 256 では瓦当全形が判明する。文様は、3 つに枝分かれした上にそれぞれ 3 つの珠文がつく中心飾りに、細い線が 3 反転する均整唐草文である。反転する線は連続せず、途中 1 か所で子葉が付く。これに似た文様は、豊橋市普門寺第 1 次発掘調査において元堂址から出土した、16 世紀末の池田輝政の修造に伴うものと推測される軒平瓦の唐草文にみられる（豊橋市教育委員会 2010）。ただし、普門寺址出土瓦の中心飾りは単純な構成で、対する晴雲寺址出土瓦の中心飾りはより複雑で、江戸で「東海式」（金子 1996）に分類されるものの典型例であることから、より後出的といえる。したがってほぼ同じ 17 世紀代の意匠ではあるが、その初頭と末期に対置される関係にあるといってよいだろう。

軒桟瓦と同笵資料　全形の判明する資料はないが、笵は 1 種類である。瓦当部の破片数は 23 点（3.9kg）でその大半は軒平部である。総じて軒丸・軒平瓦と異なる硬質な焼成であるが、燻しは弱くかかるのみで灰白色となるものが多い。あるいは二次被熱によりいぶしが消えた可能性もある。軒丸部賀灯は三巴文で珠文は 12 と推定される。軒平部は 3 つ枝分かれした先にそれぞれ凸形の葉がついた三つ葉文を中心飾りとして、細い線が連続し 3 反転する唐草文である。この文様構成は吉田城遺跡出土瓦でよくみられるもので、吉田城下の 17 ～ 18 世紀に定着した文様の 1 つである。また当該軒桟瓦は全て、瓦当面右上端を三角形に面取りしているのが特徴で、隣りの瓦の軒丸部を避けるためであろう。

なお、当該資料と同笵関係にある軒桟瓦が吉田城址（遺跡）で出土している。出土地点は三ノ丸の南側、代々吉田藩の家老職にあった西村孫次右衛門の屋敷地で、現在は愛知県警豊橋警察署とその隣接地となっている。吉田城第 36 次発掘調査では、17 世紀後半～ 18 世紀前半に限定される土坑 SK-10 から、陶磁器類とともに出土しており年代が類推できる。他の軒桟瓦は混じっていないので、比較的初期のタイプと推定される。後者は燻しが強く光沢ある黒色をしているうえに、笵押し当て前に瓦当面右端部を曲面で後退するように加工している。文様では、吉田城址（遺跡）では中心飾りが詳細な部分まで表出されているのに対し、晴雲寺址のものは全体に朧げである。さらに晴雲寺址では中心飾り右側に小さな笵傷を認める。以上の点からこれらの軒桟瓦は、まず吉田城（の武家屋敷）向けに生産されて一定の空白期間の後に、晴雲寺用に生産されたものと考えられる。

鳥衾　降棟を装飾する道具瓦で、軒丸部には直径 17.5cm、三巴文で珠文は 12 個である。燻しがかかり軒桟瓦に似た硬質の焼成であるが、巴の向きは逆である。

丸瓦・平瓦　本瓦葺きの主体を占める丸瓦と平瓦である。丸瓦は分類できたものが 965 点、総重量 118.0kg あり、平瓦は同様に 3037 点、326.8kg である。しかし全形のわかるものは少ない。271・272 は共に焼成前の穿孔があり、軒丸瓦の丸瓦部と推定される。この 2 者は凹面に、模骨による成形時についた布目の上から縄タタキをしており、特に玉縁の凹面によく残っている。玉縁長は 5cm と短い。したがって確実な丸瓦として提示できるのは 273 のみである。こちらは軒丸瓦同様に縦方向のナデと凹面側縁の面取を施している。凹面には布目痕がなく鉄線切痕（コビキ B）が観察される。端部の削り幅は約 3cm と玉縁に対応して狭い。

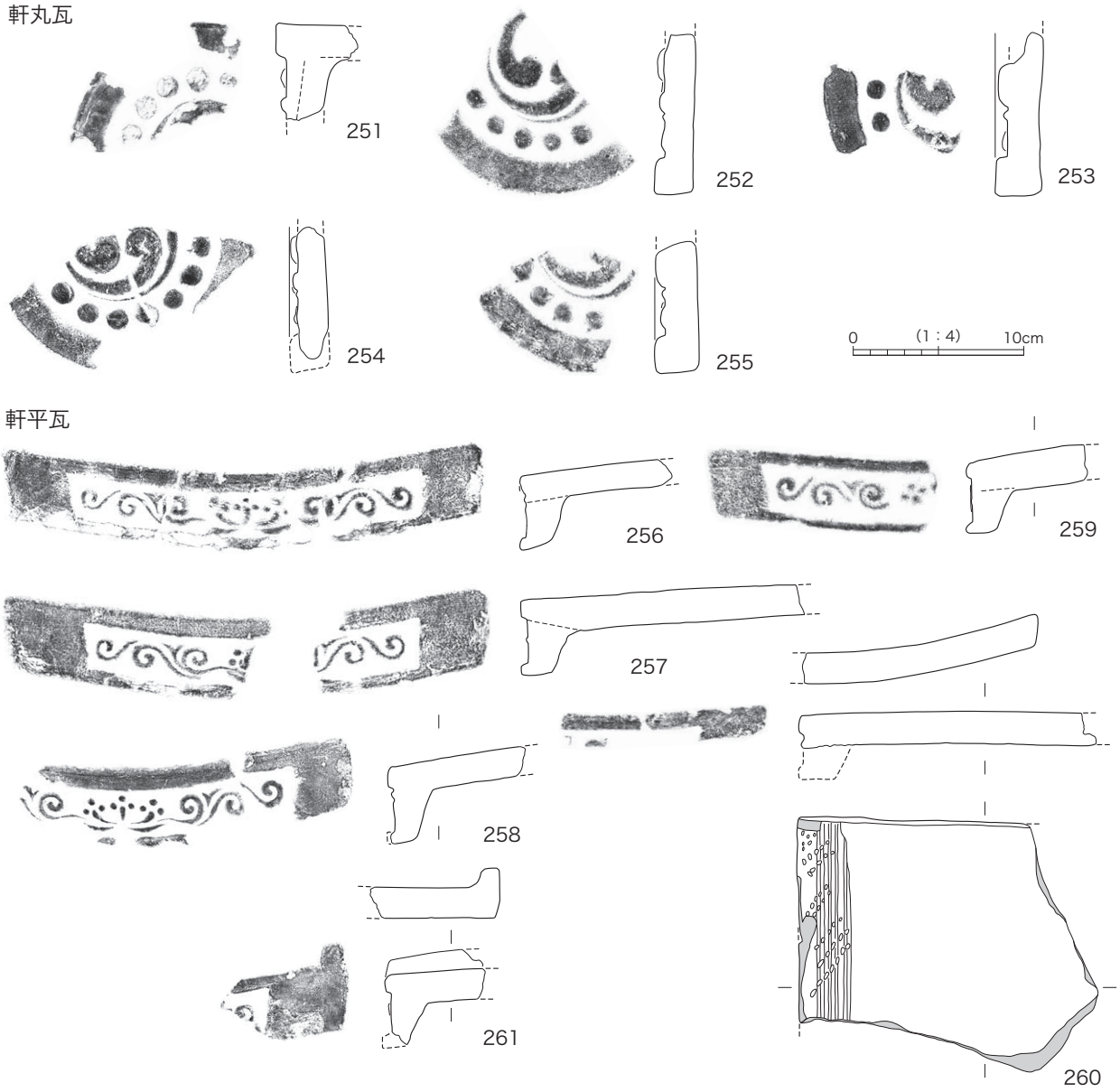


図 52　SU10A 区出土軒丸・軒平瓦実測図（1:4）

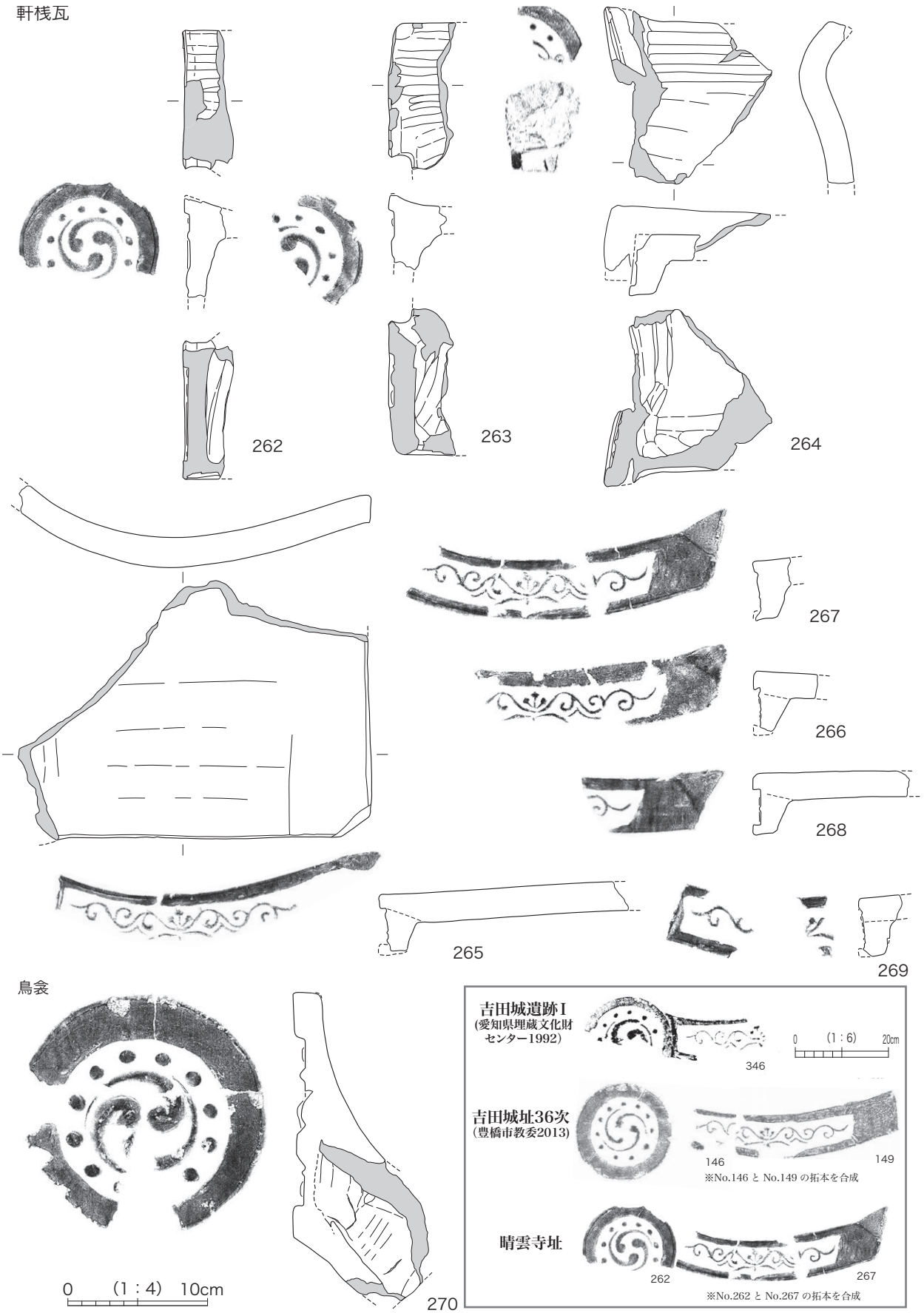


図 53　SU10A 区出土軒桟・鳥衾瓦実測図（1:4）

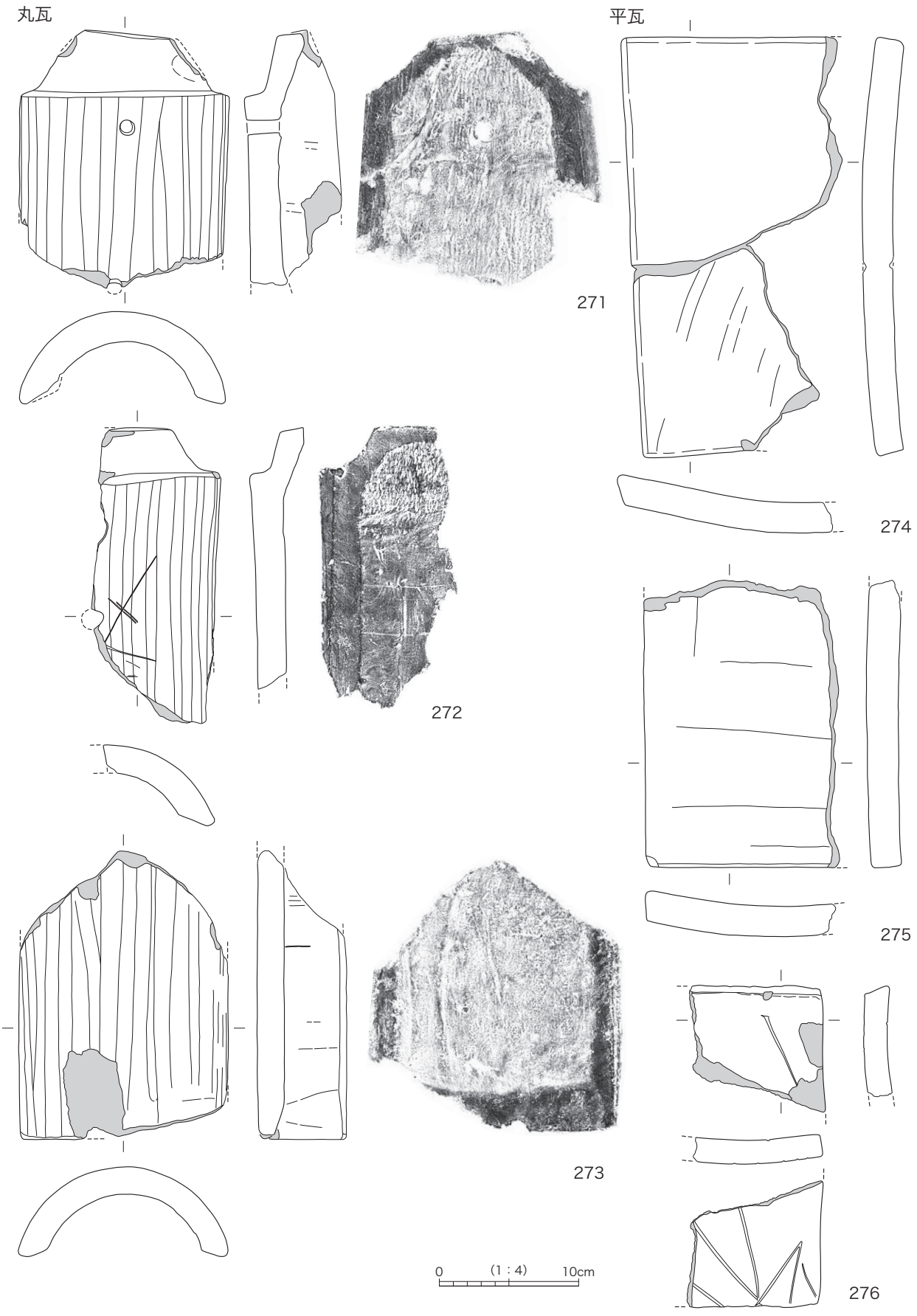


図 54　SU10A 区出土丸・平瓦実測図（1:4）

平瓦は、残存率約 60% の 274 が全長の判明する唯一の資料である。それによると全長 30.2cm でほぼ 1 尺に相当する。中心線の断面は全体に曲線となっている。凹凸面ともに削りないしはナデ調整を施すしているが、いぶしにより見えにくい。広端面を上位にした使用状態で図示した。なお風蝕痕のわかる資料はなく、葺き足については不明である。275 は 274 より断面曲線が緩く、熨斗瓦的でもある。凹面は横方向のナデである。276 は平瓦の隅部であるが、凸面に焼成後の刻書が認められる。意図は不明だが、綾杉文のようにみえる。ちなみに凹面の線は工具痕である。

熨斗瓦　棟に積み上げて使用する瓦である。平瓦から熨斗瓦への転用はいくつかみられるようであるが、熨斗瓦として製作されたものも若干ながら確認された。277 は平瓦のほぼ半分の幅で端面は斜めに仕上げられている。長さは 13.9cm 以上で若干の反りがある。

桟瓦　丸･平瓦とともに総重量の大半 (25.3kg) を占めるのが桟瓦であるが、点数・重量ともに丸・平瓦と比較すると圧倒的に少ない。破片分類時に判断のつかないものが平瓦で集計された可能性もあるが、焼成の違いもあるので、それも極少数とみられる。これに関して、全形の判別する破片が少ないため、約 50% 残存率の 278 が最大である。形状は桟が左にくる右桟瓦である。いぶしが強く、黒色の表面をしている。

袖瓦　屋根の切妻面に使用されるのが袖瓦で、この種の瓦により、切妻もしくは入母屋造り構造が想定される。279 は左袖瓦で下端に 4cm 四方の欠き取り部分と向かって左側縁に長さ 8.4cm の袖垂が貼付けられている。全体に明瞭な燻しがかかっており桟瓦に伴うものと考えられる。

面戸瓦　建物の棟に使用される面戸瓦は 32 点出土している。さほど大きくないためか破損が少なく、全形の判別するものが多くを占める。そのため以下のように 4 種類に分類することができた。A 類：折り曲げ成形で下端全体

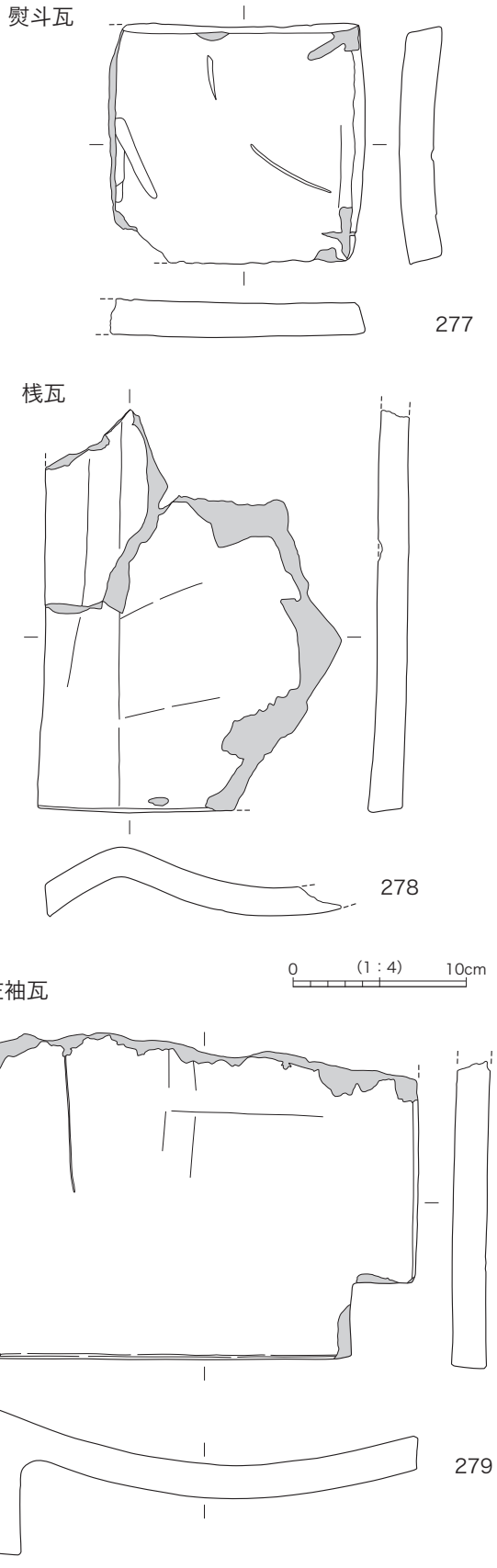


図55　SU10A区出土熨斗瓦･桟瓦実測図(1:4)

を曲線的に面取りするもの（280)、B 類：折り曲げ成形で下端両端を直線的に面取りするもの (281・282)、C 類：折り曲げ成形で下端を曲線的に面取りするが A 類のように全体に及ばないもの（283)、D 類：平らな粘土板の縁全てを面取りし下端は全体に曲線になるもの（284・285)、
である。折り曲げ成形である A ～ C 類は凹面側に曲げ皺が残るものもあるが、281・283 は板状工具でナデ消している。C 類（283）は少数で、桟瓦に伴うものであろうか。また D 類（284・285）は下端のカーブが平瓦凹面に対応するとみられる。用途に合わせた形状になっているものと考えられる。

輪違　型で成形し四周を面取りする。286 は凹面に糸切り痕､287 は凹面に疎らなヘラミガキ痕がある。

棟込瓦（差込瓦）　小菊丸とも呼称される、大棟・降棟を飾る道具瓦である。菊花文のある文様面径は

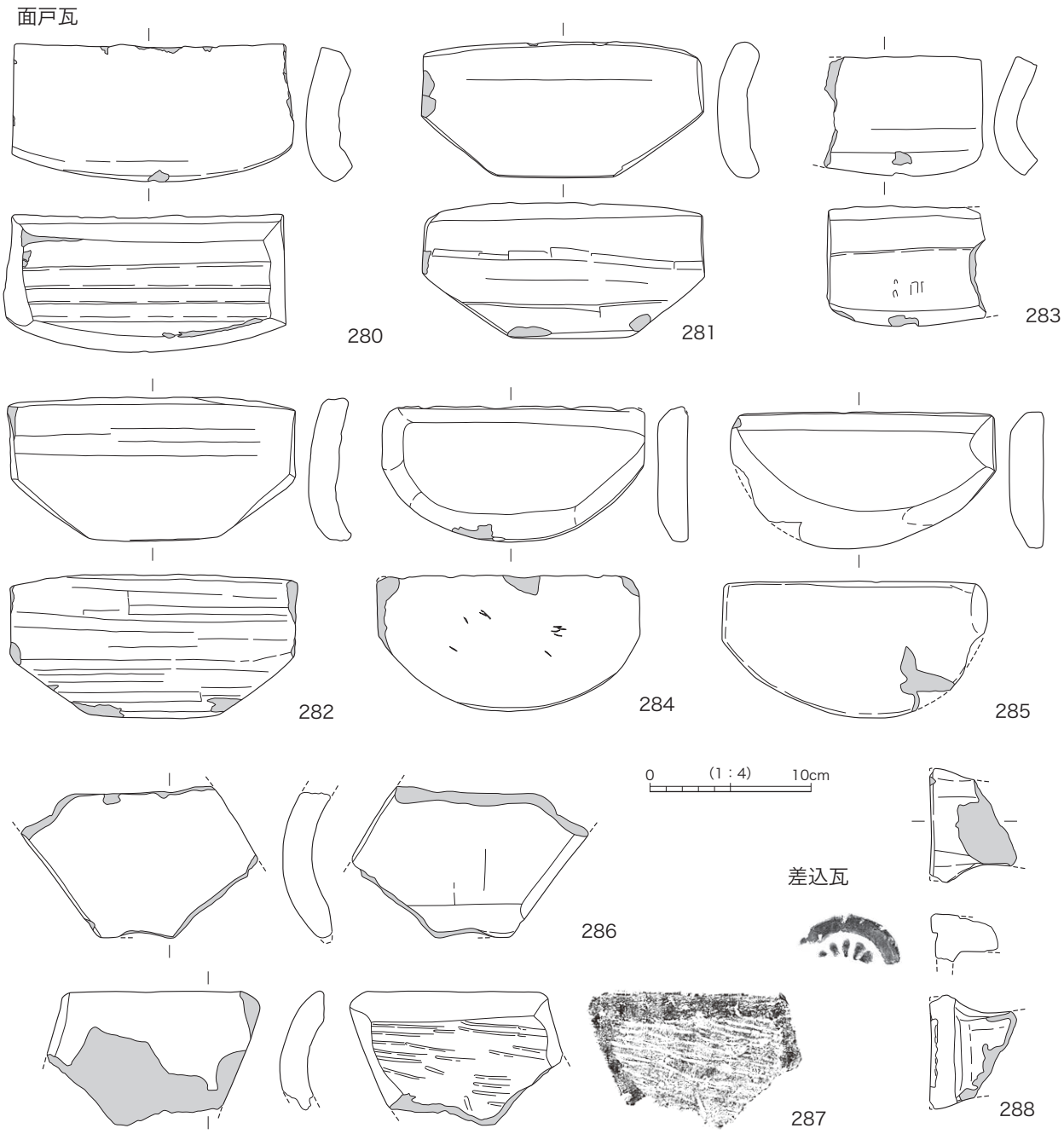


図56　面戸瓦･差込瓦実測図(1:4)

推定 7.2cm で、後方へ差し込み部が 4cm 以上延びる。いぶしが強く、やや光沢のある黒色をしている。

飾瓦・鬼瓦　以上に提示した瓦に対して特殊な形状の瓦片を集成した。289・290 は板状で木瓜形の輪郭の中が凹み文様が入るとみられる。289 の凹み中には釘孔がある。また裏面は外縁にむかって斜めに薄くなる。焼成はやや軟質で軒丸・軒平瓦に近い。これだけの資料から全形を復元するのは困難ではあるが、一案として露盤の一部である可能性が考えられる（図 71、屋根頂部の瓦参照）。板状の裏面端部が面取りされ、ここで組み合う構造になる。問題は中の文様であるが、宝輪（294）は厚さが近いことや、例えば、豊橋市浄慈院地蔵堂の享保 2 年（1717）銘の露盤では 3 つの宝輪が並ぶ文様であることから、候補に挙げられよう。

291 ～ 293 も飾瓦の縁である。板状で断面方形（厚さ 3.2cm）の外縁に対し文様面の厚さは 2.0cm である。主題となる文様は不明であるが、草の葉状の刻線がほどこされている。焼成は軒丸・軒平瓦に似てやや軟質である。先に挙げた 294 の宝輪文はこれらとも厚さが近いので、文様の一部として候補に挙げられる。

294 は範囲確認調査 T.T.006 で出土した飾瓦の主題となる文様部分である。16 角の宝輪文である。通常みられる宝輪は 8 角がほとんどであるため、かなり大掛かりな図案といえる。厚さ 1.7cm の板状の本体にさらに厚さ 0.8cm の粘土板を貼り付け、割り付けに基づきヘラで削り出して施文し、最後に中心に円形の粘土を貼付けている。そのためヘラの切り込み痕が各所にみられる他、割り付けの線も一部残っている。文様の周囲は棒で突いた小孔が多数あり、これも施文の一部と考えられる。

295 ～ 303 は鬼瓦の破片で、多くはその髭の表現である。ただしそれにもいくつか種類があり、298 のような線刻を伴う巻き髭表現に対し、300 ～ 302 は比較的図案化が進んだものといえる。焼成もこれに対応しており、295 ～ 299 は硬質で、202 ～ 303 は軟質である。

304 も飾瓦の頂部。305・306 は飾瓦の外縁とみられ、291 と比較して細身で高い外縁とほぼ同じ厚さの板状本体に 303 はヘラで施文がある。全体像は不明である。308 は鬼瓦の裏面に付く、把手形の取り付け部とみられる。全体に指オサエ・ナデ痕跡がみえる。中世の鬼瓦は本体にあけた孔に桟をつける方式であるが、近世以降このような把手形に変わる。309 も同様の形状であるが、焼成が異なり、五徳の脚部かもしれない。310 は鬼瓦の頂部か。鰭状の飾りである。

文字瓦　311 は文字瓦である。鬼瓦の一部のようであるが、どのあたりに取り付くものか不明である。形状は 308 同様に把手形であるが、滑らかにな面取がなされていて断面は角棒状である。その一面に焼成前のヘラ刻書で「　月吉日　吉　」と記されている。上半分は吉日にちなんだ瓦製作日付で、下半分は地名と職人名となろう。「吉」とあるので「吉田」である可能性が高い。

当該資料に関連して記銘のある瓦を紹介すると、吉田城址本丸出土の鬼瓦には「　…年…月吉日　瓦町　細井六之助」が、同二ノ丸（豊城中学校地点）出土の鬼瓦には「宝永五年　子ノ六月」とあり（豊橋市教育委員会 1994）、後者はまさに晴雲寺創建期と重なっている。また第 1 章でも紹介した、市内浄慈院地蔵堂露盤瓦にある「細井新兵衛」は、享保 12 年（1717）とあるのでほぼ同時期の瓦師である。このように瓦師「細井」家が 18 世紀以降、吉田における城郭や寺院の瓦生産で重要な位置を占めていたことが知られる。ちなみに当家は、元禄 11 年（1698）銘の鬼瓦が最古となる、岡崎城代々の御用瓦師「細井新助」（岡崎市教育委員会 1982）とも関わりがあるとみられる。

飾瓦

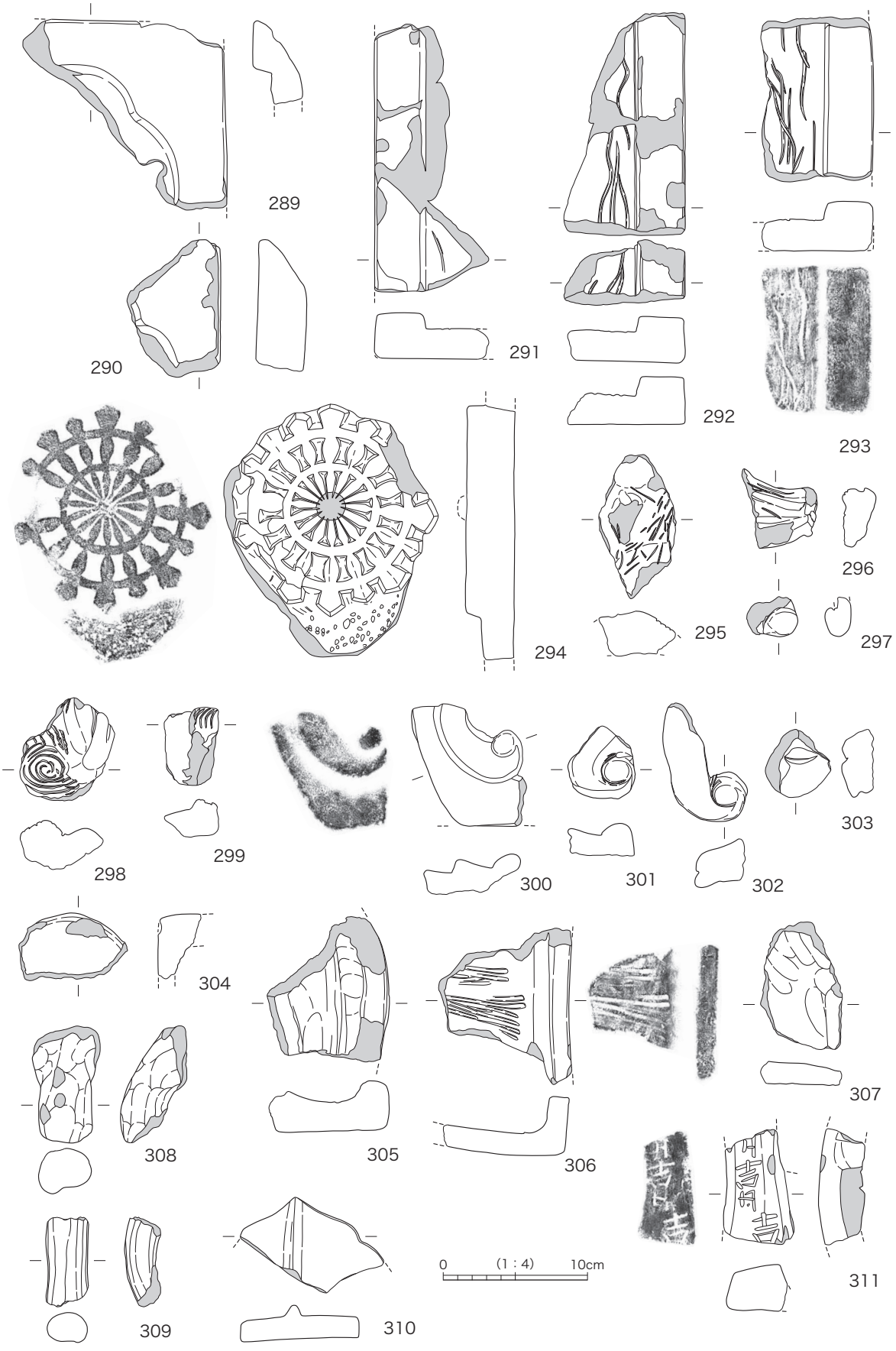


図 57　SU10A 区出土飾瓦・鬼瓦・文字瓦実測図（1:4）

第 4 章 陶器・瓦の胎土分析

第 1 節　目的と試料の特徴

分析の目的　本章では、晴雲寺址出土の瓦・陶器・土器から採取した試料の、重鉱物組成比較を中心とする胎土分析結果を報告する。試料採取は永井が、分析は（株）第四紀地質研究所が実施した。試料は、晴雲寺址出土の瓦 5 点、常滑赤物甕 6 点、土製竈 1 点、土師器鍋 1 点を抽出し、また比較試料として豊橋市石巻本町所在の東屋敷遺跡で出土した古墳時代と推定される土師器片 5 点も提出した（表 1）。

分析の目的は、地域外からの搬入と考えられる常滑赤物甕と、地元で生産されたと考えられる瓦と土師器それぞれの胎土組成の比較である。特に前者は知多半島の土を使用しているので、これと東三河地域との原料土との差異が、数値的にあわれることが期待された。

本章は、井上巌氏（第 4 紀地質研究所）が提出した分析結果報告を、永井が加筆、編集したものである。したがって記載内容については永井の文責であることを断っておく。

表1 分析試料一覧

No	器種名	遺跡名
K-1	平瓦A	晴雲寺址
K-2	平瓦A	晴雲寺址
K-3	平瓦B	晴雲寺址
K-4	平瓦B	晴雲寺址
K-5	桟瓦	晴雲寺址
K-6	赤物甕(E-167)	晴雲寺址
K-7	赤物甕(E-168)	晴雲寺址
K-8	赤物甕(E-169)	晴雲寺址
K-9	赤物甕(E-170)	晴雲寺址
K-10	土師鍋(E-129)	晴雲寺址
K-11	土製竈(E-137)	晴雲寺址
K-12	赤物甕(E-152)	晴雲寺址
K-13	赤物甕(E-166)	晴雲寺址
Hi-1	土師器	東屋敷遺跡
Hi-2	土師器	東屋敷遺跡
Hi-3	土師器	東屋敷遺跡
Hi-4	土師器	東屋敷遺跡
Hi-5	土師器	東屋敷遺跡

試料について　前掲の試料のうち、瓦は肉眼観察で 3 タイプに分かれる。すなわち平瓦 A はいぶしがかかり軟質な焼成ものが 2 点、平瓦 B は一部いぶしで光沢のある硬質な焼成のもの 2 点、そして硬質な焼成の桟瓦 1 点である。常滑赤物甕は個体識別の可能な 6 点から試料を採取した。土師器・土製品では、前者の試料に内耳鍋（E-129）1 点、後者は土製竈（E-137）を選択した。土師器小皿は極小片であることが多いのと、時期が中世に遡る可能性もあるため、今回は試料に加えていない。以上の中で、観察によって経験的に他地域のものと判じているのが赤物甕 6 点で、瓦と土製竈については、一部西三河地域からの搬入も想定されたが、吉田（豊橋）を製作地と示すと思われる文字瓦（E-311）があることから、在地産の可能性が高いと考えた。また、土師器内耳鍋はやや赤みのある褐色を呈していることもあり、ほぼ在地産と想定した。

第 2 節　分析結果報告

（1）分析方法

試料　分析に供した試料（表 1）のうち、X 線回折試験に供する遺物試料は洗浄・乾燥後、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄・乾燥後、試料表面をコーテングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し分析した。

X 線回折試験　土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定は X 線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX-8020 X 線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。【Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度：0.02° 計数時間：0.5 秒。】

化学分析　元素分析は日本電子製 5300LV 型電子顕微鏡に 2001 型エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧：15kV、分析法：スプリント法、分析倍率：200 倍、分析有効時間：100 秒、分析指定元素 10 元素で行った。

X 線回折試験結果　実験結果は表 2 に示す通りである。表 2 右側には X 線回折試験に基づく粘土鉱物

及び造岩鉱物の組織が示してあり、 左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

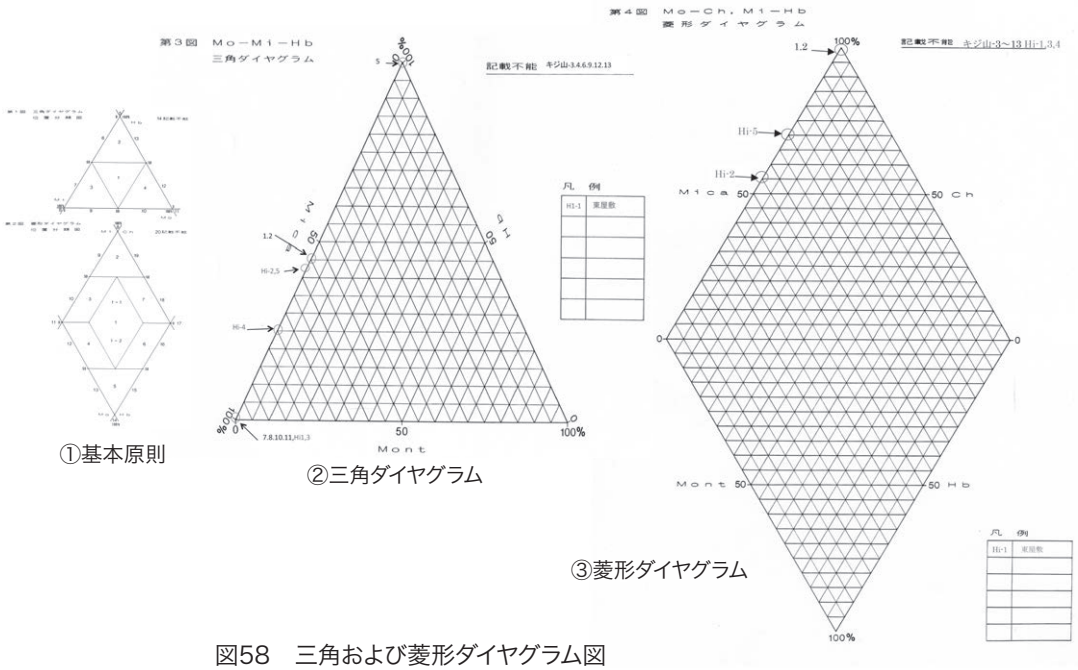
（2）組成分類

Mont-Mica-Hb 三角ダイヤグラム　図 58 中に示すように三角ダイヤグラムを 1 ～ 13 に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont、Mica、Hb の三成分の含ま　れない胎土は記載不能として 14 にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（%）で表示する。モンモリロナイトは Mont/Mont+Mica+Hb*l00 でパーセントとして求め、同様に Mica,Hb も計算し､三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の 1 ～ 4 は Mont,Mica,Hb の 3 成分を含み、各辺は 2 成分、各頂点は 1 成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は図 58 左上に示す通りである。

Mont ー Ch, Mica ー Hb 菱形ダイヤグラム　図 58 右に示すように菱形ダイヤグラムを 1 ～ 19 に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は 20 として別に検討した。モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、a) 3 成分以上含まれない、b) Mont,Ch の 2 成分が含まれない、c) Mica,Hb の 2 成分が含まれない、の 3 例がある。菱形ダイヤグラムは Mont-Ch, Mica-Hb の組合せを表示するものである。Mont-Ch,Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100 と計算し、 Mica,Hb,Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある 1 ～ 7 は Mont,Mica,Hb,Ch の 4 成分を含み、各辺は Mont,Mica,Hb,Ch のうち 3 成分、各頂点は 2 成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は図 58 左下に示すとおりである。

3) 化学分析結果　化学分析結果は酸化物として、ノーマル法（10 元素全体で 100％になる）で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて SiO_2-AI_2O_3 図、FE_2O_3-TiO_2 図、K_2O-CaO 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。



①基本原則　②三角ダイヤグラム　③菱形ダイヤグラム

図58　三角および菱形ダイヤグラム図

（3）X線回折試験結果

タイプ分類　表 2 にはキジ山古墳群遺跡より出土した土器・瓦と東屋敷遺跡出土土器の X 線回折試験結果が記載してある。遺跡の出土土器と瓦は表 4 に示すように、A ～ E の 5 タイプが検出された。

A：Hb 1 成分を含み、Mont,Mica,Ch の 3 成分に欠ける。

B：Mica,Hb,Ch の 3 成分含み、Mont の 1 成分にかける。

C：Mica,Hb の 2 成分を含み、Mont,Ch の 2 成分に欠ける。

D：Mica 1 成分を含み、Mont,HB,Ch の 3 成分に欠ける。

E：Mont,Mica,Hb,Ch の 4 成分にかける。

最も多いタイプは D と E タイプの各 6 個、ついで C タイプの 3 個、B タイプの 2 個、A タイプの 1 個である。

石英 (Qt) ー斜長石 (Pl) の相関について　土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有していると言える。図 59(1) に示すように Qt の強度が小の領域から大の領域にかけて 3 グループに分類された。

Qt1：Qt が 2550 ～ 4900、Pl が 90 ～ 280 の領域に分布する。焼成ランクは高～中温領域にあり、晴雲寺址の甕と瓦が共存する。

Qt2：Qt が 4000 ～ 5000、Pl が 380 ～ 600 の領域に分布する。焼成ランクは低温領域にあり、晴雲寺址の甕と瓦が共存する。

Qt3：Qt が 1850 ～ 3400、Pl が 300 ～ 500 の領域に分布する。焼成ランクは中～低温領域にあり、東屋敷遺跡の甕が集中する。

（4）化学分析結果

表 3 には晴雲寺址より出土した土器・瓦と東屋敷遺跡出土土器の化学試験結果が記載してある。分析結果に基づいて図 59(2)SiO_2-Al_2O_3 図、同 (3)Fe_2O_3-TiO_2 図、同 (4)K_2O-CaO 図を作成した。

SiO2-Al2O3 の相関について　図 59(2) を基準として、晴雲寺址より出土した土器・瓦と東屋敷遺跡

表2　胎土性状表

試料	種別	遺跡	タイプ	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物												
No			分類	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mull	K-fels	Hal	Kaol	Au
K-1	平瓦A	晴雲寺址	C	8	8		81	67			3079	93			159			
K-2	平瓦A	晴雲寺址	C	8	8		66	54			4696	435						
K-3	平瓦B	晴雲寺址	E	14	20						4847	210						
K-4	平瓦B	晴雲寺址	E	14	20						4577	228						
K-5	桟瓦	晴雲寺址	A	5	20			167			2593	190			169			
K-6	赤物甕(E-167)	晴雲寺址	E	14	20						4286	125						
K-7	赤物甕(E-168)	晴雲寺址	D	8	20		83				4174	473			347			
K-8	赤物甕(E-169)	晴雲寺址	D	8	20		84				4114	391						
K-9	赤物甕(E-170)	晴雲寺址	E	14	20						4651	250	113					
K-10	土師鍋(E-129)	晴雲寺址	D	8	20		109				2905	257						
K-11	土製竈(E-137)	晴雲寺址	D	8	20		84				4276	583			331			
K-12	赤物甕(E-152)	晴雲寺址	E	14	20						3540	100	111	66				
K-13	赤物甕(E-166)	晴雲寺址	E	14	20						3386	275						
Hi-1	土師器	東屋敷遺跡	D	8	20		97				3089	471						
Hi-2	土師器	東屋敷遺跡	B	7	9		184	141	175		1868	327						
Hi-3	土師器	東屋敷遺跡	D	8	20		76				3328	477			197			
Hi-4	土師器	東屋敷遺跡	C	8	8		259	90			2873	318						
Hi-5	土師器	東屋敷遺跡	B	7	9		164	126	309		2189	441						

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb ：角閃石 Ch：緑泥石（Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射）　Qt ：石英 Pl：斜長石　Crist：クリストバライト
Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石　Halloy ：ハロイサイト Kaol：カオリナイト　Pyrite:黄鉄鉱 Au：普通輝石 Py:紫蘇輝石

出土土器はⅠ～Ⅱの 2 タイプと“その他”に分類した。

Ⅰタイプ：SiO_2 が 50 ～ 60%、Al_2O_3 が 20 ～ 26%の領域に分布する。晴雲寺址より出土した土器・瓦と東屋敷遺跡出土土器が共存する。

Ⅱタイプ：SiO_2 が 62 ～ 67%、Al_2O_3 が 21 ～ 24%の領域に分布する。甕が集中し、瓦と東屋敷遺跡出土土器が混在する。

”その他“：K-4 の瓦は SiO_2 が 71.91%、Al_2O_3 が 20.34%でどの領域にも属さず、異質である。東屋敷遺跡の Hi-3 の土器は SiO_2 が 56.48%、Al_2O_3 が 30.74%でどの領域にも属さず、異質である。

Fe_2O_3-TiO_2 の相関について　図 59(3) に示すように、Fe_2O_3 の領域によって 3 グループと“その他”に分類された。

Fe_2O_3-1：Fe_2O_3 が 5.5 ～ 7.0%、TiO_2 が 1.5 ～ 2.5%の領域に分布する。

Fe_2O_3-2：Fe_2O_3 が 5.5 ～ 9.0%、TiO_2 が 0.4 ～ 1.6%の領域に分布する。

Fe_2O_3-3：Fe_2O_3 が 9.5 ～ 15.0%、TiO_2 が 1.0 ～ 2.5%の領域に分布する。

”その他“：K-4 の瓦は Fe_2O_3 が 3.22%、TiO_2 が 1.57%でどの領域にも属さず、異質である。東屋敷遺跡の Hi-1 の土器は Fe_2O_3 が 17.31%、TiO_2 が 3.32%でどの領域にも属さず、異質である。

K_2O-CaO の相関について　図 59(4) に示すように K_2O の値によって 4 グループと“その他”に分類した。

K_2O-1：K_2O が 1.8 ～ 2.6%、CaO が 0.3 ～ 0.5%の領域に分布する。瓦が集中する。

K_2O-2：K_2O が 3.0 ～ 4.0%、CaO が 0.3 ～ 0.5%の領域に分布する。赤物甕が集中する。

K_2O-3：K_2O が 2.5 ～ 3.5%、CaO が 0.1 ～ 0.3%の領域に分布する。赤物甕が集中する。東屋敷遺跡土器が混在する

K_2O-4：K_2O が 2.5 ～ 3.5%、CaO が 0.6 ～ 0.9%の領域に分布する。瓦・土師器鍋と東屋敷遺跡の土器が共存する。

”その他“：東屋敷遺跡の Hi-1 の土器は K2O が 0.99%、CaO が 0.24%、Hi-2 の土器は K_2O が 2.35%、CaO が 1.00%でどの領域にも属さず、異質である。

表3 化学分析表

試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	器種名	遺跡名
K-1	0.20	0.00	25.92	57.59	2.99	0.65	1.87	0.00	9.96	0.82	100.00	平瓦A	晴雲寺址
K-2	1.27	0.00	21.84	65.83	2.59	0.35	1.76	0.06	6.30	0.00	100.00	平瓦A	晴雲寺址
K-3	0.77	0.00	22.44	66.12	2.44	0.36	1.95	0.00	5.92	0.00	100.00	平瓦B	晴雲寺址
K-4	0.64	0.00	20.34	71.91	1.89	0.42	1.57	0.00	3.22	0.00	99.99	平瓦B	晴雲寺址
K-5	0.99	0.92	21.80	53.32	3.47	1.06	2.46	0.66	14.82	0.51	100.01	桟瓦	晴雲寺址
K-6	2.01	0.00	22.37	65.41	3.32	0.21	1.01	0.00	5.66	0.00	99.99	赤物甕(E-167)	晴雲寺址
K-7	0.96	0.00	22.25	64.48	3.73	0.49	1.00	0.32	6.73	0.03	99.99	赤物甕(E-168)	晴雲寺址
K-8	0.93	0.00	22.42	63.54	3.86	0.36	0.90	0.29	7.08	0.64	100.02	赤物甕(E-169)	晴雲寺址
K-9	0.88	0.00	23.92	62.53	3.99	0.43	1.53	0.23	6.49	0.00	100.00	赤物甕(E-170)	晴雲寺址
K-10	1.18	0.00	24.24	56.94	2.83	0.67	1.10	0.51	12.21	0.31	99.99	土師鍋(E-129)	晴雲寺址
K-11	1.13	0.00	20.33	58.92	3.18	0.49	1.43	0.41	14.10	0.00	99.99	土製竈(E-137)	晴雲寺址
K-12	1.20	0.00	21.79	65.96	3.03	0.37	1.04	0.50	6.10	0.02	100.01	赤物甕(E-152)	晴雲寺址
K-13	0.83	0.00	21.76	65.09	2.52	0.14	0.49	0.47	8.70	0.00	100.00	赤物甕(E-166)	晴雲寺址
Hi-1	1.88	0.00	21.27	54.85	0.99	0.24	3.32	0.13	17.31	0.00	99.99	土師器	東屋敷遺跡
Hi-2	1.15	0.00	25.12	55.01	2.35	1.00	2.02	0.26	12.96	0.13	100.00	土師器	東屋敷遺跡
Hi-3	0.73	0.00	30.74	56.48	2.83	0.25	2.20	0.00	6.77	0.00	100.00	土師器	東屋敷遺跡
Hi-4	0.72	0.00	24.44	61.62	3.02	0.80	1.67	0.90	6.63	0.19	99.99	土師器	東屋敷遺跡
Hi-5	0.70	0.66	23.93	56.77	3.41	0.71	2.80	0.00	10.71	0.31	100.00	土師器	東屋敷遺跡

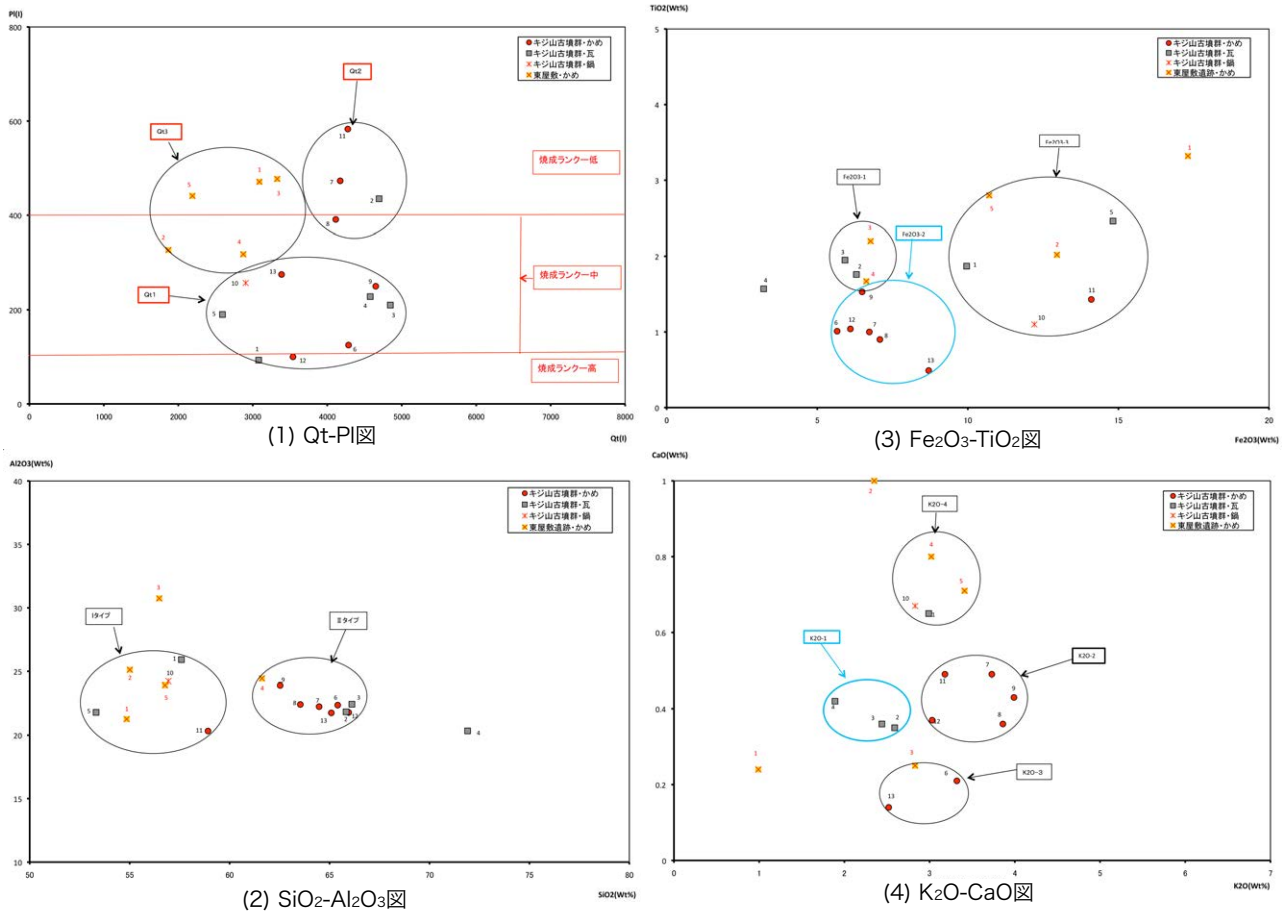


図59　化学分析結果図

（5）分析のまとめ

X線回折試験と蛍光X線分析の結果に基づいて、晴雲寺址より出土した土器・瓦と東屋敷遺跡より出土した土器を表４・５に示すように分類した。

(1) 晴雲寺址と東屋敷遺跡より出土した土器と瓦は第３表タイプ分類表に示すように、A～E の５タイプに分類された。最も多いタイプは D と E タイプの各６点、ついで C タイプの３点、B タイプの２点、A タイプの１点である。

(2) 第５図 Qt-P1 図に示すように、Qt の強度が小さい領域～大きい領域にかけて３グループに分類された。Qt1 は焼成ランクが中と高く、Qt2 は焼成ランクが低く、Qt3 は焼成ランクが中～低の領域にあり、Qt1 と Qt2 の領域には晴雲寺址より出土した土器と瓦、Qt3 領域には東屋敷遺跡より出土した土器が各々集中し、焼成環境が異なることがわかる。

(3) 土器と瓦のX線回折試験と化学分析の結果に基づいて表５に提示する分類ができた。すなわち、晴雲寺址出土土器・瓦と東屋敷遺跡出土土器は 11 タイプに分類された。そして、晴雲寺址出土土器・瓦と東屋敷遺跡出土土器は組成が異なり分別される。したがって、晴雲寺址出土土器・瓦と東屋敷遺跡より出土した土

表4 タイプ分類表

分類	No	器種名	遺跡名
A	K-5	桟瓦	晴雲寺址
B	Hi-2	土師器	東屋敷遺跡
	Hi-5	土師器	東屋敷遺跡
C	K-1	平瓦A	晴雲寺址
	K-2	平瓦A	晴雲寺址
	Hi-4	土師器	東屋敷遺跡
D	K-7	赤物甕(E-168)	晴雲寺址
	K-8	赤物甕(E-169)	晴雲寺址
	K-10	土師鍋(E-129)	晴雲寺址
	K-11	土製竈(E-137)	晴雲寺址
	Hi-1	土師器	東屋敷遺跡
	Hi-3	土師器	東屋敷遺跡
E	K-3	平瓦B	晴雲寺址
	K-4	平瓦B	晴雲寺址
	K-6	赤物甕(E-167)	晴雲寺址
	K-9	赤物甕(E-170)	晴雲寺址
	K-12	赤物甕(E-152)	晴雲寺址
	K-13	赤物甕(E-166)	晴雲寺址

器は異質であり、関連性は乏しい。

以上、主として晴雲寺址と東屋敷遺跡との間で比較をこない、その差異について言及した。最後に当初の分析目的に対する成果についてまとめておく（図 60）。

1 点目は、想定どおり赤物甕と瓦・土師器は異なる胎土組成をみせたことである。

2 点目は、赤物甕で 2 つの胎土組成の特徴があったことである。主体となるのは E-170 を含む一群で、さまざまな形態の甕が同一分類内にある。それに対して、若干器高の低い以外に口縁部形状や成形痕に大差はない甕（E-168）は少なくとも原料の土に違いを内包していることが判明した。これは後述する瓦とも同じ要因が考えられる。

3 点目は、瓦の胎土組成が 1 つでなく 4 つに分類されたことである。うち、平瓦 A と桟瓦を含む分類には東三河在地産と想定する土師器鍋も含まれており、比較的近い原料粘土の環境であることが示された。しかし一方で、平瓦 3 点がそれぞれ異なる胎土組成を示したことで、製作工程について考えさせる結果となった。可能性としては、原料粘土が想定する範囲よりも広く求められていたことが考えられる。すなわち、複数の粘土採掘地点からの搬入によってはじめて一定量の瓦需要に応えられる生産がおこなわれていたということである。これは赤物甕も同じで、近世的な生産体制の一端を示したものと評価できよう。

表5 組成分類表

試料 No	タイプ 分類	備考 器種名	遺跡名	Fe	Si	Qt
①Qt-1、Ⅰタイプ、Fe-3						
K-1	C	平瓦A	晴雲寺址	3	1	1
K-5	A	桟瓦	晴雲寺址	3	1	1
K-10	D	土師鍋(E-129)	晴雲寺址	3	1	1
②Qt-1、Ⅱタイプ、Fe-1						
K-3	E	平瓦B	晴雲寺址	1	2	1
③Qt-1、Ⅱタイプ、Fe-2						
K-6	E	赤物甕(E-167)	晴雲寺址	2	2	1
K-9	E	赤物甕(E-170)	晴雲寺址	2	2	1
K-12	E	赤物甕(E-152)	晴雲寺址	2	2	1
K-13	E	赤物甕(E-166)	晴雲寺址	2	2	1
④Qt-1、Ⅲタイプ、Fe-4						
K-4	E	平瓦B	晴雲寺址	4	3	1
⑤Qt-2、Ⅰタイプ、Fe-3						
K-11	D	土製竈(E-137)	晴雲寺址	3	1	2
⑥Qt-2、Ⅱタイプ、Fe-1						
K-2	C	平瓦A	晴雲寺址	1	2	2
⑦Qt-2、Ⅱタイプ、Fe-2						
K-7	D	赤物甕(E-168)	晴雲寺址	2	2	2
K-8	D	赤物甕(E-169)	晴雲寺址	2	2	2
⑧Qt-3、Ⅰタイプ、Fe-3						
Hi-2	B	土師器	東屋敷遺跡	3	1	3
Hi-5	B	土師器	東屋敷遺跡	3	1	3
⑨Qt-3、Ⅰタイプ、Fe-5						
Hi-1	D	土師器	東屋敷遺跡	5	1	3
⑩Qt-3、Ⅱタイプ、Fe-1						
Hi-4	C	土師器	東屋敷遺跡	1	2	3
⑪Qt-3、Ⅳタイプ、Fe-1						
Hi-3	D	土師器	東屋敷遺跡	1	4	3

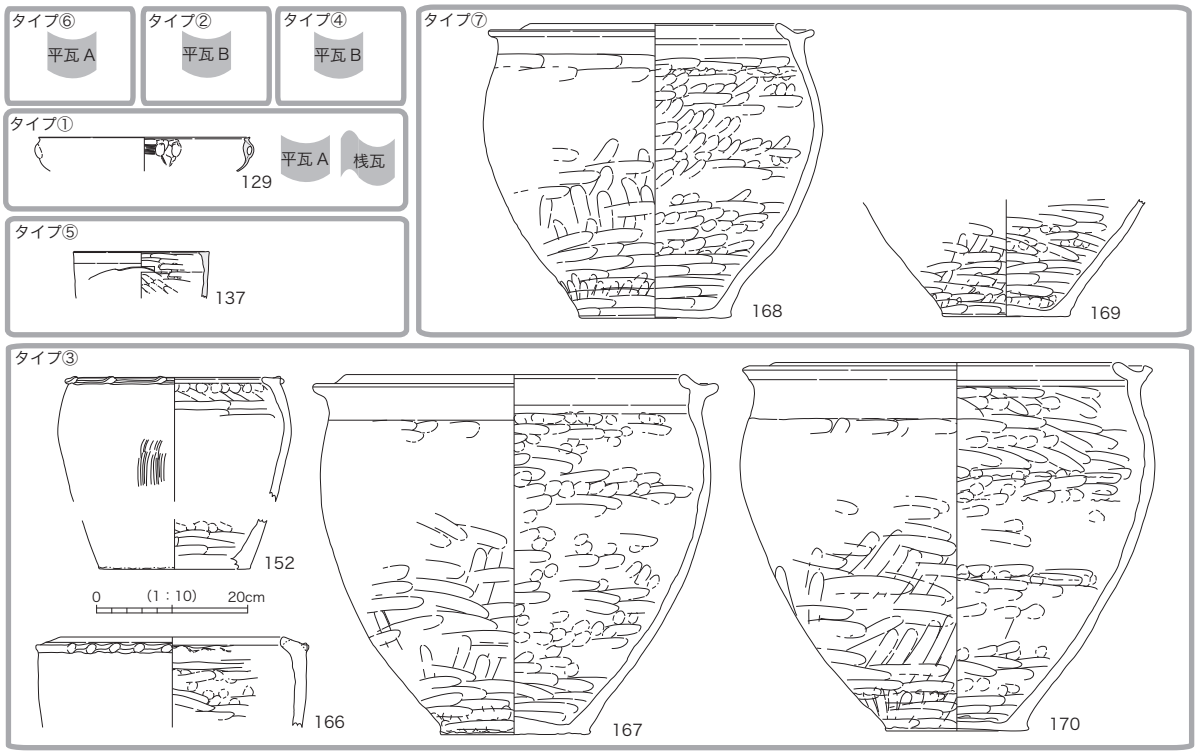


図60　胎土分析結果に基づく遺物の分類

第５章 考察と総括

第１節　キジ山古墳群について

はじめに　本章では２節に分けて、キジ山古墳群と晴雲寺址という全く時代や性格の異なる２つの遺跡が重複した今次発掘調査の成果をもとに考察を深め、調査の総括とする。その目的は各遺跡の地域史的位置づけについて確認するとともに、これらの遺跡を包含する「キジ山」の地について何らかの示唆を得ようとするものである。まず本節ではキジ山古墳群について検討をおこなう。

郷土誌中のキジ山古墳群　本書第１・２章で述べたように、多米地区の北縁となる赤岩山などの丘陵末端部には、キジ山古墳群を初めとする大小の古墳群が点在しており、比較的市街地付近であることから、地域では良く知られた存在であったことが郷土誌によって示されている。ここでは前世紀半ばの景観をよく伝える文を引用する。

朝倉川上流の古墳群

朝倉川の上流には弓張山脈からしぼってくる水をひかえて、広い湿地帯があり、それを水田化して相当の聚落があったものと推定しうる。自然の山々が防壁をましている袋地であり、北と東は山岳南はややひらけて日当りよく、北岸の山裾にある古墳群はおそらく聚落にただちに接していたものであろう。

後に鎌倉街道となる山越えの道は西遠州にいたる近路として今も徒歩旅には利用されている。和名抄の多米郷はこのあたりと考えられている。

この山すそに押し並んだ古墳の数はつい近ごろまでもおびただしく、おそらくその数は百をもって数えられた、完全なものはなかった。

永正ごろ牧野古白が今橋築城にこれら古墳の石材を運搬し、つず（ママ）いて池田・小笠原の大名が城■補強にそれをやったのではないかと思われる。私たちの知るかぎりでも明治初年に龍站寺が土塀をつくるのに運んでいるし、龍站寺の門前の立石は今もそれを語っている。つず（ママ）いて豊橋の市街の発展につれて、庭石その他にぞくぞくと運ばれて、採取しやすい山麓の古墳群は今はほとんど跡形もない。たまさか残ったものも蓋石をとられ半壊の姿である。おおむね山すそに存したが、標高五十米ぐらいの山上にもみうけられた。

すでに古くから盗掘されているので遺物も須恵器・土師器・玉類・馬具等の少量が知られているのみである。

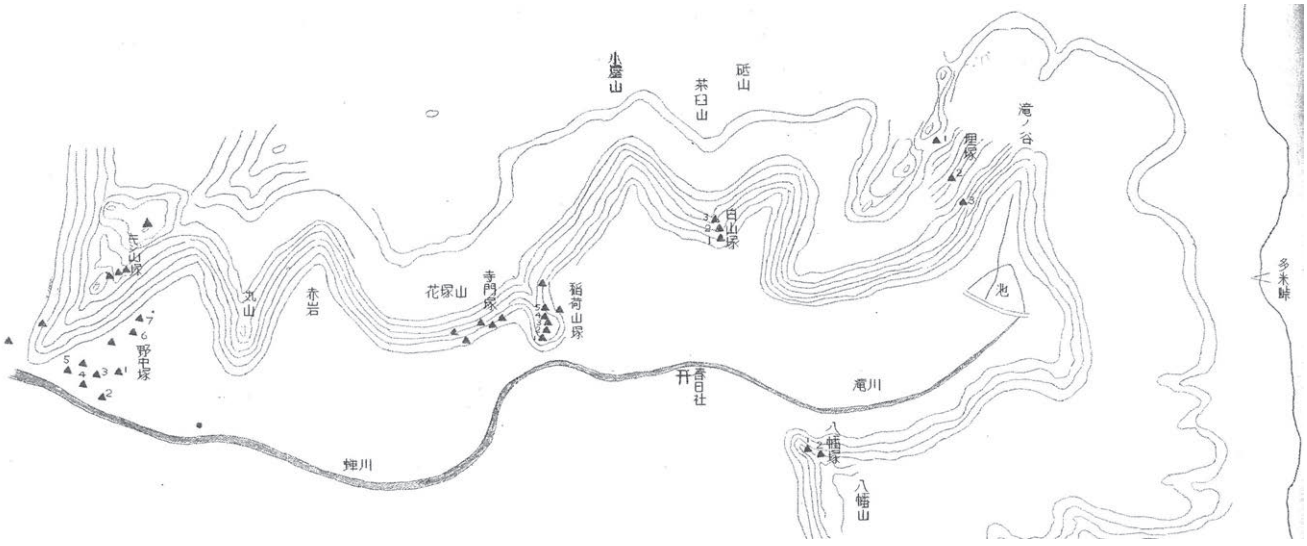


図61　『多米郷土誌』にみる多米地区の古墳分布（多米郷土誌編纂委員会1967より転載）

前方後円墳は一基も発見されておらず、いずれも円墳で横穴式石室を有する後期古墳のみであり、遺物からみてむしろ末期古墳群というべきであろう。

土地の人々も開口したこれらの石室を、古墳としてよりも、伝説のヒアナとして、朝日夕日伝説や徳郷長者伝説として信じている方が強い。

多米古墳群

蝉川橋を渡って豊橋市水道浄水池の小山のすそを迂回すると、多米町赤岩の点々とした部落がある。その道路から四、五十米北に入った山裾に、石材採取のために発掘されて、奥壁のみを残した古墳が二基ばかりある。その一基はかつて豊橋市史談會で発掘調査し、その遺物もずっと保管されていたが、戦争のためあちこち疎開して、ついに全部が失われてしまった。瑪瑙性勾玉、玻璃製小玉、鉄族、須恵器などがあったことをおぼえている。

道路まで戻って少しゆくと、北側の民家の庭に円墳が一基珍しくも完形のまま残っている。道路からわずか七、八米。墳丘上には松の大木が根をはっているが、側面のあちらこちらに藷穴が掘られており、側壁の石組の外側がその藷穴の奥に露出している。石室の向きは南西、この地域では中位の大きさである。この東南にもとはもう一基小規模な円墳があったが、今はまったく削りならされてしまっている。

さらに三、四十米行くと道路の右手（南側）の朝倉川岸に村の共同墓地がある。それが円墳二個からなっており、墓地はその墳丘上に作られている。このあたりはつい最近まで土葬だったので、深く掘り込んだところ、玄室に掘りあたり、直刀二口と須恵器が出土した。

その道路の反対側すなわち北側に二十米ばかり入った畑地に半壊の古墳があり、天井石全部がはねのけられて奥壁のみが半ば露出していた。これは豊城中学校で発掘調査したところ残存した石槨が現れた。この辺りの古墳は羨道部と玄室がはっきりしているのが例であるが、この古墳は舟形で、しかも規模は他にくらべて相当大きなものであった。

遺物は碧玉岩製管玉二個、滑石製丸玉四個、瑠璃小玉二個、刀子数個、鎌一個、須恵器の大形壺一個、蓋杯一組、高台のある杯六個、土師器の甕二個などであったが、高台のある杯の出土から見て、この古墳は年代の新しいものである。

この古墳もやはりすぐ東南に接してもう一基小さい円墳があったが今は跡形もない。

このあたりの古墳群の特徴とするのは、何故かこの二基ずつ古墳が併列していることである。

丸地古城著『豊橋史會叢書第三篇　三河の古墳』 昭和 25 年 12 月 8 日発行　豊橋史談會

以上に記された、石材採取のために天井石を始めとする石室の大部分が失われた古墳群の様子は現状に近いものがあるが、山麓において宅地化が進行し、古墳を含めたかつての景観が大きく変わっていることはあらためて述べるまでもないだろう。本節でも景観に注視しながら考察をおこないたい。

群集墳としてのキジ山古墳群　キジ山古墳群は、今次の範囲確認および本発掘調査で確認されたものを足すことで総数 40 基以上になる。「一定の地域のなかに群在している古墳」を古墳群としその一形態として「一定の限られた地域に密集する多数の小型古墳からなる」ものを群集墳とする定義（田中 2002：「」内引用）によれば、当該古墳群はまさに群集墳と呼ぶにふさわしい状況にある。しかし、2 基ずつ並列する古墳配置に注目している丸地の記述からは、現在の私たちがあたかも 1 つの古墳群として認識しているものとは異なる実態とともに、みかけ上の群集墳という最終形態に達するプロセスについて、限定的ではあるが個々の詳細を検討した発掘調査を機会に何度も考え直すことが必要であることを示唆しているようにみえる。

本節では、今次発掘調査による石室のや墳丘の時間的推移を整理し、その視点を未調査の古墳群に敷衍することによって、キジ山古墳群が群集墳となるに至った経過を探ることとしたい。

石室構造の変遷　KJ10A ～ C および SU10A・B 区を通じて検出されその形状や時期が判明したのが 3 基である。うち最古に位置づけられるのが SU10A 区 082SZ で、石室内出土須恵器から 6 世紀後半である。次いで、KJ10C 区 018SZ で墓道出土資料は 7 世紀末だが石室内からは 6 世紀末～ 7 世紀初頭

の須恵器と耳環がありこれを石室構築年代に採用する。最後は KJ10A 区 001SZ で前庭部下方出土の須恵器杯をもとに 7 世紀末～ 8 世紀初頭と位置づけられる。したがって東三河地域で群集墳最盛期とされる 7 世紀半ばを中心とする時期の石室が含まれないことになるが、逆にみれば当該時期の石室は未調査区域に分布していると考えることができる。なお本節では、古い方から石室 (1) ～ (3) と呼称する。

3 基の石室の形態的差異は明瞭である。もっとも、これらを 1 つの系列として認識するにはいくつかの前提が必要であり、その 1 つに、どのような階層の誰が築いたかという問題が存在する。しかし検出された石室の中で突出して大型のものはなく、また撹乱によって副葬品の大部分が失われている状況どうしを比較するのは無理がある。そこで階層差の視点は一旦不問として年代の明らかな石室の組列を通して、それぞれの時代的特徴を問うことに主眼を置く。

石室平面形は、石室 (1) の長方形から石室 (2) の胴張形へ変化し、同形は石室 (3) にもみられる。これに関連して奥壁の規模をみると、石室 (1) では全形不明ながら 2 つ以上の石を配して奥壁幅を確保するが、石室 (2)・(3) では 1 つの大きな石を据えてそこから胴張形の側壁を展開させている。つまり石室平面に関して面積以外の点では、石室 (1) とそれ以外では断絶が大きい。しかし一方で、玄室と前庭部・墓道を仕切る立柱石や梱石、それに類する置き石があるのは、石室 (1)・(2) であり、石室 (3) には石「室」の出口について特段の構造はみられない。また敷石を施し、その大きさを揃えるために加工をおこなっていたことは 3 基に共通している。

墳丘・周溝と造成面　次に石室の外側に付帯する墳丘や周溝などの施設、さらにそれらの基礎となる造成面を観点に検出遺構を整理する。該当するのは、先に挙げた石室 (1) ～ (3) に加えて、KJ10B 区キジ山 34 号墳の周溝 001SD と造成面（層）、石室と墳丘が削平されたと推定される SU10A 区礫群 085SX の 2 基である。しかし、墳丘はほとんどの検出遺構で削平されていたため、比較材料にならない。

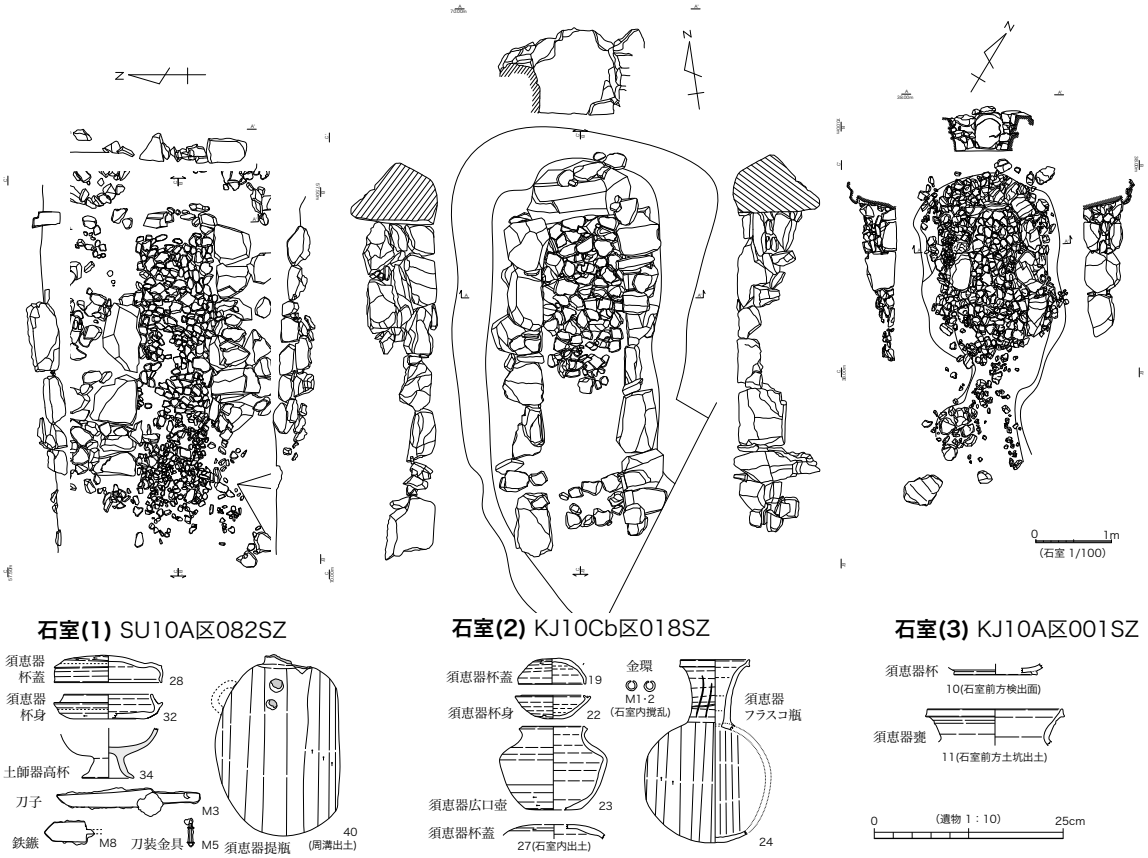


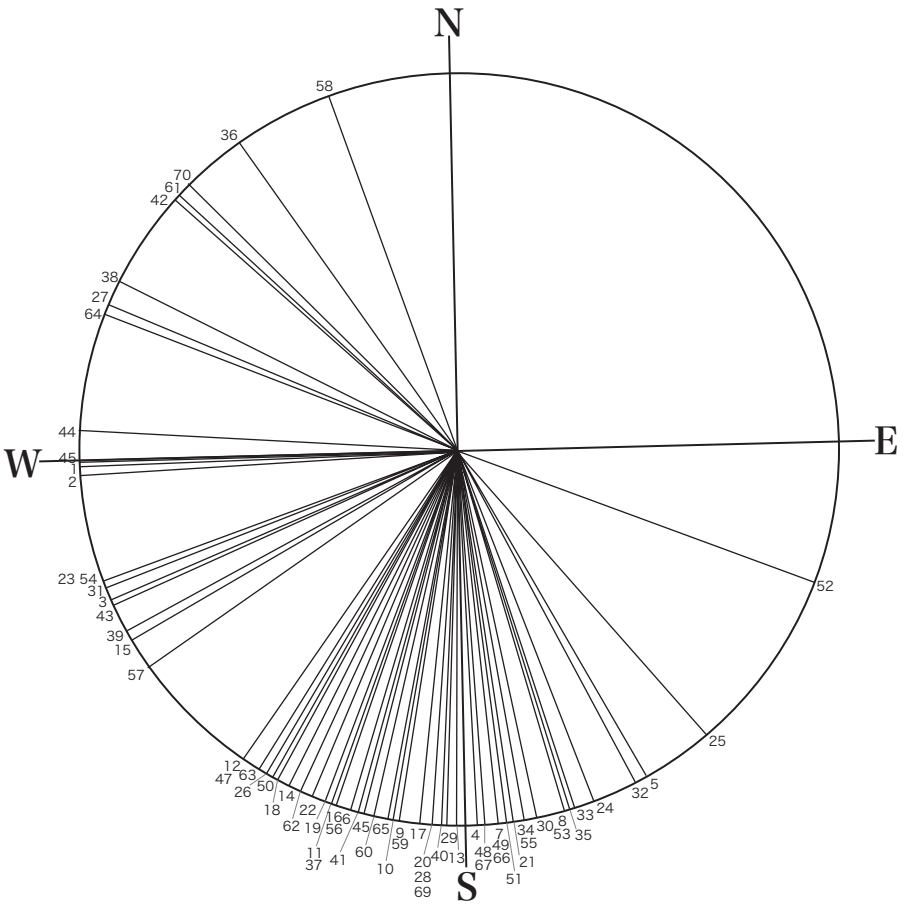
図62　キジ山古墳群の横穴式石室集成

一方、古墳築造前に斜面を切り出し基礎となる平面を施工するのは、SU10A 区の石室 (1) とキジ山 34 号墳でみられる。後者は周溝出土須恵器から 7 世紀代と推定され、石室 (1) の 6 世紀後半からこのような造成が継続していたことがわかる。この造成の特徴は、石室後背に切岸（人工崖面）と約 3 ～ 5m 幅の周溝を伴う平場が発生することである。検出古墳ではいずれも後世の削平などによって切岸上部が滅失しているものの、そうでなければ墳丘とともに明瞭な地形となって残存していただろう。しかしその一方で同じ 7 世紀代の石室 (2) では、より急傾斜地であるにも関わらず築造前造成はほとんど行っておらず、キジ山古墳群で普遍的な築造技術ではなかったことも確かめられよう。

石室の方位軸　検出した石室どうしで全く異なるのが石室の方位軸である。石室 (1) がグリッド西へ開口し、石室 (2) は南へ開口、石室 (3) は南東方向へ開口している。中でも石室 (2) では西へ下る斜面とは関係なく南へ墓道（017SD）を掘り進めていることから、立地する斜面の方向との関係は最優先ではないことが示される。

この石室方位軸に関して赤木（岩原）剛氏が集計した 1990 年代初頭のデータがある。これによると、東三河地域の横穴式石室の方位軸はその時期にによって変化しており、西向きが中心の 6 世紀代から南向きを経て 7 世紀後半の南東方向中心に至る経過が確かめられるという（赤木 1992）。石室 (1) ～ (3) の方位軸動態はこれに符合しており、石室 (2) のようなやや強引な立地も、当該期の地域の中における方位軸の設定が「規範」に近いものであったことによるものと考えることができる。このように石室構造だけでなくその方位軸にも変化があることから、当該古墳群ではその開始から不変の発想で墳墓が築かれ続けてきたのではないと理解できる。

古墳群の地形　そこで方位軸とともに古墳築造の動態を示す事象として、その立地を取り上げてみよう。



1	東山1号墳	36	向坪1号墳
2	旗頭山尾根26号墳	37	向坪2号墳
3	旗頭山尾根30号墳	38	向坪3号墳
4	摩訶戸1号墳	39	吉祥E3号墳
5	船山2号墳	40	馬越長火塚古墳
6	柴崎1号墳	41	宮西古墳
7	東原6号墳	42	日吉神社古墳
8	東原7号墳	43	万福寺古墳
9	炭焼平1号墳	44	行者山古墳
10	炭焼平2号墳	45	北山1号墳
11	炭焼平3号墳	46	北山4号墳
12	炭焼平37号墳	47	北山5号墳
13	炭焼平39号墳	48	四ツ塚1号墳
14	黒塚古墳	49	四ツ塚3号墳
15	念仏塚2号墳	50	城宝寺古墳
16	馬見塚6号墳	51	新美古墳
17	馬乗2号墳	52	篭池古墳
18	天桂院山3号墳	53	瓦場1号墳
19	照山古墳	54	瓦場2号墳
20	小照山古墳	55	がくた4号墳
21	北の谷2号墳	56	がくた5号墳
22	寺西1号墳	57	志知羅2号墳
23	赤ざれ3号墳	58	地部道1号墳
24	赤ざれ4号墳	59	地部道2号墳
25	上向嶋2号墳	60	地部道3号墳
26	北長尾3号墳	61	向山1号墳
27	下降1号墳	62	向山2号墳
28	滝の平A1号墳	63	向山4号墳
29	滝の平B1号墳	64	向山5号墳
30	滝の平B2号墳	65	村松2号墳
31	滝の平B3号墳	66	藤原1号墳
32	滝の平B4号墳	67	藤原2号墳
33	滝の平C1号墳	68	藤原8号墳
34	滝の平C2号墳	69	天神山2号墳
35	狸沢1号墳	70	天神山3号墳

図63　東三河地域の横穴式石室方位軸分布（赤木1992を基に作成）

周辺の古墳群を含めたキジ山古墳群の立地環境をいくつかに区分して、それぞれの時期や特徴を抽出してみる。そのために丘陵だけでなく、市街地化したその麓の地形を復元的に把握する必要がある。そこで簡易的に国土地理院の 25,000 分の 1 地形図を用いて、市街地部分の地形を等高線の傾向から想定してみる。すると 2 つの微地形が確認できる。1 つは「キジ山」西斜面下でみられる細尾根状の微高地である。東小鷹野付近の等高線は丘陵と平行かつ波状に延びており、西へ張り出す部分とその逆があり、それぞれ微高地と現在は埋没した谷地形に対応する。2 つ目は「キジ山」東斜面下の谷地形で、坪尻古墳群から多米西町 2 丁目方向へ延びる細尾根状の微高地との間に、やや明瞭な谷地形を示す等高線がみえる。これに丘陵の尾根筋と、そこから展開する市街地部分に比べて急な斜面とが加わる。そして後者は傾斜の強い標高 60m 以上の高位と緩斜面になる標高 45m 以下の低位をそれぞれ極相として中間的な非標高 45 ～ 60m の中位の 3 つに小区分してみる。結果、大きく 4 つの地形が「キジ山」とその周辺にはみられ、それぞれに古墳が築かれている。

細尾根上の単独墳　まず「キジ山」西方の微高地先端近くでは、6 世紀中葉（陶邑須恵器編年 MT-15 ～ TK-10 段階）に相生塚古墳が単独で築造される。墳長約 16m、西へ開口する全長 7.2m の横穴式石室をもつ古墳で、その石室規模や豊富な副葬品から、地域における小首長の墓と推定されている（現地説明会資料など）。周辺では開墾や市街地化の中で滅失したものもあったようで、例えば『郷土のしおり牛川』には区画整理前の概略図が提示され、相生塚古墳は、朝倉川から分岐した谷地形奥部の微高地端に立地していることがわかる。そして相生塚古墳以外に複数の古墳所在地がマークされているが、これらもまた谷地形に面した微高地端である。微高地端は墓域設定の重要な要素である（小林 1993）。

このような地形と古墳の関係がうかがえるのが、「キジ山」南東における 2 つ目の地形である。この微高地には土師器・須恵器の出土する多米西町遺跡がある他、現況ではほとんど墳丘は見えなくなっているが野中古墳群が立地している。『多米郷土誌』によると、野中 6・7 号墳は谷地形の奥部に位置し南北に長い石室が特徴であったと伝えられ、5 号墳などからは直刀が出土しているという。後述するように谷地形を挟んだ「キジ山」東斜面下位の古墳群は、小規模で時期が新しいと見込まれ、これらと様相が異なる。今後注視しておかなければならない存在である。

丘陵地古墳群の開始　そして、これに続く 6 世紀後葉段階の古墳立地は丘陵上に移っていく。当該期の石室 (1) や稲荷山古墳群は前者が標高 57m、後者が 65m の地点にあり、周辺とは約 20m の高低差がある。ただしこれらの立地で特徴的なのは、石室 (1) は「屏風岩」背後の小尾根上、稲荷山古墳群も小尾根の頂部ということである。高所を求めつつも、比較的築造に有利ともいえる緩斜面を選択しているのが特徴である。

尾根筋と斜面高位の古墳　ところが同じ尾根筋とはいえ、「キジ山」頂部尾根筋に立地する一群はそこからさらに高所（標高約 130m）となる。しかも現地を観察するとその尾根筋の

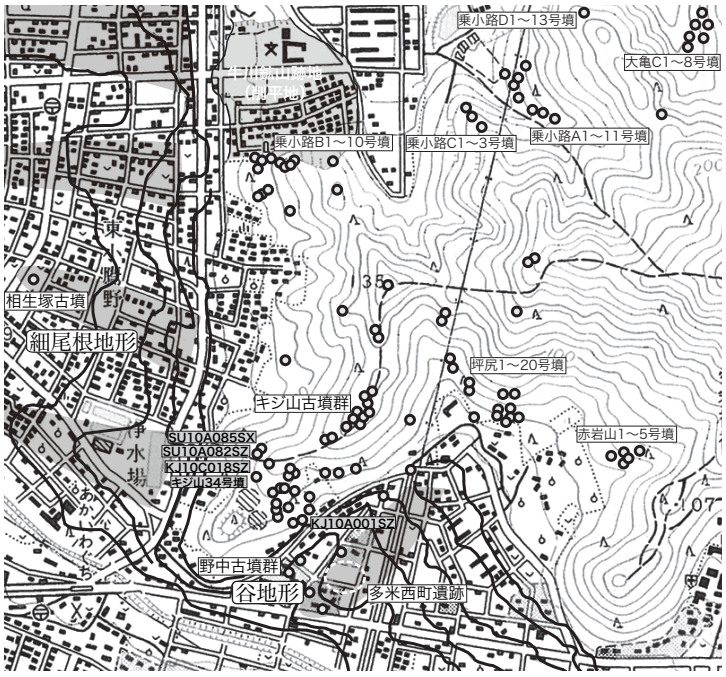


図64　キジ山古墳群の古墳分布と平野の地形（1:25,000）

幅は細く、直径 10m 級の円墳を 1 列で配置すれば、そこから先は斜面に築造せざるを得ない地形である。これに対して、範囲確認調査を実施した標高約 70m 以下の「キジ山」先端部では、例えば 13 号墳と 34 号墳のように 2 基並列が可能な場所もある。にもかかわらず、山頂の立石のある平場付近では古墳が見当たらず、東の急斜面に 1・5・14 ～ 16 号墳が貼り付くような立地をしている。中でも 14 号墳の後背は明瞭な切岸となっており、大規模な造成を伴っていたと考えられる。意図的に古墳築造を避けていた可能性が考えられる。なお尾根筋立地の古墳は 1・13 号墳が撹乱および一部露出する石室の形状から南西方向に開口し、14 号墳が周溝の形状から南～南東方向へ開口していると考えられる。これは西側斜面に立地する KJ10B 区 018SZ と同じで、尾根筋高位に立地する古墳のパターンであろう。ただし、018SZ は削平によるものとしてもあまりに墳丘の目立たない古墳であり、かつ深い墓道と排水溝が付属しており東側斜面の一群とは異質である。時期は近いながらも別集団の墓だったのかもしれない。

斜面中・低位の古墳　次に標高 60m 以下に立地する古墳をみておきたい。範囲確認調査区域では 4・6 ～ 12 号墳と「未確認古墳 B ～ D」（調査時の呼称）、そして KJ10A 区 001SZ が該当する。後の削平も影響して明瞭に墳丘が残存し石室方位軸の推定できる事例は減少するが、とりわけ 8 号墳のような直径約 6m の小規模墳が混在している点に注意したい。当該古墳はすぐ下位の 7 号墳との間でフラスコ瓶が出土しており、7 世紀末近くの築造であると考えられる。つまり、古墳群の築造が進展するに伴い、徐々にその立地が斜面中位から下位へ移行したことが想定されるのである。その端的なものが KJ10A 区 001SZ であり、標高 40m 以下にまで下っている。おそらく奈良時代初頭の墓域は丘陵地末端の緩斜面に中心があると考えてられ、今後火葬墓の所在も含めて墓域を面的に捉えていく必要がある。

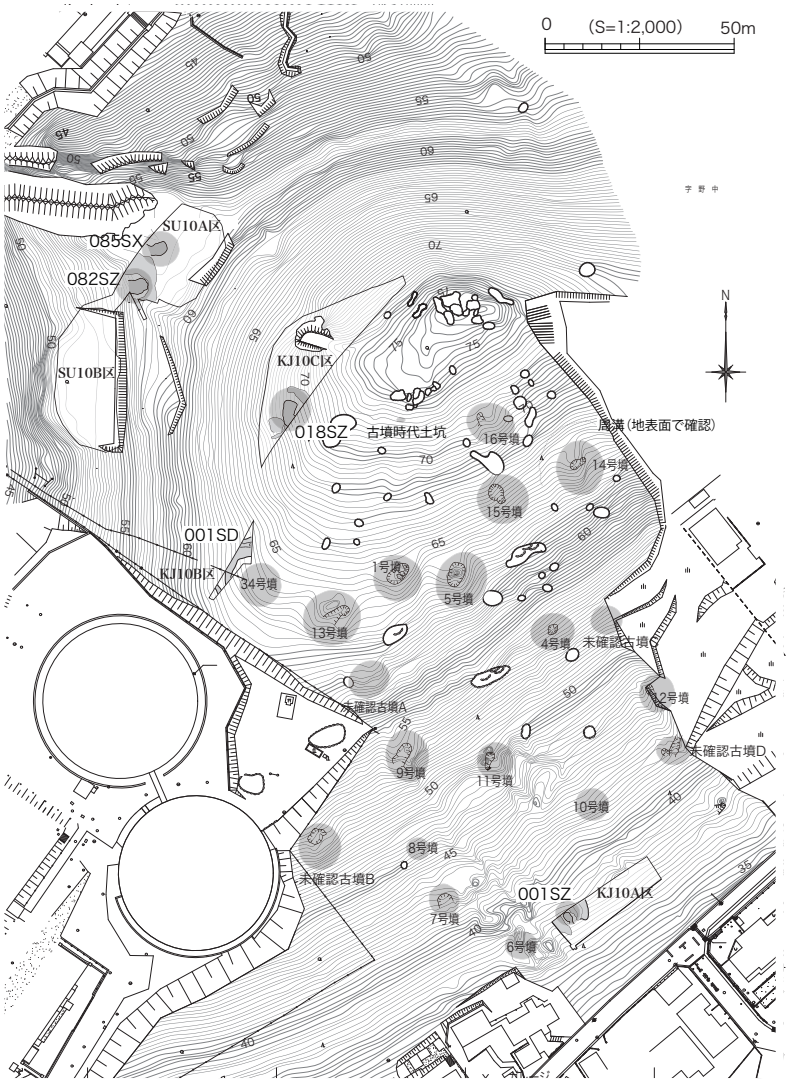
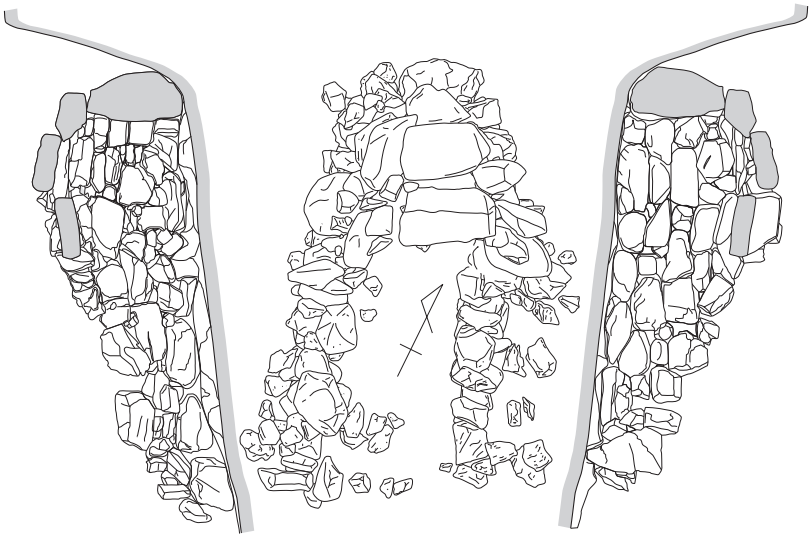


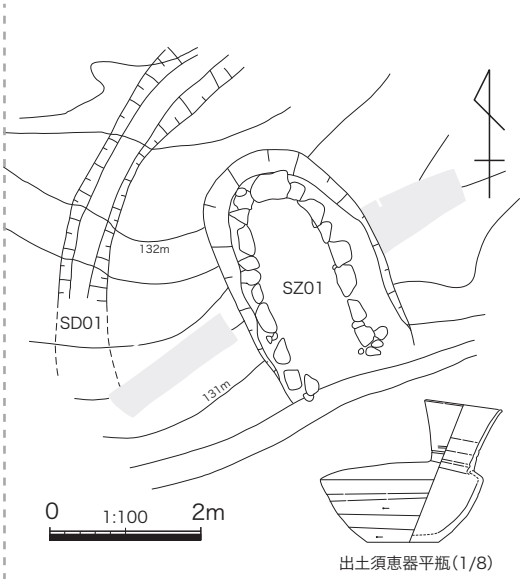
図65　キジ山古墳群古墳位置図（1:2,000）

小型横穴式石室　それでは KJ10A 区 001SZ のような小型横穴式石室は現状でどれだけ把握されているのであろうか。

豊橋市内では、石巻本町・馬越北山 19 号墳がある。全長 1.75m の奥窄まり型で遺物がないが終末期古墳であろう。その報告（豊橋市教育委員会 2002）でも集成されているが、愛知県内では三河地域で同規模の横穴式石室が数例確認されている。また近年の発掘調査では、やや大きめであるが 8 世



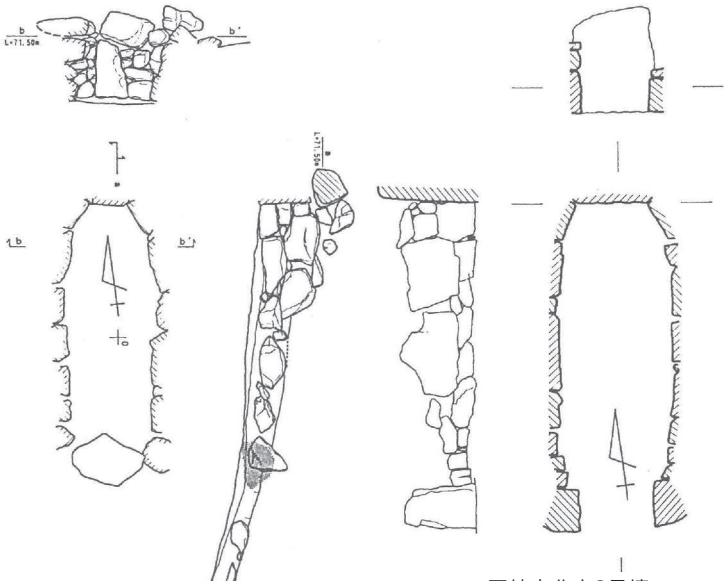
豊田市寄元4号墳



出土須恵器平瓶(1/8)

豊田市寄元4号墳(墳丘と周溝平面図)

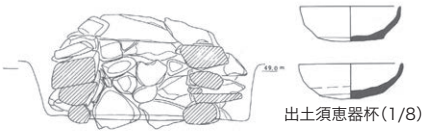
(図版出典)
寄元4号墳:愛知県埋文センター2002より一部改変
馬越北山19号墳:豊橋市教委2002
北山2号墳:豊橋市教委2002(原典,岡崎市史編集委員会1989)
東原5号墳:豊橋市教委2002(原典,三河考古学談話会1994)
東原6号墳:三河考古学談話会1994
平田古墳群53号墳:安濃町遺跡調査会1987



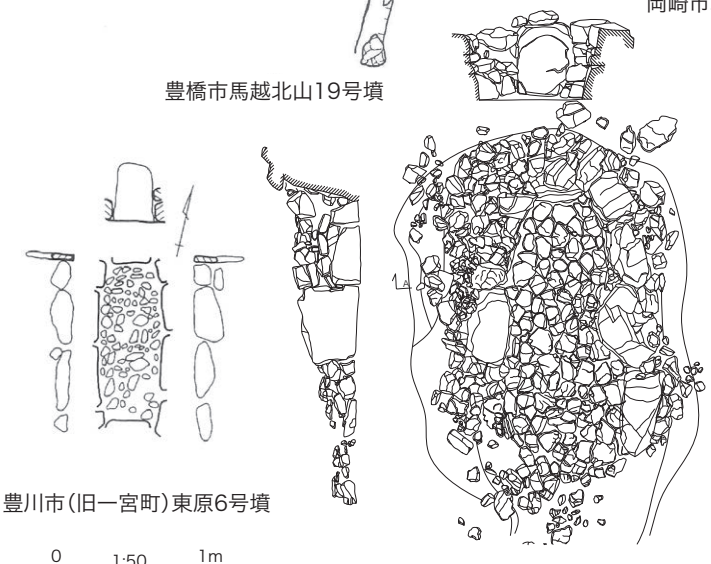
岡崎市北山2号墳

豊川市(旧一宮町)東原5号墳

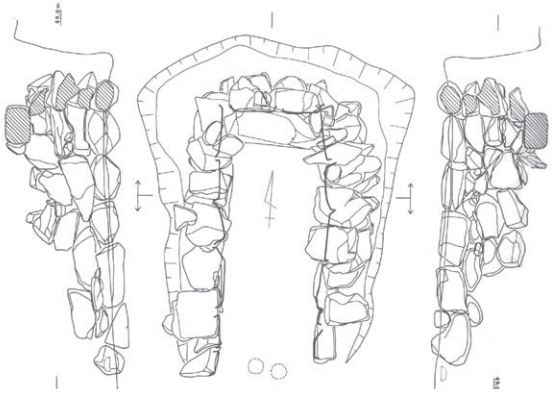
豊橋市馬越北山19号墳



出土須恵器杯(1/8)



豊川市(旧一宮町)東原6号墳



0　1:50　1m
(石室平面・立面図)

豊橋市キジ山KJ10A区001SZ

三重県安濃町平田古墳群53号墳

図66　愛知県・三重県の小型横穴式石室の諸例

紀前葉に比定される豊田市・寄元 4 号墳や岡崎市・車塚遺跡の古墳群で検出事例がみられる。これに対して愛知県西部の尾張地域では顕著な事例がなく（東日本埋蔵文化財研究会 1995）、骨蔵器に示される火葬墓へ移行が地域間で差があったためとも考えられる。

このような愛知県内（尾張国・三河国域）の状況と対比して、三重県（伊勢国域）でも尾張地域に似て多くなさそうである。津市（旧安濃町）平田古墳群では、7 世紀後半とされている 53 号墳以外に石室の痕跡がいくつか検出されているものの、当該古墳群以外で小型横穴式石室はほとんど知られていない。一方、静岡県域に目を転じると、中・西部（駿河・遠江国域）の古墳群中で小型横穴式石室がみられる。その時期は 7 世紀末～ 8 世紀前葉であるが、中には 8 世紀中葉の須恵器が出土する事例もある。伊勢国域で先行し、三河～駿河国域で奈良時代まで残る時間のずれがみられるのは興味深い。

このような小型横穴式石室に共通する特徴の 1 つは、斜面地に墓坑を掘削する際にその最大深度は奥壁の高さとほぼ同じという点である。このような掘削をすれば、さほど墳丘高がなくとも石室を土でを被覆することが可能になる。2 点目は、これに関連して、石室高が 1m 未満のきわめて低い石室が主体になる点である。したがって、ここまで狭小な空間になると、石室が完成してから木棺で埋葬するのはかなり難しいと思われる。とはいえ明らかに骨蔵器が安置された事例はないことから、石室内への散骨でもなければ、これらが火葬墓として機能した可能性は低い。おそらく側壁まで施工したところで埋葬し、その後天井石を架構していたと考えられる。つまり墓の形状は先代から引き継がれた石室ではあるが、埋葬過程は土坑墓とほぼ同じということになる。

小型横穴式石室を当時の墓制の中でどのように評価するかは今後の課題であるが、キジ山古墳群で確認された古墳時代最終末期の石室が、三河から遠江・駿河国域の分布域の中で位置づけられることが確認できたことで本節の結びとしたい。

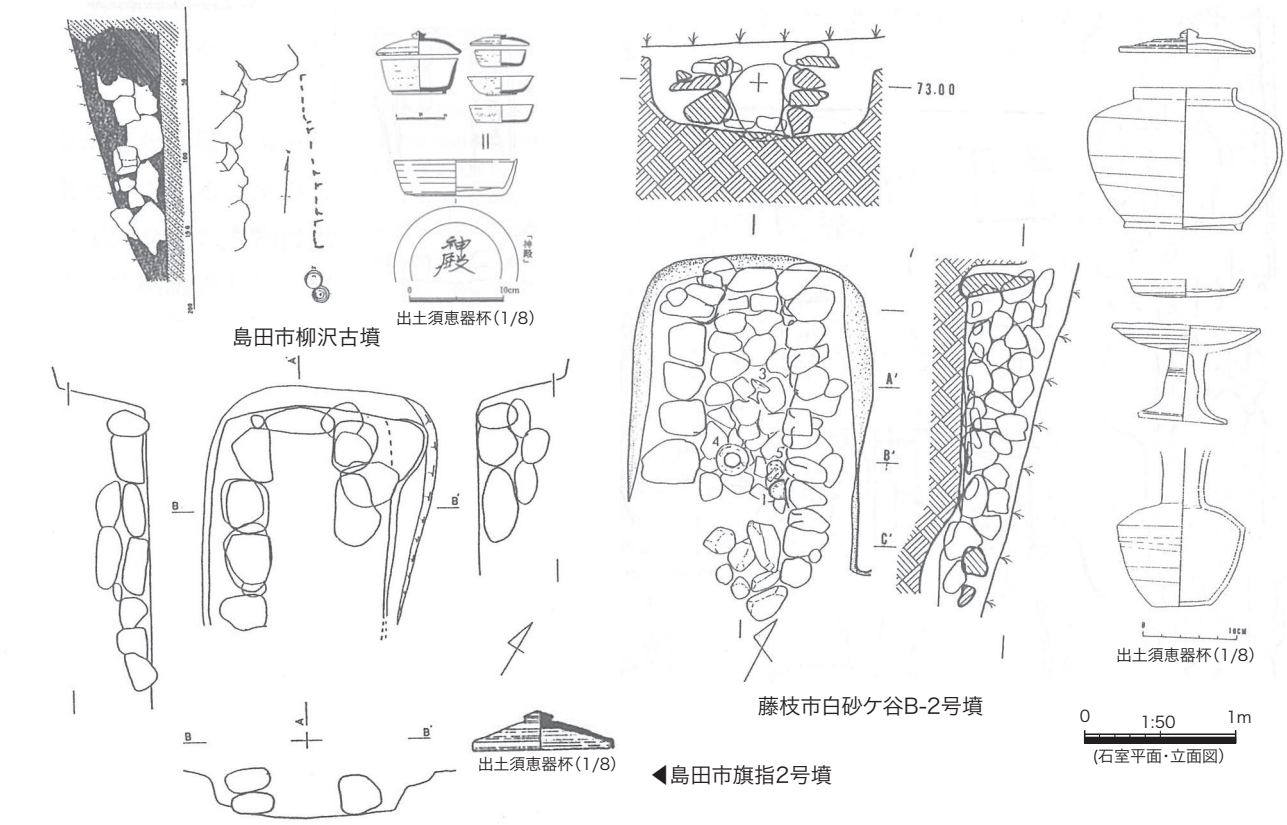


図67　静岡県における小型横穴式石室の諸例

第 2 節　晴雲寺址について

はじめに　今次発掘調査で検出された近世寺院遺跡は、第 1 章でも述べたように、遺跡名である晴雲寺址と判断するものであるが、本節ではまずそれに至った経緯について、文献史料からみた寺の歴史とともに記述し、それと検出遺構との対比と建物規模の復元と試みる。そして、菩提寺としての晴雲寺の位置づけを考察し、遺跡の評価へとつなげていきたい。

郷土誌中の「晴雲寺」　晴雲寺は、地元で 1967 年に刊行された『多米郷土誌』で、多米町内所在の近世に創建されるも廃寺となった寺院の 1 つ「屏風山晴雲寺」として記されている。そこでは所在地についての詳述はないが、別項に「著名な岩」がありその中に「屏風岩（以上蝉川山）」とあることから、蝉川地内の屏風岩付近のことであることはすぐに想像がつく。この屏風岩が SU10A 区の西にそびえる巨岩であることは、地元での呼称や文献（石川 1979）からも明らかで、したがって範囲確認調査で出土した近世瓦などの存在から、屏風岩付近の平場に晴雲寺の所在を求めるべきと結論した。以後、埋蔵文化財包蔵地として認定される経過は本書冒頭に述べたとおりである。ただし、当該地点に寺院跡を見出すのは 1959 年刊行の『豊橋寺院誌』にもあり、市内東田町の浄土宗太子山太蓮寺が「元豊橋東方牛川町小鷹野、屏風岩の麓にあった真言宗の寺であった」とする寺伝とともに、その前身寺院の所在地について「現在屏風岩東面の高地には数十坪の平地があり、松樹の間に古瓦の破片が散布」している状況について述べていることから、一部には知られた事実だったとみられる。

さて、『多米郷土誌』の記述は 1926 年刊の『八名郡誌』に多く依拠しており、そこでは「創立の年代は不明」としながらも宝永 5 年（1708）の吉田藩主牧野成央（大學）による文書（史料 B）を提示している (註 1)。また『豊橋寺院誌』も当該文書を菩提寺造営地の寄進を示すとし、牧野氏が 4 年で転封になったことから結局観音堂だけで終わったものとしている。

ではその発端はどこにあるだろうか。御津町（現豊川市）の浄土宗大恩寺は晴雲寺の本寺であるが、そこに残された文書に、宝永 4 年（1707）に吉田藩から大恩寺へ寺院造営にあたっての協力依頼とみられるものがある（史料 A）。ここでは、同寺末寺中で大破していた清雲寺を多米村に移転することで、新たな寺院の造営としたい主旨がうかがえる。清雲寺は平尾村（現豊川市）に所在した寺院で、何らかの災害で建物が倒壊していたとみられる。ただしここでは史料中の「古跡」が注目され、この用語は江戸幕府が出した寛永 8 年（1631）「新寺建立禁止令」と元禄元年（1688）「寺院古跡新地之定書」に基づいている。同法によれば寛永 8 年を境に以前に建立された寺院を「古跡」、以後を「新地」寺院とし、古跡寺院については災害などで倒壊した場合の再興を認めるが新地寺院についてはそれを認めないことになっている。このような新規寺院の造営規制があるために、「古跡」の移転という形をとることになったのであるが、吉田藩がそうまでして公的に寺院造営を進めたのは藩主牧野家の菩提寺を必要としたためである。牧野家は永正 2 年 (1505) に吉田城を造営した牧野古白にルーツをもち、宝永 2 年 (1705) に 7000 石加増の 8 万石で吉田へ移封された牧野成春は、将軍徳川綱吉の側用人にも起用された下総関宿藩主牧野成貞の養子 (註 2) である。既に成貞は、江戸に要津寺（東京都・墨田区）を建て同家の菩提寺としていたが (註 3)、成春が成貞よりも先に宝永 4 年（1707）3 月に江戸で死去し実子の成央が家督を継いだ時点で領内に寺を建立する決定がなされたと思われる。これはあくまで憶測であるが、城下町から東方に離れた高所に藩を挙げて寺院造営に踏み切ったのは、「屏風岩」の地はきわめて眺望が良く逆に領内各所からも望見できる立地であることから、牧野氏の故地でもある吉田に菩提寺をもつことで領内にその権勢を示す意図もあったのではないかと考える。

ところが、造営開始から 4 年後の正徳 2 年（1712）に牧野成央が日向へ転封とされたために、晴雲寺はその大きな支持基盤を失うことになった。このことから当寺の造営計画が結果的に中途で終わって

しまったようにもみえるが、史料Aに記されるとおり当初計画から「屏風岩山観音堂」のみであり、大規模な伽藍計画はなかったものと考えられる。しかし概ね計画通りの造営ができたものの、その後の維持管理は史料Dにあるように多米村で行われることになったのであろう。史料Dでは寺の「庫裏作事」とあることから、1733 年に付属建物の建築もしくは修繕が行われていたことが知られる。

寺僧の存在は、史料Cの1714 年には確認できるものの史料Eの 1750 年までに無住となっている。このことは境内における生活痕跡である出土陶磁器類の年代が概ね 18 世紀前半に収まることと深く関わっているとみてよいだろう。そして史料Fで境内範囲と観音堂の存在が確認できるのを最後に、晴雲寺を文献史料で見出すことができなくなる。伝承では明治維新前まで木版尊像を信者に頒布していたという（豊橋仏教会 1959）。その真偽は現在のところ確認しえないものの、創建から 100 年以上を経て、多米村による寺の経営がなんとか続いていたものと想像される。

（A）**宝永四年（一七〇七）** 多米村観音堂造立に付書状

（付箋添書）「宝永四年丁亥
当国吉田城主牧野大学頭成春士家」

貴翰致拝見候、向寒気候得共弥御堅固御暮珍重存候、
然者今度吉田於多米村屏風岩山観音堂到造立候付、
貴寺末寺之内ニ而古跡一宇右之場所江移申度御無心
申入候処、幸及大破候古跡之内、清雲寺を多米村江
移候様ニと被仰下大望不過之忝奉存候、到来春観音
堂可到造立と存候間、左様御意得可被下候、委細者
追而可得御意候、恐惶謹言

十一月朔日　曽雌常右衛門 知義（花押）

大恩寺様
御同宿中

（B）**宝永五年（一七〇八）**

是より東西南北晴雲寺境内を限り吉田領之輩松葉下草等伐採すべからず
若違背の族有之に於ては可爲曲事者也
寶永五戊子年七月
右之通り今度寄進被申候に付大學領地之内者境内の林に御立可有之候以上

牧野大學内　牧野齋（印）
川崎忠右衛門（印）
戸倉甚五右衛門（印）
藤江竹右衛門（印）

八名郡多米村
晴雲寺

（C）**正徳四年（一七一四）七月十日** 悟真寺住持唯誉上人葬儀始末記

此節御津大恩寺より屏風岩道心者使僧となり書状持参、遠方の処叮寧なること

（D）**享保一八年（一七三三）** 多米村晴雲寺差出一札

一札之事
一晴雲寺庫裏作事之義客殿と申違御本寺江御届不申上、吉田御役所へ願上候二付、御吟味之上無念之段、委細被仰聞御尤至極奉存候、併晴雲寺相続之儀ニ御座候間、何とぞ御了簡之上御案文之御添翰被成下候様ニ偏奉頼候、以後此儀ニ付、相障候義御座候節ハ役人共引請可申候、為後證一札仍而如件

多米村
享保十八年丑九月
晴雲寺（印）
組頭　喜平次（印）
同　新右衛門（印）
庄屋　又七郎（印）
重崎六郎左衛門（印）

大恩寺

（E）**寛延三年（一七五〇）** 多米村差出帳 【多米区有文書】

（前略）
本寺御津大恩寺
一寺壱ヶ寺　浄土宗　屏風山晴雲寺　無住
（後略）

（F）**宝暦九年（一七五九）** の間数録

浄土宗　屏風山清雲寺　御津大恩寺支配
境内　東西百九十八間　南北二百八十二間
右寺内　観音堂二間半三間

出典：（A）（D）…『御津町史』資料編上巻（御津町 1984）
（B）…『八名郡誌』（八名郡役所 1926）但し「寛永」を「宝永」に訂正
（C）（F）…『豊橋寺院誌』（豊橋仏教会 1959）
（E）…『豊橋市史』第 7 巻（豊橋市 1978）他に同巻所載「三州吉田領神社仏閣記」「赤岩村差出帳」も参照

晴雲寺の寺地　以上のように、文献史料でたどる晴雲寺については、18 世紀前半を中心に造営が行われたことと、具体的な寺地の規模や建物の名称を知ることができる。まずその寺地についてであるが、牧野家から寄進された土地は史料（F）によると、東西 198 間（約 360m）南北 282 間（約 513m）になるという。史料の時期は、牧野家が吉田藩を離れてから 40 年以上も離れていることから、さまざまな経緯で寺地の加増があったとしても、その最終的な規模であったと考えられる。

そこで以上の数値を基に寺地の現地比定を試みる（図 68）。問題になるのが方位軸であるが、一案と

して現在の正方位に合わせてみる。「キジ山」山麓となる豊橋市水道局多米貯水場入口付近を仮に南端として、北へ 513m を延長すると、「キジ山」の南から２つ目の山頂を大きく包み込むかたちで寺地が想定できる。東西方向はこれも「キジ山」を充分包含できる間数であり、「キジ山」の西斜面だけでなく東斜面も寺地としていた可能性が高いといえる。次に、南北軸を「キジ山」の尾根筋に合わせてみる。これも貯水場入口を仮に南端にするとちょうど南から２つ目の山頂が北端になる。これに直交する東西軸は「キジ山」の最大幅ともいえる長さであり、このようにみても山全体を寄進したものといえるのである。ところで別の史料にあるという東西 135 間（約 245m）南北 208 間（約 376m）の範囲でみると、当然狭くなるものの、「キジ山」南端の山頂を取り込む東西両斜面が寺地であったことになる。したがって、寺地の牓示は確認できないものの、その範囲はおよそ「キジ山」全体を指すものと考えておくことができよう。広大な寺地の設定は寺院経営の基礎であるとともに結界の表示でもあり、山中に墓所を拡大していくためには必要な占地であった。

検出された観音堂　晴雲寺の中心的な施設とされるのが観音堂である。今次発掘調査で検出された SU10A 区礎石建物 087SB は平場内で唯一の建物遺構であり、文献史料中の「観音堂」である可能性がひじょうに高い。その規模は寺地同様に史料（F）で２間半 ×3 間と記載されている。残念ながら当該史料の詳細は不明で、その信用度はかなり低いと言わざるを得ないが、これを出発点に観音堂の規模を想定してみよう。そこで吉田藩に所在する寺社建築の一覧である『三州吉田領神社仏閣記』を参照してみる。当該史料は元禄６年（1693）成立とされ、元文３年（1738）写本が現存し、これに史料（F）に近い内容の追記が異筆でなされている(註 4)。同史料中には例えば、同じ多米村の赤岩寺阿弥陀堂（本堂）が「三間半四方」、愛染堂が「右同断」、薬師堂が「三間四方」と記されている。これらの建築については、後の明治５年（1872）の赤岩村差出帳にも記載があるが、前二者は同じ規模であるのに対し、薬師堂は「弐間半四面瓦葺」とあり異なっている。同一建物の再測定で訂正がなされたのか、またはこの間に建て替えられたのか、興味深い。ともあれ、近年の調査で縁部分を除いた一辺長がそれぞれ約 6.3m、約 6.1m、4.5m と測定されていることから（註豊橋市教育委員会 2002）、1 間＝約 1.8m 単位として３間半＝約 6.3m、2 間半＝約 4.5m という建物規模を示しているものといえよう。近年の調査では現存建築の年代はいずれも不詳としているので(註 5)、単純な対比をすべきではないだろうが、ここでは史料の『三州吉田領神社仏閣記』や『赤岩村差出帳』の記載が、

図68　晴雲寺址の寺地想定範囲（1:5,000）

ある程度の誤差を含みつつも、おおよその建物規模を記録している点に注目したい。

やや前置きが長くなったが、以上の事例によって観音堂は、縁を除く間口が２間半 (約 4.5m) で奥行が３間 (約 5.4m) の平面規模であったと考えられる。この想定をもって検出された礎石建物から観音堂の規模を復元してみよう。まず検出された礎石建物 087SB の計測値に基づくと、東辺となる礎石１～５間は 0.5m・0.72m・0.86m・0.86m である。建物は西向きなので東辺長が間口に相当する。礎石１・２間は縁側に相当すると考えられるので、礎石２以東で約 4.5m 規模の身舎が想定される。やや大きめの礎石２と４が側柱に相当すると考えて、礎石５を通る中軸線で線対称になるように柱間３間分を展開すると、間口 4.88m の身舎となる。これは２間半から約 0.4m 張り出す規模であるが、おおよその範囲であろう。そして南へ 0.5m の縁側が取り付くと考えられる。

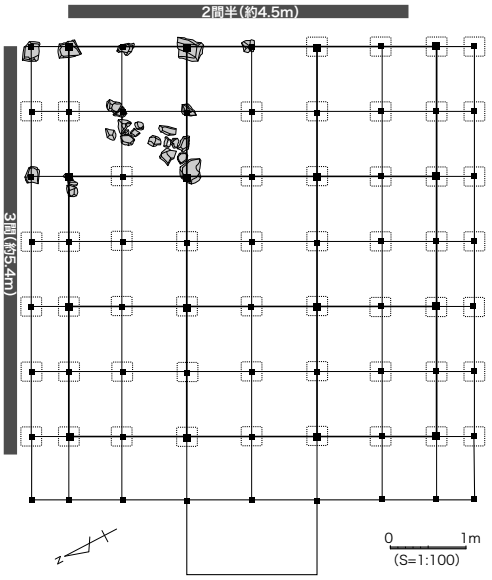


図69　晴雲寺址観音堂礎石配置想定図

次に奥行きであるが、礎石１～８間は 1.72m で身舎の柱間基準値の 0.86m の２倍となる。これを基に西方へ柱間４間分を延長すると、身舎奥行 5.16m でおよそ長さ３間 (約 5.4m) に近い規模になる。全体規模はこれに正面の縁側と階段が付属するとみられるが、現地では礫群 085SX にかかる位置に相当する。建物遺構の大半は礎石・基壇ともに大きく削平されているため、特に正面の想定は根拠が弱いが、ここに一案として提示しておきたい。

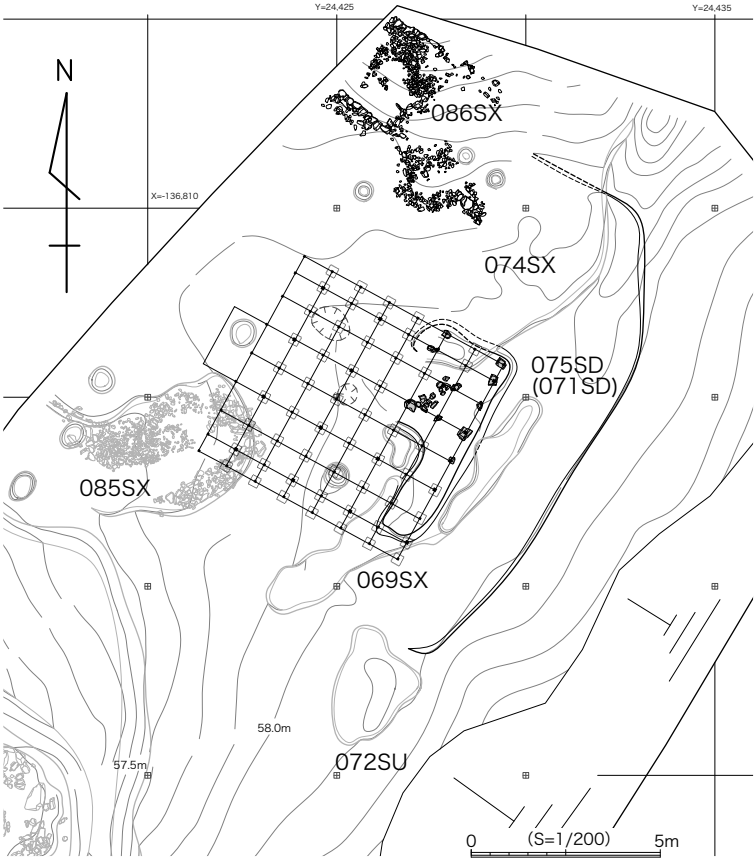


図70　晴雲寺址観音堂復元想定図(1:200)

建物に使用した瓦　それでは、観音堂の景観はどのようなものであったろうか。残念ながら今次発掘調査では、柱などの木質や装飾にかかる金具は出土していない。唯一建築の内容を示すのが瓦である。出土瓦の総量は第３章で提示したとおり、丸・平瓦がその大半を占めていることから、観音堂は本瓦葺きで創建されたものと考えてよいだろう。それに伴う軒丸・軒平瓦は、軒丸瓦の点数が極端に少ないのが問題であるが、地瓦として主体となることは間違いない。そして、これらに特徴的な軟質焼成に類似する道具瓦の一群が伴うものと考えられる。例えば飾瓦の 289 ～ 294 や鬼瓦の 300 ～ 302 である。特に飾瓦 300 は露盤の一部と推定されるので、露盤が載る屋根構造は宝形造となる。また、先にみたように

礎石建物の平面形は正方形に近いものであることから、長大な大棟構造は想定しがたい。

それでは、丸・平瓦にはかなわないものの、一定量が出土した桟瓦はどのように使用されたのであろうか。桟瓦は軒桟瓦の年代が 17 世紀後半～ 18 世紀前半に限定しうることから、ほぼ全てが晴雲寺創建期に用いられたものと考えられる。したがって数量的に劣勢な桟瓦が葺き替えで使用されたとは考えにくい。詳細な時期の前後関係は生じるかもしれないが、本瓦葺きの観音堂と同時期に建てられた桟瓦葺きの別棟が存在したと考えるのが妥当であろう。しかしながら今次発掘調査ではこれに相当する建物遺構の検出はできなかった。広範囲の整地によって観音堂より簡易な建物の痕跡は滅失したものと思われる。ただ文献史料 D では 1733 年に修造対象となった庫裏の存在が判明するから、SU10A 区内に観音堂に隣接する桟瓦使用の庫裏を想定することも可能である。もっとも、推定される寺地は広範囲に及ぶのであるから、西側山麓にその存在を求めることも可能である。庫裏の所在地については地元の伝承なども参照してさまざまな可能性を模索すべきである。

吉田城下の瓦生産について　ところで試料点数は少ないながらも胎土分析結果によって、晴雲寺址出土瓦は原料の観点から 4 種類以上に分類されることが示された。これは以前実施した吉田城遺跡出土瓦の胎土重鉱物分析（愛知県埋蔵文化財センター 1995）とも符合し、西尾城などと比べて胎土の均一性が低いという評価が導かれている。この要因として、周辺複数生産地からの搬入も考えられるが、原料の土が複数の地点で採取されていた可能性もあろう。例えば、『豊橋市史』第 7 巻所載史料 314「御用瓦土取願」では、羽田村の瓦工が最寄りに良質な土がないことから隣りの花ヶ崎村地内（現在の花田町）で原料土採取を願い出ている。1 か所で必要な土全てが得られるとは限らず、必要とあらば地主の許可を得るなどして確保していたのであろう。現代では一般的に行われていることであるが、それが胎土分析結果に反映されているのかもしれない。地域の地質とも合わせて検討する機会を持ちたい。

晴雲寺の什物　通常寺が完成すれば本尊が安置され、各種行事に使用する什物が施入されることになる。本尊の存在は調査を尽くしていないが、『多米郷土誌』では「当寺の本尊は現在東田町の太蓮寺の本尊になっていると云われ、歓喜院の手水鉢は晴雲寺より移したものと伝えられている」という。太蓮寺は「屏風岩」の麓から室町時代に現在地へ移転したという伝承をもつ浄土宗寺院で、阿弥陀如来座像（木像）を本尊としている（豊橋仏教会 1959）。また歓喜院（多米東町）の手水鉢には銘文らしき凹凸があるが判読できず、伝承の真偽を確かめることはできなかった。

発掘調査ではそれ以外の什物の一部が出土している。範囲確認調査で出土した青磁香炉（E-138）は線香を立てていたものであろう。また瀬戸美濃産の花瓶（E-224）や仏飯器（E-153・154・225～227）・香炉（228）は観音堂内で使用されたものと考えられる。一方、多数出土した肥前産（系）染付椀は、吉田城遺跡で出土する陶磁器でも多数を占める可能性が指摘されていることから（愛知県埋蔵文化財センター 1995）、吉田藩の建立した寺院にふさわしい什器として、創建期に施入されたものとみてよいだろう。つまり陶磁器類の持ち込まれた契機が、ほぼ観音堂の創建の一時に限定されるわけで、明らかに 19 世紀代と見込まれる一群を除けば、18 世紀前葉もしくは初頭における陶磁器年代の定点となりうる。これに関して、本報告では行わなかった陶磁器の形態別あるいは産地別の組成集計をすること

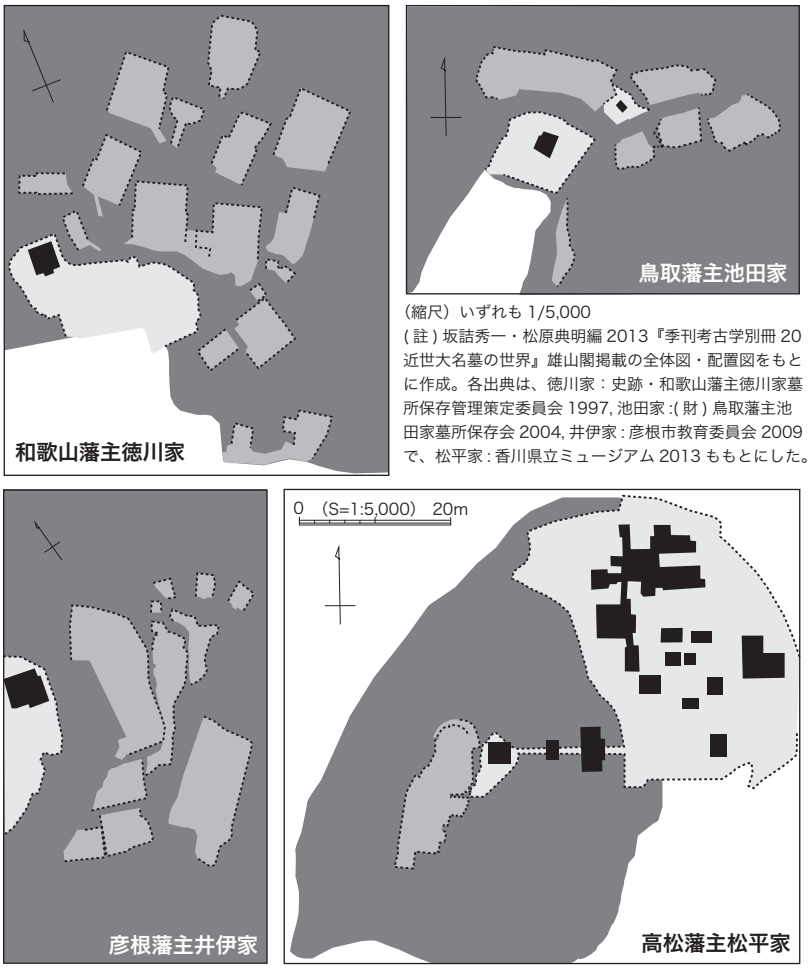
図71　豊橋市花田町浄慈院地蔵堂（平成24年12月修復後）

が課題である。

大名墓所としての晴雲寺　ところで繰り返しになるが、晴雲寺は吉田藩主牧野家の菩提寺として創建されたものの、藩主はほとんど吉田に入ることなく短期間に転封となった。そのため墓を造営することなく菩提寺としての機能を終えることとなった。今次発掘調査においても墓の遺構は検出されていない。一方 SU10B 区では、ほとんど遺構・遺物のない特異な平場が存在する。その平場は溝で後背斜面と区画されているが、幅が約 3m しかなく建物には不向きである。おそらくここを墓所とするべく造成したものであろう。しかしながらここに藩主の墓を造営することはついになかった。

さて、近世の大名墓所の考古学的研究は、近年の修復整備に伴う調査が各地が増加し、墓構造だけでなく墓所の配置・構成から景観に関わるまで多様な情報が集積されつつある。それによると、近世大名墓所の多くは江戸時代初めの 17 世紀代に開創されるが、その後は宗派や大名個人の意志によって墓所が変更されるなど、一律ではなさそうである（白石 2009・関根 2013 など）。また江戸と国元での違いもあり、単純な分類は難しそうである。ただ国元での場合、中には菩提寺を伴わない墓所だけの場合のあるようだが、大半は、麓の菩提寺から登山して山中の墓所へ至る基本構成がみられる。山中に墓所を造営するために平場を造成するが、世代を重ねた当主やその家族などの分を含めると、結果的に膨大な数と面積の平場が造られることになる。

晴雲寺址の場合、その規模は図 68 に示したように将軍家や戦国時代からの大名の墓所と比べるとはるかに小さい。しかし先述したように、そこから俯瞰される吉田城下町との位置関係をみれば、その政治的意図は大きく、そこに 17 世紀末という他の大名から後れて創始された成貞流牧野家の、吉田の地にかけた並々ならぬ意志が伝わってくる。付言すれば、晴雲寺が創建された 18 世紀初頭とは、17 世紀代を通じて醸成されてきた墓所による権力誇示の 1 つの到達点だったのではなかろうか。近世大名墓所の形成過程の研究はこれからの課題であり、造営や各墓の規模などにどのような変動があったのか等、実態解明が期待される。



（縮尺）いずれも 1/5,000
(註) 坂詰秀一・松原典明編 2013『季刊考古学別冊 20 近世大名墓の世界』雄山閣掲載の全体図・配置図をもとに作成。各出典は、徳川家：史跡・和歌山藩主徳川家墓所保存管理策定委員会 1997, 池田家 :(財) 鳥取藩主池田家墓所保存会 2004, 井伊家 : 彦根市教育委員会 2009 で、松平家 : 香川県立ミュージアム 2013 ももとにした。

図72　大名墓所と菩提寺の位置関係

註

註（第 5 章第 2 節）

註 1　『八名郡誌』では他に (1) 境内が南北 207 間東西 135 間とする文書、(2) 宝永 5 年 7 月に吉田藩主牧野大學が境内寄進状とみる文書、(3) 正徳 3 年 11 月 1 日付境内の松葉下草伐採禁断の文書があるとするがそのものは提示されていない。

註 2　養子となった経緯も綱吉の指示であったといわれる。

註 3　結果的に成貞系の牧野家代々の墓は要津寺に所在する。

註 4　史料の各所に細かい文字で追記がなされている。ただし晴雲寺の建物規模の記載はない。追記年代は、これと同筆で裏表紙に「一本を以て校合ス、欠たるをハ補加へつ　たか雄」とあるので書写年代からさらに後と考えられる。

註 5　豊橋市教育委員会 2002。なお愛知県教育委員会 1979 では赤岩寺本堂の建立年代は元禄 2 年としている。

参考・引用文献

愛知県教育委員会　1979 『愛知県の近世社寺建築』
愛知県史編さん委員会　2011 『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』 愛知県
愛知県埋蔵文化財センター　1992 『吉田城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 26 集
愛知県埋蔵文化財センター　1995 『吉田城遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集
愛知県埋蔵文化財センター　2002 『寄元古墳群・上ノ段遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 104 集
愛知県八名郡役所　1926 『八名郡誌』
安濃町遺跡調査会　1987 『平田古墳群』
石川一美編　1979 『郷土のしおり 牛川』牛川文化協会
石川智江　2009 「弓張山脈における古代山林修行の展開」『三河考古』20 号　三河考古刊行会
伊藤厚史　1988 「愛知県における横穴式石室出土土師器について」『三河考古』創刊号　三河考古刊行会
赤木（岩原）剛　1992 「第 4 章 まとめ」『東山 1 号墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 14 集
大谷宏治　2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第 10 号 （財）静岡県埋蔵文化財研究所
岡崎市教育委員会 1982 『岡崎城二の丸跡』
岡崎市史編纂委員会　1989 『新編岡崎市史 14 資料編考古（下）』 岡崎市
香川県立ミュージアム　2013 『ミュージアム NEWS』Vol.21
金子　智　1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』第 101 号　早稲田大学考古学会
楠美代子　1999 「古墳出土の耳環 – 西三河地域の資料を中心として -」『三河考古』第 12 号　三河考古刊行会
小林久彦　1993 「古墳の選地（Ⅱ）」『三河考古』第 5 号　三河考古刊行会
財団法人鳥取藩主池田家墓所保存会　2004 『国史跡鳥取藩主池田家墓所保存整備計画』
坂詰秀一・松原典明　2013 『季刊考古学別冊 20 近世大名墓の世界』雄山閣
史跡・和歌山藩主徳川家墓所保存管理策定委員会　1997 『史跡・和歌山藩主徳川家墓所保存管理計画書』下津町
白石太一郎　2009「近世の大名家墓所と古墳」『考古学からみた倭国』青木書店
鈴木敏則　2004 「第 5 章 まとめ　第 2 節 静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会
関根達人　2013 「権力の象徴としての大名墓」坂詰・松原編『近世大名墓の世界』雄山閣
田中琢・佐原真ほか　2002 『日本考古学事典』三省堂
多米郷土誌編纂委員会　1967 『多米郷土誌』
豊橋市教育委員会　1968 『豊橋市大岩町北山古墳群 豊橋市植田町大膳古窯群』
豊橋市教育委員会　1994 『吉田城址（Ⅰ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 21 集
豊橋市教育委員会　2002 『馬越北山古墳群（Ⅰ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 71 集
豊橋市教育委員会　2002 『稲荷山古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 65 集
豊橋市教育委員会　2004 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
豊橋市教育委員会　2002 『豊橋市の近世社寺建築』
豊橋市教育委員会・国際文化財株式会社　2008 『稲荷山古墳群（Ⅱ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 108 集
豊橋市教育委員会　2010 『市内遺跡発掘調査 - 平成 19 年度』
豊橋市教育委員会　2012 『市内遺跡発掘調査 - 平成 21 年度』
豊橋市史編集委員会　1978 『豊橋市史』第 7 巻　豊橋市
豊橋市史編集委員会　1991 『豊橋市史』別巻　豊橋市
豊橋仏教会　1959 『豊橋寺院誌』
東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会　1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』《第Ⅲ分冊》第 5 回東日本埋蔵文化財研究会
彦根市教育委員会　2009 『国指定史跡「彦根藩主井伊家墓所」調査報告書』
深谷淳　2011 「横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える行為」『古代学研究』189 号　古代学研究会
丸地古城　1950 『三河の古墳』 豊橋史談会
三河考古談話会古墳部会　1994 『東三河の横穴式石室　資料編』 三河考古談話会
御津町史編纂委員会　1984 『御津町史』資料編上巻　御津町

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 188 集

キジ山古墳群・晴雲寺址

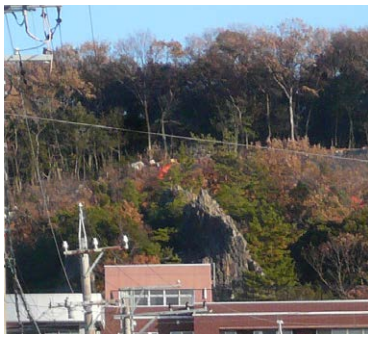
遺構写真 写真図版 01 ～ 20
遺物写真 写真図版 21 ～ 29

キジ山山腹の「屏風岩」（手前の岩）から西方展望。遠く豊川や蒲郡が遠望できる。浄水場の奥遠方にみえる高層建物群が豊橋駅で、その右側に豊橋市役所のビルがある。市役所の所在地が吉田城址である。

(上) 平成 22 年 1 月 17 日、豊橋に大雪の降った朝の赤岩山を南西方向からみる。左手前のやや低い部分がキジ山である。

(中) 春の到来したキジ山を南東、多米地区からみる。平野へ岬状に突き出した地形の特異点であることがよくわかる。

(下) 調査開始前のキジ山を西麓の浄水場からみる。右手に貯水タンクがある。左端の建物背後に「屏風岩」の一部がみえ、そこから右側に晴雲寺址がある。



(左) 西麓の住宅地からみた屏風岩。(中) 南からみた山頂の巨岩群。範囲確認調査では中央の立石手前にトレンチ T.T.-30 を設定した。
(右) その立石北西側には自然にできたテラス状の箇所がある。岩盤最上部が風化していくつかに分裂したものであろう。

(左) キジ山 13 号墳。石室該当部分が陥没しているが石材はみられない。(右) 同墳からみた 1 号墳。墳丘の高まりはわずかで石室石材が若干残っている。いずれも平成 21 年度。

雑木林の伐採が完了した調査前の KJ10A 区を北東からみる。なだらかな緩斜面であるが、最奥部に小型の横穴式石室がある。

検出時の横穴式石室 001SZ から調査区全体をみる。調査区の大半では自然の凹みや木根跡が検出されたのみである。

検出時の横穴式石室 001SZ とその周辺。石室の石材が下方へ散乱している。また、石室両脇のやや暗い覆土が認められる範囲が周溝と考えられる。

石室前方で作業中に写真の木根から須恵器杯片が出土した。001SZ に関連するものであろう。

調査区西壁トレンチにみる 001SZ の土層断面の一部。中央の地山掘り残しの左側が周溝の掘り方で、右側は石室の掘り方。石室掘り方の覆土は角礫が多く混じる。

001SZ 石室内の覆土を横断面でみる。上・下層に分かれ、上層には大小の礫が混じることから、天井石などの石室破壊が進んだ頃のものと考えられる。

001SZ 調査風景。敷石を丁寧に洗浄しながら石室埋土を掘削する。

↑石室は長さ約 1.7m でほぼこれで全長とみられる。横に立った人と比較するといかにその規模が小さいかがわかる。

← 001SZ の完掘状況。無袖タイプの系譜を引き、奥壁・側壁・敷石からなり、墓坑・裏込めもある構造は横穴式石室そのものである。古墳時代の最終末期のものと位置づけられる。

↑ 001SZ 南西下方に位置する形状のはっきりしない土坑 004SK。調査区南壁に須恵器甕の破片がみえる。

← 001SZ を前庭部からみる。天井石は残存していないが、壁の高さがほぼ石室高になると推測される。なお石室内からの出土遺物はなかった。

001SZ の奥壁。

001SZ の左側壁。内傾する 1 点は表土掘削時に若干動いている。

001SZ の奥壁裏の土層断面。斜めに掘り込んだ墓坑の下端に奥壁を据えた後に裏込めの土で支え、小礫で高さを調整する。

001SZ 右側壁。奥壁→側壁→敷石の順に敷設する。

001SZ 石室完掘状況を真上からみる。敷石の大きさはほぼ揃っている。右側壁最前位置の礫も抜き取られているとみられる。

001SZ 石室の基底石と墓坑の状況。1 枚の奥壁に対して斜めに側壁が取り付く胴張り形の平面形は当該地域の終末期古墳に多く見られるものである。

KJ10B 区キジ山 34 号墳 001SD 完掘状況。北西から。奥にみえる高まりがキジ山 34 号墳の墳丘である。古墳築造時に地山を削り西側斜面（写真右手）は盛土がなされている。須恵器甕は 2 つある切株の間のほぼ検出面から出土した。

001SD 検出状況。南西から。やや暗い色調の範囲。

トレンチ T3 の土層断面。下層は旧表土でその上から地山由来の粘土と礫が堆積しており、造成土と考えられる。

キジ山 34 号墳の造成跡。地山（含：上層風化部分）を切り込み平場としたところに盛土がなされている。周溝はその上層。

KJ10C 区中央の巨岩（南から）。右手山頂巨岩と左手下方「屏風岩」の一線上にある。わずかに岩陰がある。

（上写真）KJ10C 区の調査前状況と、（下写真）礫群 016SX とその右手に横穴式石室 018SZ 付属の溝状施設 017SD が検出された状態（南から）。018SZ はまだ奥壁・右壁の一部が検出された時点で、天井石の可能性がある礫は上写真でもみえているが、古墳の存在をうかがわせるものはない。

KJ10C 区第 1 次検出時の状況（南から）。017SD の一部はトレンチで検出できたがそれ以外は不定形な遺構である。

←KJ10C 区北半分（Ca 区）の完掘状況。顕著な遺構はなく、遺物も全く出土しなかった。最奥部は地山の岩盤がトレンチ内にみえている。

↓横穴式石室 018SZ の北側背後の周溝 020SD の土層断面（調査区東壁にて、西から）。あまり深く掘り込まれないことからことさら高い墳丘を意図していなかったことも考えられる。

(左)KJ10Cb 区礫群 016SX(北から)。左端に石室前庭部・付属施設 017SD の検出状態がみえる。当初はこれらで小墳を想定したが、礫群も横穴式石室墳 018SZ の墳丘の一部であろう。半積石塚的要素がうかがえる。
(上) 表土除去前のトレンチ調査で 017SD 検出状況。須恵器片が出土した瞬間。

石室前庭部 017SD の須恵器出土状況。フラスコ瓶・広口壺の破片が比較的まとまっている。墓前に捧げられたものか。

須恵器片群の下から礫と須恵器杯身が出土。礫は散乱状態から、閉塞石ではなく撹乱時に紛れたものとみられる。

須恵器杯身は崩落した石室石材よりも下位にあり、原位置の可能性が高い。

横穴式石室 018SZ の玄門 (玄室入口) における石室埋土の横断面。最下層に石室石材が入っており、左側壁から崩落したものか。

KJ10Cb 区横穴式石室 018SZ の石室埋土縦断面。左側壁石材が崩落し、黒褐色土が堆積した後に、人為的な整地層が上部を覆う。

崩落石材の間から金環が出土した（北西から）。副葬位置としては全く不自然であり、盗掘が石室崩落に関係しているとみられる。

石室 018SZ の石室内石材崩落状況（南から）。左側壁がほとんど失われている。

（上）石室 018SZ の奥壁直前における石室埋土横断面。
（右）同断面から奥壁までの土層縦断面。奥壁まで盗掘・崩落に関わる土層は続いているが、崩落石材は少なかった。そのため比較的短時間で床面の石敷が検出することができた。

石室 018SZ の崩落状況（北から）。

(上)KJ10Cb 区横穴式石室 018SZ の調査では、敷石直上の埋土を採集し水洗選別作業も実施。
(下) その後敷石を洗浄する。慎重な作業が続く。

横穴式石室 018SZ の完掘状況（南から）。比較的傾斜のある地点に築造されていることがわかる。しかもその方位は等高線に平行であり、南方向への開口に対する強い意志がうかがえる。

横穴式石室 018SZ の完掘状況（南から）。ほぼ長方形の平面形である。無袖タイプであるが、左側壁の玄門相当位置には立柱状の石が配置され、それに対応するように框石が配列される。敷石は奥壁を中心に一部に限定されており、撹乱による移動・欠損はほとんどないとみられる。

(上)KJ10Cb 区横穴式石室 018SZ の奥壁とその周辺の状況（南から)。
(2 段目左) 同右側壁。基底石から 3 段を数える。
(2 段目右) 同左側壁。平らな基底石の下に敷石が潜るようにもみえるが、これらはやや厚みがあって敷石の延長ではない。

(右) 同奥壁周辺の床面を上方からみる。比較的近い大きさの石材を巧みに配置して敷石とする。石材を観察することでこれらが打ち欠いて大きさを揃えていた痕跡が確認できた。

(下) 横穴式石室 018SZ の框石付近と前庭部 017SD の状況（南西から)。調査区東壁の土層でわかるように前庭部の埋土はほとんど単一層で撹乱に伴うものと考えられる。

(左)KJ10Cb 区石室 018SZ の内部から開口部をみる。前庭部 017SD の方が 1 段高くなっている。

(右) 同石室を前庭部からみる (南から)。前庭部とはいうがさほど広くなく、断面 U 字形の溝状をした通路のようである。調査区内ではここから分岐した溝状遺構が西へ曲がって約 3m のびる。

(左) 横穴式石室 108SZ の基底石および墓坑の状況 (北東から)。斜面地形のため、墓坑は奥壁と左側壁が特に深くなるが、前方へいくと墓坑の深さは浅くなる。

(左下) 同基底石と墓坑を南からみる。両側壁ともにほぼ直線的に配置される。左側壁は垂直に近いのに対して右側壁は全体に傾斜があるのが注目される。墓坑がこれほど深いと、横穴というより竪穴の印象の方が強くなる。

(右下) 奥壁脇の墓坑壁面の穴 023SK。墓坑の隅にあるため石室築造の基点であったのかもしれない。
(最下段左) 穴 023Sk の半裁状況。垂直に掘り込まれており、柱状のものが立てられたと想定。
(最下段右) 奥壁背面の状況。

SU10A 区調査前状況（北から）右手奥で古墳を検出。

SU10A 区調査前状況（東から）。アスレチック器具が残る。

古墳周溝 083SD の須恵器甕出土状況。(左) 石室後背の墳丘寄りに位置し、(中) 周溝の下層から出土している。(右) 底部が比較的まとまり、そこから上部は若干散る。設置した地点で破砕されたようにみえる。

(左) 拡張トレンチでの周溝 083SD 土層断面。(下) 横穴式石室 082SZ 検出時。須恵器の出土が発端となり削平された石室検出へとつながった。

古墳周溝 083SD の土層断面（調査区西壁にて、北東から）。周溝埋土を晴雲寺造営時の整地層が覆っている。

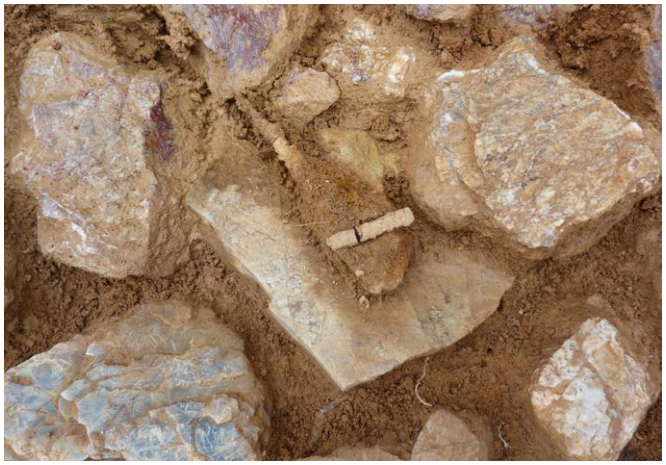
石室 082SZ 掘削状況（上と同じ位置から）

(上)SU10A 区横穴式石室 082SZ の埋土（東から）。ほぼ床面上まで寺院造成時の整地層が及んでいる。

(上) 同埋土の横断面（北から）。

(左中) 同石室内遺物出土状況（北西から）。床面設置の区画石から手前で須恵器杯蓋・杯身と土師器高杯が出土し、石室奥部では金属製品（刀子・鉄鏃）が出土している。

(左下) 同石室内鉄鏃出土状況。数点の鉄鏃が出土したが、副葬位置からは移動しているかのうせいが高い。
(下 2 枚) 同石室内須恵器出土状況。区画石の前底部側で、杯蓋（E-28) が杯身 (E-49) を下から支えるようにして出土した。ほぼ副葬時の安置状態を保っているとみられる。



(上) 石室内敷石の状況（南東から）。撹乱により一部失われているが、基本的に隙間なく床面に石が敷き詰められている。ただし KJ10Cb の石室 018SZ ほど密でない点に注目。

(上)SU10A 区横穴式石室 082SZ 完掘状況全面に敷石があり、左側壁付近に仕切りとなる石がある。側壁は基底石のみ残存。奥壁は破砕されほとんど欠損しているが、もともと小さなものだったのかもしれない。

(左) 同完掘状況。右側壁に接続するようにして 4 つの列石がある。左側壁でこれに対応するものはなかった。

(下) 同完掘状況を東からみる。石室は西向し、前庭部に相当する平場の先は斜面である。KJ10Cb 区横穴式石室 018SZ に比べてやや隙間のある敷石に注目。

(左)SU10A 区横穴式石室 082SZ の基底石（西から）。欠損部分が多いが、平面形は長方形である。側壁石材は面を揃えかつ上面も平らで高さがほぼ揃っている。

(下左) 同右側壁。左側壁よりやや大きめの石材が使用されている。

(下右) 同左側壁と裏込め（トレンチ内）。裏込めといっても充填されているわけではない。基底石周辺に散在しているようにみえる。

(上) 石室 082SZ の横断面。下から地山 (風化進行)、旧表土、古墳整地層 (墓坑埋土) で、石室軸線に排水溝がのびる。

(左) 調査区拡張後の古墳周溝 083SD 検出状況。周溝底面は平らで墳丘の立ち上がりが看取される。

(左上)SU10A 区石室 085SX 完掘状況 (南から)。およそ馬蹄形であるが、礫が均一な状態ではないことに注意しておきたい。
(上 2 枚) 同作業風景。礫を露出させると須恵器片も出土する繰り返しで取り上げ点数は 164 点に及んだ。礫群は馬蹄形に展開しその開口方向は横穴式石室 082SZ と同じ西向きである。

(左) 同完掘状況（東から）。左手の礫群が直線的である。

(左下) 同作業風景。いわゆる石室右側壁一帯は小礫がより広範囲に散在。
(下) 礫群 085SX の須恵器片出土状況。礫の間にあり、撹乱された様子がうかがえる。
(下) 同鉄製品出土状況（M-15）。

(上)SU10A の礎石建物 087SB 全景（東から）。建物正面に「屏風岩」がある。

(中左) 同建物遺構（北から）。建物の裏は切岸である。

(中右) 同礎石検出状況と T04（北東から）。4 つの礎石が原位置を保っているとみられる。その右手に礫群がある。

(下左) 同礎石建物完掘状況（東から）。礎石建物と基壇の残存状況は東隅が良く、それ以外は後世の撹乱でかなり失われていた。

(上)SU10A 礎石建物 040Sb 検出状況（北西から）手前の溝状遺構はいずれも後世の撹乱である。

(上)SU10A 礎石建物 087SB 検出状況（北東から）手前の礎石列と基壇端がほんらいのもの。

(上)SU10A 礎石建物 087SB 礎石列断面（北東から）。

(上) 同基壇の断ち割り状況（中央部、南から）。
(下) 同基壇断ち割り状況（東端、南から）。下層は基盤層の傾斜である。

(上)SU10A の階段遺構 086SX 全景を北 (左) と北東 (右) からみる。明瞭な 2 段の階段に対しやや小さい礫群が斜めに切り込んでいるようにみえる。(左) 同土層。廃絶後の整地層に覆われている。

(下) 遺物集積 071SU 全景（南から）
(下左) 遺物集積 072SU 全景（南から）。礎石建物の背後に位置し、溝状の凹地に瓦と礫が集積する。

(上)071SU と礎石列は方位が異なり、同時存在した可能性は低い（北東から）

(上)SU10A、甕埋設遺構 073SK(左) と同 080SK(右)。奥の土層断面に対応させると礎石建物などを覆う整地層上面から掘り込まれていることがわかる。したがってこれらは寺院廃絶後に設置されたものと考えられる。

(上) 範囲確認調査 T.T.-006 での 043SK 検出状況（南から）。左半分で瓦溜を検出しその拡張部分で確認された。

(下)043SK の青磁香炉出土状況（西から）。柱に相当する部分の埋土は柔らかく柱が立っていたと考えられる。

(上左)SU10B 区調査前状況（南から）と、(上右)SU10Ba 区検出状況。当該区ではほとんどが後世の造成で拡幅されていた。
(下左)SU10Bb 区全景（北東から）。(下右）山側に溝 001SD を廻らせており、土地利用の意図がうかがえる（北から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9

10
11
12
13

14
15
16
17
18

19

22

24

23
（口縁部～胴部）
24
23
（胴部～底部）
21
22
25
19
20
26

28

29

30

31

32

49

33

34

41

33 底面の重ね焼の痕跡

37

42

43

46

50

52
53
50
46
54
55
42
44
43

73
74
75

77

79

87

93

94

95

97

103

106

108

115

129

116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127

138

201

139

149

153

172

174

185

204

218

230

229

236
237
238
239
240
241
242

245

245

168

多米小学校旧蔵

多米小学校旧蔵

多米小学校旧蔵

多米小学校旧蔵

76

76

76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92

171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184(145)
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200

254

256

262

267

270

271 凸面

271 凹面

276

280

281

282

283

284

294

288

289

293

295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306

292

311

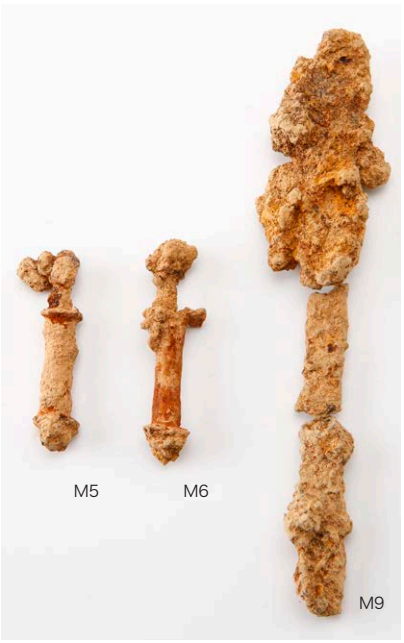
M1
M2

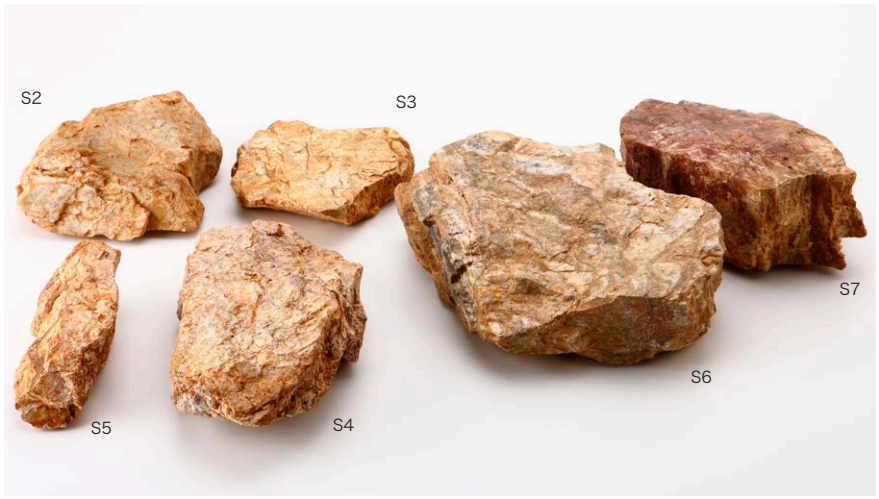
M7

M3

M8

M4


M5
M6
M9


S2
S3
S7
S6
S5
S4

S2

S2

S6

S6

ふりがな	きじやまこふんぐん・せいうんじあと
書　　名	キジ山古墳群・晴雲寺址
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第188集
編著者名	永井邦仁
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2014年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
きじやまこふんぐん キジ山古墳群	あいちけん　とよはしし 愛知県豊橋市 ためちょう　のなか　せみかわ 多米町野中・蝉川	23201	791056	34度 47分 22秒	137度 26分 15秒	2010.10.01～ 2011.03.31	1,130㎡	愛知県水道用水供給事業
せいうんじあと 晴雲寺址	あいちけん　とよはしし 愛知県豊橋市 ためちょうせみかわ 多米町蝉川	23201	791400	34度 47分 22秒	137度 26分 15秒	2010.10.01～ 2011.03.31	10,40㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
キジ山古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室、 周溝	土師器（高杯・長胴甕）、須恵器（蓋杯・提瓶・甕・フラスコ瓶・広口壺）、山茶碗（小皿）、金環、刀子、鉄鏃、両頭金具	小型横穴式石室1基を含む古墳時代後期の群集墳
晴雲寺址	古墳・寺院	古墳時代・江戸時代	横穴式石室、周溝 瓦葺き礎石建物、階段状通路	土師器（鍋・小皿・焙烙）、須恵器（蓋杯）、近世瓦、常滑産甕、肥前系染付、瀬戸美濃産陶器、青磁（香炉）、寛永通宝	文献史料から18世紀前半の創建年代がわかる遺物群と銘のある瓦の一部が出土

文書番号	発掘届出（22埋セ第140号・2010.8.31）　通知（22教生第1301号・2010.9.15） 終了届・保管証・発見届（22埋セ第264号・2011.3.14）鑑定通知（22豊教美第511号・2011.3.23）

要約

本遺跡は豊橋市市街地東方に位置する丘陵端部（通称：キジ山）に立地する、古墳時代後期の群集墳と、近世寺院跡である。古墳群では3基の横穴式石室とキジ山34号墳の周溝、および削平された古墳跡とみられる遺構1基を検出した。石室は無袖のタイプで、そのうち1基は全長が2mに満たない小型横穴式石室であり、終末期のものと考えられる。また晴雲寺址082SZは6世紀後半のもので西へ開口している。

一方、キジ山西側斜面を一部削平して造られた寺院址は、文献史料で知られる「屏風山晴雲寺」址とみられ、宝永5年（1708）に当時の吉田藩主であった牧野家がその菩提寺を造営したのが始まりである。しかしその転封により造営は頓挫し、観音堂が完成した程度で、礎石建物もそれに相当すると考えられる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 188 集

キジ山古墳群・晴雲寺址

2014 年 3 月 31 日

編集・発行　公益財団法人　愛知県教育・
スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷　サンメッセ株式会社